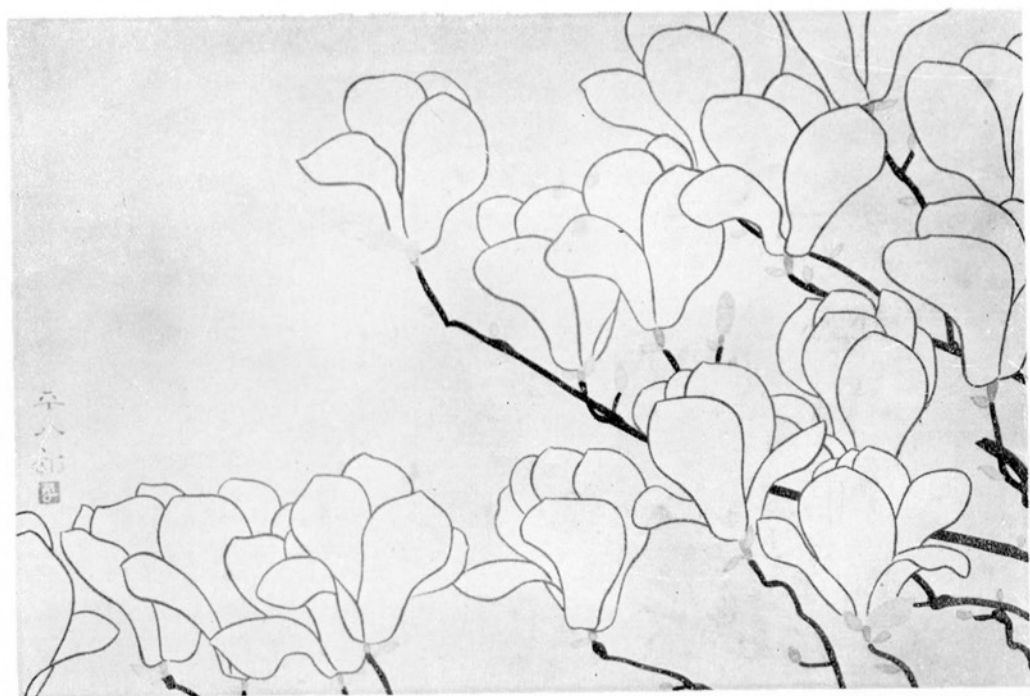


日本美術年鑑

昭和
22—
26
年版

美術研究所



序

昭和十一年以來順次編輯刊行して來た日本美術年鑑は、爰にその第十冊を公にする運びとなつた。日本美術年鑑は當美術研究所が計画し從事してゐる美術に關する調査研究事業中の一部をなすもので、從來は編輯刊行の總てが當研究所に於てなされて來たが、今回は諸般の事情により當所に於て調査編輯したものを印刷廳の手を煩はして刊行することとなつた。又、年鑑の使命としては毎年一冊を出版すべきが當然であるが、戦後の特殊事情ならびに豫算其他の理由により、心ならずも上梓の遅延を重ね、ここに昭和二十一年より同二十五年までの五ヶ年を一冊に壓縮するの止むなきに至つたことを諒とせられたい。従つて、古美術關係の記事その他に相當の省略を餘儀なくされてゐるが、戦後變動の激しかつた美術界を一望のもとに概観する便宜は此の一冊によつて得られることであらう。

本年鑑の編輯に當り、多數貴重な資料、寫真等を寄贈され、或は貸與されるなど、懇切な協力を與へられた文部省社會教育局藝術課、日本藝術院、その他の諸官廳、並びに國立博物館はじめ各地の博物館、美術館、學校、公私研究機關、美術團體、各新聞社、雜誌社、美術家および學者等の諸家に対し、ここに深甚な謝意を表する。又この困難な出版を快く承引された印刷廳當局に對し特別の謝意を表したい。

因みに、本年鑑の調査編輯は専ら當研究所第二研究部の手によつて行ひ、各項の執筆は主として該研究部の文部技官隈元謙次郎、同河北倫明、同岡畏三郎、同中村傳三郎が担当した。

なほ本年鑑本文及び附録に見出だされる誤謬、或は不備の点などにつき、弘く一般からの厚意ある叱正教示を期待し、次年度以降の改善に資したいと念願してゐる。

昭和二十六年十二月

美術研究所長 松

本

榮

一

凡 例

一、本年鑑は、昭和二十一年一月から昭和二十五年十二月にいたる五年間の美術界の主要な出来事をつかった。

一、本年鑑の内容は、「図版」「本欄」「附録」の三部に大別し、「図版」には右期間中に発表された注目すべき作品の写真を主として掲載し「本欄」はわが国美術界の全般について、全体の展望、主要な事件、注目すべき展覧会、物故者、発表された文献などを記載した。「附録」は便覧として美術関係の法規、諸施設、団体、美術家及美術関係者名簿などを集録した。便覧の性質上この欄は原則として昭和二十六年一月現在に記録に従っている。

一、本年鑑であつかう美術の範囲は、一般に行われる狭義の解釈に従い、絵画、彫刻、工藝、および建築に限っている。絵画のうち、日本画と洋画の区別はむづかしい場合もあるが、だいたい現代の慣習に従った。建築はわれわれの注意をひく範囲にとどめた。

一、人名を記す場合は、すべて敬称をはぶいた。

一、古美術関係の事項については今回は最少限に記録するにとどめ、文献目録なども割愛した。

一、美術文献目録、および美術家及美術関係者名簿についてはそれぞれ項目の初めに凡例を記した。

目

次

序	一
凡例	三
目次	四
本欄	
美術界の展望(自昭和二十一年至昭和二十五年)	三
概観	三
日本画	三
洋画	四
彫刻	六
工芸	八
建築	九
行政	一〇
古美術	二
美術界五年史	三
昭和二十一年度	三
昭和二十二年度	五
昭和二十三年度	六
昭和二十四年度	三
昭和二十五年	三
美術工藝品修理補助金年度別予算額及修理件数表	四
重要文化財都府縣別件数表(美術工藝品之部)	四
文化財専門審議会専門委員名簿	四
日展審査員一覧	四
美術関係受賞者一覧	四
政府買上品一覧	四
日展関係統計表	三
現代美術展覧会	四
昭和二十一年度	四
昭和二十二年	五
昭和二十三年	七
昭和二十四年	八
昭和二十五年	一〇
物故作家及美術関係者	三
物故者索引	八
昭和二十一年度	三
昭和二十二年	四

昭和二十三年度	一五
昭和二十四年度	一六
昭和二十五年度	一四
美術文獻目錄	一五

凡例	一五
目次	一六

定期刊行物所載文獻	一七
-----------	----

現代美術關係	一七
--------	----

西洋美術關係	一五
--------	----

單行圖書	一五
------	----

現代美術關係	一五
--------	----

西洋美術關係	一六
--------	----

附錄

目次	一六
----	----

美術行政機關	一八
--------	----

文化財保護法	一八
--------	----

帝室技藝員	二〇
-------	----

日本藝術院	二〇
-------	----

日本美術展覽會	二〇
---------	----

文部省社會教育局藝術課	二〇
-------------	----

美術學校・研究所一覽	二〇
------------	----

學會一覽	二〇
------	----

美術觀覽施設一覽	二〇
----------	----

画廊一覽	二〇
------	----

美術團體一覽	二〇
--------	----

美術家及美術關係者名簿	二三
-------------	----

美術關係定期刊行物一覽	二六
-------------	----

口 繪 福田平八郎「白木蓮」……………(2回清流會)

圖 版 目 次

日本画 一頁—八頁

1 母の誕生日(2回創造美術展)	岩崎 鐸	5 聖女(18回靑龍社展)	内海加壽子
2 群像(3回創造美術展)	朝倉 攝	6 明治(35回院展)	岩橋英遠
3 銀河祭り(2回日展)	伊東深水	7 果物(34回院展)	小倉遊亀
4 少年群像(2回創造美術展)	秋野不矩	8 軍鶏(35回院展)	奥村土牛
		9 初冬(1回創造美術展)	奥村厚一
		10 苔寺須彌山石(35回院展)	太田聰雨
		11 高原(2回創造美術展)	加藤榮三
		12 夕化粧(6回日展)	梶原緋佐子
		13 朝晴(1回日展)	川合玉堂
		14 剃髮(35回院展)	片岡球子
		15 先師の面影(5回日展)	鍋木清方
		16 全閣炎上(22回靑龍社展)	川端龍子
		17 壺(35回院展)	小林古徑
		18 青宵(18回靑龍社展)	加納三樂

19 春潮(15回春の青龍社展).....坂口一草
 20 曾遊江南冊(24回春陽会展).....小杉放庵
 21 花と銀鶴(6回日展).....兒玉希望
 22 卓子(2回創造美術展).....澤 崎 浩
 23 秋(3回創造美術展).....信太金昌
 24 少女(5回日展).....高山辰雄
 25 白い花(35回院展).....高橋米子
 26 婦女(4回日展).....堂本印象
 27 双芳園(35回院展).....津 澤 末 枝
 28 二上山(22回青龍社展).....竹 内 未 明
 29 鯉(6回日展).....徳 岡 神 泉
 30 溪湖(2回南画院展).....戸 田 浩 堂
 31 氣球揚る(6回日展).....中 村 岳 陵
 32 三人(3回創造美術展).....廣 田 多 津
 33 魚の群れ(3回創造美術展).....稗 田 一 穂
 34 踊る娘達(2回創造美術展).....福 田 豊 四 郎
 35 髪(35回院展).....中 村 貞 以
 36 殘照(3回日展).....東 山 魁 夷
 37 新雪(4回日展).....福 田 平 八 郎
 38 櫻島(6回日展).....西 山 英 雄
 39 柳鷺図(18回青龍社展).....時 田 直 善
 40 收穫の風景(1回創造美術展).....堀 文 子
 41 風神雷神(34回院展).....前 田 青 邨
 42 松泉(1回日展).....松 林 桂 月
 43 蓮(3回日展).....三 谷 十 糸 子
 44 蝶と花(10回日本画院展).....望 月 春 江
 45 原爆の図(日本美術会3回アンデパンダン展).....丸 松 俊 子
 46 殘雪(1回創造美術展).....山 本 丘 人
 47 湯原(2回創造美術展).....吉 岡 堅 二
 48 日向(5回日展).....山 口 華 楊

49 流れ行く水(35回院展).....横 山 大 観
 50 紅粧図(18回青龍社展).....山 崎 豊
 51 大觀先生像(35回院展).....安 田 勲 彦
 52 夏の印象(6回日展).....山 口 蓬 春
 西洋画 九頁一七頁
 53 道化貴族讀賣2回アンデパンダン展阿部展也
 54 裸(14回自由美術展).....麻 生 三 郎
 55 新開地(4回連合展).....朝 井 閑 右 衛 門
 56 太陽図(4回連合展).....荒 井 龍 男
 57 牛と静物(24回回画会展).....伊 藤 康
 58 バレリーナ夢想(14回新制作派展).....猪 熊 弦 一 郎
 59 運河の交響(1回擅会展).....牛 島 憲 之
 60 三津(22回回画会展).....梅 原 龍 三 郎
 61 ユーロップの掠奪(3回連合展).....同
 62 詩人(33回二科展).....岡 田 謙 三
 63 船(26回春陽会展).....岡 鹿 之 助
 64 二人の女(33回二科展).....大 澤 昌 助
 65 裏河(10回新制作派展).....萩 須 高 徳
 66 雲は機械である(個展).....恩 地 孝 四 郎
 67 畫(24回回画会展).....香 月 泰 男
 68 森の掟(35回二科展).....岡 本 太 郎
 69 作品(34回二科展).....桂 ユ キ 子
 70 鮭のある静物(個展).....川 端 實
 71 バレリーナ(6回日展).....木 下 孝 則
 72 花咲く村道(12回一水会).....木 下 義 謙
 73 一の酉(27回春陽会展).....木 村 莊 八
 74 夏の山川(35回二科展).....北 川 民 次
 75 豫側(3回二紀展).....熊 谷 守 一
 76 二人裸婦(13回新制作派展).....小 磯 良 平

77 女(個展).....小 泉 清
 78 夏山(18回独立展).....兒 島 善 三 郎
 79 盛夏浅間山(12回一水会展).....小 山 敬 三
 80 白と黒(14回新制作派展).....佐 藤 敬
 81 海(18回独立展).....小 林 和 作
 82 少女(個展).....里 見 勝 藏
 83 静物(高島屋創立30年記念展).....坂 本 繁 二 郎
 84 浜(室戸)(17回独立展).....須 田 國 太 郎
 85 三月堂月明(23回回画会展).....杉 本 健 吉
 86 長崎の丘(35回二科展).....鈴 木 信 太 郎
 87 櫻島(4回連合展).....曾 宮 一 念
 88 関門海峡の朝(12回一水会展).....田 崎 廣 助
 89 夏の函館港(4回行動美術展).....田 邊 三 重 松
 90 山の貯水池(2回日展).....高 田 誠
 91 熱海梅園(4回連合展).....高 島 達 四 郎
 92 皿と三つの果物(18回独立展).....鳥 海 青 兒
 93 座像(3回連合展).....中 村 研 一
 94 牧歌(33回二科展).....東 郷 青 兒
 95 長崎の夕ぐれ(4回連合展).....野 口 彌 太 郎
 96 黒潮(4回二紀展).....鍋 井 克 之
 97 裸婦(個展).....寺 内 富 治 郎
 98 O女史之像(11回一水会展).....裕 三 彩 亭
 99 マチヨリカ壺(27回春陽会展).....中 川 一 政
 100 猫の居る家族(14回自由美術展).....長 谷 川 三 郎
 101 星女像(個展).....林 武
 102 大地の果て(個展).....福 澤 一 郎
 103 静物(夜の構図)(14回新制作派展).....三 岸 節 子
 104 雪景(2回日展).....眞 下 慶 治
 105 裸婦(4回二紀会展).....宮 本 三 郎
 106 勤勞讀二題ノ内(まひる)(1回行動

美術展).....向井潤吉
母と子(4回連合展).....村井正誠
緑の感覚(4回女流アンデパンダン展)森田元子
二人(14回自美由術展).....森芳雄
桃(12回一水会展).....安井曾太郎
安倍先生像(1回日展).....同
天雲頌・響神炎板西梅拔萃六韻21回
国画会展).....棟方志功

彫刻 一八頁—一九頁

作品S(6回日展).....朝倉響子
三相(6回日展).....朝倉文夫
二の和(35回二科展).....笠置季夫
婦人の首(6回日展).....畠村直久
たつろう像(14回新制作派展).....佐藤忠良
作品Aの8(5回行動美術展).....建昌覺造
若い人(個展).....イサム・野口
犬の唄(14回新制作派展).....柳原義達
めばえ(14回自由美術展).....鶴岡政雄
光あれ(6回日展).....水船六洲
戦歿学生記念像(14回新制作派展)本郷新
平和の群像(試作)(14回新制作派展)菊池一雄
古橋選手の像(5回日展).....藤野舜正
衣と食と(4回日展).....齋藤知雄
少年のトルソー(35回院展).....新海竹藏
たか子さん(6回日展).....瀬戸團治
七十五年頌(2回日展).....平櫛田中
大和禪師像(3回日展).....關野聖雲

工藝 二〇頁—二二頁

131 テーブルセット(型々展).....イサム・野口
132 椅子(個展).....イサム・野口
133 陶赤繪四君子文瓢瓶(1回現代美術展).....加藤士師萌
134 茶(6回日展).....平田郷陽
135 籠の蒔繪盛器(4回日展).....松田権六
136 葆光白磁牡丹花瓶(4回日展).....板谷波山
137 クリスタルガラス花器(5回日展).....各務鑽三
138 白樺の風炉先屏風(6回日展).....彼谷芳水
139 室内セット(日本輸出工藝展).....
140 四分一切撮小宮舞御堂(2回日展)山脇洋二
141 室内セット(14回新制作派展).....
142 フランス船食堂のパネル.....東京輸出工藝家協会
143 銅製灰落セット(5回型々工藝集團展).....
144 筆筒(3回新匠会展).....田中芳郎
145 兵庫鎖文様飾籠(6回日展).....内藤四郎
146 銅花器(6回日展).....小島保彦
147 藤織更紗屏風(3回新匠会展).....松崎福三郎
148 木曳香爐(4回日展).....矢部連兆
149 白熱燭台(1回現代美術展).....香取秀眞
150 藤織屏風(童女図)(2回日展).....山鹿清華
.....佐野猛夫

建築 二二頁—二三頁

151 久ヶ原教会.....山口文豪設計
152 全日本造船労働組合会館.....今泉善一
153 慶応義塾大学々生ホール.....谷口吉郎
154 女子学院.....日建設計工務株式会社
155 大阪銀行々員アパート.....佐藤秀三
156 建設省公務員アパート.....建設省管理局管轄部

157 戸山ハイツ.....建設省・厚生省・東京都建築局
158 東京海上ビル別館.....三菱地所株式会社
159 大映共同住宅.....松田・平田設計事務所
160 歌舞伎座(改装).....吉田五十八・木村武一
161 ナイトクラブ銀馬車 岡田哲郎建築設計事務所
162 東京スポーツセンター.....三菱地所株式会社
163 慶応義塾大学四号館.....谷口吉郎
164 ドライブイン.....清水建設株式会社
165 山口市役所廳舎.....藏田周忠
166 N氏邸.....加倉井昭夫建築事務所
167 K氏邸.....坂倉準三建築研究所
168 I氏邸.....松田・平田設計事務所

物故者 二四頁

1 津田信夫 昭和二一・二・一七逝去
2 田中善之助 〃 〃 〃 九・一八
3 山本 鼎 〃 〃 〃 一〇・九
4 牧野虎雄 〃 〃 〃 一〇・一八
5 天沼俊一 〃 〃 〃 一一・九
6 小林萬吾 〃 〃 〃 一二・六
7 田中豊藏 〃 〃 〃 二三・四二六
8 岡本一平 〃 〃 〃 一〇・一一
9 清水南山 〃 〃 〃 一二・七
10 中山岩太 〃 〃 〃 二四・一・二〇
11 長野草風 〃 〃 〃 二・六
12 上村松園 〃 〃 〃 八・二七
13 北 連藏 〃 〃 〃 一二・二一
14 南 薫造 〃 〃 〃 二五・一・六
15 六角紫水 〃 〃 〃 四・二四
16 見島喜久雄 〃 〃 〃 七・五

自昭和二年
至昭和五年
物故者索引
(五十音順)

北野恒富	北島淺一	北谷運藏	木谷千種	河野通勢	川村吾藏	鹿島英二	狩野探道	荻野仲三	岡本一平	大藏雄夫	大國貞藏	大口理夫	尾川藤十郎	小山内龍	上村松園	入江波光	今西中通	今關啓司	石崎光瑤	石川宰三郎	池田永一治	伊勢專一郎	井上和雄	天沼俊一	相田直彦	巖光
(22・5・20)	(23・9・18)	(24・12・21)	(22・1・24)	(25・3・31)	(25・3・11)	(25・5・1)	(23・6・4)	(22・5・21)	(23・10・11)	(21・1・24)	(22・2・11)	(23・11・10)	(25・4・24)	(21・11・1)	(24・8・27)	(23・6・9)	(22・6・10)	(21・3・31)	(22・3・25)	(22・3・26)	(25・12・30)	(23・1・13)	(21・6・20)	(22・9・1)	(21・1・22)	
.....	
二四	二五	二四	二四	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	
長野草風	中山岩太	中村亮平	中村大三郎	中西利雄	德川義恭	津田信夫	谷脇素文	多田北鳥	田中松太郎	田中豐藏	田中善之助	關野聖雲	杉田益次郎	下村爲山	芝田徹心	清水南山	清水澄	笹川臨風	近藤光紀	香田勝太	兒島喜久雄	小林萬吾	小林德三郎	小早川清	小島勝美	
(24・2・5)	(24・1・20)	(22・7・7)	(22・9・14)	(23・10・6)	(24・12・12)	(21・2・17)	(21・4・28)	(23・1・1)	(24・3・10)	(23・4・26)	(21・9・18)	(22・10・28)	(22・1・22)	(24・7・10)	(25・2・6)	(23・12・7)	(22・9・25)	(24・4・13)	(23・8・9)	(21・7・5)	(25・12・6)	(22・4・19)	(24・4・4)	(23・12・13)		
.....		
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五		
和田嘉平治	渡部審也	六角紫水	吉田秋博	吉田光鼎	山本一	安本亮一	安田半圓	森脇忠	村山しげる	南薫造	御厨純一	松本竣介	松方幸次郎	正木篤三	牧野虎雄	牧野伸顯	前田荻郎	福原信三	廣幡憲	濱地青松	濱田葆光	野口米次郎	野口謙次郎	野上豐一郎		
(25・6・18)	(25・12・5)	(25・4・15)	(25・4・5)	(21・6・21)	(21・10・8)	(25・11・6)	(22・9・8)	(24・10・13)	(24・9・13)	(25・1・6)	(23・2・7)	(23・6・8)	(25・6・24)	(25・10・25)	(21・10・18)	(24・1・25)	(22・1・19)	(23・11・4)	(23・10・10)	(22・3・18)	(22・1・18)	(22・7・13)	(22・5・21)	(25・2・23)		
.....		
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五		

圖

版



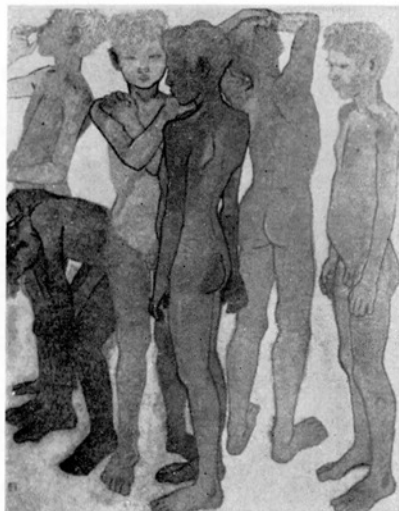
2 群像 朝倉 耕 1950



1 母の誕生日 岩崎 鐸 1949



5 聖女 内海加壽子 1946



4 少年群像 秋野 不矩 1949



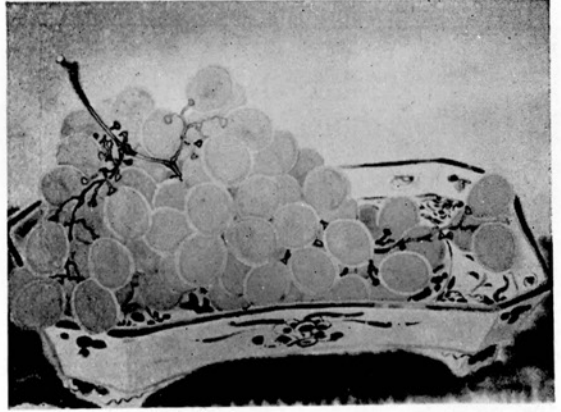
3 銀河祭 伊東深水 1946



6 明治 岩橋 英遠 1950



8 軍雞 奥村土牛 1950



7 果物 小倉遊亀 1949



10 苔寺須彌山石 太田聽雨 1950



9 初冬 奥村厚一 1948



12 夕化粧 梶原緋佐子 1950



11 高原 加藤榮三 1949



14 剃 髮 片岡球子 1950



13 朝 晴 川合玉堂 1946



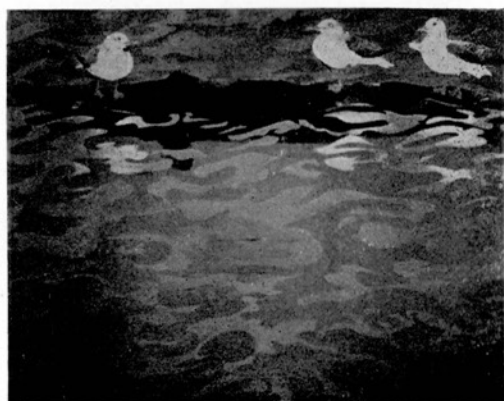
16 金閣炎上 川端龍子 1950



18 青 宵 加納三樂 1946



15 先師の面影 鍋木清方 1949



19 春 潮 坂口一草 1947



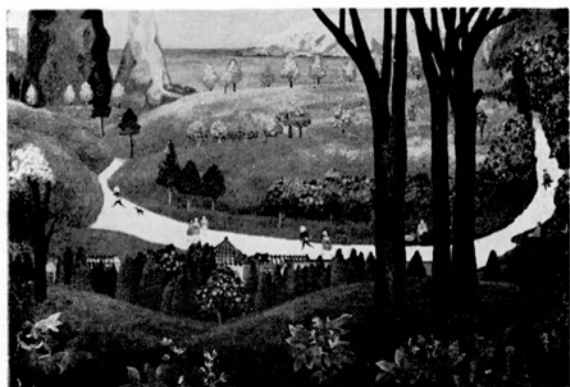
17 壺 小林吉徳 1950



21 花と銀雞 児玉希望 1950



20 曾遊江南冊 小杉放庵 1947



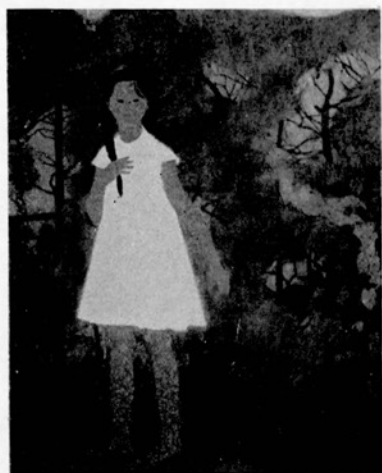
23 秋 信田金昌 1950



22 卓子 澤宏毅 1949



25 白い花 高橋米子 1950



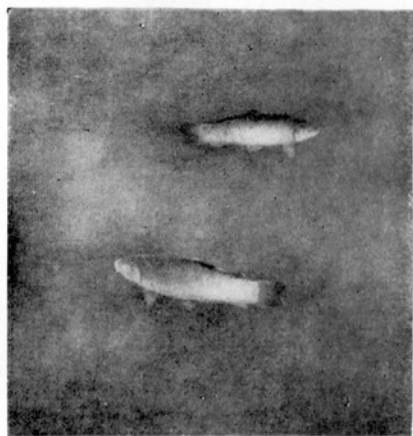
24 少女 高山辰雄 1949



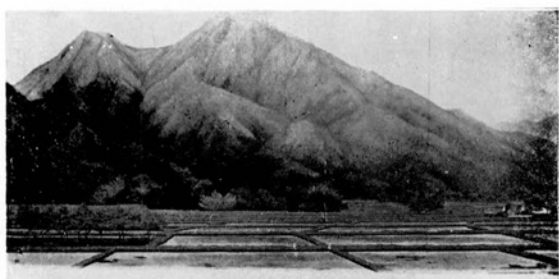
27 双芳图 津澤末枝 1950



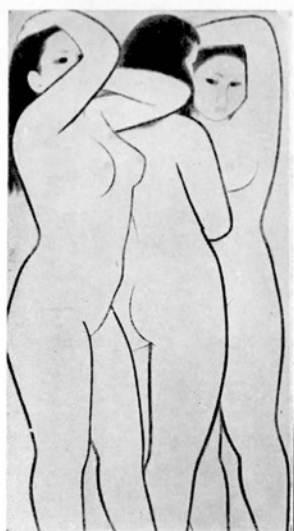
26 婦 女 堂 本 印 象 1948



29 鯉 徳岡神泉 1950



28 二 上 山 竹 内 未 明 1950



32 三人 廣田多津 1950



31 氣球揚る 中村岳陵 1950



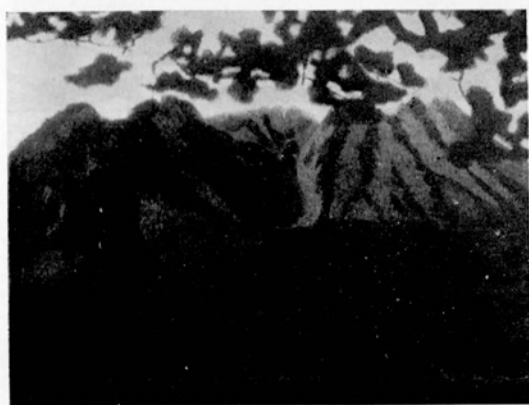
30 溪澗 戸田浩堂 1947



34 踊る娘 福田豊四郎 1949



36 残照 東山魁夷 1947



38 櫻島 西山英雄 1950



39 柳鶯園 時田直善 1946



33 魚の群れ 稗田一穂 1950



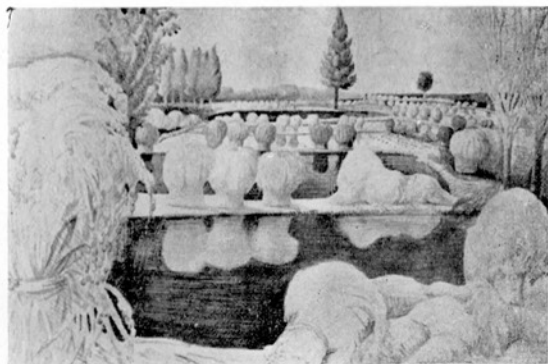
35 髪 中村貞以 1950



37 新雪 福田平八郎 1948



41 風洞雷神 前田青邨 1949



40 收穫の風景 堀文子 1948



42 松泉 松林桂月 1946



43 蓮 三谷十糸子 1947



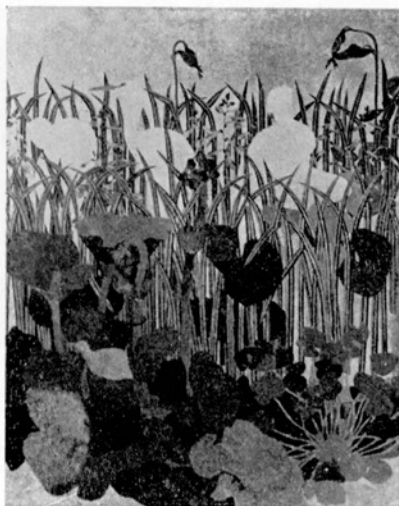
44 蝶と花 望月春江 1950



45 原爆の図(第一部) 赤松俊子・丸木位里共同製作 1950



48 日向 山口華楊 1949



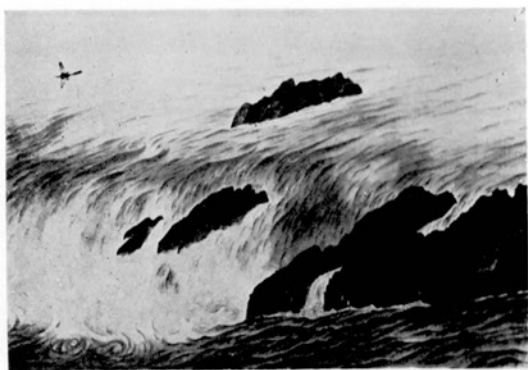
47 湯 原吉岡堅二 1949



46 残雪 山本丘人 1948



50 紅粧図 山崎豊 1946



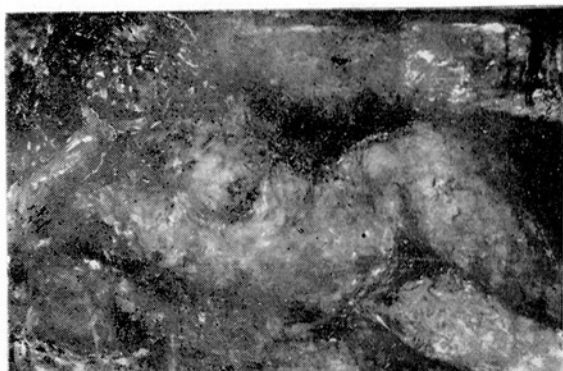
49 流れ行く水 横山大観 1950



52 夏の印象 山口蓬春 1950



51 大観先生像 安田靫彦 1950



54 裸 麻生 三郎 1950



53 道化貴族 阿部 展也 1950



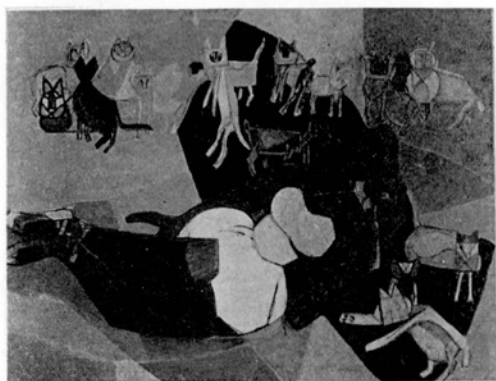
56 太陽図 荒井龍男 1950



55 新開地 朝井閑右衛門 1950



57 牛と静物 伊藤 廉 1950



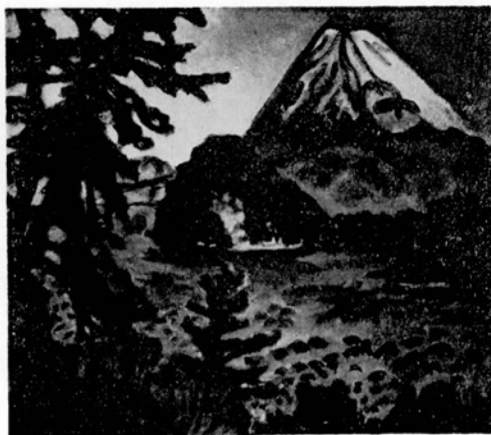
58 パレリーナ夢想 猪熊弦一郎 1950



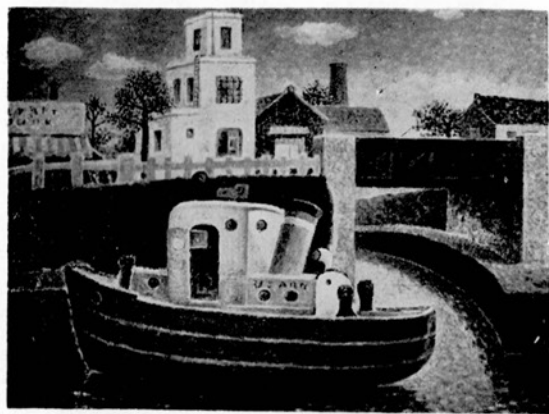
59 運河の交番 牛島 憲之 1950



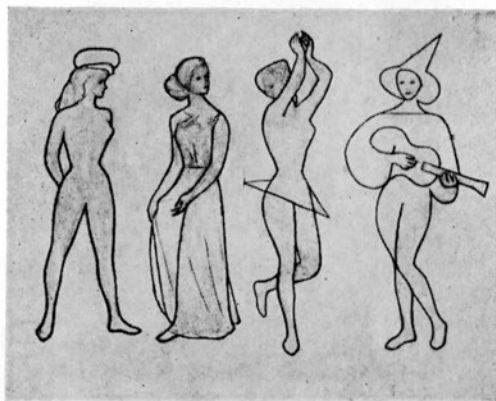
61 ユーロープの掠奪 梅原龍三郎 1949



60 三津 梅原龍三郎 1948



63 船 岡鹿之助 1950



62 詩人 岡田謙三 1947



66 雲は機械である 恩地孝四郎 1950



65 裏河 萩須高德 1946



64 二人の女 大澤昌助 1948



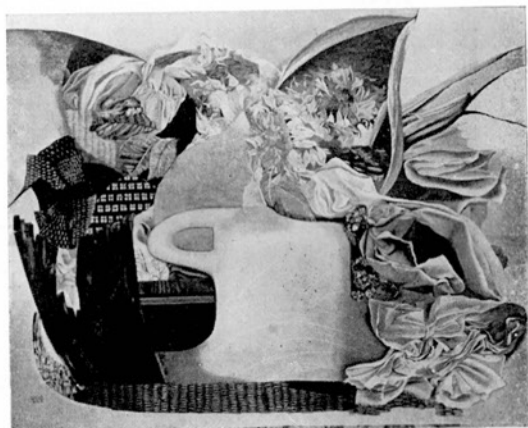
68 森の掟 岡本 太郎 1950



67 晝 香月 泰男 1950



70 鮭のある静物 川 端 實 1949



69 作品 桂 ユキ子 1949



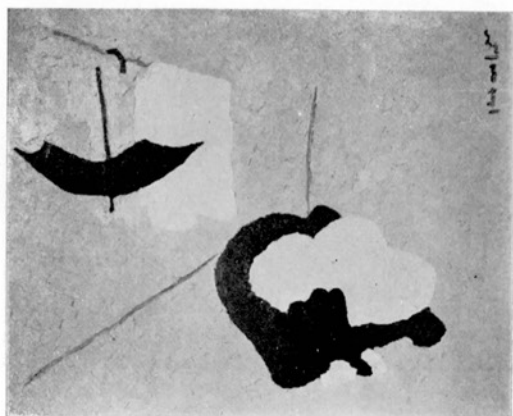
72 花咲く村道 木下 義謙 1950



73 一の酉 木村 莊八 1950



71 バレリーナ 木下孝則 1950



75 縁側 熊谷 守一 1949



74 夏の山川 北川 民次 1950



77 女 小泉 清 1950



76 二人裸婦 小磯 良平 1949



79 盛夏浅間山 小山 敬三 1950



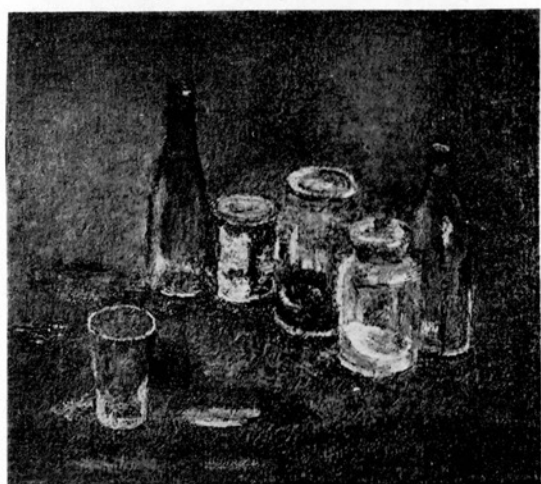
78 夏山 児島善三郎 1950



81 海 小林 和作 1950



80 白と黒 佐藤 敬 1950



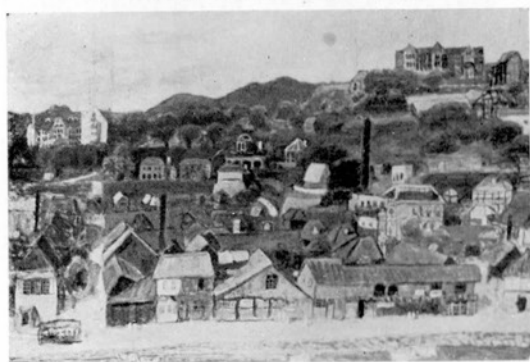
83 静物 坂本繁二郎 1949



82 少女 里見 勝蔵 1948



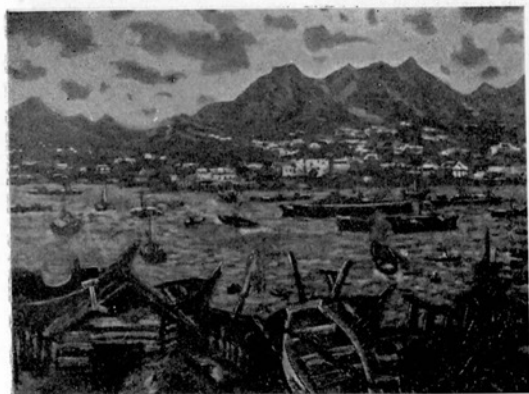
85 三月堂月明 杉本 健吉 1949



86 長崎の丘 鈴木信太郎 1950



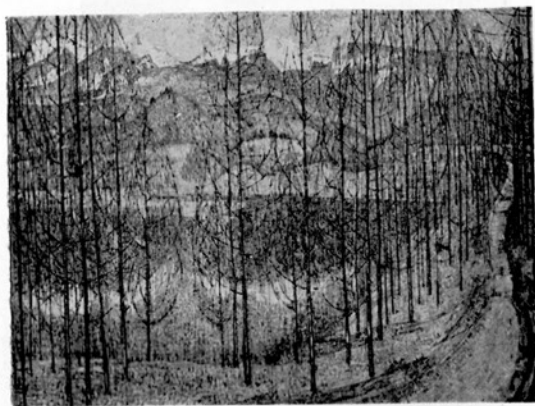
84 浜 須田國太郎 1949



88 関門海峡の朝 田崎 廣助 1950



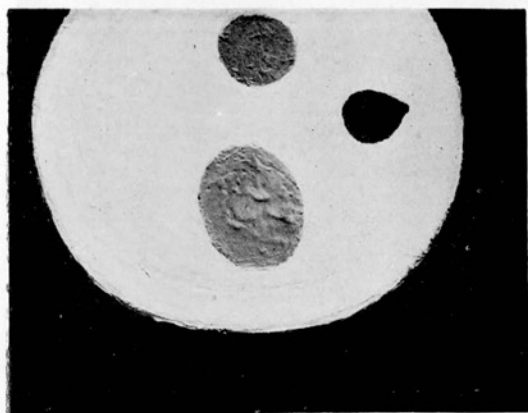
87 櫻島 曾宮 一念 1950



90 山の貯水地 高田 誠 1946



89 夏の函館港 田邊三重松 1949



92 皿と三つの果物 島海青児 1950



91 熱海梅園 高島達四郎 1950



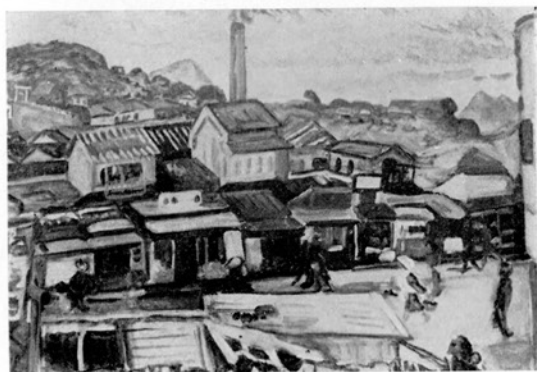
94 牧歌 東郷青児 1948



93 座像 中村研一 1949



96 黒潮 鍋井克之 1950



95 長崎の夕ぐれ 野口彌太郎 1950



99 マヂョリカ壺 中川一政 1950



98 O女史之像 陥三彩亭 1949



97 裸婦 寺内萬治郎 1950



101 星女像 林 武 1950



103 静物(夜の構図) 三岸節子 1950



105 裸 婦 宮本三郎 1950



100 猫の居る家族 長谷川三郎 1950



102 大地の果て 福澤一郎 1950



104 雪 景 眞下慶治 1946



106 勤勞讃二題ノ内(まひる) 向井潤吉 1946



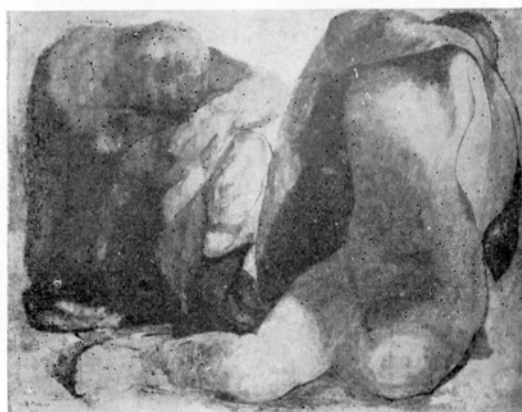
108 線の感覚 森田元子 1950



107 母と子 村井正誠 1950



110 桃 安井曾太郎 1950



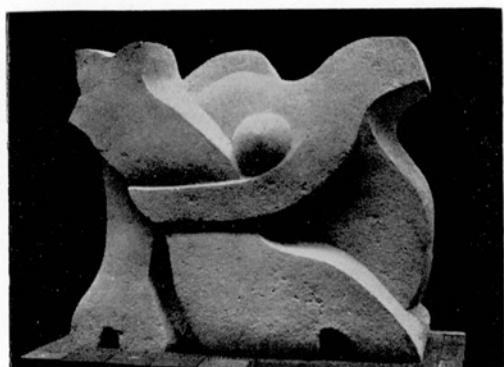
109 二人 森芳雄 1950



111 安倍先生像 安井曾太郎 1946



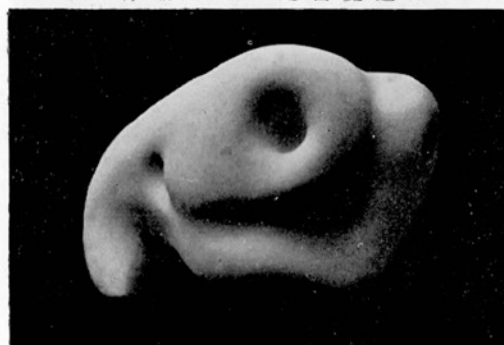
112 天雲頌・響神炎板謁欄拔萃六韻 棟方志功 1947



115 二の和 笠置季男 1950



118 作品Aの8 建畠覚造 1950



121 めばえ 鶴岡政男 1950



122 光あれ 水船六洲 1950



114 三相 朝倉文夫 1950



113 作品S 朝倉響子 1950



117 たつろう像 佐藤忠良 1950



116 婦人の首 畝村直久 1950



120 犬の唄 柳原義達 1950



119 若い人 イサム・野口 1950



125 古橋選手の像 藤野舜正 1949



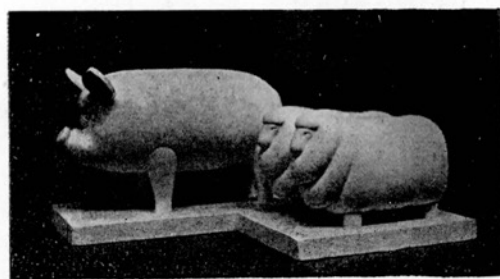
124 平和の群像 菊地一雄 1950



123 戦歿学生記念像 本郷新 1950



127 少年のトルソー 新海竹藏 1949



126 衣と食 齋藤知雄 1948



130 大和禪師像 關野 聖雲 1947

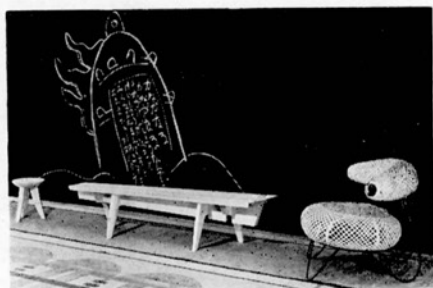


129 七十五年頌 平櫛田中 1946

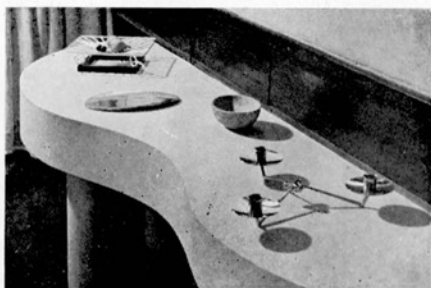


128 たか子さん 瀬戸園治 1950

彫 刻



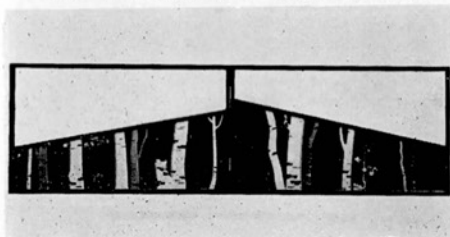
132 椅子 イサム・野口 1950



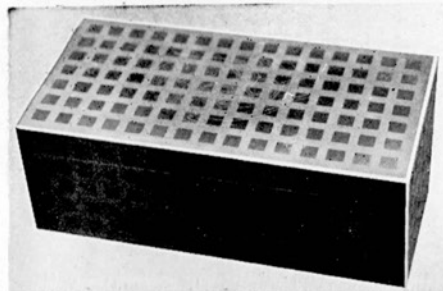
131 テーブルセット 型々展 1950



135 龍の蒔繪盛器 松田権六 1948



138 白楳の風炉先屏風 彼谷芳水1950



140 四分一切嵌小宮舞御堂 山脇洋二1946



134 茶 平田郷陽1950



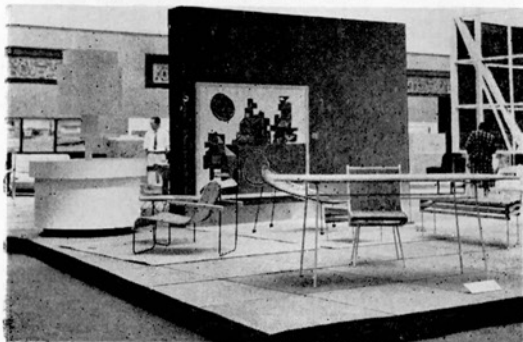
133 陶赤繪瓢瓶 加藤土師萌1947



137 クリスタルガラス花器 各務謙三 1949



136 霽光白磁牡丹文花瓶 板谷波山 1948



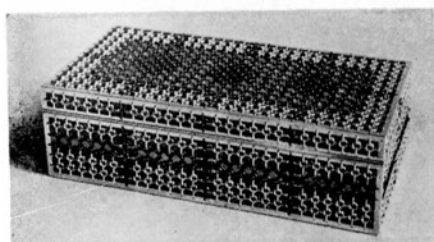
141 室内セット 14回新制作派展 1950



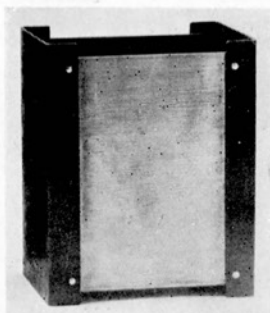
139 室内セット 日本輸出工芸展 1948



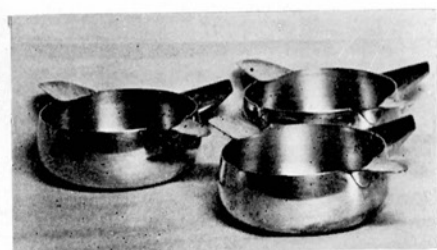
142 フランス船食堂のパネル 東京輸出工芸家協会 1950



145 兵庫鎖文様飾箱 小島保彦 1950



144 筆筒 内藤四郎 1949



143 銅製灰落セット 田中芳郎 1949



148 木兎香炉 香取秀眞 1948



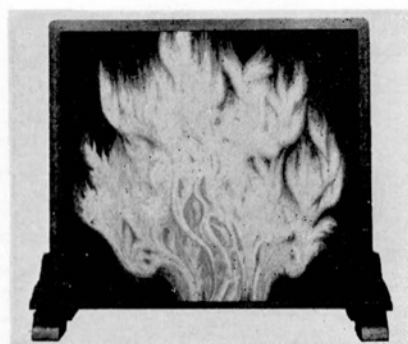
147 蒔縷更紗屏風 矢部連兆 1949



146 鍍銅花器 松崎福三郎 1950



150 蒔縷屏風 佐野猛夫 1946



149 自然図衝立 山鹿清華 1947

工 藝

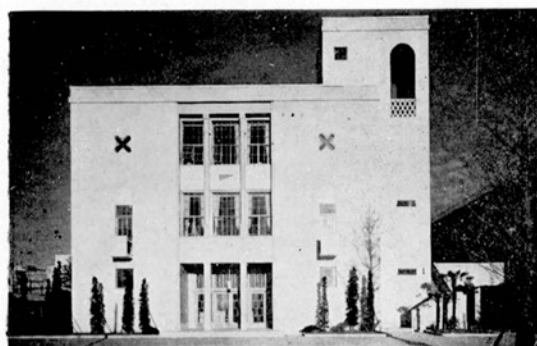
(一部工芸指導所提供寄託による)



152 全日本造船労働組合会館 1949



151 久ヶ原教会 1950



154 女子学院 1950



153 慶應義塾大学学生ホール 1949



156 建設省公務員アパート 1949



155 大阪銀行々員アパート 1950



158 東京海上ビル別館 1950



157 戸山ハイツ 1949



161 ナイトクラブ "銀馬車" 1950



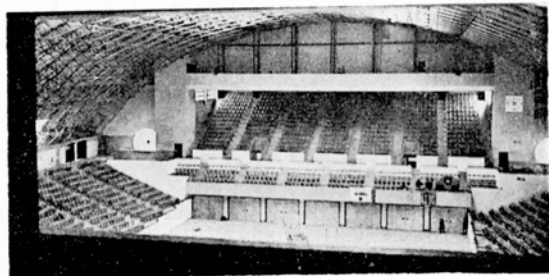
160 歌舞伎座 (改装) 1950



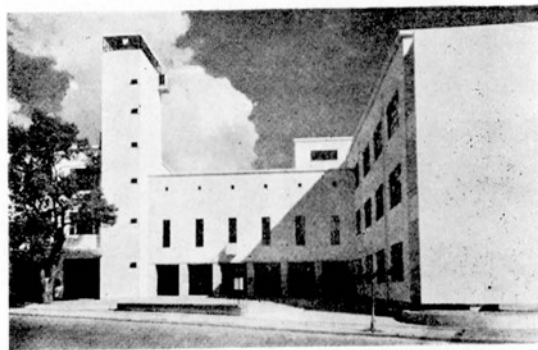
159 大映 共同住宅 1949



163 慶應義塾大学四号館 1949



162 東京スポーツセンター 1949



165 山口市役所庁舎 1950



164 ドライブイン 1950



168 I 氏 邸 1950



167 K 氏 邸 1949



166 N 氏 邸 1949



4 牧野虎雄 21.10.18



3 山本 鼎 21.10.9



2 田中善之助 21.9.18



1 津田信夫 21.2.17



8 岡本一平 23.10.11



7 田中豊蔵 23.4.26



6 小林萬吾 22.12.6



5 天沼俊一 22.9.1



12 上村松園 24.8.27



11 長野草風 24.2.6



10 中山岩太 24.1.20



9 清水南山 23.12.7



16 兒島喜久雄 25.7.5



15 六角紫水 25.4.24



14 南 薫造 25.1.6



13 北 蓮藏 24.12.21

本

欄

自昭和二十一年 美術界の展望

概観

戦後五ヶ年の美術界は、全体としてみると戦時中きびしく行われた統制抑圧に対する反撥の動きとなつており、起つてきた文化国家の提唱とあいまつて量的には戦前以上の活況を示すにいたつた。しかしまた基盤となる社会情勢や経済的條件も十分には安定せず、質の上の決定的な成果には到らなかつた。

まず戦時中行われた日本中心主義がすてられ、西歐的な自由主義、民主主義が強調されるとともに、国内にあつた西洋近代美術の流れが統々と力を得て復活し、他方しきりに海外美術の動向が紹介輸入された。

これによつて二一年にはなお戦時中の空白を示し、技術も低下していたものが一氣に高められ、各種展覧會が華やかに幕をひらき、美術に対する関心もひろく社会各層にみられるようになった。二三年以後となれば西歐の近代様式が美術各部門に浸透する情勢となり、

一方前衛的な諸派もしだいに活況を呈するにいたつてゐる。このような動向を背景として、美術関係の出版物も戦前に比をみぬ多数を發行し、それも主として西洋近代美術関係のものが圧倒的であつたことは注目に値する。ために洋画壇は著しく活氣づいて多くの団体や作家を送りだし、これに反し、伝統的な日本画壇は時勢におかれて昏迷に陥つた。戦後の新しい日本画はこの圧力をうけて次第に洋画に追隨する経過をえ

がくことになつてゐる。しかし、以上のような大勢もやがて社会の落ちつきとともに反転の氣配をみせ、一方鑑賞層の成長とともに展覧會の魅力もうすらぎ、名

作展など特殊の展覧のほかに一般団体展は次第に赤字による経営難を示すようになった。展覧會に各種のアトラクションが出現して話題を投げたのもこの傾向の一端であつた。こうして、近代西洋美術に対する急激な傾倒も、一応は戦時中の空白を埋めるまでに進んだが、まだ十分肉体化されぬ皮相の模倣にすぎぬ点が反省されるようになり、次の動きが促される段階に及んでいる。

この情勢の中に、従来の文部省美術展覧會は日本美術展覧會と改められ、二一年には審査員公選、鑑査公開など慌しい民主化が計られたが、結果としては成功せず、翌年には日展事件などが起り、ことに洋画壇の有力団体がほとんど不参加を表明する事態となつた。二四年度からは美術展覧會に対する政府予算が打ちきられ、日本藝術院・日展運営會の共同主催という新形式の半官展が成立している。

古美術界では、二二年成立した国立博物館を中心に各種の特別展や啓蒙普及の事業がすすめられ、華々しい活動もみられたが、戦後の不安定状態を示すものとして法隆寺焼失のような大事件が起つた。その他にも国宝や古建築の焼失、腐朽の事実は多数にのぼり、これを機会に新たに文化財保護法が成立し、多彩な行政機構上の変革が行われた。しかしなお多くの課題を残しているのが二五年までの実状である。(河北倫明)

日本画

戦時中日本的国粹的思潮に支えられて隆盛をみた日本画は、反対に戦後は敗戦による民族の自信喪失を反

映して昏迷の状態に陥つた。

二一年中には第一回日展、第二回日展のほか、院展青龍社などの団体展もひらかれたが、すでに戦前に円熟していた少数の大家が一部に佳作をみせたほか、一般には方向を見失ひ、消極的な画風をくりかえすだけであつた。戦後の社会には古い体制を一挙に民主的に解放しようとする動きが各方面にみえ、残存する封建性への批判が各所で取上げられたが、日本画壇はことに前近代的なものととして厳しい批判をあびた。

この批判は二二年に入つて泰西名画展、西洋名作展などが統開され、戦争による空白を埋めようとする近代化の時流が高まるにおよび、さらに重なる決定的となり、ついには日本画第二藝術論、日本画滅亡論なども唱えられるようになった。こうした風潮に対し、老大家は依然として自己の藝術の堅壘を守つたけれども中堅以下の作家となると少なからぬ刺戟と影響をうけるを得なかつた。一部には、まったく異なる近代様式の画風に急変する作家も出てくるし、一般には洋画壇の生氣とは打つて変わるほど無氣力な状態が現われている。

このような日本画壇も二三年に入る頃から、何とか窮地を打開しようとする動きが萌し、その先頭は一月の新団体「創造美術」の結成となつて反響をよんだ。この新団体は「我等は世界性に立脚する日本繪畫の創造を期す」という綱領をかかげ、日本画壇の封建的因襲に抵抗し、東洋の基盤に立つ新しい美を求めようとするもので、東京の山本丘人、吉岡堅二、福田豊四郎ら六名と、京都の奥村厚一、上村松篁ら七名の進歩的な中堅作家からなり、在野を宣言して戦後日本画の重要な推進力となつてゐる。その第一回展は二三年九月に開催されたが、日本画近代化の激しい意氣込みが好感

をもつて迎えられたと同時に、手がかりとした近代洋画にあまり追随しすぎるとの批判も生れた。しかしこの動きによつて戦後日本画の停滞が打ちやぶられたことは特記に値しよう。また二三年には国立博物館で日本美術史総合展、近代日本美術総合展があいついて催され、過去の日本美術に改めて目をむける機会がつけられた。

二四年になると、創造美術の洋画的傾向は種々の批難をうけながらも、日展、院展などの作家にも刺戟をあたえ、ことに新進の作家には近代西洋繪畫の造型的性恪や感覚的特徴を攝取しようとする動きが目だつてきた。色彩は明るく強くなり、それと同時に顔料の油繪具に近い使い方が圧倒的にふえ、中には抽象繪畫的な表現を試みる作家もあらわれ、額縁も洋画風のものが増加するにいたつた。が、それと同時に、日本画に對する戦後新世代の無関心はその極に達し、二四年四月東京藝術大学美術学部日本画科の志望者はわずか定員の一名超過という類例のない激減ぶりをみせた。二一年日本画雑誌として創刊された「三彩」もこの状態を反映して年毎に不調となり、「みづゑ」「アトリエ」などの洋画雑誌がはるかに戦前を越える部数を出したのと反対に、二四年末には氣息も弱る状態を示している。

しかしこの不振の日本画壇も社会が落つにつれ、少しづつ息を吹きかえすかにみえ、あるいは二四年グルツセ教授の末朝に激励され、ことに同年一月の「横山大觀画業六〇年展」は日本画のもつ独自性を思いださせるに十分であつた。さらにこのような回顧展は二五年二月「上村松園とその藝術展」、同年七月「明治大正昭和巨匠名作展」とつづき、日本画の再生に力づよい刺戟が送られた。「創造美術」の新傾向が一般

にひろがると同時に、これとは別に新日本画を出そうとする試みも各派団体の中に萌え、二五年二月には伊東深水、兒玉希望を顧問に日展中堅作家を集めた「日月社」が成立し、新人の研究的グループである「一采社」なども活況をみせるにいたつた。日展、院展、青龍社の各展覧会も毎回批難をあびながらも、少しづつ生氣を取もどし、近代的な新日本画の出現がしだいに待望される状態となつてゐる。

以上の五年間にくに注目すべき作家をあげれば院展では、主として老大家が活躍し、「四時山水」「被褐懷玉」「流れゆく水」を出した八〇余歳の横山大觀をはじめ、「王照君」「大觀先生」をかけた安田靉彦、「舞踊」「壺」をかけた小林古徑、「郷里の先覺」「風神雷神」「鯉」の前田青邨、そのほか奥村土牛、中村貞以、小倉遊亀、太田聰雨らが活躍し、新しく岩橋英遠、高橋米子らも進出をみせた。

日展では、二一年中は院展系作家も多く参加していたが、その後はしだいに本来の官展系作家の活躍舞台となり、「朝夕安居」「先師の面影」をかけた鍋木清方、「菊」「新雪」と秀作を出した福田平八郎、「榻上の花」「夏の印象」の山口蓬春、「銀河祭」「舞」「閑香」の伊東深水、「赤松」「鯉」の徳岡神泉、そのほか小野竹喬、院展を脱退した中村岳陵をはじめとして、堂本印象、山口華楊、東山魁夷、西山英雄、さらに新しく高山辰雄らの活躍がみられた。

戦後画壇に問題をなげた創造美術は一三会員いずれもそれぞれの活躍を示したが、ことに「草上の秋」の山本丘人、「渾厚」の吉岡堅二、「踊る娘達」の福田豊四郎がその中心となり、京都の廣田多津、秋野不矩の兩閑秀作家も精進がみとめられた。しかしさらに注視されたのは創造美術によつて紹介された新人群で、堀

文子、碑田一穂、岩崎鏡、朝倉頼らは、未完成ながらも新しい型の作風を打ち出している。

青龍社は依然として川端龍子の独り舞台に近く、二五年の「金閣炎上」「沼の饗宴」にいたるまで毎回たくましい力作を発表してきているが、加納三樂、安西啓明ら以前からの社人以外に別に有力な作家の出現はみえない。なお坂口一草は二五年から脱退して日展に参加した。

右は主要な団体展についてふれたが、他に鑑賞面の展覧は各所に行われ、清光会、七弦会などのほか清流会、無名会その他の会がはじめられ、時にはかなりの作品を集めて展覧した。なお小杉米醒、中川一政、和田三造ら洋画系作家がみせた日本画にも注目すべき佳作があつた。（河北倫明）

洋 画

終戦直後の思想的な虚脱感や社会的、経済的悪條件はひとしく洋画家の製作意欲を阻止し、記録画製作のため遠く外地に東奔西走した多くの洋画家たちの疲労困ばいは仲々回復せず、青年作家は長い間製作、研究から離れて、技術は極度に低下した状態に在つた。しかし、思想的な解放と長い鎖国の状態に置かれた反動としての海外文化への憧憬は、西洋画一般の急速な復活を促し、今日においては、作家の技術はほぼ戦前の域に達し、展覧会の数においては戦前にまさるとも劣らず、海外美術の紹介も頻りに行われるようになった。この五年間の経過を簡単に辿つて見よう。

昭和二年は、春に、昭和二〇年度の官展として第一回日本美術展覧会が開かれたのをはじめ、それぞれ復活した国画会、独立美術協会、奉陽会、美術文化協会、光風会、創元会等が展覧会を開いた。しかし、

未だその作品は低調であつて、わずかに日展に出陳された安井曾太郎の「安倍先生像」、梅原龍三郎の「北京風景」、嵯峨伊之助の「黄八丈の令嬢」春陽会展の岡鹿之助の「花籠」美術文化協会の福澤一郎の「世相群像」などが優れて居り、むしろ国画会展の梅原の二〇年回顧陳列や独立展の清水登之の遺作陳列が注目された。秋に至つて、二科会展、新制作派協会、一水会展、行動美術協会展や二年度の官展として第二回日展が開かれ、一般的に漸く落つきを見せた。

二科会は、秋の展覧会開催中日展参加をめぐつて日展参加組と、非参加組が対立し、遂に会員三名の除名問題を惹起して分裂した。なおこの年旺文会、現実会、日本美術会、六弦美術会、藝苑美術会等が結成された。また戦時中雑誌の統合によつて「生活美術」「美術」と改名していた「アトリエ」と「みづゑ」が、それぞれ本来の名称に歸り、主として西洋画関係の事項を取扱うこととなつた。

昭和二年になつて、作家はいずれもインフレーションに悩まされながらも、次第に意慾を回復し、技術的にも戦前に近づいた。一方幾つかの新団体が結成され、新人たちの擡頭が目立ち、前衛美術が戦時中の圧迫から解放されて息吹きを取りもどした。また、恒例の展覧会のほか、幾つかの綜合展や特別展覧会が催され、その主なものに、天皇、皇后両陛下が御成りになつたことは、前例のないことであつた。

この年結成された団体には、第二紀会、示現会、新樹会、日本アヴァンギャルド美術家クラブ、シツタン會、女流画家協会などがある。また戦時中中絶していた自由美術家協会が復活し、これに属していた前衛作家が別に前衛美術会を結成した。かように、此の年は美術団体の分化作用がはげしかった。また東京地方の

会社、工場、官公署、団体等の美術発展のため職場美術協議会がつくられ、この年から展覧会を開始した。

綜合的な展覧会には、秋の第三回日展のほか、春季に朝日新聞社と東京都共催の現代美術展と毎日新聞社主催の洋画一二団体を含せた連合展が催された。又特別展覧会には、わが物故洋風画家の作品を陳列した国立博物館主催の近代日本洋画展や、わが国に現存する西洋美術を展覧した泰西名画展（讀賣新聞主催）と西洋美術名作展（国立博物館主催、朝日新聞社後援）が催され、沈滞した美術界や久しく西洋美術や、わが過去の作家の名品に触れる機会に恵まれなかつた人々に強い刺激と喜びを與えた。第三回日展は、前年の第二回以来文部省が日展の民主化を意圖した審査員公選問題から紛糾し、遂に春陽会、二科会、国画会、一水会等主要団体が参加せず、尙相なものとつた。この年行われた独立美術協会と日本美術会のアンデパンダン展は、その後の流行となつたアンデパンダン展の端緒となつた。この年の主な作品には、梅原龍三郎の「朝陽」岡鹿之助の「風景」野口彌太郎の「風景」猪熊弦一郎の「花のある帽子の女」嵯峨伊之助「ボンナ君」岡田謙三の「シルク」木下義謙の「馬籠峠」南薫造の「庭」齋藤興里の「花咲く村」等があつた。

昭和三年に入り、終戦後逐年増加した諸団体の公募展や研究団体の同人展、或は個展がしきりに行われ、特に洋画は著しく、この傾向は東京だけでなく、地方にも及んだ。併し、内容的には著しい進歩や向上があるわけではなく、未だ昏迷の状態に在つた。ただ前年の日本アヴァンギャルド美術家クラブ結成以来、同会主催の第一回モダーン・アート展や二科会、美術文化協会、自由美術家協会等の展覧会に超現実派や抽象派の傾向を持つ作品がおびただしく出品され、美術

雑誌も海外やわが国の前衛作家を取上げるようになつた。

展覧会は、恒例展のほか、この春第二回泰西名画展（讀賣新聞社）が開かれて、前年に続いてわが国に所在する西洋美術を展覧し、またフランス現代繪画の複製が新しく將來されて展覧（朝日新聞社主催）された。綜合的なものとしては、東京都主催の現代美術綜合展と毎日新聞社の第二回連合展が催された。また、国立博物館は表慶館に西洋画の常置陳列を開始し、秋には近代日本美術綜合展を催して、明治以降の洋風面多数を陳列し、未だ近代美術館を持たない美術界の弱点を補うために、系統的に展覧して貢獻するところがあつた。第四回日展はその運営が文部省の主催から日本藝術院の手に移されるという劃期的な変革が行われた。しかし、国画会、自由美術家協会、春陽会、新制作派協会、独立美術協会、二科会、美術文化協会の七団体が参加せず、わずかに新しく一水会が加わつたに止まり、綜合的な実はずなかつた。

この年の記憶にのこる作品には、健康を回復した安井曾太郎の「藤山氏像」「徳川國頼氏像」梅原龍三郎の「裸婦」須田國太郎の「眞鶴」鈴木信太郎の「初夏の山村」岡鹿之助の「窓」「橋」兒島善三郎の「北都の秋」原勝郎の「風景」や、前衛派のものとしては福澤一郎の「群像」、村井正誠の「天使」廣幡憲の諸作品があり、その他三岸節子、麻生三郎、香月泰男等の熱烈な製作振りが見られた。

尙この年、日本作家協会洋画部、現代美術作家協会新生派美術家協会の三団体が解散、合同して新に現代美術協会を創立した。また荻須高德が戦後初めてフランスに渡つた。また美術出版社が一般啓蒙誌として「美術手帖」を創刊した。

昭和二年に入り、団体の公募展や個人展覧会は、益々多くなつたが、一方觀衆の鑑賞も次第に向上し、又他の娯樂の隆盛と經濟生活の逼迫のために、一般的に觀衆が激減し、しかも一五割の入場税のため各団体は赤字難に直面した。従つて連合展やアンデパンダン形式の展覧会や回顧展が継続して盛んであり、また実力主義の傾向は、個展の隆盛を來した。また超現實派や抽象派が、従来の二科会、自由美術家協會、美術文化協會などばかりでなく、新制作派協會、奉陽會、国画會、光風會等の展覧會にまでしきりに行われ、此の傾向は年々強くなつて來ている。此の年から日展が日本藝術院と同會員全部から成る日展運営會の共同主催で行われることとなつたほか、新しく立軌會が結成され、また弱体化した太平洋畫會、新構造社、朱葉會、創造美術會の四団体が聯合して自主連立展を開くなどのことがあつた。

恒例の展覧會から主な作品を挙ぐれば、安井曾太郎の「小坂氏像」野口彌太郎の「道光の港」猪熊弦一郎の「K氏の肖像」兒島善三郎の「壺のある靜物」高島達四郎の「箱根連山」岡鹿之助の「祀拜堂」中村研一の「出漁」寺内萬治郎の「裸婦」林武の「傾横向き」伊藤藤の「鳩と水差」小磯良平の「二人裸婦」三岸節子の「靜物」森田元子の「帽子の女」等があつた。主な個展には鍋井克之、鈴木信太郎、福澤一郎、荻須高徳、猪熊弦一郎、菅野圭哉、香月泰男等があつた。これ等のほか梅原、安井の回顧的な自選展や前田寛治、三岸好太郎、松本竣介、鬚光等の遺作展もそれぞれ意義のある展覧會であつた。

尙この年ピカソ近代複製展や現代フランス繪画複製展が開催され、またフランスの東洋美術館長ルネ・ゲルツェが文化使節として來朝、或は藤田嗣治がアメリカ

へ渡航するなど、歐米との文化交渉が日を加えて盛んになつて來た。

昭和五年に入り、二科會作家たちが九重會を復活したのをはじめ、モダンアート協會、プラス美術家群型生派美術家協會、一線美術などが結成された。また展覧會は、日展をはじめ各団体の恒例展のほか、連合展やアンデパンダン展が続けられ、また新形式のものとして前年度の秀作や問題作を選抜して展覧する朝日新聞社主催の選拔秀作美術展が第一回を開いて注目された。また個展も益々増加し、その他の回顧展が盛んに行われ、活況を呈した。

この年に至つて、漸く一般的に質的向上が見られたが、主な作品には、安井曾太郎の「孫」、梅原龍三郎の「赤い浅間」、高島達四郎の「熱海梅園」、野口彌太郎の「長崎の夕ぐれ」、兒島善三郎の「春遠からず」林武の「星女像」、鍋井克之の「黒潮」、中村研一の「裸体」、小糸源太郎の「秋蘭」、原勝郎の「丘と畑」田崎廣助の「関門海峡の朝」、小山敏三の「盛夏の浅間山」、鈴木信太郎の「長崎風景」、三岸節子の「くちなし」、森田元子の「緑の感覚」、猪熊弦一郎の「パレリーナの夢想」などがあり、中堅以下の若い作家たちの眞摯な努力も見られた。

回顧展には、讀賣新聞社主催の現代美術自選代表作十五人展をはじめ、坂本繁二郎自選回顧展、兒島善三郎遺作回顧展、示現會の石川寅治作品回顧室、京都に於ける黒田重太郎自選洋画展、大阪に於ける藤田嗣治回顧展、須田國太郎自選作品鑑賞會等があつた。

海外美術の紹介には、讀賣新聞社主催の第二回日本アンデパンダン展にスイスの作品九点が將來され、大阪において現代のアメリカ作品三〇点が將來されて公開されたのをはじめ、英連邦現代繪画複製展、イタリ

ア名画複製展、西洋名作複製展等が開催され、またフランスからゴッホ、ロダン、マイヨール、マチス等の作品をまつかつた美術映画がもたらされた。

なおこの年藤田嗣治がアメリカからフランスへ、嵯伊之助がフランスへ、岡田謙三がアメリカへ渡つた。

（隈元謙次郎）

彫刻

戦後の彫刻は社會一般の例に洩れず作家の生活環境の惡條件や殊に材料需給の不円滑、社會の需要範圍の狭小に災いされて美術他部門に比して復活の度は緩慢であつたが、まず作家のうちの余力あるものは二一年三月開催の日展に唯一の発表場所を見出して戦後初めての出品をした。しかし僅か一五点の閑散ぶりで、量質共に未だみるべきものがなかつた。つづいて二科會が復活第一回展を開いたが、この彫刻部は春の日展参加をめぐつて反官主義の伝統を保持する渡邊義知、松村外次郎の有力會員を除名し僅かに笠置季男の孤軍奮闘に待つより他なかつた。秋開催の日展も前回の轍を踏む程度、戦前の域には道遠しの感があつた。漸く二十二年度に至つて作家も物心両面に稍々余裕をとりもどし戦前への復興の萌しが見え初めた。しかし作家の數においても戦前八〇〇名を数えたのが半減して四〇〇名弱、材料の入手困難や技術面においても速成の效かないこの道だけに作家たらんとするもの余程の覚悟を必要とするようになり、まず既成作家の復活振りに望みを托するに過ぎなかつた。戦前在野の有力団体日本彫刻協會や構造社彫刻部等は戦時中に解散、文展が名称を変えた日展、院展、新制作派、二科の各彫刻部が作家達の発表場裡として復活したに過ぎず、機構的に独立した日展を除いてはいずれも繪画部門に從屬的

であり、自主的な活動は鈍いものであった。かく彫刻文化の危機が叫ばれた初めは七月二五日、朝倉文夫、加藤顯清、本郷新等の肝入りで「日本彫刻家連盟」(会員三〇〇名)が結成され、作品発表よりもまず彫刻資料の確保にのり出した。

二三年になると制作活動も幾分軌道に乗り、従来の官展系作家、即ち全作家の約八割はやはり日展に依拠集中し、全力を注いだ。造型思考の低下は未だ戦争中の空白を埋める迄には至らなかつた。かえつて在野の新制作派の彫刻部では四十歳代以下の活躍期の作家を揃えて、ただに地味乍ら造型の本質を追求した作品が多く、陳列作の呼吸も一致して清新であり戦後新界に於ける活躍を期待させた。二四年には世狀の落着と共に作家の制作條件も好転はじめ、まず戦後最初の独立した彫刻展として日本彫刻家連盟の第一回彫刻文化総合展(五月・都美術館)が開かれ、会員各自の作品を発表し一般への彫刻の普及を図り漸く積極的な活動がみられた。長い伝統をもつ院展彫刻部も春秋展覧会を開き、戦後の復興振りを世に問い、相変らず趣味的な傾向が強いが新しい動きもみえはじめた。二科会彫刻部は戦前からの中樞を失つたが笠置季男を中心に新会員を迎えて新興の氣もあがり、技術は幼いが時流に随い、前衛的な作品が目立つて現われ、この会獨特の新しい前進を窺わせた。新制作派は今年より建築部を新設し、彫刻室に作品を陳列して、建築と彫刻の有機的なつながりをもたせ、この室役末の退屈な陳列から美術館始まつて以来の新しい展示形式に観覧者を眩目させ、彫刻美に対する関心を深めさせた。作品も佳作が多く殊に会員菊池一雄の「青年像」は戦後随一の尤作として刮目された。日展も第五回と回を重ねて戦前を想わせる盛観を呈し等身大の大作も多く量的な回

美術界の展覧(彫刻)

復のみならず質的にも漸次向上がみられた。二五年に至ると全面的にもう戦前への水準に回復した感があつた。五月日系米人前衛彫刻家イサム・ノグチの来朝は彫刻界のみならず全美術界に刺激を與え、彼の講演や談話における造型藝術の「立体化運動」の力説や滞在中の製作品の展覧(八・一八—八・三〇)日本橋三越は日本古典美への反省や簡潔な抽象的觀照に大いなる示唆を呈供し、殊にこの傾向を辿りつゝある作家達には日頃の知己を見出したような力強さを感じさせた。二科展では繪画と共に大作主義の方針がとられ、彫刻部に於ては笠置季男の抽象作「和」が七五〇貫という大重量の石彫で搬入の時から話題の種をまき、陳列作品は殆んど抽象傾向となつた。新制作派は昨年につづき建築と共同して新鮮な雰囲気のを会場をつくり、会員の力作で活況を呈した。モニュメントの原型として菊池一雄「平和の群像(部分)」、本郷新「わたつみのこゑ」等注目さるべき佳作を産み、柳原義達「犬の唄」の異色あるポーズ、佐藤忠良の「たつろう像」は従来の持味の上にイサム・ノグチのよき解悟を示した。日展では等身大の裸像が林立する盛観で制作意慾の復活昂揚を示し、また量的のみでなく質的にもすぐれたものが簇出し始めた。元老級の朝倉文夫の「三相」や、つづく世代の加藤顯清の「人」、特選の朝倉響子「作品S」、畠村直久「婦人の首」、瀬戸團治「たか子さん」、水船六州「光あれ」、晝間弘「無限」等、新進氣鋭の秀作を初めとし、この会の良識的な審査方針に副つて一般入選作の水準も一段と向上した感があつた。

なお戦後現われたグループ展としては平櫛田中一門の緑櫻会彫刻展、建昌覺造等東美校出身の若き世代の最生彫塑展があつた。

以上は主要な展覧会の展覧であるが、戦時中既成作

家であり乍ら不遇のまゝに埋れて居て戦後特に注目された作家に川村吾藏(二五年三月歿、一四二頁参照)と木内克があつた。木内はバリ生活一五年の後昭和一〇年歸朝のまゝ隠棲、二三年七月新樹会展に招待され、多量の作品を発表し、パロツク的な独自の作風に人々の注視を浴びたことが特筆される。又、前衛作家として自由美術の植木茂、画家で彫刻をする鶴岡政男、二科の笠置季男、堀内正和等も注目された。

次に戸外に眼を転じるなら、まず二二年五月東京都では銅像忠魂碑等撤去審査委員会を設け、過去乱立した軍国時代の銅像の存置撤去如何を審議し、結局大山巖(大正八年新海竹太郎作)、山縣有朋(昭和四年北村西望作)の二騎馬像のみ、明治以降を代表する藝術作品として場所を移して(都美術館裏)存置された。これに代つて二四年頃より新時代に適わしい記念像が建ちはじめ今度は戦前の個人的な顯彰を意味する作品でなく、愛とか自由平和を謳ひ、人類普遍の福祉を象徴化した裸体像が多くつくられるようになった。東京都内に建てられた主なものを列挙すると、

△青年像(二四年四月) 菊池一雄作 慶応大学4号館前庭
△愛の女神像(二四年一〇月二〇日除幕) 長沼孝三作
上野駅前 日本曹達株式会社社寄贈
△自由の女神像(二五年一月三日除幕) 乗松巖作
日比谷公園花壇 安田海上火災保険会社社寄贈
△なぎさのヴィナス(二五年一月二二日除幕) 本郷新作
上野駅RTO前上野松坂屋寄贈
△白鳥と少年像(二五年一月二九日除幕) 早川鏡一
郎作 昭和通三原橋交叉点 社団法人J・A・E(民間緑地団体)寄贈
なお、本郷新作「わたつみのこゑ」(戦後学生記念碑)

は二五年中に除幕の運びだったが東大図書館前の建設予定場所が反対されたまま保留されている。

地方に於ても、二四年一月ザビエル四百年祭を記念して山口市金小曾の大道寺（布教所跡）の大字架にザビエル浮彫（河内山賢祐作）が嵌められ、二五年九月「荒城の月」の作曲者瀧原太郎の記念像（朝倉文夫作）が郷里大分市に建てられた。又、二五年一月三日東京都と武蔵野文化協会後援、日本彫刻家連盟主催の井の頭公園における林間彫刻展が我国初の試みとして注目され、彫刻と自然の融合を図り彫刻藝術の生活化を行った。

以上粗雑な概観であるが彫刻本来の性質として特に著しい変化は認められず、ただ戦後五年を通じてこの道にも時流に副つて漸次前衛的な抽象様式の傾向が戦前にも増して活発化して来たことがみとめられる。

（中村傳三郎）

工 藝

戦後の工藝は見返り物資としての需要によつていち早く活気づき、まずそれに応ずる産業工藝の面から発足することになった。当初経済的に重要な役割を荷うものとして大きな期待の下に、振興の諸方策が講ぜられ幾多の展覧会が開催され、前半期に於ては華々しいものがあつた。

まず二一年六月日本美術及工藝交易振興展が日本美術及工藝品株式会社主催、貿易廳後援によつて都美術館で行われたが、當時は外国の諸事情が未だよく知り得ない時としてその成果には諸種の詭を免れなかつた。

一〇月工藝圖案及応用作品展覧会が工藝学会主催、貿易廳、特許標準局及工藝指導所後援の下に開かれ、産

業工藝の改善、発達以外に意匠権の確立を図ることを目的とし異色を示した。二三年六月には日本輸出工藝展が貿易廳、日本輸出工藝協会、鉄工品貿易公團美術工藝室纖維貿易公團纖維工藝室などによつて大々的に行われた。全国から輸出向工藝品を募集し、都道府縣別を単位とする産業工藝品、輸出取扱業者別の特定出品、工藝作家の美術工藝品に分けて展開され、戦後日本工藝の總括的紹介をなし、輸出の端緒を開く等の役割を果たした。

この輸出、産業工藝の指導を担当する工藝指導所は二三年神奈川縣川崎に再建され、輸出工藝品、生活用品に科学性と生産性を附與した價值高いものを作る目的のもとに研究指導の面に活動をはじめた。同年八月通産省外局工業技術廳が設置されその所管となり、また従来の東北、関西支所の他九州支所を新設し土地柄染織及び木竹工藝の指導に當つてゐる。指導所二〇周年記念事業と前年八月新設された中小企業廳の技術向上指導育成の目的とを兼ねた両者共同主催による中小企業振興工藝展が二四年一月東京三越で行われた。これは産業工藝界に奮起を促すと共に、工藝に対するあらゆる問題について検討の機会をも與え、二月には更に大阪で開かれ、第二、三回と続いて催されている。

これら色々な展覧会や指導面にも見られたように、戦後生活形態、感情の変遷反省にとともに、生活に即した新工藝の創造が従来より一層切実に叫ばれ、一般産業工藝の部面においてもその関心はいよいよ昂まり意匠の改良等企てられ、更にアメリカ工藝の新様式、技術等の急速な輸入によつて非常な進展を示して来た。又新しい材料による各種工藝が生れ、プラスチック、輕金屬等の新天地の開拓にも目ざましいものがある。

一方産業工藝を直接の目的としない部門は早く立直

つたが、団体、作家の中にはこうした工藝の再検討から意匠、技術の改革、生産面との関連等に意をそそぐものが多くなり、工藝界には産業工藝に基準を置く傾向がいよいよ濃くなつて来た。

その中で注目されるのは、新しい時代の生活から必然的に生れる工藝の創造を目標にして、若い工藝家達の集まつた型々工藝集團で、木、漆、金工を主とし陶藝を加へ二二年十月第一回展を和光ギヤラーに開いた。従来の造型概念や技術偏重の弊から脱することに努め、アンシンメトリカルな型に異色ある性格を見せ造型探究の遊戯化の非難もあつたが、近代工藝として知性に充ちたものと大いに刮目され、以来数回展覧会を重ねた。同じような目的のもとに作家ばかりでなく批評家、研究者等も集まつた輸出工藝家協會が出来、総合的研究や、会としての試作をもち異色を示した。

従来からの眞赤土工藝は二一年一月より引続き展覧会を開き、国画会は四月富本二〇年史室を設けて開催されたが、この年の末富本憲吉の脱退により特色を弱くした。これを契機として富本を中心に国展、日展の中堅鋭の人々によつて新匠工藝會が設立され、二二年五月第一回展を都美術館に開き、そのメンバーから當時は最も注目され、今後を大いに期待されたが、二五年東京中心の作家は別にコ工藝展を開き、京都、石川等の作家が止まつて続ける状態となつた。

在野洋画団体の二科においては二一年展覧会より工藝部を新設し、茶道、華道各宗家参加で角度の異つた方面から工藝の育成を試み、回を追うて内容も変つて来ているが、工藝の本質、性格に対する積極的な研究態度の少ないうらみがある。新制作派は二四年建築部を新設し、それに附随する家具類に新しい工夫を見せて

いる。又二五年八月東京三越で開かれたイサム・ノグチ作品展は彫刻が主であつたが、機械的な抽象主義と東洋古典の素朴、單純さを結びつけようとする行き方は今後の日本工藝の進む方向に一つの指針を與える機会となつたと思われる。

その他の展覧会では次代の作家を世に送るという工彩会、実用品の簡潔な新しい形の創造を目標にした長工会等幾多が開催された。工藝界に一派をなして来た民藝グループもすみやかに復活し、作家の展覧も続いて行われ愛好者を喜ばせた。

所謂美術工藝の殿堂たる日展は二年三月、一〇月早くも開催され当初は材料燃料難等を反映していたが回を追うて回復し二四年には日本藝術院と日展運営会共催の民藝となり、その間不出品問題等を惹起して工藝家の全面的協力を失つた傾きもあるが、矢張り工藝家の社会的な登龍門の一つとしての地位を占めてゐる。

作品には従来の技術的誇示の豪華趣味や生硬な近代的惡趣味の傾向はやゝ減少して来たが、未だその難をまぬがれない。しかし展覧会毎に日展以外では求められない伝統を生かした秀作のいくつかが見られる。又日展と在野の工藝家の作品を集めた現代美術総合展が東京都主催で二年より行われ、其他東京工藝総合展等が開催された。二三年国立博物館において催された近代日本美術総合展には明治、大正、昭和の歴史的意義ある作品が陳べられ、過去と現在の関連を知ると共に、再批判の機会が與えられた。

この他工藝各部門の展覧会では彫金会、鍛金、鍍金家協会、東陶会、日本漆工藝会、鍍金家協会連合展等が開催され、各個人展も随時開かれた。

地方においても京都の工藝作家団体連立展、創人社漆藝展、工藝作家展等が開催されたのははじめ、各地

においても盛に展覧会が開かれ、あるいは工藝振興のための機関等が設けられ、輸出や観光事業などと結びついて活潑な動きを見せている。

二五年の末バリーに現代日本陶工の作品が展覧されたが、その技術の高く変化あることが彼地の陶工達を驚かし、日本陶器の名を挙げたことはよろこばしい。

古工藝に関しては二五年文化財保護委員会が設置され、作品と共に工藝の優れた伝統技術の保存も計られるようになり、また従来一回しか公開されたことのないかつた正倉院御物が二年より毎年奈良博物館にて展覧され、二四年には東京で行われ広く益するところがあつた。古陶磁、染織に対する愛好、鑑賞熱は外国人も加わつて大いに高まり、展覧会、研究会等も盛に行われるようになった。(中川千咲)

建築

厚生省の推定による住宅の喪失総数は震災による喪失と強制疎開による喪失等合計二六五万戸、更に新規需要を合すれば四二〇万戸の住宅が不足総数とされてゐる。然るに終戦直後の建築界は進駐軍関係の工事、賠償施設の撤去、ついで戦災復興と膨大な仕事を抱え、資材不足、高資金と相まつて住宅復興率は二一年度僅かに一割そこそこの状態であつた。住宅緊急措置令、特別都市計画法律案、或は復興院の設立等、住宅復興策は色々試みられ、二二年には更に建築資材の計画的配布も行われたが資材の流通は依然として円滑を欠き、殆ど見るべき実績はなかつた。二三年に入り、政府は従来の戦災復興院を建設院に、更に七月建設省に昇格させ住宅難乗り切りに努力を続けたが資材及資金の隘路は解決せず、民間資金による住宅建設も遅々とし

て進まず、漸く二四年頃から、僅かに見るべき建築が現われたといえる有様であつた。而もなお、終戦時の不足総数四二〇万戸は其後の風水火災による喪失、更に人口自然増加による需要を考へるとなお三六〇万戸不足と推定されている状態である。二四年から従来の住宅建築坪数制限は三〇坪までに拡張せられたが、復興住宅の七〇%は資力ある人々に限られていた。一般個人住宅はまだ質よりも量の時代で従つて特に挙げるべき建築作品もないが、官・公・民間資本によるアパート、或はビル、学校等には多少見るべきものも出来初めた。この年の作品には掲載写真以外のものに、藤村記念堂(谷口吉郎)、芝兒童館(兒童福祉施設研究所)、戸山ヶ原都営アパート、立教小学校(櫻建築事務所)等もあり、個人邸宅では加倉井昭夫、前川國男置瀬謙二等の作品がある。なお掲載写真の戸山ハイツは以上の建築と比べ如何にも粗末であるが(水洗便所瓦葺設備を一応備へてはいるが)この時代早期の産物として記録的意味で挿入しておいた。

二五年には国庫補助の公営住宅や住宅金融公庫の住宅建設への融資が実施せられ僅かながら住宅難は緩和されてきたが、住宅欠乏は相変わらず深刻で生活水準は甚だしく低下したままである。都市計画も実行にまで至らず丹下健三の広島市都市計画も立消えの様に見られる。然し大資本による建築は活氣を呈し、殊に労働組合を初め諸組合の活発な動きがそれぞれの会館を建築し初めたことは戦後の現象として注目される。ここに掲載出来なかつた建築についてなお数種を挙げると、神戸博の建築、全国銀行従業員組合連合会館、(信建築事務所)東交会館(井上工業株式会社)家庭裁判所少年審判部、うさぎ幼稚園(清家清)、東京立正高等学校(坂倉準三建築研究所)、東京海上火災千

歌谷アパート（三菱地所株式会社建築部）、東京都本所保健所（都建築局工事課）等の外東京大学池部陽研究室設計の「立体最小限の試み」による各種住宅、郵政省設計部の手になる同省関係の建物等が注目されよう。又この年、建築家として初めての藝術院賞が岸田日出刀に授けられた。

以上、終戦から二五年迄の建築には、まだ目新しい傾向は見られないが、建築、繪画、彫刻、工藝が互にそれぞれの立場に立ちながら、今までは違つた意味で提携、融合して空間構成に新生面を開拓しようとする動きが遲まきながら二、三の建築を通じて我國にも現われ初めた事は特筆すべく、二四年に新制作派協會に建築部が新設されたのもこの傾向の一端を示すものといえよう。（岡長三郎）

美術行政

日本藝術院

昭和二年

文部省は従来の文部省美術展覽会に代り、第一回日本美術展覽会を三月一日から三一日まで東京都美術館に開催した。

九月四日第二回日本美術展覽会開催の前に同展の改革案を発表したが、その要点は無鑑査の廃止、審査員の公選、鑑査の公開等であつた。

九月一〇日帝國藝術院会則の一部を改正し、第三部に舞踊を加え、會員推薦について従来部会に於て候補者を選定し、總會の承認を経て決定していたのを、所屬の部会が候補者を選定し、院長が推薦することとしまた部会に於て選出し難い場合も、院長が推薦することに改めた。

昭和二年

三月一七日文部省會議室に總會を開催し、欠員會員の補充につき協議、第一部五名、第二部七名の候補者を決定、更に昭和二一年度院賞授賞候補者を選考各部とも該当者なく、また本年から會員の定員を一〇〇名に増員すること、日本美術展覽会出品招待制度を設けることを決定した。なお展覽会規則中、主要団体單位を個人單位に、審査員各部の定員中第二部の三〇名を二〇名とし鑑査の公開を中止するなどの改正を決定した。

一二月四日政令第二百五十四号をもつて、八月七日の帝國藝術院總會に於て決定した「帝國藝術院」の名称を「日本藝術院」と変更することを告示した。

昭和二十三年

五月一日昭和一八年度以来中絶していた藝術院賞を復活、二二年度授賞者として美術部門では伊東深雪が決定した。

五月一日、第一部会を文部省に於て開催、第四回日本美術展覽会を文部省主催とせず日本藝術院主催とすること、本年度から書の部門を加えること、審査員は藝術院會員と同會員によつて選定された作家で行い、無鑑査出品は藝術院會員、その年の審査員、前年度の特選者、藝術院會員の選定した作家とすることなどを決定した。

七月三〇日總司令部民間情報局美術顧問ブラマーは、日本美術展覽会に関心をよせ、日展の改組と民主化に希望を持ち審査員、無鑑査制に対する疑問を解決して在野団体も快く協力するような内容を持たねばならぬとの談話を発表した。

七月三〇日教育刷新委員會は、日本藝術院の現在の組織および制度の改訂につき數次にわたり慎重に審議した結果として第七回總會において次の決議をなし、

八月二日委員長から内閣總理あてに建議した。即ち「日本藝術院の現在の組織および制度について検討したが、次のような事項について改訂を加えることを必要と認める。一、日本藝術院は藝術上の功績顯著な藝術家を優遇する、藝術に関する最高の榮譽機關とし、藝術に関する重要な事項を審議し、必要な事業を行い、又文部大臣に藝術に関する重要事項について建議する。二、院長の任期を三ヶ年とし、會員に対しては年金を出すこと」

八月一日久しく空席中の日本藝術院長に高橋誠一郎が就任した。

八月二日文部省において總會に続き第一部会を開き、第四回日本美術展覽会を日本藝術院主催で行い、従来の部を科に改め、第五科に書道を置き、無鑑査は藝術院が出品を依頼する者に適用し、第二科洋画の審査員は藝術院會員とすることなどを決定した。

昭和二十四年

五月二五日文部省において總會を開催、文部省設置法制定に伴う日本藝術院に関する政令案について協議続いて第一部会を開き、本年度の美術展覽会には日本藝術院と會員有志によつて組織される日展運営会との共催のもとに開催すること、開催方法等については小委員會によつて協議することなどを協議した。

六月一日文部省設置法が施行され、昭和一二二年勅令第二八〇号によつて制定された日本藝術院官制は廃止され、新しく政令第二八一号をもつて日本藝術院令（二〇四頁参照）が制定された。

七月九日上野公園日本学士院において第一部会を開催、日本美術展覽会運営會規則（二〇七頁参照）、第五回日本美術展覽会規則等を協議決定した。

昭和二五年

五月二十九日国立博物館會議室において天皇陛下御臨幸のもとに二四年度恩賜賞並びに日本藝術院賞授與式を挙行した。

五月三〇日前日に引続き總會開催、日本藝術院會則、日本藝術院會員選考委員會規則、藝術院授賞規則日本藝術院會員年金支給規則(二〇四頁参照)を議決した。のち第一部會を開き會員選考委員會委員選舉を行ひ、辻、山下、朝倉、北村、松田、海野、松林、福田、尾上、伊東の一〇會員を委員に決定、第一部長の選舉の結果川合芳三郎が當選した。なお日展運營會理事會提出の日展運營會參事、日展審査員及び出品依頼者を承認した。

六月五日日展運營會を大倉集古館に開催、理事および參事出席、第六回日展規則書および第六回日展審査員決定。

一〇月一七日東京都美術館に於て第六回日展審査員總會開催。

国立博物館

昭和二三五年五月三日新憲法實施を機として帝室博物館、文部省国宝調査室、同保存修理室、美術研究所が合体して、文部省の管轄のもとに国立博物館として新發足した。この新機構に際し、従前の帝室博物館の列品課、學藝課、經理課の三課制に代つて、陳列課、事業課、調査課、保存修理課、資料課、監理課、附屬美術研究所の六課一所制をとり、更に奈良帝室博物館を国立博物館奈良分館とした。国立博物館初代館長には前総長安倍能成が、次長には谷川徹三が、美術研究所長事務取扱には田中豐藏がそれぞれ任命された。

文化財保護法

戰中戰後におけるわが文化財の焼失、損傷、散佚、

美術界の展望(美術行政・古美術)

海外流出等のため、文化財保護の強化が叫ばれている折しも、昭和二四年一月二六日法隆寺金堂が火を發し世界にはこつた壁面を焼滅するという未曾有の事件が起つた。これが契機となつて従來の国宝保存法を改正し、さらに範圍を拡大する案が參議院文部委員會文化小委員會の手で作成され、同年四月國會へ提出されたが、本會議では審議未了で保留となつた。しかし、同二五年四月この議院立法の文化財保護法案が第七國會の大小六〇數回の會議を経ての可決成立し、同五月三〇日法律第二一四号をもつて文化財保護法(一八一頁参照)が公布された。これに伴ひ、文部省の外局として文化財保護委員會が設置され、高橋誠一郎、細川護立、矢代幸雄、一万田尚登、有光次郎の五委員が任命された。委員會のもとに従來の国立博物館の調査課、保存修理課を包括する事務局を置き、附屬機關として従前の国立博物館の陳列課、事業課、資料課の事業を踏襲した国立博物館と、従前の国立博物館附屬美術研究所を美術研究所として設置、同年八月二九日から新機構のもとに發足した。その後一〇月一三日政令第三〇九号を以て文化財審議會令を定め、同二月二一日文化財保護委員會專門委員會を發表した。(隈元謙次郎)

古美術

今次の大戦に際しては、本年鑑前年度版に報告した如く、わが国の古美術品の罹災があつたが、古美術の淵藪である地区、京都及び奈良が、連合軍の都市爆撃の對象となることを免れ、極めて少數の例外の場合であつたのは、消極的な意味ではあるが、わが古美術にとつて重大な事案であり、ひいてはわが文化に対して多幸な寄與とも云い得ることを特記する要がある。

戰後五年間の古美術に関する社会的動向はまずこの重大な事案から出發するものであり、その保存と公開とが最も核心的な問題であつた。これら古美術が、國民全体の文化財であるとの意識は、戰後わが國の民主主義的であり方の當然の結果として昂揚されて、古美術に対する主指導標が確立されたと思えるが、事實としては、戰後の經濟的逼迫が、この目標へ向つての推進の速度を著しく阻害していることもやむを得ない。

終戦につづく二一年は、古美術品とこれに関する博物館等の諸機關の疎開復歸に忙殺されたが、二二年五月帝室博物館が文部省に移管されて、新たに国立博物館として發足、古美術に関する國家行政としての戰後第一着手がなされた。国宝及び重要美術品の指定及び保存事業に関する技術面の組織は、従來の社會教育局から新国立博物館内の機構に移され、美術の調査研究面を担当する美術研究所も国立博物館の附屬機關となり、国立博物館は古美術に関する綜合的機關として成立した。国宝の新指定は二二年一二月一回行われたに止まり、新使命として古美術品の公開に重点が置かれ、国立博物館は同年秋、西洋名画展を、翌二三年春日本美術史綜合展を開催して以後従來の帝室博物館と變つて積極的に社會面との接觸を企圖して活動することとなつた。これにつれて、諸地方に博物館、美術館の新設或は活動が促進され、国立博物館は中央機關としてこれらを援助する立場となつたが、經濟狀態からして必ずしも全国各地方にこの機運を助成するには至っていない。

一方古美術の保存事業は、戰時中も繼續していた法隆寺をはじめ復活することとなり、インフレのため難航しつつも続行し、特に法隆寺は伽藍の中樞である金堂及び五重塔の解体修理が進行し、二二年中に金堂天

井板組の下に落書を、五重塔初層の周壁は上塗の下に金堂と同様な壁画を発見するなど、工事の進行とともに、學術的に多大の寄與をなすべく期待された。しるかに二四年一月二六日、早晩金堂の失火は実に遺憾極まりない事件として社会的驚愕を喚起した。安置の佛像、厨子等、天井以上の建築の上層部は解体のため罹災を免れ、柱及び壁体も焼落ちるに至らず消火されたが、わが美術史上最高の傑作であつた十二面の壁画は、そのありし日の華麗な色彩を失ひ、わずかにその形像を黒白の輪廓で辿り得るに止まり、この変貌、藝術的生命の死に對しては、関心をもつ全世界の人々の失望に値するものであつた。政府が直接監督下に慎重を期した最大の保存事業に於ける最大の失態は、世論のきびしい批判を浴びて、その保存事業全般のあり方の改革が要求されて、一年後、二五年五月第七国会に於いて、議員立法の文化財保護法案が成立、その法の規定するところに従つて、文化財保護委員会が構成され、法の対象としては、有形文化財としての従来の国宝、重要美術品の範囲に限らず、無形文化財としての藝能部門をも加え、その文化財の特に重要なものに重点的な保護を加え、且つ公開してわが国の文化国家として進むべき将来に資することとなつた。国立博物館並びに美術研究所は附屬機關として、同委員会に協力する体制となつたが、古美術の面に限つて見ても、文化財としての範囲が拡大したのにも係わらず、予算その他の制約からして、必ずしも所期の目的が近い将来には望み得ない感がある。新たに指定すべき国宝及び重要文化財に關しても、免税の規定の如きは削除され、戦後経済変動のため、古美術品の所有変更は頻繁であり、しかも財産として課税の対象となるため、古美術品が隠蔽される結果を生み、また未指定の古美術品は海外に流出する機会が多いが、これらを買収すべき財政的裏付けが充分でない委員会は事実上甚だ無力な存在化することが懼れられる。

しかしながら、文化財として古美術品に對する問題が一般に考慮される傾向は、犠牲としては余りにも大であつたが、法隆寺金堂失火の齎した結果であり、二五年七月金閣寺焼失もまた一の刺戟として役立つたことは事實である。民間にあつても古美術を対象とする全国的美術史家によつて二五年六月美術史学会が組織され、學術的な立場から活動することとなり、同年九月法隆寺五重塔心礎から発見された舍利容器的の公開を国立博物館職員組合と協同にて要請し、その結果信頼すべき學者によつて調査報告を作成公表することとなり、國民の文化財としての舍利容器的の保存と同時に公開の目的である舍利容器的の性格を知るべき途を拓いた。また朝日新聞の組織した文化事業団は同年三月、中尊寺の學術的調査を行うなど、民間団体の古美術面に寄與する活動がようやく充足することとなつた。

古美術に關する研究或は教育の面としては戦後の學制改革に當り高等學校以下の社會科の内容には必ず古美術の教養が盛られることは戦前に見られなかつた変化であり、各府縣に設置された国立大学にあつては美術史の講義は必要とせられているが、特に後者の場合は充分な目的を達成すべき段階に到らない憾みを存する。それぞれに歴史をもつ美術研究所、国立博物館、東大東洋研究所、京大人文科學研究所等は、すでに戦前に劣らぬ學術的活動を復活して居り、特に京大人文科學研究所の雲崗調査報告の出版は學界に期待されつつあるところである。個々の單行圖書は略すとして、美術史の専門的研究雜誌としては戦前より継続の國華社の「國華」、美術研究所の「美術研究」、戦後の新刊

として毎日新聞社の「佛教美術」、美術史学会の「美術史」などが発行されている。

一般の出版としては西洋美術への傾斜が大きかつたが、最大の企画をもつ平凡社の「美術全集」をはじめ、古美術を対象とするシリーズの刊行も多く、殊に少年向のものの刊行が盛んであり、一般に古美術に對しても愛好、教養としての要求の強い傾向が察知されるところである。（熊谷宜夫）

美術界五年史

昭和二十一年度

一月

○文部省に文化課藝術課新設 情報局廃止による国内文化課移管に伴つて文部省社会教育局に文化課と藝術課が新設され、七日文化課長に下野信恭が、藝術課長に今日出海が発令された。文化課は図書・博物館・国宝指定等を、藝術課は美術・音楽・文学・映画・演劇・出版（新聞雑誌）等を司どる。

○「藝術」創刊 創元社より「藝術」が創刊された。

二月

○京都美術懇話会創立 京都美術家クラブが解散し、新に京都在住の美術家と愛好家によつて京都美術懇話会が五日設立された。

三月

○第一回日展開催 従来の文展に代つて文部省主催第一回日本美術展覧会が三月一日から三十一日まで東京都美術館で開催された。京都側の日本画作家達は材料、期日の不足を理由として出品し

なかつた。審査員には藝術院会員が当り、従来の無鑑査をやめ、無鑑査の資格を藝術院会員と今までの帝文展の委員又は審査員に限つた。同展開催中に第四部工藝彫金大木秀春作櫻花文煙管が盗まれ、文展開催以来始めての盗難として話題になつた。

○二科会改組工藝部理論部新設 二科会ではこれまでの参興、評議員の制度をやめ單一会員制とし、又新に千宗左、千宗室、勅使河原蒼風、山脇巖等を迎へて工藝部を、北園克衛、植村鷹千代等を迎へて理論部を新設した。

○帝室博物館再開 帝室博物館は昭和二年三月以来閉館していたが、新たに内容を整へて二四、五日の招待日の後、二六日から再開した。

四月

○旺玄會結成 牧野虎雄を主宰者とした旺玄社は昭和一九年に解散したが、旧同人その他により組織を新にし旺玄會を結成した。

○ウオーナー來朝 戦時中奈良、京都等の爆撃を防ぐのに努力したと伝えられるアメリカの著名な東洋美術研究家ラングドン・P・ウオーナー博士は聯合

軍總司令部民間情報部教育局美術記念物課顧問として四月一日來朝した。一九日記者団会見を行い、日本美術に對する見解を述べ、五月には京都奈良を視察、古美術に對する保護公開政策に助言を與えて八月一七日歸国した。

○大西克禮學士院會員に決定 帝國學士院では一二日總會を開き會員の補充、二年度恩賜賞等を決定したが、美学の大西克禮が第一部會員に推薦決定し一六日發表された。

○火の會結成 日本に於ける前衛運動の集りとして、豊島與志雄、中島健蔵、村山知義、猪熊弦一郎等によつて火の會が結成された。二〇日銀座実業之日本社に於て風変りな発會式を挙げて注目をあびた。

○日本美術會結成 美術界の民主化をめざして内田巖、嵯伊之助、福田豐四郎、本郷新ら各派の進歩的美術家によつて日本美術會が結成され、二一日自由学園に於て發會式を挙げた。

○国展で梅原龍三郎の作品益々 東京都美術館で開催中の第二〇回回國画展の梅原龍三郎二〇年史室に陳列されていた「雪雲」が二七日朝盗まれたが、三〇日犯人の画家が檢挙され作品は無事にかえつた。

○東京美術學校に女子學生入學 上野の東京美術學校に今年始めて女子學生の入學が許可され、三五名が試験に合格

入學した。

○水彩聯盟研究所開設 作家相互の研究及後進指導の目的をもつて東京に水彩聯盟研究所が開設された。

五月

○法隆寺保存協議會開催 二六、七の兩日しばらく中止していた法隆寺保存協議會が開かれ法隆寺解体復原工事について種々協議した。

○早大に藝術學科新設 早稻田大學文學部に藝術學科が新設され、演劇、映画を主として美術音楽に關する講座を併置した。

六月

○新日本藝術家聯盟結成 大衆藝術の前進を目的として新日本藝術家聯盟が三日發會式を挙げた。石井柏亭、大佛次郎らが理事に選ばれた。

○現実會結成 旧プロレタリア美術作家同盟の作家一名によつて東西美術文化の交流による綜合レアリズムの確立をめざして現實會が結成され、六月六日より二五日まで第一回展が東京都美術館で開催された。

○學士院會員に上野直昭決定 帝國學士院では二一日欠員の補充を決定し、故瀧精一の補欠として上野直昭が推薦された。

○第一回日本美術及工藝交易振興展開催

輸出をめざしてわが国の美術及び工藝品の基準を確立するため第一回日本美術及工藝交易振興展覧会が東京都美術館で二八日から七月八日まで開かれた。日本美術及工藝品株式会社主催、貿易廳後援によるもので、第一部産業工藝、第二部第一類日本画、第二類洋画、水彩、版画、第三類彫刻、第四類工藝美術にわけて公開された。

○ユマニテ美術研究所開設 内田巖、本郷新、福田豊四郎等によつて東京世田谷に油繪彫刻等の指導をするユマニテ美術研究所が設立された。

七月

○戦災国宝重要美術等の件数発表 文部省では国宝二九三件、重要美術品一三四件史蹟名勝天然記念物四四件の罹災数を一日発表。

○全国美術教育連盟結成 美術教育の検討拡充を計画して中等師範学校的美術教育関係者による全国美術教育連盟が二一日創立総会を行つた。

○新国宝指定 戦後始めての国宝保存会が二三日開催され、川越の喜多院、東京の寛永寺清水堂、浅草寺二天門など十件の建造物が国宝に指定され、八月九日発表された。

○日本童画会結成 武井武雄、初山滋、村山知義らによつて日本童画会が結成された。

八月

○帝室博物館総長に安倍能成就任 前文部大臣安倍能成は帝室博物館総長に就任した。

○日本美術及工藝統制協会解散 戦時中結成された日本美術及工藝統制協会は二三日解散した。

○「アトリエ」復刊 大正一三年四月創刊されて以来続いて来た美術雑誌「アトリエ」は一時「生活美術」と改称され、その後中断されていたが今月より再び「アトリエ」として復刊した。

○国宝重要美術品の減税運動 財産税の実施によつて国宝や重要美術品も課税の対象となり、個人所有のものなどは転賣等によつて保存上支障を来す恐れがあるのて、文部省、国宝保存会等では大蔵省、国会等に働きかけ減税をはかつたが不可能となつた。

九月

○二科会一部会員を除名 二科会では八月三一日総会を開いて官展に参加せずといふ規約削除を決議し、日展参加問題をめぐつて分裂した。あくまで反官展を唱へる林是、西田明史、松村外次郎、渡邊義知、名井萬亀の不参加組は二日声明書を出した。これに対して民主化した日展には参加するといふ態度をとる東郷青児、高岡徳太郎等は三日

不参加組を除名し声明書を発表した。

○日展改革案決定 第二回日展を前に官展の改革案が四日文部省から発表された。要点は無鑑査の廃止、審査員の公選、審査の公開等である。

○日展不参加運動起る 改革案を示し全美術団体に参加を求める日展に対し、在野団体のうち青龍社、行動美術協会、新制作派協会、独立美術協会などは不参加を決定、日展不参加協議会を開いて在野各方面に呼びかけた。

○美術行政審議会創立 美術の振興普及と美術行政の民主化のために具体策を政府へ建言し、その実現を促進するといふ目的で美術行政審議会が二一日衆議院内で創立総会を開いた。貴族兩院の各派代議士と新聞通信関係者によつて構成されている。

○文化建設本部・文化院設置案 二七日の議会で政府から藝術関係政策の立案・管理を行う文化建設本部、文化院設置案が提出され論議された。

○帝室博物館諮議会設立 美術の鑑賞と研究を通じ美術普及を目的とする帝室博物館諮議会が同館の事業の一つとして設立された。

○アカデミー46美術研究所設立 藤田嗣治、鶴田吾郎、中村直人、井上幸らによつて実技指導を目的としたアカデミー46美術研究所が東京豊島に創立された。

○「みづゑ」復刊 明治三八年創刊された美術雑誌「みづゑ」は「美術」等と改題されて発刊されていたが、今月から「みづゑ」の名称に復した。

○「三彩」創刊 日本美術出版株式会社より日本画を専門とする月刊美術雑誌「三彩」が今月から創刊された。

一〇月

○藝術院会則一部改正 帝國藝術院では九月二七日戦後初めての総会を開き会則の一部を改正し一日発表した。新しい規約は第三部の音楽、雅楽、能楽の他に演劇、舞踊を加へることと会員の補充は各部門毎に会員の選挙によるという二点である。

○藝術院新会員内定 九月二七日の総会で新しい規約による新会員が内定し一日公表された。第一部では日本画の福田平八郎、奥村土牛、野田九浦、洋画の辻永、工藝の松田権六が選ばれた。

○日展審査員辞退 存野団体から公選された日展審査員のうち、病氣又は日展反対の立場から第三部洋画の金山平三、坂本繁二郎、須田國太郎、小磯良平、山本鼎、第三部彫塑の雨宮治郎、加藤顯清の七名が辞退し、次点者を繰上當選とした。洋画と彫塑の両方に當選した石井鶴三は洋画審査員だけを受諾した。

○富本憲吉藝術院会員辞任 帝國藝術院

第一部会員富本憲吉は九日藝術院会員を辞任した。

○第二回日展開催 機構改革にも拘らず論議の多い中に、文部省主催第二回日本美術展覧会が一日から一月二〇日まで東京都美術館で開かれた。

○正倉院展開催 昭和十五年紀元二六〇〇年記念に一部展覧された以外全く一般に公開されなかつた正倉院御物三三三点が二日から一月九日まで奈良博物館で正倉院特別展として開かれた。非常な注目を集めて入場者は約一五万人にのぼつた。

○美術記者クラブ発足 各新聞社美術担当記者の連絡と親睦を目的として美術記者クラブが二四日発会式を挙げた。

○観光美術協会結成 美術による観光日本を紹介宣伝のため観光美術協会が創立された。中澤弘光、石井柏亭、藤田嗣治、三宅克己が顧問、鶴田吾郎、向井潤吉らが理事となり運輸省、商工省が後援して、第一回展を二九日から一日間東京日本橋高島屋で開いた。

一 月

○美術教育会設立 学校家庭一般社会に對する美術教育の普及徹底を目ざし、全国的な社会教育事業を行う財団法人美術教育会が二九日文部省の認可となり、寺内富治郎を理事長として発足した。

○女流画家協会結成 各派各会的女流画家を網羅して女流画家協会が結成された。女流画家の地位の向上を目的とし選挙制による委員によつて運営し、二年七月東京都美術館に於て自由出品制の公募展を開いた。

一二 月

○藝術課長更迭 文部省社会教育局藝術課長今日出帆は依願免本官となり、二日新に檜垣良一が任命された。

○第五回野間賞決定 第五回野間賞が決定し、一七日講談社で授典式が行われた。美術関係では村田泥牛、木下義謙が美術奨励賞を、河目悌二が挿画奨励賞を受けた。

昭和二十二年 度

一 月

○新樹会結成 光風会の中堅、大河内信敏、川端實、朝井閑右衛門らによつて洋画研究団体新樹会が結成され、第一回展を六月日本橋三越で開いた。

○新匠美術工藝会創立 富本憲吉ら旧国画会工藝部会員に山脇洋二・小合友之助が加わり新な立場から新匠美術工藝会が設立され、六月東京高島屋で第一回展が開かれた。

二 月

○千葉縣で前方後円墳発掘 千葉縣山武郡成東附近で日大考古学会の門上秀敏等によつて前方後円墳が発掘された。

○石清水八幡宮火災 一二日京都八幡町の石清水八幡宮が火出し、同社所蔵の国宝御鎮座縁起繪卷をはじめ多くの美術品宝物などが焼失した。

○議事堂に彫刻を配置 美術行政審議会では彫刻家の協力を求めて国会議事堂内に彫像の配置陳列を行つた。

○シツタン会創立 新制作派協会に出品する室田豊四郎、古茂田守介らの新進によつて研究発表会のシツタン会が創立された。二月北莊画廊で第一回展を開いた。

三 月

○日本古美術工藝複製品展開催 帝室博物館では一日から二日まで表慶館で正倉院御物を主として桃山時代までの古美術工藝品の精巧な研究と技術による複製品を展覧した。

○泰西名画展開催 讀賣新聞社主催、文部省後援の泰西名画展が一日から三日まで東京都美術館で開催された。○日展東京美術展開催 国内にある西洋名画が多数集められ非常に好評であつた。

○春陽会日展不参加声明 春陽会では一日日展不参加の声明書を發表した。

從來は日展を総合展とする理想案実現に協力して審査員も出して来たが、昨年の日展の傾向から相反した性格を持つものとして不参加を決定した。

○東京驛に浮彫壁面製作 東京驛の待合室に石膏の浮彫壁面が飾られることになり、中村順平のデザインで本郷新・建昌覺三・田畑一作らの彫刻家が一日から原型の製作を始めた。日光・東海道・奈良等の光景を置き、浮彫としては日本一の大きさを持つ壁面四月二〇日に完成された。

○藝術院新会員決定 帝國藝術院では七日の総会で新会員推薦を決定した。第一部では小野竹喬・中村岳陵・須田國太郎・豊田慶中が選ばれた。

○日展出品招待者制採用決定 帝國藝術院では一七日総会を開き、日展の規則を一部改正して第三回日展から出品招待者制をとることに決定した。第二回日展に際しての改組に無鑑査廃止制をとつたため無鑑査級作家の出品拒否となつたので折衷案として新制度採用となつたものである。

○兩陛下博物館・美術館に行幸啓 一八日天皇皇后兩陛下は帝室博物館の本館陳列、表慶館の日本古美術工藝複製品展覧会と東京都美術館の泰西名画展を御覧になつた。

○職場美術協議会結成 労働組合文化活動の一翼として各会社工場等美術部

をもつものが多くなつたが、京浜地区の組合が発起団体となつて二〇日職場美術協議会が結成された。専門美術家の協力を得て、文化的技術的に向上させることを目ざし、六月東京美術館で第一回勤労者美術展を開いた。

○宮城内に文化施設建設の計画 衆議院の文化関係者による日本社会文化協会によつて宮城内の国有地に劇場・博物館・美術館等の国営文化施設を建設しようとする計画案がたてられた。

四 月

○新美術人協会解散 福田豊四郎・吉岡堅二等による新美術人協会は一九日解散した。

○第二紀会創立 昭和二〇年新発足をした二科会と別れて、旧二科会々員の正宗得三郎・能谷守一・黒田重太郎・中川紀元・鍋井克之・宮本三郎・栗原信らによつて第二紀会が創立された。二八日発会式をあげ、九月東京都美術館で第一回展を開催した。

○藝術院会員補充 帝國藝術院第一部会員の補充として工部省の海野清の推薦が決定した。

○金澤市立工藝専門學校設立 金沢市に市立の美術工藝専門學校が設立され、元東京美術學校教授森田龜之助が校長に就任した。

○前衛美術會創立 勤労大衆の文化的意

欲を基調とする新美術の創造を目ざして、美術文化協会を脱退した丸木位里、赤松俊子、山下菊二、井手則雄らは前衛美術會を結成し、五月第一回展を東京都美術館で開催した。

五 月

○現代美術綜合展開催 東京都と朝日新聞社の共同主催で第一回現代美術綜合展覽會が一日から二〇日迄東京都美術館で開催された。第一部日本画、第二部油繪、第三部彫塑、第四部工藝に分れ全美術界に涉つて出品招待制をとつた。会期中の一四日には天皇皇后兩陛下が御覽になつた。

○国立博物館發足 皇室博物館は皇室財産の整理とともに国有となり、三日の新憲法実施の日から文部省の管轄下に国立博物館として發足した。文部省の美術研究所、国宝調査室と奈良皇室博物館を併せ、新しい活動を始めた。館長には安倍能成、次長には谷川徹三が就任した。

○大阪府下で古墳發掘 三日大阪府三島郡福井村において京大考古学教室の梅原末治らによつて堅穴式船型石室の前方後円古墳が發掘された。中国製王恭鏡、和製の鏡その他貴重な資料が多数發見された。

○美校彫刻科に石井鶴三教授反対問題起る 一〇日東京美術學校彫刻科學生に

よつて彫刻科石井鶴三教授反対の声明書が學校当局・文部省などに提出され問題となつたが、平櫛・石井二教室制が採用され、六月山本豐市・菊池一雄が迎えられて解決した。

○仁和寺所藏金盒子盜難 一〇日京都博物館で展覧中の仁和寺所藏国宝金盒子が盜まれた。大正三年仁和寺境内から發掘され昭和一年国宝に指定された平安朝末期の遺品である。

○法隆寺五重塔解体工事始まる 法隆寺五重塔の解体工事が一日から始められたが、天井板落書の發見、さらに九月には一階壁面漆喰下から新しい壁画が現われるなど法隆寺研究上重要な資料が次々と發見された。

○智積院燒失 一七日京都東山の智積院から出火、本堂・寢殿その他の建物を燒失した。一部の床貼付等は建物と共に灰燼となつたが、国宝の襖繪は持出され燒失を免れた。

○現代中国木刻画展開催 一九日から二四日まで銀座三越に於て現代中国木刻画展が開かれた。

○刀劍美術展開催 二五日から六月二五日まで国立博物館において古刀・新刀約二六〇点と外装具・鐔・小道具類を展示する刀劍美術特別展覽會が開催された。

○第一回連合展開催 毎日新聞社主催の第一回美術団体連合展が一〇日から三〇日まで東京都美術館で開催された。一水會・二科會・独立美術協會・光風會・国画會・春陽會・新制作派協會・東光會・旺文會・創元會・現実會・自由美術家協會の一二団体に参加し、在野をふくむ日本洋画壇の展望を示した。会期中の二八日には天皇皇后兩陛下が行幸啓になつた。

七 月

○近代日本洋画展開催 近代美術の常置陳列場の要望は中々実現されないが、国立博物館では一日から八月二〇日まで表慶館において明治以降物故洋画家の作品を時代的に陳列する近代日本洋画展を開催した。

○登呂遺跡の發掘開始 昭和一八年發見された靜岡縣の登呂遺跡は、登呂調査委員會によつて一三日から発掘を開始し、彌生式文化時代の住居跡、水田跡、銅器具、ガラス玉などの貴重な資料を得たが、資金難のため八月二七日で中止し、九月一日から保存のため再び埋没した。

○日本彫刻家連盟創立 彫刻家の團結をはかつて日本彫刻家連盟が二五日創立された。第一回展は二四年六月東京都美術館で開かれた。

八 月

○第三回日展審査員決定 選挙による日

展審査員は七日発表されたが、団体の多い第二部油繪では選挙運動が烈しく団体間に協定が行われたところもあり、これに対する非難が強く起つた。

(四三頁参照)

○国画会日展不参加を表明 国画会は一

日展に對して不参加を決定し、声明を出した。

○唐招提寺秘宝調査 奈良唐招提寺の秘

宝調査が一八日から国立博物館の石田茂作・田中一松らによつて行われた。なお二四日から九月七日まで奈良博物館に於て唐招提寺宝物展が開かれた。

九月

○「国立博物館ニュース」發刊 国立博物館では美術普及を計る事業の一つとして新聞形式で月刊の「国立博物館ニュース」を發行した。

○一水会日展不参加決定 一水会は二〇

日日展不参加を決定声明を發表した。

○日本アヴァンギャルド美術家クラブ結

成 抽象派・超現実派など前衛画派の作家達によつて各自所属団体とは別に共同の研究団体として日本アヴァンギャルド美術家クラブが結成された。二

三年二月には第一回モダン・アート展

を開催した。

○北海道モロ貝塚発掘 北海道網走市

内のモロ貝塚の発掘が東大の駒井和愛らによつて行われ、葦石被覆跡や耳輪などが発見された。

一〇月

○兩陛下民藝館へ行幸啓 三日天皇皇后

兩陛下は目黒駒場の民藝館へ行幸啓になり民藝のコレクションを御覧になつた。

○美術著作權確立運動起る 美術におけ

る著作權は従来から非常にあいまいであつたが、四日開かれた日本著作家組合第二回總會でこのことが問題となり、美術団体に呼びかけて二一日美術著作權確立懇談会が開かれた。フランスの「美術追及權」制度をとり入れて著作權法に挿入立法化する決定を行い

實現に努めることゝなつた。

○新重要美術品の認定 一〇日重要美術

品等調査委員会が開かれ、一休墨蹟・京都島原の角屋などを含む繪画四三件彫刻三二件、文書典籍九九件、刀剣三四件、同附属七件、工藝及考古学資料二

八件、建造物二〇件の二六三件が認定され、二五日文部省から發表された。重要美術品の認定は戦後始めてある。

○法隆寺五重塔壁面取外し作業開始 解

体中の法隆寺五重塔の壁面を取外して保存するための工事が一二日から行わ

れた。樹脂注射によつて剝落を止め、木組の枠で包み、柱からの抜きとりに成功した。

○西洋美術名作展開催 国立博物館にお

いて一五日から一月三〇日まで国内にある多数の西洋繪画、彫刻の作品を集めて西洋美術名作展が開かれた。一月一七日には天皇皇后兩陛下が行幸啓になつた。

○第三回日展開催 一六日から一月二

〇日まで文部省主催第三回日本美術展覧会が東京都美術館で開かれた。第二部油繪に有力な団体が参加せず、第一部日本画にも院展同人を始め藝術院会員の大部分と出品招待者の多くが出品

せず淋しい會となつた。会期中の一七日天皇皇后兩陛下が御覧になつた。日展への行幸啓は始めてある。

○正倉院展開催 戦後二度目の正倉院特

別展観が二六日から一月一五日まで国立博物館奈良分館に開かれた。

○「子供の文化史展」開始 国立

博物館では美術普及事業の一つとして子供の文化史展を行うことになり、第一回として住居の歴史展を二九

日から一二月二〇日まで開催した。

○愛知縣豊橋瓜郷遺跡発掘 愛知縣豊橋

瓜郷遺跡の発掘が行われ、彌生式土器・木・米穀類等が発見された。

ゝになつてゐる松方コレクション洋画の一部が二二日パリで競賣になつた。その中にモネの「太陽と柳」しだれ柳「牡丹の花束」等があり、四六八万四千フランに上つたと伝えられた。

○型々工藝集團創立 在野工藝団体の一

つとして新しい生活感覚を生かしてゆかうとする型々工藝集團が辻光典・佐藤正巳らによつて創立され、第一回展を一月一〇日から一八日迄東京和光ギャラリーで開催した。

一一月

○登呂遺蹟特別展観 登呂遺蹟から発掘

採集された夥しい出土品を一般に展観する登呂遺蹟特別展観が国立博物館で二〇日から二三年一月二〇日まで行われた。

○美術親和会創立 全国洋画商の有志が

集り、美術親和会が結成され、同業組合として出発した。

○示現会結成 石川寅治・鶴田吾郎らが

太平洋画会から別れて新に示現会を結成した。二三年二月東京都美術館に第一回展を開催した。

一二月

○藝術院名稱変更 帝國藝術院は四日政

令によつて名稱を日本藝術院と変更した。(二〇四頁参照)

○旧柳瀬文化館国立博物館へ寄贈 埼玉

縣人間郡柳瀬村の財団法人柳瀬文化館が解散し、国宝法然上人繪伝・三六歌仙住吉社頭圖や重要美術品の小栗宗湛水墨山水・有樂井戸茶わんなど一切が土地建物と共に元東邦電力社長松永安左衛門から国立博物館に寄贈された。

○第一回日本アンデパンダン展開催 日本美術会の主催によつて初めての試みで自由出品制をとる第一回日本アンデパンダン展が九日から一八日迄東京都美術館で開催された。

○印刷技術賞決定 全国印刷工業協同組合の第一回印刷技術賞が決定し、一二日授賞式が行われた。第二部の繪圖・写真などを主とした印刷物で毎日新聞社発行便利堂印刷の國華百粹が一等に、凸版印刷のポスター「Stik Fair」が二等に選ばれた。

○国宝保存法改正の意向 国宝保存法は昭和四年制定されたまゝで実情とのずれを来しているのを、文部省・国立博物館などで再検討の氣運が高まつて来た。

○千葉縣検見川遺蹟で古代丸木舟発掘 千葉縣検見川の草炭探掘場遺跡からは土器などの資料が発掘されていたが、慶応大学松本延廣らによつて一四日古代丸木舟が発掘された。

○新国宝指定 一六日国宝保存会總會が開催されて、繪画二六件・彫刻三二件・文書典籍八六件・刀劍一七件・工藝一

三件・建造物二〇件、合計一九四件の国宝が指定され、二〇日文部省から発表された。財産税で國庫に物納された御物の普賢菩薩像なども含まれて居り戦後始めての国宝指定である。二一日から五日間国立博物館で新国宝の展覧を行った。

○毎日出版文化賞決定 終戦から二二年八月一四日迄の出版物を対象とした本年度の毎日出版文化賞が二〇日決定した。美術関係では小林太市郎著全國畫房発行の「大和繪史論」が選ばれた。

昭和二十三年度

一月

○明治神宮聖徳記念繪画館再開 昭和一九年一二月から閉鎖していた明治神宮聖徳記念繪画館は一〇日から再開した。大觀東京驛に作品寄贈 横山大觀は二〇日東京駅に「露峰富士」の繪を寄贈した。同駅貴賓室に掲げられることになった。

○フランス繪画複製展開催 二〇日から二月五日まで銀座三越で新着のフランスの畫集などから集めたフランス繪画複製展開かれた。久しく途絶えていた海外美術の渴を医すものとして注目された。

○創造美術創立 世界性に立脚する日本

繪画の創造を目ざし、東京と京都の日本畫家が呼応して、在野日本畫団体創造美術が二六日結成された。東京側では山本丘人、吉岡堅二、福田豊四郎、橋本明治、加藤榮三、高橋周桑、京都側では上村松篁、菊池隆志、向井久万、奥村厚一、秋野不矩、澤宏毅、廣田多津が創立委員となり、九月東京都美術館で第一回展を開いた。動きの少ない日本畫壇に清新な息吹きを吹きこむものとして美術界の注目を集めた。

○マチス展へ日本からも出品 二月アメリカのフィラデルフィヤ美術館で開かれるマチス作品展に、大原美術館所蔵のマチスの作品が出品されることに決定し、二八日アメリカ船で送り出された。「マドモアゼル・マチスの像」と「エトルタ海岸」の二点である。

○第一回一燈賞決定 年一回新進畫家中の優秀作家に贈られる一燈賞の第一回（二二年度）は安井曾太郎の推薦による一水会の奥田郁太郎に決定した。

○「美術手帖」創刊 日本美術出版株式會社から月刊美術雑誌「美術手帖」が創刊された。（四四頁参照）

○「美の国」復刊 美術雑誌「美の国」の復刊第二卷第一号が発行された。大正一四年創刊されて以来美術雑誌として著実な地歩を占めて来たが、昭和一九年「日本美術」と改題、さらに休刊

に至り、二一年一二月復刊第一号を出したが続かず、こんど復刊第二卷第一号を出した。

二月

○アチソン大使遺族へ繪額面寄贈 飛行機長故で斃れた対日理事會議事アチソン大使の遺族に平和の鐘樓建立会から一三日漆工繪額面が贈られた。東京美術學校教授松田権六の制作によるものでアチソン大使追悼の楽譜と菊野草を蔭繪したもの。

○第二回泰西名画展開催 讀賣新聞社主催の第二回泰西名画展が二五日から三月一五日まで東京都美術館において開催され、さらに同一七日から二六日まで国立博物館表慶館において続開された。

三月

○ガラス粉による繪画誕生 フランスの畫集にヒントを得て、ガラス板に色ガラスの破片を接着劑でつけて画く新しい画材があらわれ美術界の話題となった。変色せず耐久力が強い等の利点があるが製造費や制作日数に難点があつた。

四月

○日本美術史綜合展開催 国立博物館主催朝日新聞社後援によつて日本美術史

上の主要作品を網羅した日本美術史総合展覧会が一日から五月三十一日まで国立博物館で開催された。高野山の赤不動図、御物聖徳太子像など珍しい作品が多数陳列され、五月二六日には兩陛下も行幸啓になった。

○北齋百年祭記念展開催 葛飾北齋の歿後百年を記念して一日から三〇日まで北齋百年祭記念浮世繪展覧会が、国立博物館主催、朝日新聞社後援によつて博物館表慶館で開かれた。このほか鎌倉、酒田、新津、京都、大阪、神戸、福岡など各地の博物館、美術館で一斉に北齋を中心とする浮世繪展覧が開かれ世界的に影響をあたえた北齋の偉業を顯彰した。

○新重要美術品認定 新重要美術品として應舉の七難図画稿、西方寺の阿彌陀如来坐像など繪画二〇件、彫刻一二件文書典籍四五件、刀剣一三件、刀剣付屬鐔小道具五件、工藝及び考古学資料九件計一〇四件が五日認定になった。

○安倍博物館長辞意表明 国立博物館長安倍能成は学習院長に専念するために五日正式に辞意を表明した。同時に副館長谷川徹三も辞表を提出した。六月五日発令になり、文部省社会教育局長柴沼直が事務取扱となつた。

○静岡有東遺跡発掘 登呂から一キロの地域にある静岡市有東遺跡の発掘が二日から日本考古学協会委員後藤守一

らによつて行われた。古代井戸の跡、木製臼、杵、土器などが発見され、二三日一たん打切つた。

○国立博物館附屬美術研究所長田中豊蔵逝去 美術研究所長田中豊蔵は国立博物館発足以来所長事務取扱にあり二二年八月一六日正式に所長に補せられて現在に至つたが二六日逝去した。

○出雲で彌生式土器発見 鳥根縣大社町の荒木村原山荒神社の境内から彌生式土器の最古形式文様の土器破片が多数発見された。これらは北九州遠賀河遺跡、大和唐古遺跡と同時代のもので、出雲にも大和と同一文化を営む民族がいたのではないかと今後の研究が期待された。

○國吉康雄作品展ひらく 一九〇六年渡米してアメリカに在住している二科会員國吉康雄の作品展が知名物故作家の回想展ばかりを開くニューヨークのホイットニー美術館で開催された。最初の生存作家個展で、好評を受けた。

○合成樹脂ガラスの彫刻 彫刻の新材料として透明な合成樹脂ガラスへの浮彫を試みられ、作品の一部が完成した。モーター・ドリルを使用し東京美術学校助教菅原安男によつてヴィナスの誕生が制作された。

五月
○藝術院賞受賞者決定 昭和一八年度以

来途絶えていた日本藝術院賞を復活することに、昭和二二年度受賞者が一日決定した。第一部美術は日本画の伊東深水「鏡」で授賞式は八月二二日に行われた。(四四頁参照)

○現代中日版展開催 現代中日版展が朝日新聞社主催によつて一日から一五日まで日本橋高島屋において開催され、兩國現代版画の主要作品が陳列された。

○第四回日展方針決定 日本藝術院では一日第一部会を開いて第四回日展開催の根本方針を決定した。休止案もあったが展覧会は存続することになり、文部省主催をやめて藝術院主催とし、第四回日展とする。今年から書道を参加させる。審査員は藝術院会員と藝術院会員によつて選定された作家で行い無鑑査出品は藝術院会員、その年の審査員と前年度の特選者、藝術院会員の選定した作家とする。特選は審査を受けたものだけを対象とするが前年度の特選者にも特選審査を受ける資格を興える。作品の大きさの制限は除く。

○法隆寺聖靈院修理完成 解体修理をしていた法隆寺聖靈院の復元工事が完成し、一五日落成供養が行われた。

○百万塔の上部盗まる 二日銀座松坂屋で開催中の木製品展覧会から重要美術品の法隆寺百万塔の上部と経文が盗まれた。

○総司令部美術顧問更迭 シヤーマン・リイ総司令部民間情報教育局宗教文化資源課美術顧問はシヤトル美術博物館副館長に就任のため六日帰国した。後任としては考古学者・探検家・美術史家として著名なジェームス・マーシナル・ブラマー元ミシガン大学教授が来日、就任した。

○フランガン神父像アメリカへ 世界の少年福祉事業に盡力した故フランガン神父の肖像画が平和協会婦人子供福祉部からアメリカの少年の町へ寄贈された。昨年フランガン神父来日の際光風会々員鹿鹿彪によつて画かれ、上野駅正面入口内側に掲げられていたもので七日贈呈の会が開かれた。

○国立博物館表慶館に洋画常置陳列 二二年に近代日本洋画展、西洋美術名作展などを開催した国立博物館では表慶館に日本と西洋の油画作品を常置陳列することとなり八日開館した。常設近代美術館への第一歩である。

○日本輸出工藝展開催 戦後輸出品として重要視されて来た工藝品の水準を示し方向を示唆する日本輸出工藝展覧会が二二日から七月四日まで東京都美術館で開かれた。モデルルームが一般の注目を惹き、七月一日には天皇皇后陛下が行幸啓になった。

六月

○文部省主催近代美術巡回展ひらく 文部省、東京美術学校などにある政府所蔵の近代美術作品により、近代美術展が文部省と地方教育委員会の共催で六月の岩手縣を最初に開催された。八月新潟縣、九月福井縣と順次巡回して地方に鑑賞普及の便をはかった。

七月

○在野洋画七団体日展不参加声明 日展は藝術院主催で開催されることになったが、国画会・自由美術家協会・春陽会・新制作派協会・独立美術協会・二科会・美術文化協会の七洋画団体は三日共同で不参加声明を出した。

○一水会日展に参加決定 一水会では一七日委員が集り、日展は藝術院主催によつて開かれるという見通しの下に開催の場合は参加することを確認した。日展休止説の安井曾太郎も会の意向には同調する態度を示した。

○石山寺の国宝観音像盗難 大津市石山寺の国宝金銅聖観音立像が二〇日蓮華台と金銅厨子を残して盗まれた。

○登呂遺跡発掘再開 二二年九月埋没された登呂遺跡の発掘作業が再び二一日から開始された。

○日展問題に総司令部から談話発表 総司令部民間情報局ブラマー美術顧問は三〇日展問題に関し、日展の改組と民主化に希望をもち、審査員、無鑑査

制に対する疑問を解決して在野団体も快く協力するような内容を持たねばならぬとの談話を発表した。

○教育刷新委員会藝術院制度につき首相に建議 教育刷新委員会では三〇日總會を開き日本藝術院の制度について検討し、三一日首相に対して建議案を出した。

○美術教育懇談会設立 全国美術教育連盟は理事会の協議によつて解散し、浦崎永錫らによつて新に美術教育懇談会が作られた。

八月

○藝術院々長決定 日本藝術院々長の後任は第一部和田英作・鍋木清方、第二部山本勇造・志賀直哉、第三部信時潔・喜多六平太の各部二名の候補者選考委員によつて高橋誠一郎・柳田國男が推薦され、更に全員の投票によつて前文部大臣学士院会員高橋誠一郎が決定、一一日発令された。

○ハチ公の銅像再建 澁谷駅頭のハチ公の銅像は昭和一九年取はずし供出されたが、前銅像の作者安藤照の令息安藤士によつて再び製作され、一五日除幕式を行つた。

○自然科學面からの法隆寺非再建論起る 慶応大学講師西岡秀雄は氣象七百年周期説によつて年輪の幅に伸縮を来すことから法隆寺用材の年輪を調査の結果、非再建論を立て一六日国立博物館で発表した。類推材料に乏しいが、従来の文獻論様式論と異なる新論で注目された。

○藝術院会員補充決定 二一日開かれた日本藝術院總會において第一部会員として川島理一郎が決定し、一〇月五日に発令になった。

○第四回日展具体策決定 二一日日本藝術院第一部会第四回日展の具体策が決定した。日展は藝術院主催で行い、従来の部を科に改め、第五科に書道を置き、無鑑査は藝術院が出品を依頼する者に適用し、第二科審査員は藝術院会員のみとする等。

○帝銀事件犯人容疑者として平澤大暉逮捕 一月二六日の帝銀事件犯人容疑者として元文展無鑑査・元水彩画会委員テンペラ画会々長平澤大暉が二一日逮捕され、大きな話題となつた。

○第四回日展審査員決定 日本藝術院では二一日の藝術院第一部会で藝術院全員の責任で第四回日展審査員を選出し二七日発表した。（四三頁参照）

○原コレクシヨンの一部国立博物館に入る 美術蒐集家として著名な横浜の故原富太郎の蒐藏品の一部が国立博物館に購入された。ことに明治大正時代の院展系主要作品約六〇点が入つたのは注目される。

九月

○工藝作家日展不参加決議 日展反対の動きが工藝作家の中にも起り、山鹿清華、楠部綱式ら京都工藝作家審議委員会が不出品を決議したのを始め、東京でも岩田藤七、香取正彦、北原千鹿、高村豊周、山崎覺太郎ら出品依頼者、前審査員等三十六名によつて今年度日展に不参加の決議がなされ、一四日共同声明を発表した。官展そのものに対する非難ではなく、藝術院の美術行政に対する反対が理由で、東京・京都・金沢・富山・新潟など全国主要作家が多数参加して大きな影響を生んだ。

○アメリカで西陣織展開催決定 正倉院御物など古代複製の研究によつて知られる龍村平藏の西陣織展覧会がアメリカで開かれることになり一六日横浜から積み出された。

○梅原龍三郎藝術院会員辞意表明 梅原龍三郎は一八日内閣総理大臣宛に藝術院会員の辞退を届け出た。

○日展第二科審査員辞退 第四回日展の第二科油繪の審査員は藝術院会員のみと決定したが、藝術院会員の中で梅原龍三郎・小杉放庵・須田國太郎・安井曾太郎が審査員辞退を申出た。（四三頁参照）

○美術親和会解散 洋画関係商の集りとして昨年結成された美術親和会は諸

般の事情により解散した。

一〇月

○新重要美術品認定 一〇日開かれた重要美術品等調査委員会にて繪画一四件、彫刻七件、文書典籍一一四件、刀剣一七件、刀剣附屬小道具一三件、工藝及考古學資料四一件、建造物一七件、合計二三三件の新重要美術品等の認定が可決され、一三日文部省から発表された。新重要美術品には狩野探幽の臨面帖・足利義持の寒山圖・木阿彌光悦筆立正安國論などがある。

○荻須高徳渡佛 新制作派協会々員洋画家荻須高徳はオランダの蒐集家バツサ・ンジェーとフランス美術評論家テツシエの助力により、一年の予定で渡仏することになり、一一日オランダ船ラングリースコット号で出帆した。

○近代日本美術総合展開催 国立博物館では四月の日本美術史総合展の後をうけて明治以降の近代美術の主要作品を集めた近代日本美術総合展を一日から一一月三〇日まで朝日新聞社後援で開催した。

○アメリカのポスター展へ出品 アメリカオハイオ州クリヴランドの学生ボスター藝術展の依頼で東京商工会議所では観光・貿易・文化など各業界方面の宣伝ポスターから七三枚を選び二三日発送した。

○武蔵野博物館設立 武蔵野文化協会と東京都では武蔵野市井之頭自然文化園内に郷土文化資料を集め武蔵野博物館を開設、二四日から一般に公開した。

○天皇陛下藝術院員会と御懇談 天皇陛下は藝術院員会を宮中に招いて御懇談なさる催しを計画され、その第二回目として二五日第一部会員のうち日本画家を御招きになった。上村松園・小野竹喬・奥村土牛・錦木清方・川合玉堂・中村岳陵・西山翠嶂・野田九浦・福田平八郎・前田青邨・松林桂月・安田靉彦・横山大観の一三名が伺った。

○正倉院展開催 戦後第三回の正倉院御物特別展観が二八日から一一月一〇日まで国立博物館奈良分館において行われた。

○田園調布で古墳発掘 大田区田園調布で関東地方には珍しい前方後円型古墳が三一日から東洋大学教授和島誠一、明大教授後藤守一らによつて発掘された。円型のところに横穴式石室が発見され埴輪や副葬した装飾品などが出土した。

○古代文化資料自然科学的研究特別委員会設置 學術研究会に古代文化資料自然科学的研究特別委員会が設置された。貴重な古代文化資料の保存・修理を科学的に研究するのを目的とし、委員長には資源科学研究所長柴田桂太が就任した。

○経本長官官邸で彫像紛失 経済安定本部長官官邸で昭和二十二年五月以来東京美術学校から借用していた關野聖雲作木彫毘沙門天像が行方不明となり問題となった。昭和一九年戦時特別文展の出品作である。

一一月

○文化勳章受領者決定 第六回文化勳章受領者五名の決定が一日文部省から発表され、二日授與式が行われた。美術関係からは、安田靉彦、朝倉文夫、上村松園の三名で女性の文化勳章受領は今回の松園が始めてであつた。(四四頁参照)

○正倉院御物楽器により古代音楽再現 正倉院御物の横笛・尺八等による古代音楽の再現が一日から二〇日にわたつて、古代音楽研究家の林謙三、科学研究所員田口湧三郎、宮内府楽部々員芝新奏によつて行われ成功した。

○静岡市片山の奈良時代寺院跡発掘 登呂周辺遺跡調査の一つとして静岡市片山の奈良時代寺院跡の発掘が日本考古学協会登呂特別委員会によつて二三日から一二月二日まで行われ奈良時代寺院の建築物跡があらわれた。

○現代美術協会創立 日本作家協会洋画部・現代美術作家協会・新生派美術家協会の三団体は二〇日解散、合同して新に現代美術協会を創立した。

○第二回一燈賞決定 第二回一燈美術奨励賞は梅原龍三郎の推薦により小泉清に決定、一〇日発表された。(四四頁参照)

○日本學術會議々員決定 日本學術會議員の始めての選挙が行われ、二二日學術体制刷新委員会中央選挙管理会から決定が発表された。第一部(哲学・史学・文学)に和辻哲郎(哲)、藤田亮策(史)、第三部(経済学・商学)に高橋誠一郎(経)、第五部(工学)に岸田日出刀(建築学)等がある。

○新国宝指定 二一日国宝保存会が開催され繪画一四件・彫刻四件・文書典籍書籍五三件・工藝一一件・刀剣四件・建造物六件の九二件の指定が議決され二八日文部省から発表された。大阪市立美術館の伏生授経図・岩崎家の古文書大手鑑などが含まれる。二四年一月一五日から二一日迄国立博物館に於て特別展観が開かれた。

○国宝指定解除 二一日の国宝保存会で国宝六五件の指定解除が決定、二八日発表された。仙台城大手門などの建造物四六件、華嚴文義要訣など一九件の震災による焼失を確認したもの。

○現代美術協会創立 日本作家協会洋画部・現代美術作家協会・新生派美術家協会の三団体は二〇日解散、合同して新に現代美術協会を創立した。

昭和二十四年度

一月

○**コンラッド・メイリ歸国** 日本滞在十年におよぶコンラッド・メイリは十三日夫人山田菊子とともにスイスに立つた。

○**後任博物館長決定** 十七日、前年五月安倍能成辞任以来空席であつた国立博物館館長に上野直昭を推すことを評議員会が決定した。

○**日本學術會議第一回總會** 同會議の第一回初顔合せは二〇日日本学士院でひらかれ、会長に龜山直人、副会長に我妻榮（人文科学）、仁科芳雄（自然科学）が選出された。

○**ユネスコ事務所設置** 総司令部のパンス博士は二一日ユネスコ事務所を東京に設置することを総司令部が許可したむね発表した。

○**中小企業振興工藝展ひらく** 中小企業廳では工藝指導所と共催で中小企業の振興をはかるため二一日から二九日まで日本橋三越で、中小企業振興工藝展をひらいた。第一部は一般公募の産業工藝品、第二部は研究実施成品、第三部資料と統計。

○**ベティ・ベッツ來朝** アメリカの漫画評論家、ベティ・ベッツがきて「ベッツ

さんの日本見物」第一回を讀賣新聞に發表した。

○**二瓶初太郎渡米** 漆器を海外に宣伝するため漆器業界を代表してマルニ工業漆器製作所長二瓶初太郎は二二日渡米した。総司令部のニューヨーク貿易事務所技術顧問として金屬漆器、木地漆器二百種を携行、アメリカ各地に宣伝を図つた。

○**法隆寺金堂の火災** 二六日午前七時二〇分出火を発見し、同九時五分に鎮火したが、この火災で世界に知られた貴重な壁面をはじめ内陣のほとんどが全焼し黒こげとなつた。法隆寺国宝保存協議会と同壁面保存調査会の合同対策協議会は二月五、六日ひらかれ、金堂は二六年、五重塔は二五年完成予定で修理を続行すること、壁面模写の焼失部は二年以内に補写するなど六項目を決定、さらに二月二八日の国宝保存會議で応急処置として二三年度内に五〇万円の補助をするなど二項目に決定した。

○**西洋名画横領事件** 前年末、猪熊弦一郎、高野三三男所有のマチス、ユトリロ、ルノアールの作品三点がルノアール画廊開設につき貸し出されたところその後行方不明となり、二八日兩名により告訴された。事件は次第に拡大し翌月関係者の送検が行われ、画廊の存在が賑やかな社会問題となつた。

○**ザビエルの記念像** 本年はフランシスコ・ザビエルが日本布教に訪れてから四百年になるので、各地に國際的な記念行事が企てられたが、ゆかりの地山口市金小曾大道寺の大字架にザビエルの浮彫がはめられることになつた。原型は河内山賢祐の製作。

二月

○**藝術院新會員推薦** 一日日本藝術院新會員候補者として宇野浩二他六名が推薦され、四月一日発令された。こんどの會員には第一部（美術）はふくまれない。

○**美術団体に建築部登場** 新制作協會ではこんど日本の美術団体としては初めて建築部を新設し、池邊陽、岡田哲郎、吉村順三、谷口吉郎、丹下健三、山口文象、前川國男の中堅建築家を會員に迎えた。

○**第一回日本アンデパンダン展開催** 讀賣新聞社主催の第一回日本アンデパンダン展が一日から三月三日まで都美術館でひらかれた。パリのアンデパンダン展事務局長ヴィジエーや劇作家ヴィルドラックなどの激励の辞も伝えられた。

○**裸体画喫茶店から没收さる** 第二紀會員橋本徹郎が前年東京都現代美術展に出品した「地下道」が中央区室町二の八喫茶店ケルクに貸されたところ、わ

いせつ画だというのが京橋署に致收され、十六日橋本徹郎は地検刑事部に呼出され、取調べをうけた。

○**法隆寺壁面模寫再開** 法隆寺金堂壁面の模寫は戦前から続行され完成も近くなつていたが、火災のため頓座したのを一八日から記憶の薄らがぬうちにと着手、まず入江組がトツプを切つた。橋本組、荒木組もこれにつぎ、五月完成の目標が立てられた。

○**浮世繪持逃げさる** 浮世繪研究家高見沢忠雄は鈴木春信、喜多川歌麿などの浮世繪三百点余の捜査方を京都五條署に願ひ出た。保管していた牛山充コレクシヨンが借出され所在不明となつたものである。

○**藝術院會員を午餐に招待** 宮中では二日藝術院會員（洋風美術関係者）を午餐に御招待になり、和田英作、北村西望ら一五會員が出席した。

○**松山城の焼失** 二七日法隆寺について松山城の筒井櫓、筒井門が全焼、隠門同櫓戸無門を半焼した。昭和一〇年国宝に指定されていたものである。

三月

○**国立博物館「友の会」発表** 美術の鑑賞と研究に関心をもち人々と博物館を結びつける国立博物館「友の会」がつけられた。会費半年二〇〇円で、種々の特典があたえられた。

○官費の日展はとりやめ 官展としての日展開催は前年から問題となつていたが、この種の展覧会に国費を使う点が反対意見を生み、文部省では二四年度予算面から日展経費二〇〇万円を削減し、こゝに明治四〇年以來の官費による展覧会は一応終止付をうつことになつた。なほこのため日展を継続するかどうかが各方面で論議された。

○美術評論家組合結成 美術評論家の職能的な團結をはかるため二日博物館食堂で組合の結成総会がひらかれ、会則役員などが決つた。幹事は富永惣一、江川和彦、今泉篤男、水澤澄夫、河北倫明、鈴木進の六名

○文部次官の辞任 文部次官井手成三は法隆寺出火の責任を負つて四日辞表を出した。後任は伊藤日出登。

○史跡名勝天然記念物調査会開催 同会では新たに指定または解除すべき史跡名勝天然記念物について審議中だつたが、五日新指定五九件と解除八件を文部大臣に答申した。安政元年アメリカ総領事ハリスが初めて領事館旗を掲げた玉泉寺なども含まれる。

○藤田嗣治渡米 藝術院会員藤田嗣治は「日本画壇も國際的水準に達すること祈る」の言葉を残して、一〇日午後六時五〇分羽田発のパン・アメリカン機で渡米した。ニューヨークなどの美術学校教授として招かれたものだが、フ

ランス入国の許可も受けている。

○延暦寺の一部焼失 比叡山延暦寺の境内山上の五智院から二六日午前八時発火、本堂、つり鐘堂、倉庫を焼いた。

四月

○東京美術大學発足 東京美術学校は東京音楽学校とともに新制の東京藝術大学の一学部となり、一日から発足した

○現代日本美術巡回展決る 文部省では現代日本美術の代表作をあつめて国内一〇都市に巡回展をひらくことを企劃し今年度から予算三五〇万円で実施することとなつた。前年行われた近代日本美術展が、初期文展以來の文部省買上作品を主としたのに対し、今回の企劃は現代作家の作品を主眼とするもので二四年から四ヶ年の継続事業となつている。

○博物館長に上野直昭 約一年空席であつた国立博物館長に東京美術学校校長上野直昭が就任することに決り、六日発令された。依つて館長事務取扱にあつた柴沼直は同日被免となる。

○宋版義楚六帖紛失 東福寺蔵の中国日本を通じて唯一とされる宋版義楚六帖が一昨年来行方不明となつている旨、七日京都松原署に届出られた。

○画商事件解決 画壇の話題となつた名画横領故買事件は時目清、坪田吾六の

検査に進んだが、話し合いがつき告訴が取下げられた。

○皇居貝塚の発掘 皇居内の貝塚発掘が一一日東大人類学教授鈴木尙ら八名の手に行われた。

○文化財保護法国会へ 従來の国宝保存法を改正し、さらに範圍を拡大する案が参議院文部委員会文化小委員会の手で作成され、一九日試案の検討を終了した。しかし本会議は審議未了で保留となつた。

○立軌会創立 創元会の中堅作家、須田壽、飯島一、圓城寺昇、牛島憲之、大貫松三、榎戸庄衛、山下大五郎の七名は同会を脱退し、新たに立軌会を創立した。

○装幀美術展ひらく 博報堂内装幀相談所主催、出協、自由出協、小賣全連後援の装幀美術展が二日から一週間日本橋三越でひらかれた。なほこの会で一九四八年度装幀賞がきまつた。

○藝術院会員を午餐に招待 宮中では二日藝術院会員を午餐に招待され、今回は山崎朝雲、内藤伸、板谷嘉七らの一名(うち美術関係会員八名)が出席した。

○登呂発掘に三〇万円 日本学術会議では二七日上野の日本学士院で、開かれた第三回総会で、研究費予算の中から三〇〇万円を登呂発掘事業の経費とし

て支出することを決定した。

○臨本十九郎国立博物館次長となる 藝大教授臨本十九郎は三〇日国立博物館次長に任命された。同一月一日に免官。

五月

○入場税反対デモ 博物館、動物園に入場税をかけようという地方財政法一部改正案が一一日国会に提出されるといふので、関係者間に猛反対が起り署名運動や国会陳情デモが行われた。動物園のお猿もこのデモに参加した。

○梅原安井自薦展ひらく 梅原龍三郎・安井曾太郎の自薦による作品約一五〇点の展覧が毎日新聞社の後援で一日より三〇日まで銀座松坂屋でひらかれ非常に好評であつた。

○兩陛下連合展へお成り 天皇、皇后兩陛下は二三日都美術館で第三回美術団体連合展を御覧になつた。

○法隆寺文化展 火災によつて世界の注視をあつめた法隆寺の文化財を展覧する法隆寺文化展が一五日から六月一四日までひらかれた。壁面模写も焼けたこつた分が初めて公開された。

○藝術院第一部会で日展問題協議 二五日文部省では藝術院会員総会につゞき午後第一部会を開催、本年度の美術展覧会は日本藝術院と会員有志によつて組織される日展運営会との共催のもとに開催すること等を協議した。(二〇

七頁参照

○国宝保存会議開催 二七日国宝保存会

議がひらかれ、建築（法隆寺金堂、五重塔など二八件）の修理補助費六九三万七千二百円、宝物（七件）の修理補助費二二〇万五千円を交付することを可決した。

○文教審議委員会決定 政府は三〇日の

閣議で文教審議委員会として、鈴木大拙、長谷川如是閑、馬場恒吾、安倍能成、高橋誠一郎、板倉卓造、鈴木文史朗、天野貞祐、和辻哲郎、仁科芳雄を決定した。

六 月

○日本藝術院令制定 帝國藝術院から名

称を変更した日本藝術院は、一日政令第二八一号日本藝術院令の制定によつてその機関となつた。旧日本藝術院官制は同日廃止された。（二〇四頁参照）

○日本藝術院主事の交替 一日文部事務

官増垣良一は日本藝術院主事を免ぜられ、新に藝術課長犬丸秀雄が主事を命ぜられた。

○松前城焼く 五日午前一時ごろ北海道

松前町役場から発火し、天主閣に飛火して国宝松前城が焼失した。わずかに追手門が残つた。

○横須賀の貝塚発掘 五日明大考古学教

室では横須賀市若松町四五の平貝貝塚を発掘し、縄文石器時代最古の稻荷台

式土器や同系の人骨を確認した。

○谷中田運送店に感謝状 運送店主谷中

田國雄は七日から一四日まで都美術館で行われた第一回日本彫刻家連盟展の作品運搬を無料に奉仕し、七日同連盟から感謝状が送られた。なほ同展では岸旗江など映画女優をモデルに公開制作を行つた。

○美術史学会創立 久しく待望されてい

た美術史学会が東西学界の連絡なつて二五日成立した。会長をおかず、常任委員として左の十名が選挙された。

〔東京〕太田博太郎、小杉一雄、富永惣一、蓮實重康、土方定一、吉川逸治、米沢嘉圃 〔京都〕梅津次郎、亀田孜、長廣敏雄。

○日本美術家連盟発足 二六日国立博物

館講堂に、美術家約三五〇名が集り、日本美術家連盟の結成大会をひらいた。美術に関する著作権の確立、法規の改善、資材向上、生活擁護などを目標とし、左の役員を決定した。

〔会長〕安井曾太郎 〔理事長〕伊原宇三郎 〔会計監督〕益田義信 〔事務局長〕三田康 〔委員〕日本画一一名、洋画三〇名、彫刻九名

七 月

○日展連盟会規則など決る 九日日本学

士院で藝術院第一部会がひらかれ、つぎの事項を協議決定した。

一、日本美術展覧会運営規則
二、日本美術展覧会運営規則に基き、会長を決定、ひきつゞき会員の互選で理事および常任理事を決定

〔会長〕高橋誠一郎 〔理事〕〇松林桂月、〇野田九浦、中村岳陵、福田平八郎、〇辻永、〇山下新太郎、石井柏亭、川島理一郎、〇朝倉文夫、〇北村西望、藤井浩祐、齋藤知雄、

〇松田権六、〇海野清、〇尾上柴舟 豊道春海（〇常任）
三、第五回日本美術展覧会規則決定
四、第五回日本美術展覧会審査員および出品依頼者を選定（四三頁参照）

○法隆寺火災の責任者を起訴 法隆寺火

災につき調査を進めていた奈良地検では慎重に検討した結果を大阪高検を通じて最高検に報告、処置方の指示を仰いできたので、最高検では九日左の四名を業務上失火罪および電気事業法違反で起訴することに決め奈良地検へ通達した。

△法隆寺国宝保存工事事務所長大岡實
△同建築技師淺野清△法隆寺庶務主任小西武彦△電気座蒲田製造業者株式会社三京社事務取締役井上渉。

○文化教育関係の税金減免 文化、教育

関係の税金の減免運動が猛烈に行われていたが、文部省では次国会を目ざして検討を開始し、参議院文部委員会でも

この問題を取上げ、一三日文部省関係者を招いて協議した。

○東京会の結成 既成所属団体を離脱せ

ずに自由な雰囲気で作の純粹を守ろうとする一種のクラブのような東京会が発足した。世話人は林武、土方定一、今泉篤男、野口彌太郎、田近憲三等の一九名。

○藝術大學兩學部長決る 四月発足した

東京藝術大学の美術学部長に村田良策、音楽学部長に加藤成之が二七日附て発令された。

八 月

○横山大観辞表を出す 藝術院会員横山

大観は一日付て辞表を出した。老齡のため」という理由だが、日本藝術院では善後策を協議した。

○西山翠峰日展審査員を辞退 京都日本画壇の長老西山翠峰は三日日展審査員辞退を申出た。

○法隆寺五重塔に鉄骨 解体修理工事中

の法隆寺五重塔は来月立柱式を行う予定で二三日工事事務所では一層から三層までは力肘木、尾垂木にそれぞれ幅二四厘、厚一五厘の鉄骨を入れ、外観は木造と変らぬように再建することを決めた。

○松本榮一国立博物館附屬美術研究所長に任命さる 前所長逝去以来空席となつていた国立博物館附屬美術研究所々

長に三一、日松本榮一が発令された。

九月

○美術ペンクラブ設立 三輪郷、横川毅一郎、北川桃雄らにより美術ペンクラブが設立された。

○旧石器時代の遺物発見 明大考古学教室助教杉原莊介らは一日から三日間群馬縣新田郡笠懸村岩宿の翠平山稻荷山を試掘し、旧石器時代の遺物を拾得確認した。

○上村松園を偲ぶ会 この八月歿くなった上村松園を偲ぶ会が八日から一四日まで日本橋三越でひらかれ遺品や遺作が展覧された。

○新展示形式あらわる 一三日から都美術館でひらかれた新制作派展の彫刻室は建築部会員丹下健三のプランで面目を一新した。建築部の壁面には白とグレーの骨格を生かし、緑の芝生で床面に会のマークを浮出させ、その廻りに彫刻を配列したもの。

○シャトルへ古美術を出陳 国立博物館ではシャトル美術館副館長シャーマン・リイからの要請で、同館で十一月から日本古美術展に雪舟山水図など五点を出陳することとなり、一九日には荷作りを終った。

○法隆寺五重塔の秘宝調査 法隆寺五重塔心柱下に埋藏される秘宝について、美術史学会その他と寺側との間に調査

許可をめぐって論議が交され、社会的話題となったが、法隆寺文部省間に調査案が成立し、宝器内部の清掃を行う機会に専門学者と信徒代表だけに「奉拜」を許すこととなり、二六日その旨発表された。

○法隆寺国宝保存委員会委員決る 昭和九年以来の法隆寺国宝保存事業部は失火を機会に改められ、民間団体である法隆寺国宝保存委員会に一切がまかせられることとなった。二八日同会委員として藤島亥治郎、村田治郎、上野直昭、藤田亮策、有光次郎が決定し、一月一日より発足。委員長は有光次郎、顧問として伊東忠太、細川護立、羽田亨があげられた。

一〇月

○上野直昭国立博物館々長を免ぜらる 国立博物館々長上野直昭は一日同職を免ぜられた。同日次長脇本十九郎が館長事務取扱となり在職一ヶ月にして三日免官となった。

○東京藝術大學學長發令 国立博物館々長上野直昭は九月二九日付で辞職し、東京藝術大學學長として専念することとなり、一日発令された。

○荻須高徳モナコ展に入賞 在パリ中の荻須高徳がモナコ展に「モンマルトル小景」を出して特賞となった旨二日報せられた。(朝日による)

○法隆寺秘宝発掘調査る 社会注視の的となった五重塔下の秘宝(舍利容器と海獸葡萄鏡)は四日午前一時ごろ大正一五年以来二五年ぶりに発掘され、佐伯貫主の手許に安置された。秘宝の「奉拜」調査は一七、八、九の三日間羽田、岸、梅原、藤田、石田、小場の六委員並びに専門助手の手によつて行われ、一九日午後結果が発表された。

○學士院新会員決る 五日日本學士院第四回總會で二九人の學士院新会員が當選した。第一部文学では、波多野精一和辻哲郎、土居光知が選ばれた。

○国宝盗難 山梨縣中巨摩郡禪宗永源寺では八日午後三時までに国宝聖觀世音菩薩立像(三尺一寸)が盗まれた。

○ルネ・グロツセ来る フランス政府から文化使節として日本へ来たアカデミー会員、ギユメ東洋美術館館長ルネ・グロツセ教授は八日夜羽田着、フランス使節随員小田ハウスに入つた。「日本はあくまで自分たちの古い伝統を守つてこれを基礎として發展させるように努力するのが本當であらう」と語つた。

○室町時代の国宝盗まる 群馬縣新田郡世良田村大字世良田長榮寺住職毛呂文雄方で一六日調べたところ室町時代の豊前良戒の刀(国宝)が盗まれているのを発見した。

○毎日出版文化賞決る 二三年八月一六

日から二四年八月一五日の間の出版物に對する毎日出版文化賞が決定して二六日發表された。美術関係では吉川逸治「中世の美術」(東京堂)がある。(四四頁参照)

○藝術院會員を午餐に招待 宮中では二一日藝術院會員清水六和、佐藤清藏ら八會員を午餐に招待された。うち美術部會員は二名。

○文化勳章受章者決る 第八回文化勳章の授章者は津田左右吉、鈴木大拙、志賀直哉、谷崎潤一郎ら七名と二九日正式決定、文化の日に授けられることとなった。今回の選考は高橋誠一郎以下十名の委員によつて一三日から行われたものである。(四四頁参照)

○第五回日展ひらく 第五回日展は日展運営會規則によつて二九日より翌月二一日まで東京都美術館にひらき、一月一日には天皇、皇后兩陛下と三笠宮、同一八日には皇太后陛下が御觀覽になつた。その他米朝中のフランス國文化使節ルネ・グロツセ博士も一月八日に來觀し、同日は日展關係者と藝術についての懇談會も催された。

○正倉院御物特別展ひらく 三〇日から一月一三日まで国立博物館で正倉院御物特別展がひらかれ、以前出品されなかつた北倉の御物を中心に陳列された。一四日兩陛下および皇太后陛下が御覽になつた。

○東京都美術館へ抗議 今年になつて展覧会のアトラクションがふえ、二科会の「額縁ショー」や二紀会の「ダンス・パーティー」が話題となつたが、これに對し石井柏亭、和田英作の両藝術院会員は三〇日「神聖な美術館を汚すものである」との抗議を都美術館当局に申入れた。

○毎日美術賞決る 本年度の毎日美術賞は、福田平八郎「新雪」、林武「梳する女」、菊池一雄「青年像」の三者と決り一六日発表された。各々賞金一〇万円づつが贈られた。（四四頁参照）

○国立史料館ひらく 文部省では民間の旧家、町村役場、寺院、神社などに残る古文書や記録を保存するため史料館の設立を準備していたが、品川区豊町一ノ一一三八の旧三井文庫を買取つて一九日學術史料展示会をかねて開館式を行つた。

○英連邦現代絵画複製展 英本国はじめ英連邦五ヶ国の美術界の現状を伝える複製三五〇点が毎日新聞、英文毎日両社主催で日本橋三越において展覧された。

○高橋誠一郎博物館長となる 三一日附で前文部大臣高橋誠一郎が国立博物館長に補せられ、在職中の日本藝術院長はそのまゝ兼任することとなつた。

○上野驛に女神像 二〇日上野駅前て愛の女神像の除幕式が行われた。作者は長沼孝三。

○大觀の絵盗まる 中央区銀座一ノ三東洋美術館では大觀、玉堂の軸を盗まれたと一四日届出した。

○朝日賞授賞式行わる 二四年度朝日文化賞に正倉院古楽器を扱つた林謙三が受賞した。

○高松に美術館 香川県出身の美術家が主体となつて淨財をつくり、栗林公園内に美術館が設立された。三日落成、設計は山口文豪、木造二八〇坪。美術の常設展観場となる。

○法隆寺秘宝再び埋蔵さる 発掘と調査で問題をつんだ法隆寺五重塔下の秘宝は二八日夜再びもとの舍利穴に埋められ、永久に保存されることになつた。

○穀山安樂律師焼く 二二日夜滋賀縣滋賀郡坂本村天台宗天台律師本山安樂律師正殿天井から出火、本堂、庫裏、鐘樓など六むねを焼いた。国宝の本尊は焼けなかつたが、古仏書約一五〇箱など貴重な藏品も焼失した。

○現行美術自選代表作十五人展ひらく 讀賣新聞社主催により日本の現代繪画を鳥瞰する意味で選ばれた梅原、安井ほか一五作家による展覧会が一六日より高島屋に開催された。

○グルツセ博士を學士院客員に推舉 日本學士院では一二日の總會で末朝中のルネ・グルツセ博士を學士院客員に推挙することに決定した。

○一燈賞決る 安井會太郎、梅原龍三郎両人の推挙で洋画壇の新人に興えらるる一燈賞の第三回受賞者が決り二二日発表された。今回は一水會員小野末である。（四四頁参照）

○幼兒画家の個展 六歳の西田紘、四歳の矢野目清彦らが個展をひらき街の話題となつた。

○浅草寺に平安初期の瓦 浅草寺発掘は一四日夕まで続けられ、平安朝初期と

○藝術大學祭 東京藝術大學第一回藝術祭は大學、毎日、東京日日新聞共催で行われ、一日記念式典で幕をあげ、二日から七日まで展覧會、演奏會、小學生動物寫生大會、仮裝行列などを催した。

○東照宮の被害 二六日の暴風雨で国宝日光東照宮の陽明門、表門、輪王寺三仏堂に相當の被害があつた。

一 月

昭 和 二 十 五 年 度

○無名會第一回展ひらく 大觀、玉堂、桂月ら老大家級数人を集めた三越企画の展覧會無名會が開かれた。

○舞台美術展ひらく 伊藤嘉朗、吉田謙吉両舞台美術研究所主催の舞台美術展が開かれ、約五〇〇点の精巧な模型がならび演劇美術に對する一般の関心を呼んだ。

○日月社結成 伊東深水の青衿會、兒玉

○大觀畫業六十年展ひらく 明治大正昭和三代にわたる横山大觀の畫業を一堂にあつめた六十年展が、二日から一三日まで上野松坂屋でひらかれた。画壇に洋画化する傾向の強い折柄反省と感銘を與えた。

○グルツセ博士歸國 ルネ・グルツセ博士は一ヶ月半の滞日を終えて二四日羽田から歸國した。

○朝日賞授賞式行わる 二四年度朝日文化賞に正倉院古楽器を扱つた林謙三が受賞した。

○高松に美術館 香川県出身の美術家が主体となつて淨財をつくり、栗林公園内に美術館が設立された。三日落成、設計は山口文豪、木造二八〇坪。美術の常設展観場となる。

○法隆寺秘宝再び埋蔵さる 発掘と調査で問題をつんだ法隆寺五重塔下の秘宝は二八日夜再びもとの舍利穴に埋められ、永久に保存されることになつた。

○穀山安樂律師焼く 二二日夜滋賀縣滋賀郡坂本村天台宗天台律師本山安樂律師正殿天井から出火、本堂、庫裏、鐘樓など六むねを焼いた。国宝の本尊は焼けなかつたが、古仏書約一五〇箱など貴重な藏品も焼失した。

○現行美術自選代表作十五人展ひらく 讀賣新聞社主催により日本の現代繪画を鳥瞰する意味で選ばれた梅原、安井ほか一五作家による展覧会が一六日より高島屋に開催された。

○グルツセ博士を學士院客員に推舉 日本學士院では一二日の總會で末朝中のルネ・グルツセ博士を學士院客員に推挙することに決定した。

○一燈賞決る 安井會太郎、梅原龍三郎両人の推挙で洋画壇の新人に興えらるる一燈賞の第三回受賞者が決り二二日発表された。今回は一水會員小野末である。（四四頁参照）

○幼兒画家の個展 六歳の西田紘、四歳の矢野目清彦らが個展をひらき街の話題となつた。

○浅草寺に平安初期の瓦 浅草寺発掘は一四日夕まで続けられ、平安朝初期と

○藝術大學祭 東京藝術大學第一回藝術祭は大學、毎日、東京日日新聞共催で行われ、一日記念式典で幕をあげ、二日から七日まで展覧會、演奏會、小學生動物寫生大會、仮裝行列などを催した。

○東照宮の被害 二六日の暴風雨で国宝日光東照宮の陽明門、表門、輪王寺三仏堂に相當の被害があつた。

○朝日賞授賞式行わる 二四年度朝日文化賞に正倉院古楽器を扱つた林謙三が受賞した。

○現行美術自選代表作十五人展ひらく 讀賣新聞社主催により日本の現代繪画を鳥瞰する意味で選ばれた梅原、安井ほか一五作家による展覧会が一六日より高島屋に開催された。

○グルツセ博士を學士院客員に推舉 日本學士院では一二日の總會で末朝中のルネ・グルツセ博士を學士院客員に推挙することに決定した。

○一燈賞決る 安井會太郎、梅原龍三郎両人の推挙で洋画壇の新人に興えらるる一燈賞の第三回受賞者が決り二二日発表された。今回は一水會員小野末である。（四四頁参照）

○幼兒画家の個展 六歳の西田紘、四歳の矢野目清彦らが個展をひらき街の話題となつた。

○浅草寺に平安初期の瓦 浅草寺発掘は一四日夕まで続けられ、平安朝初期と

○藝術大學祭 東京藝術大學第一回藝術祭は大學、毎日、東京日日新聞共催で行われ、一日記念式典で幕をあげ、二日から七日まで展覧會、演奏會、小學生動物寫生大會、仮裝行列などを催した。

○東照宮の被害 二六日の暴風雨で国宝日光東照宮の陽明門、表門、輪王寺三仏堂に相當の被害があつた。

○朝日賞授賞式行わる 二四年度朝日文化賞に正倉院古楽器を扱つた林謙三が受賞した。

○現行美術自選代表作十五人展ひらく 讀賣新聞社主催により日本の現代繪画を鳥瞰する意味で選ばれた梅原、安井ほか一五作家による展覧会が一六日より高島屋に開催された。

○グルツセ博士を學士院客員に推舉 日本學士院では一二日の總會で末朝中のルネ・グルツセ博士を學士院客員に推挙することに決定した。

○一燈賞決る 安井會太郎、梅原龍三郎両人の推挙で洋画壇の新人に興えらるる一燈賞の第三回受賞者が決り二二日発表された。今回は一水會員小野末である。（四四頁参照）

○幼兒画家の個展 六歳の西田紘、四歳の矢野目清彦らが個展をひらき街の話題となつた。

○浅草寺に平安初期の瓦 浅草寺発掘は一四日夕まで続けられ、平安朝初期と

希望の国風会は発展的解消を遂げ、伊東、兒玉両名を顧問に岡塾の代表作家ならびに各方面の同志を会員として日月社が結成された。

○九室会再発足 戦前一時中断されていた二科会の前衛派集団九室会が再組織され、機関誌「ニューアート」を発刊する。

○京都工藝美術総合研究所作品陳列所新設 同陳列所は四條通り河原町西入バシ・アメリカン二階に新設された。

○京都輸出美術工藝作家協会常設館開設 同館は四條柳馬場東入ル京都貿易館内に開設された。

二月

○藤田嗣治アメリカより渡佛 最近ニューヨークで十ヶ月間にわたり個展を開き好評を博した藤田嗣治は四日英国からル・アーゲル港に到着した。

○湯島聖堂の孔子像盗まる 湯島聖堂内大成殿孔子廟から大正天皇御下賜の孔子像二体が九日窃取され、数日後国電内で発見された。

○国宝長樂寺焼失 一二日千葉縣印旛郡大森町国宝長樂寺観音堂から出火、同建物全焼した。

○第二回日本アンデパンタン展開催 讀賣新聞主催第二回日本アンデパンタン展が一八日より都美術館で開かれた。

○夏島貝塚を試掘 縄文文化研究の資料として戦前から注目されていた横須賀追浜の夏島貝塚は総司令部ダウンス中尉の協力により明大考古学教室の手で二〇・二一両日にわたり試掘された。

○上村松園とその藝術展開催 毎日新聞社主催により二二日より日本橋高島屋で松園の初期より晩年に至る代表的作品を百十数点が展覧された。女史の全貌を知るにたる意義ある陳列であつた。

○現代美術展の出品画焼失 文部省主催現代美術展の出品画が二七日朝運搬途中路上で焼失した。通行人の煙草の火が原因らしいとされた。繪は森田沙伊「カナリヤ」等四点。

○松園賞設定 上村松園とその藝術展を記念して毎日新聞社では女流作家の向上に寄與するため松園賞を設定した。選考委員には山本丘人、福田平八郎、山口蓬春、上村松算が当ることになった。

○日本美術家連盟関西支部設置 日本美術家連盟では関西に支部を設け支部長須田國太郎、委員長小磯良平と決定した。

三月

○二科美術研究所開設 二科会では杉並区久我山に研究所を開設した。

○一九四九年選抜第一回秀作展開催 昨

年度の各種展覧会に公表されたものの中から秀作、問題作として話題を投げたものばかりを約一三〇点選び三日より日本橋三越において展覧した。

○中尊寺遺体調査開始 朝日新聞社文化事業団は、中尊寺藤原清衡、基衡、秀衡三代の遺体を調査し保存措置を講ずるため學術調査団を組織して現地に派遣、二十三日調査を開始した。

○創藝協会結成 緑菴会神津港人は同会を解散して新たに綜合美術団体創藝協会を結成した。

○藝術院賞、恩賜賞決定 日本藝術院では二七日、二四年度藝術院賞受賞者七名と本年度から新設の恩賜賞受賞者一名を決定した。(四四頁参照)

四月

○関西アカデミー新設 大阪市文化協会主催で天王寺区上汐町六に新設され池島勘治郎、小出三郎、中畑輝人が美術アカデミーのセクションを担当する。

○六家会結成 昭和六年東美幸の洋、日彫・工・建の作家一四名が六家会を結成、団体意識を離れて友情で結ぶ第一回展を四月日本橋高島屋に開く。

○京都市立美術大學発足 旧京都市立繪画専門學校はこの月から新制の美術大學として出発した。

○藤田嗣治回顧展開催 毎日新聞社主催で一日より大阪松坂屋で藤田嗣治回顧展が開かれた。

展が開かれた。

○名古屋城美術展開催 我國城郭建築の代表的遺構であり、また代表的な桃山障壁面の遺品をもつことで美術史上にも知られている名古屋城は戦災で焼失したが、取はずしの出来る模繪の類ははゞ災厄をまぬがれたので、それらの遺品を一日より一ヶ月間国立博物館で公開した。

○二四年度文部省買上決定 二四年度に各種展覧会に発表された優秀作一四点を買上げる事に四日決定した。(四六頁参照)

○イタリヤ名画複製展開催 朝日新聞社提供、国立博物館主催の下にイタリヤ政府から送られたルネッサンス期名作複製の数々が六日より三〇日まで国立博物館表慶館に展覧された。

第二回装幀美術賞決定

装幀相談所主催による一九四九年度出版物の装幀美術展が一日より三越本店で開催され受賞が決定した。(四四頁参照)

○明治大正昭和日本画巨匠名作展ひらく 朝日新聞社主催で大観、紫紅、鐵齋等の名作を十五日より銀座松坂屋で展覧した。

○日米子供美術展 アメリカの子供が描いた繪四〇〇点が日赤を通じて日本の子供たちに送られて来たので日赤と都教育廳では全国から子供の作品千点を募集、日米交換子供美術展を二八日

より都美術館で開催した。

○文化財保護法成立 二四年二月法隆寺

火災に関する参議院文部委員会の議に
発した文化財保護法は大小六〇数回の
会議を経て、第七国会において可決成立
し、八月二十九日から実施されることに
なつた。（一八一頁参照）

○第一回アトリエ新人賞決定 二四年度
アトリエ新人賞は一水会小野末と決定
した。

○雑誌「美術史」創刊 美術史学会機関
誌として「美術史」が便利堂から創刊
された。

五月

○イサム・ノグチ来日 日米米人前衛彫
刻家として有名なイサム・ノグチは二
日空路訪日、一九年ぶりに日本の土を
踏んだ。二ヶ月の滞在中講演や我国美
術家との交歓などをする。

○サロン・ド・フランタン展開催 駐日ベ
ルギー代表シュヴァレリ夫人を中心に
連合国夫人達により発足した美術展サ
ロン・ド・フランタン第二回展が六日
開かれた。

○法隆寺壁画採取はじまる 法隆寺再建
に一時期を劃する壁画採取作業は東大
浜田、櫻井両博士立会いの下に一二日
四号小壁から着手された

○第四回連合展開催 毎日主催の第四回
美術団体連合展が一四日より開かれた

岡陸下が一五日にはおそろいで御覽に
なつた。

○中村岳陵日本美術院に辞表提出 藝術
院会員、日本美人院同人中村岳陵は同
院に対し二九日辞表を提出した。

○第六回日本藝術院賞授賞式 初の恩賜
賞授賞者小場恒吉他七名に対する二四
年度藝術院賞授賞式は二九日天皇陛下
の臨幸の下に国立博物館において挙行
された。

○藝術院新会則内定 三〇日の日本藝術
院総会第二日は文部省機構改革以来空
白となつていた藝術院会則草案を審議
内定した。（二〇四頁参照）

○藝術院受賞者に御階食賜る 天皇陛下
は恩賜賞、藝術院賞の受賞者八氏をお
招きになり三一、二日午餐を共にされた。

○日本美術家連盟新委員決る 日本美術
家連盟では第二回総会にて会長安井曾太
郎委員長伊原宇三郎その他の新委員を
決定した。

○建築学会學術賞及び技藝賞受賞者決定
戦後最初の建築学会學術賞と技藝賞の
受賞者が決定し、學術賞は「利休の茶
室」の研究によつて堀口捨巳に、技藝
賞は「慶応義塾大学四号ホール」と「藤
村記念堂」の建築によつて谷口吉郎に
授與された。（工學技術的なものは省
略。）

○石井鶴三藝術院会員任命 石井鶴三は
一日日本藝術院会員に任命された。

○第六回日展規則書及び審査員決定 第六
回日展規則書および審査員が五日日
展運営會理事會で決められた。（二〇
七、四三頁参照）

○フランス留學生決る 昭和一六年末の
フランス政府給附留學生が九日決定、
美術関係では美術研究所員秋山光和
（美術史學）が選ばれた。

○藝術院第二、三部長決る 藝術院第二
部長は久保田万太郎、第三部長は信時
潔に決定した。

○川村吾藏遺作展開催 彫刻家川村吾藏
の遺作五〇余点、デッサン二〇〇点が
一七日から三越本店において展覧され
た。

○川合玉堂藝術院第一部長を辞退 藝術
院第一會において第一部長に推薦され
た川合玉堂は都合で辞退、当分高橋
院長が兼任することになった。

○BBS運動援護日米英加美術展公開
四ヶ国画家の子供を主題とする繪画の
ほか世界各國のBBS運動の資料や保
護少年たちの作品が二〇日から三越本
店で公開された。

○日米學童交歓國畫展開催 米國西部學
童の作品四〇点と全國小中学校作品一
千余点の國畫展が二七日から新宿三越
で開かれた。

○ユネスコ絶版圖書の複製に着手 ユネ
スコでは戰災地域諸國の圖書館の要求
に應ずるため絶版となつて定期刊行物
を複製することに第四回總會で決定し
た。

○太平洋畫會吉田ふじを等を除名 會の
統制を亂すという理由で太平洋畫會で
は吉田ふじを、吉田遠志、小泉秀松を
除名したが三名は理由承服できず自ら
脱會聲明を發した。

○梅原龍三郎國畫會名譽會員となる 梅
原龍三郎は國畫會員を退き名譽會員と
なり會の運営には関與しないことにな
つた。

○世界美術全集出版される この月平凡
社から世界美術全集が出版された。

○坂本繁二郎自薦回顧展 九州で弧高の
画業をつゞける坂本繁二郎の回顧展が
一日から日本橋三越に開催され注目を
ひいた。

○フランス現代ボスター展開催 日佛會
館主催フランス現代ボスター展が一日
から日本橋三越でひらかれた。

○金閣寺焼失 二日京都鹿苑寺の国宝三
層樓金閣から出火、同閣および閣中に
安置された国宝義滿像はじめ古美術品
などを全焼した。原因は同寺徒弟林養
賢の放火によるものであつた。

○牧野記念館完成 目黒区上目黒の都立
駒場高校に建設中の故牧野虎雄記念館

七 月

七 月

七 月

七 月

七 月

七 月

七 月

が完成し八日落成式を行った。

○東京都美術館の修理 懸案中の都美術館の破損修理は二五〇万円の予算で一〇月から一ヶ月の予定で着手した。

○金閣寺放火事件公判開く 金閣寺放火犯林養賢の第一回公判が二四日京都地裁で行われた。

○対馬調査団歸る 八学会連合対馬調査団中の考古学団は多くの收穫を得て二四日福岡に歸った。

○文化財保護委員開議で決る 五名の文化財保護委員については選衡委員会へ人選をすゝめていたが二六日の開議で高橋誠一郎、細川護立、矢代幸雄、一万田尚登、有光次郎と決定した。

○聖徳太子像盗まる 埼玉縣天洲寺で二八日国宝聖徳太子像が盗まれ三〇日近くの草むらで発見された。

○一線美術結成 岩井剛一郎ら二三名は旺文会を脱退、一線美術を結成した。行動美術彫刻部新設 行動美術協会では今秋の第五回展から彫刻部を新設することとなった。

○瀧廉太郎記念像建立 明治の作曲家瀧廉太郎の記念像が郷里大分市に建てられることになり朝倉文夫制作の原型が二七日出来上った。

○碓伊之助遺像 一水会々員碓伊之助はこの月空路フランスへ渡った。

八月

○日本書作院結成展開催 鈴木翠軒を会長に結成された日本書作院では一日より日本橋三越で結成展を催した。

○近代美術館新設を建議 日本美術家連盟は文部省、建設廳、大蔵省などを訪れ首都建設法の実施に當つて、近代美術館と常設展覽會場を都心に建設することを要望建議した。

○尻屋崎遺跡の発掘始まる 青森縣下尻屋吹切浜の新石器時代の遺跡発掘調査が一日着手された。

○現代世界美術展 讀賣新聞社主催により米・佛の近作をはじめ歐洲各国の現代美術約一〇〇点を集めて一日より高島屋に展覧された。

○登呂遺跡最後の発掘 静岡縣登呂遺跡最後の発掘が一日より一ヶ月の予定で始められた。

○自由美術家協会から荒井龍男ら脱退 自由美術家協会会員荒井龍男、朝妻治郎、小松義雄、村井正誠、矢橋六郎、山口薫、植木茂、中村眞は新団体を結成するため六日同会を脱退した。

○東京都美術館長決定 しばらく欠員だった東京都美術館長は一四日杉山司七に決つた。

○「わだつみのこえ」の記念像なる 日本戦歿学生記念会の委嘱で本郷新制作の同像原型が一六日出来上った。

○イサム・ノグチ作品展開催 三ヶ月にわたるイサム・ノグチの滞日中の作品

彫刻・新フレイム・新作家具などを一八日より日本橋三越に展覧した。

○商業美術展開催 毎日新聞社主催の商業美術展が一八日より三越本店で開かれた。

○ネオン美術展開催 東京日々新聞社主催でネオン美術展が二二日より銀座三越で開かれた。

○フランス留學生出発 戦後初の佛国政府給附留學生一六名が二三日渡佛した。

○吉川逸治渡佛 日佛交換展東洋陶磁展の用務をかねて藝術大学教授吉川逸治も二三日渡佛した。

○文化財保護委員会発足 文化財保護委員会は五委員を正式任命、高橋誠一郎を委員長として文部省内に事務局をおき二九日正式に発足した。

○高橋誠一郎国立博物館々長を免ぜらる 国立博物館々長高橋誠一郎は二九日同館長を免ぜられ同日国立博物館々長事務取扱となる。

○文化財保護委員会事務局長決る 文化財保護委員会事務局長に二九日森田孝が任命された。

○松本城を修理 国宝松本城は破損変化著しいので五ヶ年計画で修理工事に着手した。

○葉作權法改正案起草審議會設置 總司令部民間財産管理局の覚書により現行著作權法を改正することになり文部省では著作權法改正案起草審議會を設けることとなった。

○フランス美術家群結成 太平洋画會を脱退した吉田ふじを、吉田遠志、浅井眞海州正太郎ら八名はフランス美術家群を結成した。

○日佛交換美術展開催決定 毎日新聞社主催の下に同時期にパリで日本現代陶磁展を、東京でフランス戦後新銳作家の繪画展サロン・ド・メイを開くことに決定した。

○岡田謙三渡米 二科会々員岡田謙三はこの月渡米した。

九月

○イサム・ノグチ歸米 五月末日以来、各スケジュールを終つたイサム・ノグチは五日空路歸米した。

○中尊寺の遺体永久保存措置を實施 さきに調査の行われた中尊寺遺体を永久に保存するため二五日その措置が實施された。

○型生派美術家協会結成 国画會の香月泰男、杉本健吉、須田昶太ら一五名は研究団体として型生派美術家協会を結成二七日から第一回展を三越本店に開いた。

○上野会結成及第一回展開催 東京美術学校の出身者で挿繪、表紙繪などを執筆している一六名により組織、第一回上野会挿繪展を一八日より資生堂で開催した。

○日本花道展 文部省日本花道展運営委員主催第一回展が二九日より銀座松坂屋で開催された。

○横山大観藝術院会員を辞任 横山大観は三〇日藝術院会員を正式に辞任した。重要文化財の届出 文化財保護法施行と同時に旧国宝保存法が消滅したので同委員会では旧法による指定文化財を所有しているものは一月二八日までに出るよう通達した。

○華道文化会館落成 小石川に本邦最初の華道文化会館が建設された。

○モダンアート協会結成 さきに自由美術家協会を脱退した荒井龍男、山口薫ら八名は新たにモダンアート協会を結成した。

○青丘会結成 日展参加洋画六団体に所属する中堅作家、高田誠、廣瀬功ら二名により青丘会が結成された。

○第二紀金造型部新設 第二紀会では新たに造型部を設け河野鷹思、原弘、亀倉雄策、金子徳次郎、橋本徹郎を会員に推薦した。

一〇月

○日本藝術院補充会員候補決る 日本藝術院では欠員の補充候補として九名を七日内定した。第一部では日本画の堂本印象、山口蓬春、洋画の中村研一、工藝の高村豊周、堆朱楊成が推薦された。（二〇四頁参照）

○現代フランス版画展開催 現代に於てフランスで最も活躍している版画家達の作品が十日から国立博物館表慶館で紹介された。

○文化勳章授与者内定 二五年度文化勳章授与者選考委員は高橋誠一郎、辰野隆、上野直昭ら一〇名と決定したが、同委員会によつて二五年度文化勳章授与者が一九日内定し、美術関係では小林古徑が決つた。（四四頁参照）

○南画展ひらく 我国草創期より現代までの南画および中国作家の名作をあつめ、二五日より上野の国立博物館において展覧された。

○櫻ヶ丘遺跡発掘 奈良縣吉野郡大淀町で縄文期の完全な堅穴式住居跡が二九日発見された。

○第六回日展開催 二九日より都美術館で第六回日展が開かれた。一五日両陛下が御覧になった。

○新興美術院再組織 田中案山子、横田仙草、英木杉風ら同人八名によりしばらく中絶していた新興美術院が再組織された。

○平櫛田中藝大へ自作を寄贈 平櫛田中は藝術大学へ自作および彫刻のコレクション一二〇余点を寄贈した。

十一月

○第四回正倉院特別展開開 第四回正倉院特別展は一日より奈良博物館に開

催された。文化財富貴入り切手発行さる 外国向手紙料金二四四の切手に平等院鳳凰堂を印刷したものが一日発行された。

○鎮西清方画業五十年展ひらく 明治風俗をかいいて有名な鎮西清方の初期より近代までの代表作五〇余点をあつめた清方五〇年展が一日より上野松坂屋で開催された。

○三文豪の史跡に標識建立 さきに都教育委員会により岡外、漱石、秋聲の住居が史跡に指定されたが、これら三史跡に二日標識が建てられた。

○林間彫刻展開開 武蔵野文化協会、日本彫刻家連盟共催の林間彫刻展が三日から井之頭自然文化園で開かれた。

○ウィンドー藝術コンクール 新制作派二科会、美術文化、第二紀会の四団体が同じテーマの「一つの椅子」を素材に三日から三越本店のショウ・ウインドーに表現を競つた。珍しい催して街の人氣を呼んだ。

○日比谷公園に自由の女神建立 二科会員乗松嚴制作の自由の女神像が日比谷公園に建てられ三日除幕式を行つた。

○文化勳章授賞式舉行 三日宮中に於いて天皇陛下御臨席の下に小林古徑ら七名に文化勳章が授與された。終了後午餐を賜つた。

○国際連盟へ綴れ錦織の佛像を贈る 佛教連合会、佛教懇話会、日本佛教讚仰

会から国連へ綴れ錦織の佛像が贈られた。

○法隆寺聖徳宗を開宗 法隆寺は奈良朝以来の宗派法相宗から離脱し新たに聖徳宗を開宗した。

○青年画家協会結成 関野準一郎、東山沙智子ら会員一〇〇余名によつて青年画家協会が結成された。

○マツカーサー元帥の胸像完成 川村吾藏制作のマツカーサー元帥胸像除幕式が二八日三越本店においてマツカーサー夫人の手により行われた。

○東京代々木に堅穴式住居跡発見 渋谷区代々木八幡神社境内で堅穴式住居跡や土器などが発見された。

○フランス美術文化映画来る ゴッホ、ロダン、マイヨール、マチス等の作品をあつかつた文化映画が輸入紹介されその巧みな手法が注目された。

○毎日美術賞第二回受賞者決る 第二回毎日美術賞に吉岡堅二の「濕原」、猪熊弦一郎の「慶応義塾学生ホール」の壁画が決定し、二八日発表された。（四四頁参照）

○京都日展が二科の作品をポスターに盗用 京都日展の宣伝ポスターに二科会々員吉原治良の作品を盗用したことがわかり問題となつた。

○無形文化財の保存 文化財保護委員会では大倉流の能狂言小謠 茂山彌五郎の「京童」ほか二五曲をレコードにと

つて保存することになった。

○平出遺跡の本調査終る 長野縣平出遺跡の本調査は貴重な收穫をあげ一まづ終了した。

○出版美術家連盟結成 出版美術家の地位の向上と生活保護を目的として、岩田專太郎を理事に会員約二〇〇名の出版美術家連盟が発足した。

一一二月

○法輪寺境内を發掘 法輪寺の原型が法輪寺ではないかとの學界のなぞを解くため国立博物館石田茂作らが二日奈良縣法輪寺境内の發掘を行つた。

○飛鳥中學校庭で土器發掘 北区西ヶ原町飛鳥中學歴史研究会では五日校庭中央の西ヶ原貝塚の一部を試掘した。

○文部大臣賞授賞式 二四年度の藝術選奨のうち美術文部大臣賞を一一日日本画山本丘人、洋画木下義謙、工藝前大峰に授與した。(四四頁参照)

○學術會議當選者發表 日本學術會議會員第二回選舉の結果が一一、二四日上野學士院會館で開票發表された。

○藝術院新會員正式任命 日本藝術院ではさきに補欠候補として挙げられた堂本印象らの新會員を正式に任命した。

○文化財保護委員會專門委員決定 文化財保護委員會では文化財保護法に基いて專門審議会の專門委員を二一日正式に決定發表した。

第一分科(美術工藝) 明石國助他三九名、第二分科(建造物) 大熊喜邦他一名、第三分科(史跡名勝天然記念物) 石井満吉他二三名、第四分科(無形文化財) 折口信夫他二三名、計九五名。(會長) 辻善之助(副會長) 和辻哲郎(四三頁参照)

○重要美術指定解除 文化財專門審議會では二一日第一回總會において重要美術品五一件の指定を解除した。

○一渚のヴィーナス 上野驛前に立つ上野駅前広場に本郷新作プラスチック塗裝のヴィーナスが建てられ二五日除幕式を行つた。

○日比谷公園の銅像盗まる 日比谷公園事務所脇にあるブロンズ牝狼の乳をのむ二人兒の一方が二七日持去られた。

○金閣寺放火犯に懲役七年の判決 金閣寺放火犯林養賢は二八日の京都地裁における最終公判で懲役七年の判決を言渡された。

○「白鳥と少年像」除幕式 早川純一郎作の白鳥と少年像が木挽町歌舞伎座脇昭和通りに建てられ二九日除幕式を行つた。

○映画「美の殿堂」製作 国立博物館では日本美術の名作を紹介するため「美の殿堂」の製作を開始した。

○東大戦歿學生記念像建立を拒否 さきに完成された本郷新制作の戦歿學生記念像「わたつみのこえ」は建立地を東

大構内に選び日本戦歿學生記念会より同大学に寄附されたが、学校当局はこれを拒否した。

○雲崗石窟研究出版に文部省で補助 京大人文学部研究所水野清一、長廣敏雄両教授らの雲崗石窟調査の成果は資金の不足から出版不能を惜しまれていたが、文部省ではこれに対し一六〇〇万円を補助し出版を進めることになった。

美術工藝品修理補助金年度別予算額及修理件数表

年度別	予 算 額	繪 画 修 理 件 数	計	補 助 額 計	摘 要
昭和二年	一、四四〇、〇〇〇円	二一	五二	一、三五二、三〇〇円	予算額トノ差ハ八、七〇〇円トシテ管
二三年	二、四四〇、〇〇〇円	一二	八	二、三九八、〇〇〇円	予算額トシテ管
二四年	五、五〇〇、〇〇〇円	六一	四一	五、五〇〇、〇〇〇円	予算額トシテ管
二五年	一一、〇〇〇、〇〇〇円	三六	九七	一一、〇〇〇、〇〇〇円	予算額トシテ管

重要文化財都府縣別件数表 (美術工藝品之部)

種別 縣別	繪画	彫刻	文書	刀剣	工藝	合計	種別 縣別	繪画	彫刻	文書	刀剣	工藝	合計
北海道	0	0	0	1	0	1	滋賀	89	355	92	2	29	567
青森	0	2	0	4	6	12	京都	368	319	605	22	57	1,371
岩手	2	14	3	2	8	29	大阪	45	86	43	18	35	227
宮城	0	6	2	3	2	13	兵庫	76	97	51	15	10	249
秋田	1	0	0	2	1	4	奈良	51	478	83	9	94	715
山形	2	2	5	16	3	28	和歌山	47	92	31	25	39	234
福島	3	20	2	1	8	34	鳥取	3	18	2	1	3	27
茨城	6	14	0	3	4	27	島根	6	18	7	2	11	44
栃木	5	5	29	17	12	68	岡山	25	14	3	5	4	51
群馬	0	2	3	1	3	9	広島	6	35	11	19	27	98
埼玉	5	8	6	4	4	27	山口	8	15	11	13	5	52
千葉	2	6	1	0	3	12	徳島	5	15	4	0	1	25
東京	192	60	252	190	51	745	香川	20	24	11	6	3	64
神奈川	76	60	71	17	26	250	愛媛	2	10	4	8	19	43
新潟	3	13	4	3	4	27	高知	0	49	0	2	2	53
富山	1	6	3	0	1	11	福岡	11	49	6	12	14	92
石川	5	10	20	8	10	53	佐賀	0	12	1	5	2	20
福井	11	22	12	3	6	54	長崎	1	0	0	2	0	3
山梨	7	13	4	4	2	30	熊本	1	10	5	3	1	20
長野	4	36	4	2	2	48	大分	0	18	0	7	4	29
岐阜	1	40	2	9	6	58	鹿児島	1	0	0	5	5	11
静岡	9	13	15	29	4	70	宮崎	0	3	0	0	0	3
愛知	20	31	26	28	8	113							
三重	17	54	15	4	9	99	計	1,137	2,154	1,449	532	548	5,820

26. 10. 29 現在

文化財專門審議會
專門委員名簿

會長辻善之助、副會長和辻哲郎【第一分科會】分科會長、分科會長代理上野直昭（繪画彫刻部會）一部會長上野直昭、部會長代理脇本十九郎、田中一松、福井利吉郎、藤懸靜也、松本榮一、丸尾彰三郎、安田新三郎、米澤嘉圃、和辻哲郎（工藝品部會）一部會長松田權六、部會長代理田澤金吾、明石國助、奥田誠一、香取秀治郎、北原大輔、神津伯、小山富士夫、龍村謙、野口直造、本間順治、前田廉造、溝口三郎、宮形武次、吉野富雄、（文書部會）一部會長尾上八郎、部會長代理石田幹之助、神田喜一郎、芝葛盛、武内義雄、田山信郎、辻善之助（考古民俗資料部會）一部會長藤田亮策、部會長代理石田茂作、（兼）梅原末治、折口信夫、柴田常惠、田澤金吾、（兼）原田淑人（兼）柳宗悅【第二分科會】分科會長大能嘉邦、分科會長代理內田祥三、岸能吉、岸田日出刀、田邊泰、谷口吉郎、福山敏男、藤島亥治郎、堀口捨巳、村田治郎【第三分科會】分科會長芝葛盛、分科會長代理楠木外岐雄（史跡部會）一部會長原田淑人、部會長代理坂本太郎、（兼）大熊嘉邦（兼）芝葛盛、（兼）辻善之助、長谷部言人、（名勝部會）一部會長吉永義信、部會長代理辻村太郎、石井滿吉、關口鉄太

文化財專門審議會專門委員名簿・日展審查員

日展審查員一覽

第一回日展（昭和二年三月）

第一部（日本画）

川合玉堂 結城素明 菊池契月
西山翠嶂 鍋木清方 松林桂月
横山大觀 安田靉彦 前田青邨

郎、龍居松之助（天然記念物部會）一部會長鍋木外岐雄、部會長代理本田正次、內田清之助、黒田長禮、小林義雄、辻村太郎、中井猛之進、藤本治義、渡邊武男（埋藏文化財部會）一部會長長谷部言人、部會長代理（兼）藤田亮策、石田茂作、梅原末治、後藤守一、原田淑人、【第四分科會】分科會長久保田万太郎、分科會長代理河竹繁俊、（藝能部會）一部會長河竹繁俊、部會長代理加藤成之、（兼）折口信夫、久保田万太郎、小宮豐隆、芝祐泰、田邊尚雄、南江治郎、野々村成三、花柳芳三郎、本田安次、町田嘉章、光吉積男、三宅周太郎、吉田幸三郎、（工藝技術部會）部會長西澤昂一、部會長代理（兼）松田權六、（兼）香取秀次郎（兼）小山富士夫、（兼）野口直造、（兼）堀口捨巳、（兼）本間順治、柳宗悅【追加】

【第四分科會】西崎惠、【第一分科會兼第二分科會】下村壽一、【第一分科會】宇佐美毅【臨時專門委員】【第三分科會】森本潔、横川信夫、間島大治郎、吉田晴二、武部英治

小林古徑 上村松園

第二部（洋画）

和田英作 和田三造 南 蕭造
中澤弘光 石井柏亭 梅原龍三郎
山下新太郎 安井曾太郎 小杉放庵

第三部（彫塑）

北村西望 山崎朝雲 内藤 伸
朝倉文夫 佐藤清藏 齋藤知雄
平瀨田中 藤井浩祐

第四部（工藝）

板谷波山 香取秀眞 清水六和
六角紫水（註）日本藝術院會員のゝ

第二回日展（昭和二年一〇月）

第一部（日本画）

安田靉彦 松林桂月 瀧田平八郎
奥村土牛 中村岳陵 山口蓬春
伊東深水 小野竹喬 野田九浦
宇田荻邨 徳岡神泉 堅山南風
堂本印象 金島桂華 山口華楊
川崎小虎 山本丘人 兒玉希望
森 白甫

第二部（洋画）

石井柏亭 中澤弘光 藤田嗣治
寺内萬治郎 辻 永 中村研一
佐竹徳次郎 曾宮一念 裕 伊之助
中川一政 鈴木信太郎 木下義謙
木下孝則 青山義雄 石川寅治
野間仁根 奥瀬英三 木村莊八
齋藤興里 中野和高 伊原宇三郎
石井鶴三 小絲源太郎 川島理一郎
大久保作次郎 中川紀元 伊藤 廉

安宅安五郎（欠） 長谷川昇（欠）

第三部（彫塑）

山崎朝雲 朝倉文夫 北村西望
澤田晴廣 國方林三 横江嘉純
關野聖雲 堀 進二 清水多嘉示
吉田三郎 吉田久繼 佐々木大樹
後藤清一 北村正信 松田尚之（欠）

第四部（工藝）

六角紫水 香取秀眞 北原千鹿
高村豐周 香取正彦 廣川松五郎
内藤春治 山崎覺太郎 松田權六
大須賀 喬 吉田源十郎 高井白陽
加藤土師萌 楠部彌式 内藤四郎
岩田藤七 信田 洋 堆朱楊成
山鹿清華
註（欠）は受諾しながら欠席せるものを示す。

第三回日展（昭和二年一〇月）

第一部（日本画）

松林桂月 前田青邨 福田平八郎
徳岡神泉 山口蓬春 望月春江
伊東深水 兒玉希望 山本丘人
金島桂華 宇田荻邨 堂本印象
山口華楊 上村松篁 川崎小虎
池田遙邨 桑本一洋 堅山南風
森 白甫 吉岡堅二

第二部（洋画）

藤田嗣治 辻 永 山下新太郎
小絲源太郎 中野和高 齋藤興里
鈴木千久馬 大久保作次郎 中村研一

渡邊浩三 寺内富治郎 富田温一郎
佐藤一章 石川寅治 金澤重治
三上知治 川島理一郎 吉田 博
岩井彌一郎 岡田謙三(欠)

第三部(彫塑)

内藤 伸 平櫛田中 齋藤素巖
關野聖雲 澤田晴廣 加藤顯清
清水多嘉示 雨宮治郎 國方林三
横江嘉純 石井鶴三 吉田三郎
後藤 良 佐々木大樹 堀 進二

第四部(工藝)

清水六和 海野 清 松田權六
北原千鹿 香取正彦 高村豐周
内藤春治 山崎覺太郎 廣川松五郎
吉田源十郎 大須賀 喬 楠部彌次
高井白陽 山脇洋二 北出塔次郎
吉田醇一郎 岩田藤七 加藤土師萌
高橋 勇 番浦省吾

第四回日展(昭和二三年一〇月)

第一科(日本画)

中村岳陵 鍋木清方 福田平八郎
小野竹喬 伊東深木 宇田荻郎
金島桂華 堂本印象 徳岡神泉
中村貞以 山口蓬春

第二科(洋画)

和田英作 有島生馬 石井柏亭
中澤弘光 藤田嗣治 南 薫造
山下新太郎 和田三造 辻 永
川島理一郎

第四科(工藝)

海野 清 板谷波山 香取秀眞
清水六和 清水南山 松田權六
六角紫水 長野埜志 三井義夫
前 大峰 近藤悠三 櫻井霞洞
山本純民

第五科(書)

尾上柴舟 豐道春海 相澤春洋
石井雙石 川村驥山 鈴木翠軒
園田湖城 辻本史邑 中邨蘭石
中村春堂 西川靖闇 松本芳翠

第五回日展(昭和二四年一〇月)

第一科(日本画)

松林桂月 奥村土牛 西山翠峰
伊東深木 岩田正己 宇田荻郎
太田聰雨 川崎小虎 兒玉希望
郷倉千鶴 徳岡神泉 堂本印象
森 白甫 矢野橋村 山口蓬春

第二科(西洋画)

辻 永 石井柏亭 川島理一郎
中澤弘光 山下新太郎 和田英作
池部 鈞 石川寅治 伊原宇三郎
太田喜二郎 鬼頭鍋三郎 木下義謙
木下孝則 小絲源太郎 小山敬三
齋藤興里 高間惣七 田崎廣助
寺内富治郎 中野和高 中村研一
長谷川 昇 森田元子

第三科(彫塑)

朝倉文夫 齋藤知雄 内藤 伸
平櫛田中 大須加力 倉持 芳
後藤清一 橋本朝秀 藤野舜正

松田尚之 和田金剛

第四科(工藝)

松田權六 海野 清 磯井如眞
海野建夫 小合友之助 岡部達男
各務鑛三 河村喜太郎 木村雨山
清水六兵衛 高井白陽 野口光彦
原 直樹 木間舜幸 丸谷端堂
安原喜明 山岸堅二

第五科(書)

豐道春海 上田桑鳩 川村驥山
鈴木翠軒 辻本史邑 手島右郷
西川 寧 松本芳翠 柳田泰雲
尾上柴舟 高塚竹堂 田中親美
羽田春基 吉澤義則 石井雙石
園田湖城 中村蘭台 山田正平

第六回日展(昭和二五年一〇月)

第一科(日本画)

野田九浦 福田平八郎 堅山南風
案本一洋 矢澤弦月 大智勝額
山口華揚 金嶋桂華 徳岡神泉
森 白甫 田中以知庵 望月春江
江崎孝坪 東山魁夷 西山英雄

第二科(洋画)

山下新太郎 石井柏亭 中澤弘光
川島理一郎 有島生馬 辻 永
鈴木千久馬 大久保作次郎 齋藤興里
小絲源太郎 小山敬三 太田喜二郎
木下孝則 中村善策 中村琢二
高野三三男 耳野卯三郎 田村一男
朝井閑右衛門 小寺建吉 富田温一郎
三上知治 佐竹 徳

第三科(彫塑)

北村西望 藤井浩祐 朝倉文夫
加藤顯清 國方林三 雨宮治郎
澤田晴廣 清水多嘉示 岡本金一郎
都賀田勇馬 長沼孝三 叔山三穀
安永良徳 富永朝堂 杉本宗一

第四科(工藝)

松田權六 清水六和 海野 清
宮之原 謙 廣川松五郎 杉田禾堂
石田英一 堆朱楊成 岩田藤七
近藤悠三 大森光彦 皆川月華
会田富康 信田 洋 介川芳秀
高野松山 福澤建一 小松芳光

第五科(書)

尾上柴舟 豐道春海 相澤春洋
安東聖空 上田桑鳩 園田湖城
高塚竹堂 辻本史邑 手島右郷
西川靖闇 松井如流 松本芳翠
山田正平

美術關係受賞者一覽

文化勳章

昭和二十三年(第六回)
安田靉彦、上村松園、朝倉文夫
昭和二十五年(第九回)
小林古徑
日本藝術院賞
昭和二十二年(第四回)
伊東深木「鏡」
昭和二十四年度(第六回)

恩賜賞(第一回) 小場恒吉「日本紋様の研究」

藝術院賞「洋画」 鍋井克之「朝の勝浦港」その他風景諸作 「彫塑」

吉田三郎「建築」 岸田日出刀「舞台装置」 伊藤嘉訓

日本學士院賞

昭和二十三年度

恩賜賞家永三郎「上代倭繪年表」「上代倭繪全史」

藝能選奨美術文部大臣賞

昭和二十三年度(第一回)

「日本画」山本丘人「洋画」木下義謙「工藝」前大峰

朝日文化賞

昭和二十四年

林謙三「東洋古代音楽の研究と正倉院古楽器の復元」

毎日美術賞

昭和二十四年度(第一回)

福田平八郎「新雪」(第四回日展)等

一連の作品活動

林武「梳する女」(第三回連合展)を初めとする画業

菊池一雄「青年像」(第十二回新制作派展)の意欲的作

昭和二十五年(第二回)

吉岡堅二「濕原」(第二回創造美術展)

猪熊弦一郎「慶應義塾大学学生ホー

ル壁画」

「名古屋丸榮ホテル・ホール壁画」

毎日出版文化賞

昭和二十二年

小林太市郎「大和繪史論」(全国書房)

アトリエ新人賞

昭和二十五年(第一回)

小野末(一水会會員)

一燈賞

昭和二十二年(第一回)

奥田郁太郎(一水会)

昭和二十三年(第二回)

小泉清

昭和二十四年(第三回)

小野末(一水会)

野間賞

昭和二十一年(第五回)

「洋画」木下義謙「日本画」村田泥牛

装幀賞

昭和二十三年

専門書第一位「タウト建築藝術論」

岩波書店装幀、岩波書店発行

専門書第二位「中世の美術」東京堂

編集部装幀、東京堂発行

一般教養書第一位「その夜」恩地孝

四郎装幀、朝日新聞社発行

一般教養書第二位「隨筆竹」森田た

ま装幀、共立書房発行

児童書第一位「新版日本童話宝玉集

上」初山滋装幀、童話春秋社発行

児童書第二位「ピノチオ」初山滋装

幀、鎌倉文庫発行

昭和二十四年

専門書第一位「登呂」河野鷹思装幀

毎日新聞社発行

専門書第二位「波多野精一全集」岩

波出版部装幀、同書店発行

児童書第一位「みつばちの国のアリ

ス」熊田五郎装幀、羽田書店発行

児童書第二位「日本児童名作全集」

全十二巻各冊初山滋装幀、三十書房

発行

印刷技術賞

昭和二十二年

第二部一等賞「国華百粹」便利堂印

刷、毎日新聞社発行

第三部二等賞「ボスター」Silk Fair」

凸版印刷株式会社

政府買上品一覽

昭和二十三年度

【日本画】

比良薄暮 霧雨 河合健二 西山英雄 東山魁夷 中村貞以

昭二三 第三回日展 第一回現代美術展

【洋画】

伊奈の谷の春の夜明 裸婦 椅子による 森田元子 川端實 鬼頭鋼三郎

昭二三 第一回現代美術展 第三回日展

【彫塑】

鳩 若い女 しろうさぎ 廣井直之助 畠村直久 圓鏑勝二 清水多嘉示

昭二三 第一回現代美術展 第三回日展

【工芸】

彫金小宮 銅蝸虫香爐 清水辰夫 山脇洋二 佐藤潤四郎

昭二三 第一回現代美術展 第三回日展

昭和二十四年度

【日本画】

少女 瀟湘 溪澗 華竹林盤 山口岳陵 山妻碧宇 我妻大果 木本三世 大日三子

昭二三 第四回日展

【洋画】

厨の猫 新道部 池部 赤城泰 中村善策 山村一男

昭二三 第四回日展

残雪車 山秋庭 山村 田村

花苑の戯れ 【彫塑】

大久保作次郎

昭二三 第四回日展

吉祥の天女面 【工芸】

古賀忠雄 橋本朝秀 吉田三郎

昭二三 第四回日展

青銅獅子耳花瓶 染色ハッピーコート 唐銅偏型花瓶 【工芸】

長野埜志 櫻井霞洞 山本純民

昭二三 第四回日展

寒山詩 篆刻遊魚出聽 昭和二十五年 日本画

豊道春海 尾上柴舟 園田湖城

昭二三 第四回日展

楊上の花 濕丹 山口蓬春 吉岡堅二 郷倉千靱

山口蓬春 吉岡堅二 郷倉千靱

昭二四 第五回日展

壺のある静物 【洋画】

兒島善三郎 鈴木信太郎 高木一也

昭二四 第一七回独立展 第三五回二科展 第五回日展

立崎の家 秋 【彫塑】

瀬戸園治 中野桂樹

昭二四 第五回日展

少望年 【工芸】

瀬戸園治 中野桂樹

昭二四 第五回日展

磁器印花壺 金工竜松花瓶 【工芸】

宮坂房衛 叶光夫

昭二四 第五回日展

隼書七言二句 落花水面皆文章 【書】

川村驥山 吉沢義則 石井隻石

昭二四 第五回日展

酒井三良個展 1—6 銀座・松坂屋
 濤々会日本画展 9—11 富士画廊
 一采社展 11—13 銀座・銀座美術クラブ
 清光会展 23—27 高島屋

八月

海洋繪画展 3—14 三越
 1回南画院展 12—24 都美術館

九月

31回二科展 1—18 都美術館 批—毎日5、東京
 9、讀賣9、毎日15、二科賞—織田廣喜 特待—廣幡
 憲 准会員推挙—桑原實、妹尾健太郎(彫塑)
 主要出品目録(会員)

(繪画)

花咲く街、子供の園、新しき日 大澤 昌助
 街の女、車内、子供 寺田 竹雄
 ぺいたいほう、湖 野村 守夫
 景色、重荷 北川 民次
 家、沖繩紉と子供、静物 加治屋隆二
 雲仙A、雲仙B 青山 龍水
 山百合、流れ、雪の殿敷谷 錦義一郎
 室内A、室内B 山尾 薫明
 夜釣、平潮の海磯、滯船、村の朝、水門のあ 野間 仁根
 る土手道、龜と河童
 雨後の八甲田山、窓に寄りて、採果、藤
 菅笠の娘、菜園にて 藤井 二郎
 テラス、少女1、少女2 吉井 淳二
 南瓜の図、水引とんぼ 東郷 青兒
 藥屋の一隅、紅色の上衣 福島金一郎
 岡田 謙三

現代美術展覧会(昭和二十一年)

化粧、花 高岡徳太郎
 袋田風景、母子、松 服部正一郎
 青い人形、村、桃1、桃2、田園 鈴木信太郎
 麦秋の頃、夏木立、閑庭、静物 松本 弘二
 丘、室内 清水 刀根
 モチリアニの美しき寡婦、グキナスの誕生、
 サラブレット、銀河の沐浴、猫の子、星と
 女性、画の星雨、そろばん塔、復活 中原 實
 巴里一九三一年 山路 眞護
 失 鷹山 宇一
 花鳥、鳥 井上 覺造
 樹木の風景、花の風景、顔 山本 敬輔
 線三題A、〃B、〃C 山口 長男
 邂逅の像、群像、像 吉原 治良
 少女像、端座、めくまれたる一地区鱸 利彦
 フットボール、ある一しゅん、チャウヤ
 ク、野球 名井 萬亀
 篠原来介遺作六點
 島崎鶴二遺作十四點
 田口省吾遺作六點

(彫刻)

エチウド 笠置 季男
 裸体習作 浅野 孟府
 裸婦A、裸婦B 林 是
 自分 赤塚 秀雄
 青 八柳 恭次
 31回院展 1—18 都美術館 批—東京7、讀賣9、
 毎日15、16 同人推挙—小谷津任牛、小松均 院友推
 挙—土生勝宣、宮坂一義、津田時子、鈴木成欣、川崎
 省三、鈴木竹相、杉山哲朗、上田堯民、山口静恵、樹
 下孝太郎、中村進一、岡田重雄、宮本青架(以上繪

画)、千野茂、鷹野悦之輔、鷹野忠一、矢形勇、片野
 不空藏(以上彫塑) 賞—小谷津任牛、小松均、羽石
 光志、片岡球子(以上繪画)、菅原安男、櫻井祐一
 (以上彫塑)
 主要出品目録(同人)

(繪画)

関 取 北野 恒富
 余 燼 新井 勝利
 巢 龍 真道 黎明
 文五郎と人形 北澤 映月
 朝顔、夕 富取 風堂
 凍 郷倉 千靱
 園 太田 聴雨
 い 前田 青邨
 雪の山 奥村 土牛
 竹外一枝、春光る(樹海) 横山 大観
 はた 中村 貞似
 塞江、菱湖爽涼、春隣 酒井 三良
 八 朔 堅山 南風
 落 葉 長野 草風
 百 合 田中 青坪
 無 題 (故) 小山 大月

(彫刻)

ビルマの女、大同を偲ぶ(母子観音)、神農
 像 中村 直人
 少年像、弓野氏像、画家の像 平櫛 田中
 尋 牛 村田 徳次郎
 胸 辻 晋堂
 大河内博士像、女の顔 山本 豊市
 神農氏、芭蕉妄念像試作 宮本 重良

三岸節子

22、朝日23、東京29	1 回行動美術展	21—10月4	都美術館 批—讀賣
M	金の頸飾	銀のバイブ	牛のいる岸辺
海沿ひの道	晩秋	ブル	春蘭
小樽	栗	黒	男
青	静	信濃	静
暮れ行く江の島	燕	湖	山
村の小学	甘の収穫	軍鶏飼う男	石切山黎明
池部	釣	石井柏亭	仲田菊代
高田誠	中村琢二	島あふひ	中村善策
近藤光紀	金子博信	納富進	岡田行一
網田行一	像	像	像
友山莊獎勵賞	永井保	批—讀賣	友山莊獎勵賞

—伊藤信夫、下高原龍己 研究賞—山森元龜、荒井秀
宣、パレット賞—船越かつみ

主要出品目録（○會員）

鹽田	〇榎倉省吾
晩秋の志賀高原	〃
美術の秋展	〃
虹	〃
ブラウのある農園	〇田中忠雄
麦稔	〃
除草する農夫	〃
袋かけ	〃
九月の農園	〃
雪の山	〇伊谷賢藏
一九四六年八月（薄暮）	〃
選炭場休憩室	〃
ニコライ堂	〃
街待	〃
立待	〃
朝の港	〇田邊三重松
海の夕映	〃
造船船所	〃
狩勝	〃
五月の山	〇田川寛一
窓の供	〃
窓	〃
よあけ（勤労讃二題）	〇向井潤吉
まひる	〃
二人	〃
白い花	〇飯田清毅
採果	〃
歸る漁夫	〇柏原覺太郎

南島の初夏	〇古家新
牡樹園の朝	〃
果樹園の朝	〃
ぱくあぢさい	〃
黎戸遠望	〃
神にわか	〇小出卓二
出葉と子	〃
海落葉と子	〃
花やまもと老の像	〃
やまもと老の像	〃
太鼓と子	〃
トマトと子	〃
画面の女	〃
初秋の河	〃
薬ぶきの家	〃
画面の肖像	〃
木家の搬出像	〃
父母の像	〃
海浜の人々	〃
静物	〃
地蔵	〃
出演の前	〃
フルート助演	〃
裸婦（一）	〃
裸婦（二）	〃
少年	〃
日本作家協会展	〃
21—10月3	〃
都美術館	〃

十月

創元会秋季展 8—12 高島屋
上社 13—31 北莊画廊
国画会小品展 15—22 三越
2回展 16—11月20 都美術館
朝日20、讀賣28 文部省主催 批

主要出品目録（日本画）

姉妹	秋野不矩
春日	梶喜一
稚櫻部	江崎孝坪
秋山深部	橋田永芳
鏡の深部	橋本明治
清水辺放	我妻碧宇
洛辺放	東山魁夷
おさら	武藤彪
石さ	今尾津屋
暹の秋	望月春江
紅度と俊	立石金昌
忠度と俊	小堀安雄
海女	向井久万
聖丘	西山英雄
山嶽	矢野橋村
樹蔭	中村岳陵
銀河祭	伊東深水
雨月祭	松林桂月
望月祭	兒玉希望
午流	山本大観

現代美術展覧会（昭和二年）

東大寺正
秋晴れ
斜陽
靜物
南園
懷舊
梅
茜いろの伊那駒ヶ岳
P氏とI令嬢
島山の眺望
晩秋の赤城山
春
峠落
千曲川の畔
夜明け
山朝
宵田
蘭花像
鳥の花
庭の上
二ノ平ノ秋
マラヤの装ひ
海の水浴
溪流
柿
画家S君の像
麦
奥入瀬
虹
雨後の朝

高紙女 風 原船
陰 室に於ける父の像
菜園の 幸
夕 映
五月の 日
勤らく少 女
纏 足
男 休山を望む
女 職
風 神 雷 神
二 夕 股 道
南 瓜と甘 藷
野 總の 花
北 總の 秋
信 濃火の 山
夏 二 題
みかんと娘(創作版画)
霧 大同雲巖石傳
盆 市(創作版画)
洋 蘭
戸 隱山雪 景
炉 バイオリンの少女
鐘溪頌・公案「鯉雨」板画
五 月
(彫塑)
潮 音

五五

十一月

5 回 日本人形美術院展 9—15 三越
1 回 萌木会染色展 11—16 三越
武者小路實篤新作日本画展 12—19 三越
仲田菊代個展 17—20 日動画廊

輸出織物圖案入選作展	18—20	三越	批—每日5
1回菊池一雄彫塑個展	21—24	京都・日仏學館	
美術文化協會秋季展	22—29	三越	
大潮展	23—12月10	都美術館	
8回大輪西院展	28—12月7	都美術館	

十二月

福澤一郎個展 1—4 日動画廊
歐洲古典複製名画展 1—10 都美術館 美術教育
会主催

春陽会小品展	2 12	北莊画廊
珊々会展	4 9	高島屋
15回湖日会展	11 25	都美術館
東光会展	11 25	都美術館
岸田劉生作品展	14 22	都美術館
日本女流美術家協会展	24 30	三越

昭和二十二年

月

獨立美術在京會員展 7—17 北莊西廊
朱葉會展 14—21 三越
坂本繁二郎作品回顧展 15—22 福岡・玉屋 西部
美術協会主催

現代美術展覧会（昭和二年—三年）

關口俊吾個展	21—2月3	日動画廊
日本彫金会展	27—2月1	三越
19回上社会展	—30	三越
齋藤清版画展	—31	東和工藝ギャラリー
旺文会展	31—2月8	都美術館 批—毎日2月8

二月

山本正個展	1—3	日動画廊
溝江勘二・牛島憲之油彩展	1—8	北莊画廊
水彩聯盟展	1—10	都美術館
東光會展	1—13	都美術館 批—朝日9、読賣10
平塚運一版画展	5—20	丸の内・東和ギヤラリ
1回朔匠會展	7—13	白木屋
綜合人形美術展	11—19	上野・松坂屋
33回光風會展	11—23	都美術館 批—東京23
創元會展	15—23	都美術館 批—東京23
日本画院同人新作展	20—28	三越
七絃會復活展	21—3月8	三越 批—東京3月6
朝日3月11		
24回春陽會展	24—3月7	都美術館 批—東京28
讀賣3月3		

主要出品目錄（○會員）

馬込別れ坂
菜園の秋
武藏野の秋
秋庭
武藏野の冬
白菜の庭
秋の庭
海浜の小景
丘の木立

〇遠藤典太
伊川鷹治
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

[illegible]

赤松麟作展 31—4月5 大阪・堂島画廊

四月

新日本美術会 1—5 銀座・松屋

1 回彩縑染試作展 1—6 川島織物ビル

吉岡憲・大久保泰油繪二人展 4—6 日動書廊

15 回独立美術協会展 9—28 都美術館 批—東京

15、朝日21、毎日23、読賣25

主要出品目錄（○會員）

房	野	田	海	春	氷	雪	山	十	修	円	裸	ト	婦	腰	勝	果	鹿	花
州	島	園	の	上	の	越	架	架	道	舞	人	ラ	人	か	勝	果	鹿	花
白	岬	祭	ア	賑	賑	え	ある	ある	曲	女	女	女	座	座	座	座	座	座
浜	にて	日	ン	わ	わ	え	風景	風景	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
		〇島村三七雄	〇鈴木亜夫	〇居串佳一			〇熊谷登久平											
	岡部文之助																	

魚	安	多	夕	森	雪	雪	海	泉	三	早	妙	玲	小	花	風	花	由	熱	バ	多	漁	農	雪	洋	菊	M	雪	立	熱	林
達	太	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
村	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
〇菅野圭介	〇川誠一	〇今井憲一	〇松島正人	〇故常安人	〇中村節也	〇樋口加六	〇林武	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
〇鳥海青児	〇小林和作	〇須田太郎	〇中間册夫	〇加藤陽	〇岡村芳男	〇青柳暢夫	〇岩瀬憲一	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳	〇鈴木保徳

美術館
毛サ工藝部
越
批一朝日21、東京22

池邊貞喜	南風原朝光	山村誠	原田成大	千葉七郎	久本弘一	尾田龍	細谷重雄	宗像逸郎	松木満史	國松登	野澤岩太郎
------	-------	-----	------	------	------	-----	------	------	------	-----	-------

[illegible]

黑白画試作「顔」

書齋の盧子先生

楽屋の文五郎

鶴

断

にかるの王伝

心

対

手仕

東光会小品展

新制作派小品展

岡田紅陽作品写真展

美術館二十周年記念展

曾宮一念個展

近藤浩一路個展

3

25

五月

現代美術展

13、朝日16

津田青楓個展

藤田嗣治日本画展

牧野虎雄遺作展

青衿会展

木村莊八日本画小品展

林武個展

狩野芳崖作品展

高井貞二油繪個展

一采社日本画展

○恩地孝四郎

關野準一郎

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

キリスト教造型美術展

1回榎会展

中国木刻画展

国士会展

石井彌一郎個展

小倉遊亀個展

井上良齋作陶展

阿以田治修作品鑑賞展

朝日26

2回里見勝藏個展

朝日26

大日展

双台展

河合卯之助陶器個展

7回美術文化展

1回前衛美術展

宮脇公實作品発表展

1回五月会展

日本水彩画会満35年記念展

27回朱葉会展

5回手工藝展

最生彫刻展

津田青楓個展

赤堀信平彫刻展

神保俊子個展

独立美術協会小品展

在京漫画家綜合展

14

三越

1回連合展

19、朝日23、毎日7月7

2回行動美術試作展

アメリカ児童画展

1回職場美術展

1回新匠美術工藝会展

1回新樹會油絵展

12回清光会展

青山義雄近作油繪個展

宮坂勝個展

コンラッド・メイリ展

7月

熊谷守一作品鑑賞会

日本洋画回顧展

西洋画振興会主催

近代日本洋画展

東京13、朝日21

1回女流画家協会展

河井寛次郎新作陶器展

10回新興美術院展

11回自由美術展

藤田嗣治・堂本印象二人画展

日本画院展

田中案山子個展

吉田謙吉舞台美術研究会展

八月

小川千斐新作画展

1回露雲展

六三

九月

19回青龍社展 1-13 三越 批—東京4、毎日8

朝日8、國際タイムズ9、新報知11、第一13 青龍社

賞—内地青星、佐藤博、丸山敏、宅間説

主要出品目録

32回院展 1-17 都美術館 批—東京4、読賣5

毎日8、朝日8、國際タイムズ9、新報知11、東京

15 日本美術院賞—羽石光志、濱孤嘯、中島保

主要出品目録 (同人)

(繪画)

はつなつ

手毬 櫻

四時山水(繪卷第一卷)

黃昏

雨後

野鼠

夏委

郷里の先覚(夜明前の香蔵と景蔵)

連山雨

清夜

王昭君

村莊

暮春

夕映

磨針

朝風

片影

涼流

筆抄

萬葉

婦題

花莖

(彫塑)

村田瑞枝

小谷津任牛

横山大觀

酒井三良

郷倉千穀

中村貞以

前田青邨

大智勝觀

中村岳陵

安田靱彦

奥村土牛

富取風堂

小倉遊亀

堅山南風

太田聰雨

眞道黎明

北澤映月

小松均

額田王の歌、但馬皇女の歌、穂積皇子の歌

進、西村清、研究所賞—増田悟郎、八木勇、武部本一

主要出品目録

K 氏 像

村 叟 貫 翁 像

M H 翁 頭 部 像

老 人 像

下クタ一桃井 人 像

大 和 乙 女 像

力 士 照 国 像

F 女 像

光 木 氏 像

岸 澤 惟 安 老 師 像

石 橋 像

海 女(南方二題)

歩 女(南方二題)

穀物を搗く女(南方二題)

石 井 氏 還 曆 像

乾 反 葉 像

秋 穫 像

裸 婦 像

阿 彌 陀 如 來 像

老 人 像

天 皇 像

信 貴 英 藏 氏 像

即 現 婦 女 身 像

(觀世音菩薩三十三化身ノ内)

觀 自 在 菩 薩 像

2回行動美術展 1-19 都美術館 批—読賣7、

東京8、朝日8 協会賞—川原章二 友山莊賞—高島

進、西村清、研究所賞—増田悟郎、八木勇、武部本一

主要出品目録

松 原 松 造

宮 本 重 良

新 海 竹 藏

小 柳 津 三 郎

古 藤 正 雄

村 田 德 次 郎

辻 晋 堂

關 谷 充

中 村 直 人

喜 多 武 四 郎

石 井 鶴 三

山 本 豊 市

大 内 青 圃

(會員)

裸女群像、ひまわりと裸女
多宝塔、初夏の村、早春の村
面壁の女、Y子の像

早 春、窓 作

堂のある山、海岸風景
港、雨やどり、山
海、初島へ救われる孤兒達、庭前蔬菜

炭 塵 の 中 に

緑の池畔、おつけの浜、夏の展望
夏のノロ峠、一本の豆の蔓

声、横町の午後
F嬢、街の人々、アトリエ、Y婦人像

鶉、鶉
牡丹、霧、朝 鶉

ライ麦刈込み、開墾する人、六月の果樹園

河 岸 木 立

(会友)

楽 屋、花 道

裸 婦、浴 衣

牛と少年、午後、失題
半裸、二人の裸1、二人の裸2

座 像、閑 日、黒 衣
裸婦、馬小屋、少女と花、みかへり

の塔の少年達
大通りの夏景、樹蔭、石切場
きりり島、二人、芝生

小 出 卓 二
福 井 勇

飯 田 清 毅

高 井 貞 二

村 田 實 史 雄

伊 藤 久 三 郎

榎 倉 省 吾

伊 谷 賢 藏

向 井 潤 吉

田 邊 三 重 松

難 波 香 久 三

三 芳 悌 吉

柏 原 覺 太 郎

坪 内 節 太 郎

古 家 新

田 中 忠 雄

田 川 寛 一

現代美術展覧会(昭和二年)

砂 浜、石 山

日暮前、手藝のひとつ
瓦斯工場、松根と砂丘、松根のある風景

32回二科展 1-19 都美術館 批一毎日8 会員
尾崎悌之助

推挙一阿部金剛、桑原實、佐藤吉五郎(以上繪画)、
妹尾健太郎、堀内正和、植木力、安藤菊男、乗松巖

(以上彫刻) 准会員推挙一米良道博、桂ユキ子(以
上繪画)、野水信吉、鷺泰次郎、中堀正孝(以上彫
刻) 二科賞一鶴岡義雄(繪画) 特待一田中豊、花
谷時子(以上繪画)、飯田巖三(彫刻) 第一回会員
努力賞一山口長男、岡田謙三

主要出品目録 (〇会員)

(繪画)

街 の 女 〇寺田竹雄
都 女 〇
少 さ む ら 〇大澤昌助
く れ き の 歌 〇
瓦 れ き の 歌 〇
静 想 の 時 物 〇
幻 想 の 時 物 〇
灰 色 の 日 〇
雑 草 の 如 く 〇北川民次
太 陽 島 に て 〇野村守夫
風 景(北京) 〇青山龍水
海 原 に て 〇青山龍水
野 原 に て 〇
海 原 に て 〇
池 邊 の 丘 〇伊庭傳治郎
夏 の 子 供 〇桑原實

人 眞 子 孫 供 畫 *

星 夜 〇野間仁根

銀 河 〇

星 河 〇

夜 〇

星 〇

裸 〇

裸 〇

奈 良 〇

青 良 〇

奈 良 〇

水 良 〇

初夏の道(奈良) 〇

早 春 の 鎌 倉 〇

白 い 崖 と 海 〇

ほ と こ ろ 〇

そ の こ ろ 〇

た は む れ の 〇

桑 原 實

〇加治屋隆二

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

二紀會賞―宮川 仁 K氏賞―秋保正三、藤村恒夫
獎勵賞―福岡孚雄、芝野武夫 褒狀―山下勇、有田
徳一、伊藤泰三、宮永岳彦、三宅博信

朝の湖
映 鍋井克之
正 宗得三郎

11回新制作派展 1910月4 都美術館 批一朝日

22 東京26、毎日29、讀賣10月1 新制作派協會賞

鈴木新夫 新作家賞—西田勝、行木正義、村尾絢子、

桑田道夫(以上繪画)、稻村昭二、岡弘武次郎(以上

彫刻) 岡田賞—丸山正三

主要出品目録(會員)

(繪画)

子 供 之 像 伊藤繼郎

画 室 の 一 隅 伊藤繼郎

画 を 描 く 少 女 伊藤繼郎

室 内 人 猪熊弦一郎

二 人 猪熊弦一郎

窓 人 猪熊弦一郎

丸 い 顔 の 娘 猪熊弦一郎

立 てる タ ン ス ー ズ 猪熊弦一郎

扇 を 持 つ 女 伊勢正義

室 内 人 伊勢正義

青 い 外 套 伊勢正義

丁 氏 荻須高德

ア ラ ビ ヤ 街 荻須高德

シ タ デ ル 荻須高德

カ イ ロ 死 の 町 荻須高德

エ ジ プ ト の 村 荻須高德

回 教 の 墓 荻須高德

カ イ ロ 死 の 町 荻須高德

少 女 と 妖 精 田和

草 ア ウ ン の 子 供 田和

石 の 庭 舞台裏の饗宴

花 と 女 ナチユール・モルト

嚴 島 の 見 える 港 分岐駅眞晝

和 服 を 着 た H さん 曇り日の離宮と駅

ミ チ コ 像 像

リ サ コ 像 像

夏 草 像 像

山 羊 と 少 年 幼 児 と 三 容 年

ポ ー ズ 取 る 少 女 母 子 像 像

裸 婦 像 像

婦 人 像 像

海 の み える 丘 出 石 の 陶 窯 物

野 外 果 物 踏 切 り の 見 える 風景

岡 本 踏 切 り 初 秋 踏 切 り 風景

踏 切 り 風 景 白 い 道 (御影町風景)

ホ テ ル の ある 風景 (山本通り)

人 間 (或は失樂園) 裸 婦 像

人 裸 婦 像

人 裸 婦 像

子 良 川 (1) 供 物 婦 像

長 良 川 (1) 供 物 婦 像

竹谷富士雄 中西利雄

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

内 田 武 夫

長 良 川 (2) 庭 人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

人 形 と セ ッ ト

(故)

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

三 田 康

否 女の首 柳原義達

首 1回現代彫塑院展 20-30 都美術館 山内壯夫

9回一水会展 20-10月4 都美術館 批-東京25 吉田芳夫

功 毎日29 優賞-奥田郁太郎、納富進 一水会賞-廣瀬

主要出品目録

秋の草花 田崎廣助

櫻松 中村琢二

小松 提琴を持つ少年

扇を持つ少女

花を持つ少女

曇り 納富進

故郷の川 安宅虎雄

七ヶ月 奥田郁太郎

初夏の磯物

秋の磯物

山と道と 奥田郁太郎

花の影

雲の影

作品の影 (一)

作品の影 (二)

裸婦 池部鈞

松本二景(1)女鳥羽川 木下孝則

M氏像 石井柏亭

松本二景(2)松本御藻

朝涼 有島生馬

群青石の頸飾 山下新太郎

北平の園 安井曾太郎

連雲の町(一) 小山敬三

少連雲の町(二) 中村善策

冬の山村 木下義謙

夏の山村 高野三三男

杉の夕光 高野三三男

眞鶴 高野三三男

馬籠 高野三三男

横顔 高野三三男

シヤンダイ・チョー 高野三三男

裸婦 高野三三男

フアンム・アン・ヴェール 高野三三男

河野通勢日本画展 21-26 高島屋

梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎自選洋画名作展 23-10月8 大阪・阪急 関西洋画振興会、新大

阪新聞社主催

十月

国画会小品展 4-7 三越 批-第一26

鬼原素俊個展 4-8 養生堂画廊

小泉清展 6-11 柴田画廊

春陽会秋季小品展 13-18 高島屋 批-第一26

西洋美術名作展 15-11月15 表慶館 国立博物館

主催 朝日新聞社後援 批-朝日13、17、20、23、讀

書新聞22、29、11月5、11月12、第一15、19、20、26、27

1回棟会展 15-22 養生堂画廊

3回展 16-11月20 都美術館 文部省主催 批

讀賣20、朝日20、東京21、22、第一26

主要出品目録 ○審査員△帝國藝術院會員

紅葉 (日本画)

新葉 葵

犬 雲

滝 畔

尾 沼

花 舞

天 櫻

古 びいるむぎ

中年の夫人(現代商家)

朝顔の家

青 柿

赤 松

仲秋の月

猿 者

時 化の

午 下

秋 壑暮

支那町の

太 子降

清 光

山 神

雪 戸

海 港

山 人

愛 湖

宗 香

鏡 愛

○望月春江

○廣田多津

○加藤榮三

○堅山南風

○宇田萩邨

○吉岡堅二

○森田沙伊

○橋本明治

○矢澤弦月

○松本姿水

○寺島紫明

○矢野橋村

○上村松篁

○德岡神泉

○小野竹喬

○野田九浦

○見玉希望

○案本一洋

○松林桂月

○川崎小虎

○堂本印象

○奥村厚一

○後藤貞之介

○池田遙邨

○向井久万

○山口蓬春

○岩田正己

○服部有恒

○森部白甫

○伊東深水

[illegible]

—伊藤信夫、下高原龍己 研究賞—山森元龜、荒井秀
宣、バレット賞—船越かつみ

主要出品目録（〇会員）

虹	鹽	晚秋の志賀高原美術の秋展	〇榎倉省吾
ブラウのある農園	〇田中忠雄		
除草する農夫	〇伊谷賢藏		
九月の農園	〇三芳悌吉		
雪の山	〇田邊三重松		
一九四六年八月（薄暮）			
選炭場休憩室			
ニコライ堂			
街待			
立の港			
朝の夕映			
海船の夕映			
造船所			
狩勝			
五月の山	〇田川寛一		
子供			
窓			
よあけ（勤労讃二題）	〇向井潤吉		
まひる	〇飯田清毅		
二花人			
白い花			
採果	〇柏原覺太郎		
歸る漁夫			

南島の初夏	〇古家新		
牡蠣の朝			
果樹園の朝			
バークの小品			
がくあぢさい			
黎戸遠望	〇小出卓二		
神にわか雨	〇高井貞二		
出葉と子			
海葉と子			
落葉と子			
花やまもと老の山			
やまもと老の山			
太鼓と子			
トマトと子供			
トマトと子供			
初秋の河岸	〇柴田又太郎		
薬家の肖像	〇西阪修		
木家の肖像	〇伊藤信夫		
父母の像			
海浜の人々			
静物	〇小林武夫		
地蔵			
出演の模様	〇長坂春雄		
フルート助演			
裸婦（1）	〇下高原龍己		
裸婦（2）			
少女			
日本作家協会展 21—10月3 都美術館			

姉妹	秋野不矩	梶喜一	江崎孝坪	橋田永芳	橋本明治	我妻碧宇	東山魁夷	武藤章	今尾津屋	望月春江	立石春美	信太金昌	小堀安雄	向井久万	西山英雄	矢野橋村	中村岳陵	伊東深月	松林桂月	見玉希望	山本大	横山
造日妹	秀前	山深部	鏡の	清水辺放	洛さ	おさ	石	暹	紅	忠度	海	聖	山	樹	銀河祭	雨	望	午				
主要出品目録																						
朝日20、讀賣28																						
2回展 16—11月20																						
都美術館																						
文部省主催 批																						
三越																						
北莊画廊																						
高島屋																						
創元会秋季展 8—12																						
上社 13—31																						

生	朝倉文夫	堤梁花瓶	高村豐周	室	藤本東一良
スタートの前の種々相	池田勇八	ほうづき文菓子器	河合榮之助	博物館彫刻	杉本健吉
円	寺畑助之丞	染色屏風本草六姿	廣川松五郎	湖	宮坂勝
少	畝村直久	ガラス花器	岩田藤七	秋	小林邦報
試	吉田三郎	たから船香炉	香取秀眞	高	田村一男
塔	後藤清一	方形布目知秋文磁製飾鉢	北出塔次郎	書	新保兵次郎
婦	清水多嘉示	蝶文花器	香取正彦	山の貯水	高田誠
聖	山崎朝雲	御所人形「雨に起つ童兒」	野口光彦	炎	牛島憲之
久遠の悲しみとさうして喜び (民族の象徴)	横江嘉純	彩磁唐花文水指	板谷波山	ふるさとの家	鈴木榮二郎
曙	北村西望	孔雀縁金彩大皿	加藤土師朋	雪	真下慶治
手	北村正信	龍紋花瓶	清水南山	千	奥山堤
地藏菩薩	關野聖雲	山月屏風	小合友之助	(彫塑)	星野宣
観	藤井浩祐	花籠銘悠然	生野祥雲齋	立	朝倉矜子
婦	佐々木大樹	刀筆アルマイト日廻小箱	六角紫水	最	圓錐勝二
人	乗松巖	天球香炉	杉田不堂	砂	水船六洲
秋	森野圓象	硝子花宮	松田権六	手	後藤六良
街で拾った男	古賀忠雄	菊子花瓶	各務鏡三	能	遠藤松吉
七十五年頌	平櫛田中	寒木染付花瓶	吉田源十郎	T	古川順三
武器を棄つ人	齋藤知雄	特	近藤悠三	再	
A	建島覺造	(日本画)			
実と花を持つ裸婦	毛利恭夢	襖	後藤貞之介	(美術工藝)	前大峰
不死鳥フェニックス	大内青圃	阿彌陀三尊	廣田多津	ひな鶏飾宮	山脇洋二
新らしき湖に	大國貞藏	浄	中谷光炎	舞御堂	山岸堅二
龍		阿彌陀三尊	奥村厚一	迎火染壁掛	根來實三
(美術工藝)			廣田多津	四	鶴卷三郎
染屏風波濤	皆川月華	夢	濱田台兒	「せんこはなび」紙型人形	淺見隆三
手織錦平和之礎屏風	山鹿清華	春	吉田登穀	(象嵌)干柿ノ図皿	藤井觀文
彫漆花の山文庫	堆朱楊成	母	笠原可於	白鷺水草文沈金彫漆手宮	
染の香水瓶	北原千鹿	と	池田榮廣	獨立美術小品展	
梅の花文宮	梅部彌一	浴	高山辰雄	1回翰林工藝展	
	内藤四郎	(西洋画)		梅原龍三郎展	

梅原龍三郎展 24—30 三越 雑誌創元主催

1回翰林工藝展 24—30 伊勢丹

獨立美術小品展 22—26 高島屋

白鷺水草文沈金彫漆手宮

(象嵌)干柿ノ図皿

「せんこはなび」紙型人形

迎火染壁掛

舞御堂

四分一切嵌小宮

ひな鶏飾宮

再

能野口兼師黃石公

手

砂

立

最

千

雪

ふるさとの家

炎

山の貯水

書

高

秋

湖

博物館彫刻

室

博

河

廣

岩

香

北

蝶

御所人形「雨に起つ童兒」

方形布目知秋文磁製飾鉢

たから船香炉

ガラス花器

染色屏風本草六姿

ほうづき文菓子器

堤梁花瓶

藤野龍
角南松生
○岩田榮之助
北野萬平
故兼平英示
○上野春香
新沼杏一
○中谷泰
○倉田三郎
田中壽太郎
○南城一夫

林 椿 柿 蛙
柘
檣 榴
“ “ “ “

3 回齋藤愛子油繪個展 1—6 北莊画廊
3 回眞赤土工藝展 3—8 三越
1 回三光会展 3—8 三越—批東京6
1 回泰西名画展 10—30 都美術館 讀賣主催 批
朝日4月3

熊谷守一作品展	18—25	北莊画廊	批—東京22
二科春季展	25—4月7	三越	批—每日31、誠實
4月2			
牧野虎雄遺作展	25—31	高島屋	批—誠實26、東
京28			

日本美術院小品展 25—4月10 三越 批—毎日4
月3、読賣4月9、東京4月10
19回新構造社展 26—4月6 都美術館
一水会々員展 26—29 日動西廊
43回太平洋画会展 26—4月10 都美術館
白日会展 28—4月6 都美術館

赤松麟作展 31—4月5 大阪・堂島商廊

四月

新日本美術会 1—5 銀座・松屋

1 回彩繪染試作展 1—6 川島織物ビル

吉岡憲・大久保泰油繪二人展 4—6 日動書廊

15 回独立美術協会展 9—28 都美術館 批—東京

15、朝日21、毎日23、読賣25

主要出品目錄 (〇會員)

房州白浜 阿部文之助

野島岬にて 〇島村三七雄

サントカトリヌの祭日 〇鈴木亜夫

海のアンダンテ 〇居串佳一

氷上の賑わひ 〇熊谷登久平

雪の越え 〇熊谷登久平

山越え 〇熊谷登久平

十字架のある風景 〇熊谷登久平

修道士の風景 〇熊谷登久平

田舞 〇熊谷登久平

裸女曲 〇熊谷登久平

トラン プ 〇熊谷登久平

婦人座像 〇熊谷登久平

腰かけ 〇熊谷登久平

勝つ 〇熊谷登久平

果実 〇熊谷登久平

鹿島 〇熊谷登久平

花島 〇熊谷登久平

漁安達太郎の春村

冬山の春

夕山の春

森の小屋

雪の街

雪の港

海峯

泉峯

三峯

早春の妙義連峯

妙義の秋

玲子の像

小原風

花原風

風原風

花原風

由貴子の像

熱海の像

バ貴子の像

多村の像

漁家の女

農家の女

雪家の女

洋菊のアカシ

菊氏の像

M氏の像

雪景

立春

熱海の像

林海の像

〇菅野圭介

〇川誠一

〇今井憲一

〇松島正人

〇故常安人

〇中村節也

〇樋口加六

〇林武

〇高島達四郎

〇野口彌太郎

〇富樫寅平

〇宮城輝夫

〇兒島善三郎

〇鳥海青児

山肌

山雲

秋雲

叢雲

ざくろ

少く

少く

收原

松原

兄原

柴陽

T陽

枯れ

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

少く

〇鳥海青児

〇小林和作

〇須田國太郎

〇中間冊夫

〇加藤陽

〇岡村芳男

〇青柳暢夫

〇岩瀬憲一

〇鈴木保徳

〇宇根元

〇菊地精二

〇藤岡一

〇小島善太郎

中川一政展	9—17	三越
読画会四十周年展	9—18	都美術館
恩地孝四郎作品展	10—17	ミモザ工藝部
15回春の青龍社展	12—24	三越
21回國展	12—28	都美術館
毎日25、読賣25		批一朝日21、東京22、

主要出品目錄（○會員）

松、	鳥	○池邊貞喜
丘	物	〃
靜	物	南風原朝光
魚	〃	〃
アマリ、ス	〃	〃
浜名湖	〃	○山村誠
雪	景	原田成大
優子立像	〃	千葉七郎
菊	〃	久本弘一
パイプの靜物	〃	〃
樹間靜物	〃	〃
少	女	尾田龍
彫刻する老人	〃	〃
椅子に凭る少女	〃	細谷重雄
M子像	〃	〃
松林秋色	池	宗像逸郎
蓮	池	〃
北京の壺と女の	子	松木満史
画室	〃	〃
ポルドーの壺と女の子	〃	〃
黄秋	雨	○國松登
緑	〃	〃
窓と黒い徳利	〃	○野澤岩太郎

[illegible]

秋の人物	山の湖にて	米園	磨園	顔作	作品(1)	赤繪鉢	赤繪鉢	赤繪鼠袖鉢	丸紋長角鉢	角大鉢	面取壺黒釉	大片口黒釉九紋	急須白地釉	急須利鉄釉地	蓋物魚篋	水注鉄砂紋	柿釉食籠	赤繪蓋物	赤繪德利碗	赤繪茶碗	赤繪茶碗	鉄繪花瓶鉢	柿釉大鉢	たばこ渡来記(本)	安土の信長(本)	横浜どんたく(本)		
○長濱慶三	"	○北角玄三	"	○木村伊兵衛	○中山岩太	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	○川上澄生	"	"		
横濱懷古(本)	南蜜船記(本)	水陶滴視	"	"	"	長角蓋物黒釉	長角蓋物黒州	鉢(九紋)	鉢(ねり上げ)	鉢(象嵌)	茶碗辰砂紋	六角蓋物辰砂入	扁壺海鼠釉	六角瓶緑釉紋	四角瓶辰砂地	長角瓶白磁	長蓋物緑釉紋	角筆筒白磁	象嵌精円鉢	いろは屏風	沖縄地圖(軸)	琉球風物(軸)	法然上人(人軸)	法然上人繪伝(本)	赤繪もどき(本)	益子日歸り(本)	道具紋盡し(本)	赤繪土瓶
○川上澄生	"	○河井寛次郎	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	○芹澤銈介	"	"	"	"	"	"	"	"
赤繪小鉢	琉球型附(本)	日本紙(本)	帶地紺紙	"	帶地黄花織	黄夜具地	着尺茶色地	"	白地上着	赤襟袖無着	肩掛薄茶地	肩掛全織	肩掛色緋白	"	(版画) 白地花織	葉上落花	魚の劇場	夜の桔梗	卓上枯梗	天雲頌・響神炎板面構拔葵六韻	瑞巖寺石窟	山渡の荒磯路	佐渡の野	武蔵藏	松江津田の松原	唐招提寺経蔵	抒情「明日」	
○芦澤銈介	"	"	"	○柳悦孝	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	山口源	○畦地梅太郎	○川西英	○棟方志功	○下澤木鉢郎	○笹島喜平	"	○齋藤清	"	○平塚運一	"	○恩地孝四郎	

黑白画試作「顔」
書齋の盧子先生
樂屋の文五郎

○恩地孝四郎
關野準一郎

鶴 原

○前田政雄

断 量

〇川上澄生

心 伝

〇ブノワ

対 話

〇〇〇〇

手 仕

〇〇〇〇

東光会小品展 21—26 高島屋

新制作派小品展 22—26 日動画廊

岡田紅陽作品写真展 26—5月3 三越

美術館二十周年記念展 29—5月21 都美術館

曾宮一念個展 25—30 柴田ギヤラリ 批—東京

近藤浩一路個展 26—5月3 三越 批—東京5月

五月

現代美術展 1—20 都美術館 批—読賣9、朝日

13、朝日16

津田青楓個展 1—10 柴田ギヤラリ

藤田嗣治日本画展 1—10 銀座・松坂屋

牧野虎雄遺作展 5—10 北莊画廊

青衿会展 6—12 三越

木村莊八日本画小品展 11—17 北莊画廊

林武個展 12—17 柴田ギヤラリ

狩野芳崖作品展 12—16 東京美術陳列館

高井貞二油繪個展 13—17 高島屋

一采社日本画展 13—17 銀座・松屋

現代美術展覽会（昭和二二年）

キリスト教造型美術展 13—17 三越

1回榎会展 15—27 資生堂画廊

中国木刻画展 19—24 銀座・三越

国士会展 20—24 高島屋

石井彌一郎個展 20—25 白木屋

小倉遊亀個展 20—26 三越

井上良齋作陶展 20—26 三越

阿以田治修作品鑑賞展 20—30 江戸橋画廊 批—

朝日26

2回里見勝藏個展 21—28 柴田ギヤラリ 批—

朝日26

大日展 22—6月7 都美術館

双台展 23—30 都美術館

河合卯之助陶器個展 24—30 三越

7回美術文化展 24—6月7 都美術館 批—東京

1回前衛美術展 24—6月7 都美術館

宮脇公實作品発表展 26—31 銀座・松坂屋

1回五月会展 27—31 高島屋

日本水彩画会満35年記念展 31—6月7 都美術館

六月

27回朱葉会展 1—10 都美術館

5回手工藝展 1—12 都美術館

晨生彫塑展 2—7 柴田ギヤラリ

津田青楓個展 3—13 神田・万壽屋

赤堀信平彫刻展 6—12 三越

神保俊子個展 7—10 資生堂

独立美術協会小品展 10—14 日動画廊 批—東京

14 在京漫画家綜合展 10—14 三越

1回連合展 10—30 都美術館 批—毎日16、毎日

19、朝日23、毎日7月7

2回行動美術試作展 12—19 三越 批—東京18

アメリカ児童画展 16—21 三越 批—朝日29

1回職場美術展 16—30 都美術館

1回新匠美術工藝会展 17—23 高島屋

1回新樹會油絵展 21—27 三越 批—東京29

12回清光会展 21—26 柴田ギヤラリ

青山義雄近作油繪個展 23—27 兜屋画廊

宮坂勝個展 24—28 資生堂画廊

コンラッド・メイリ展 26—30 丸の内・AEC

七月

熊谷守一作品鑑賞会 1—5 兜屋画廊

日本洋画回顧展 1—7 大阪・阪急デパート 関

西洋画振興会主催 近代日本洋画展 1—8月20 表慶館 批—読賣7

東京13、朝日21

1回女流画家協会展 2—13 都美術館 批—東京

7 河井寛次郎新作陶器展 7—12 高島屋

10回新興美術院展 1—17 三越

11回自由美術展 12—21 都美術館

藤田嗣治・堂本印象二人画展 14—19 高島屋

日本画院展 15—27 都美術館

田中案山子個展 18—26 三越

吉田謙吉舞台美術研究会展 17—21 資生堂画廊

八月

小川千穂新作画展 5—15 神田・万壽屋

1回露露展 11—25 都美術館

九月

19回青龍社展 1—13 三越 批—東京4、毎日8
朝日8、國際タイムズ9、新報知11、第一13 青龍社
賞—内地青星、佐藤博、丸山俊、宅間説

主要出品目録

虎の 川端龍子
秋の 坂口一草
妍の 立華
夕の 加納三樂
虹の 福岡青嵐
白の 山崎豊
吉の 市野亨
青の 安西啓明
鶏の 安西啓明
子供の 安西啓明
滝の 安西啓明
山六の 安西啓明
王鳥の 安西啓明
Sの 安西啓明
水の 安西啓明
夏の 安西啓明
夏の 安西啓明
魚の 安西啓明
燈の 安西啓明
溪の 安西啓明
青の 安西啓明
新の 安西啓明
金の 安西啓明
昏の 安西啓明
南の 安西啓明
奔の 安西啓明

32回院展 1—17 都美術館 批—東京4、読賣5
毎日8、朝日8、國際タイムズ9、新報知11、東京
15 日本美術院賞—羽石光志、濱孤嘯、中島保

主要出品目録（同人）

（繪画）

はつなつ 村田瑞枝
手毬 小谷津任牛
四時山水（繪卷第一卷） 横山大觀
黄 酒井三良
雨 郷倉千靱
野 郷倉千靱
夏 郷倉千靱
郷里の先覚（夜明前の香蔵と景蔵） 前田青邨
連山 大智勝觀
清 中村岳陵
王 安田靱彦
緋 奥村土牛
村 富取風堂
暮 富取風堂
夕 富取風堂
瞻 富取風堂
朝 富取風堂
片 富取風堂
涼 富取風堂
筆 富取風堂
萬 富取風堂
花 富取風堂
（彫塑） 小松均

K 氏 像 松原松造
村 叟 貫 翁 像 宮本重良
M H 翁 頭 部 像 新海竹藏
老 人 像 小柳津三郎
F ター 桃 井 人 像 古藤正雄
大 和 乙 女 像 村田徳次郎
力 士 照 国 像 村田徳次郎
F 木 氏 像 辻 晋堂
光 澤 惟 安 老 師 像 辻 晋堂
岸 澤 惟 安 老 師 像 辻 晋堂
石 井 氏 還 曆 像 中村直人
歩 く 女（南方二題） 中村直人
穀物を掲ぐ女（南方二題） 中村直人
石 井 氏 還 曆 像 喜多武四郎
乾 反 葉 像 石井鶴三
秋 裸 婦 像 山本豊市
阿 彌 陀 如 來 像 山本豊市
老 人 像 大内青圃
天 皇 像 大内青圃
信 貴 英 藏 氏 像 大内青圃
即 現 婦 女 身 像 大内青圃
（觀世音菩薩三十三化身ノ内）
觀 自 在 菩 薩 像 大内青圃
2 回 行 動 美 術 展 1—19 都美術館 批—読賣7、
東京8、朝日8 協会賞—川原章二 友山莊賞—高昌
進、西村清、研究所賞—増田悟郎、八木勇、武部本一

主要出品目録

(會員)

裸女群像、ひまわりと裸女

多宝塔、初夏の村、早春の村

画室の女、Y子の像

制 作

早 春、窓

堂のある山、海岸風景

港、雨やどり、山

海、初島(救われる孤兒達、庭前蔬菜

炭 塵 の 中 に

緑の池畔、おつけの浜、夏の展望

夏のノロ岸、一本の豆の蔓

声、横町の午後

F 嬢、街の人々、アトリエ、Y 婦人像

鶉、鶉

牡 丹、霧、朝 靄

ライ麦刈込み、開墾する人、六月の果樹園

河 岸、木 立

(会 友)

染 屋、花 道

裸 婦、浴 衣

牛と少年、午後、失題

半裸、二人の裸1、二人の裸2

座 像、閑 日、黒 衣

裸婦、馬小屋、少女と花、みかへり

の塔の少年達

大通りの夏景、樹蔭、石切場

きうり畠、二人、芝生

小 出 卓 二

福 井 勇

飯 田 清 毅

高 井 貞 二

村 田 實 史 雄

伊 藤 久 三 郎

榎 倉 省 吾

伊 谷 賢 藏

向 井 潤 吉

田 邊 三 重 松

難 波 香 久 三

三 芳 悌 吉

柏 原 覺 太 郎

坪 内 節 太 郎

古 家 新

田 中 忠 雄

田 川 寛 一

松 田 種 次

上 山 哲 夫

小 林 武 夫

西 阪 修

河 野 通 紀

下 高 原 龍 巳

伊 藤 信 夫

玉 澤 潤 一

砂 浜、石 山

日暮前、手藝のひとつ

瓦斯工場、松根と砂丘、松根のある風景

尾崎悌之助

32回二科展 1-19 都美術館 批-毎日8 会員

推荐-阿部金剛、桑原實、佐藤吉五郎(以上繪画)、

妹尾健太郎、堀内正和、植木力、安藤菊男、乗松巖

(以上彫刻) 準会員推荐-米良道博、桂ユキ子(以

上繪画)、野水信吉、鷺泰次郎、中堀正孝(以上彫

刻) 二科賞-鶴岡義雄(繪画) 特待-中田豊、花

谷時子(以上繪画)、飯田巖三(彫刻) 第一回会員

努力賞-山口長男、岡田謙三

主要出品目録 (○會員)

(繪 画)

街 の 女 ○寺田竹雄

都 少 女 會 ○大澤昌助

く さ む ら 歌 ○大澤昌助

瓦 れ き の 歌 ○大澤昌助

静 物 ○大澤昌助

幻 想 の 時 日 ○大澤昌助

灰 色 の 日 ○大澤昌助

雑 草 の 如 く ○北川民次

太 陽 島 に て ○野村守夫

風 景(北京) ○青山龍水

海 原 に て ○青山龍水

野 辺 の 丘 ○伊庭傳治郎

海 邊 の 物 供 ○伊庭傳治郎

池 の 子 供 ○伊庭傳治郎

夏 の 子 供 ○伊庭傳治郎

人 眞 子 孫 供 畫 *

藤川勇造遺作陳列十六点

星 夜 河 星 國 (1) (2)

銀 々 の 星 國 (1) (2)

裸 良 の 林 雨 橋 秋

青 良 の 林 雨 橋 秋

奈 良 の 林 雨 橋 秋

水 辺 の 村 雨 橋 秋

初夏の道(奈良)

早 春 の 鎌 倉

白 い 崖 と 海

ほ と こ ろ

そ の こ ろ

た は む れ の 景

夏 の 風 景

花 の 風 景

久 我 山 風 景

久 我 山 風 景

久 我 山 風 景

郷 我 山 風 景

月 我 山 風 景

七 月 の 風 景

子 月 の 風 景

風 月 の 風 景

桑 原 實

○加治屋隆二

○野間仁根

○藤川榮子

○鈴木信太郎

○井上覺造

○高岡徳太郎

○東郷青兒

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

○吉井淳二

1 回第二紀會展 18 | 10 月 4 日 都美術館 批 | 東京
25、每日 29
二紀會賞—宮川 仁 K 氏賞—秋保正三、藤村恒夫
奨勵賞—福岡宇雄、芝野武夫 褒狀—山下勇、有田
徳一、伊藤泰三、宮永岳彦、三宅博信
主要出品目錄 (委員)

六七

否 女の首 柳原義達
山内壯夫
吉田芳夫
1回現代彫塑院展 20-30 都美術館
9回一水会展 20-10月4 都美術館 批-東京25
毎日29 優賞-奥田郁太郎、納富進 一水会賞-廣瀬

主要出品目録

秋の草花 田崎廣助
櫻松 丘 中村琢二
提琴を持つ少女 中村琢二
扇を持つ少女 中村琢二
花を持つ少女 中村琢二
曇り 納富進
故郷の川 納富進
七ヶ月 安宅虎雄
初夏の人物 安宅虎雄
秋の道 奥田郁太郎
山と道 奥田郁太郎
花の影 奥田郁太郎
雲の影 奥田郁太郎
作品の影 奥田郁太郎
裸婦 奥田郁太郎
松本二景(1)女鳥羽川 奥田郁太郎
M氏像 奥田郁太郎
松本二景(2)松本御漆 奥田郁太郎
朝涼 奥田郁太郎
群青石の頸飾 奥田郁太郎

十月

北平の園 安井曾太郎
連雲の町(一) 安井曾太郎
連雲の町(二) 安井曾太郎
少女の 小山敬三
冬の山 中村善策
夏の山 中村善策
杉の夕光 中村善策
眞鶴 木下義謙
馬籠 木下義謙
横濱 高野三三男
シヤンダイ・デヨーン 高野三三男
裸婦 高野三三男
フアンム・アン・ヴェール 高野三三男
河野通勢日本画展 21-26 高島屋
梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎自選洋画名作展 23-10月8 大阪・阪急 関西洋画振興会、新大阪新聞社主催

国画会小品展 4-7 三越 批-第一26
鬼原素俊個展 4-8 資生堂画廊
小泉清展 6-11 柴田画廊
春陽会秋季小品展 13-18 高島屋 批-第一26
西洋美術名作展 15-11月15 表慶館 国立博物館
主催 朝日新聞社後援 批-朝日13、17、20、23、讀
書新聞22、29、11月5、11月12、第一15、19、20、26、27
1回棒会展 15-22 養生堂画廊
3回展 16-11月20 都美術館 文部省主催 批
讀賣20、朝日20、東京21、22、第一26
主要出品目録 ○審査員△帝國藝術院会員

紅葉 (日本画)
新葉 葵
犬 菅
滝 畔
尾 瀬
花 瀬
天 瀬
古 瀬
びいるむぎ 桜
中年の夫人(現代商家) 矢野
朝顔 矢野
青 矢野
赤 矢野
仲秋 矢野
猿 矢野
時 矢野
午 矢野
秋 矢野
支那 矢野
太 矢野
清 矢野
山 矢野
雪 矢野
海 矢野
山 矢野
愛 矢野
宗 矢野
麦 矢野
鏡 矢野

望月春江
廣田多津
加藤榮三
堅山南風
宇田荻二
吉岡堅二
森田沙伊
橋本明治
矢澤弦月
松本姿水
寺島紫明
矢野橋村
上村松篁
德岡神泉
小野竹喬
△野田九浦
○兒玉希望
○案本一洋
△松林桂月
○川崎小虎
○堂本印象
○奥村厚一
後藤貞之介
池田遙邨
向井久万
○山口蓬春
岩田正己
服部有恒
○森部白甫
○伊東深水

(西洋画)

誕生	富永朝堂	蓮口花	△板谷波山	淨韻	加藤晨明
古典と平和	藤野舜正	舊蒲文の棚	○吉田源十郎	晩船	岩淵芳華
鏡	後藤清一	鳥獸文対鉢	○北出塔次郎	春堤	谷口英雄
浴	吉田久繼	蛙群應教金銅華曼	○北原千鹿	霧雨	河合健二
朝	○佐々木大樹	根菜図四曲小屏風	○番浦省吾	晩芥	梶原緋子
浴	△藤井浩祐	鑄銅壁面裝飾「白日の夢」	山室百世	調子	濱田正子
よあけ	北村正信	蕨綴屏風	山鹿清華	隠岐の	田代正子
(美術工藝)	岸本景春	風呂釜一揃	根來實三	清	松浦満
刺繡山趣壁掛	清水六兵衛	染付芋の図角皿壹組	山岸堅二	(西洋画)	佐藤太清
玄燦燦壺	三井義夫	初秋硯宮	鈴木清	笛	新保兵次郎
平象嵌黄銅花器	△清水六和	蕨綴流水屏風	藤井観文	モデ	西尾善積
清水燦燦水指	○山崎覺太郎	金彩臥牛黄銅壺	小合友之助	鶏小屋のある家	飯島一次
兎蒔繪硯箱	○内藤春治	御所人形童心鏡戲の像	増田三男	ピンクのターバン	須田剋太
鼠香ス鉢	○岩田藤七	松竹梅宝玉筆筒	野口光彦	家刺繡する女	須田剋太
ガラス鉢	○高井白陽	黒味銅丸盆	磯井如眞	刺繡する女	藤本東一良
華文文庫硯一組	中島清	鑄銅水郷文花瓶	○大須賀喬	窓べの静物	江藤哲
象嵌栗の図花瓶	○吉田醇一郎	鑄起製鳥形花盛	杉田禾堂	窓べの静物	鹽津誠一
卓	加賀象嵌隨神燦燦	「歌ふ子供」紙製人形	石田素瑛	窓べの静物	高光一也
加賀象嵌隨神燦燦	○高橋勇	染色寝台掛	鶴巻三郎	窓べの静物	金子徳衛
鑄銅水注	○香取正彦	刀筆銀唐獅子ノ図小手宮	木村雨山	窓べの静物	山下忠平
遊禽香炉	○桶部彌次	蝶散文銀打出香炉	△六角紫水	窓べの静物	平通武男
彫金黄銅花瓶	信田洋	卓	寺田龍雄	窓べの静物	田村一男
鵲に秋草布目象嵌手箱	岡部達男	水のほとり沈金飾宮	△松田權六	窓べの静物	菅谷邦敏
黒釉金彩鉢	○加藤土師朋	硝子花器	前田大峰	窓べの静物	土佐林豊夫
彫漆手箱	佐藤陽雲	特選	各務鑛三	窓べの静物	西村喜久子
白堆麦の図花瓶	浅見隆三	(日本画)	江崎孝坪	窓べの静物	村岡平藏
蜥蜴文硯宮	○山脇洋二	像造	東山魁夷	窓べの静物	伊藤清永
花瓶染付三友図	河村靖山	像造	山崎孝坪	窓べの静物	古川順三
あらべすく(友仙染壇瀧丸帯)	○廣川松五郎	像造	東山魁夷	窓べの静物	畝村直久
銀香炉	△清水南山	像造	伊東萬	窓べの静物	

自由の樹を植える爲に

立 空 像 像

男 萌 像 像

想 鹿 像

草 座 像

裸 座 像

砂 座 像

紅 座 像

(美術工藝)

柏 樹 栗 鼠 飾 宮

鐙 銅 蝸 牛 伏 香 爐

友 禪 染 荷 文 服 飾 談 議

均 霽 雪 柳 之 図 手 宮

月 兎 三 趣 鈎 花 生

板 金 瑞 鳥 鈿 香 爐

テ マ リ 花 蔀 繪 書 棚

魚 譜 手 附 花 器

観 音 出 現 壁 飾

彫 漆 風 呂 先

栗 鼠 荷 荷 文 飾 蓋 物

堤 達 男

北 村 治 實

新 田 全 次

朝 倉 矜 子

畫 間 弘

宮 本 光 庸

都 賀 田 勇 馬

水 船 六 洲

三 坂 耿 一 郎

木 下 繁

尾 形 喜 代 治

圓 錫 勝 二

橋 本 次 郎

佐 治 正

清 水 辰 雄

所 榮 二

岡 田 章 人

宮 田 宏 平

中 野 惠 祥

佐 藤 潤 四 郎

會 宮 一 念 近 作 展 22—31 兜 屋 画 廊

和 田 三 造 日 本 画 展 23—29 三 越

十一月

旺 文 会 小 品 展 2—8 高 島 屋

川 合 修 二 作 陶 展 8—15 三 越

高 間 惣 七 個 展 9—15 高 島 屋

丹 阿 彌 岩 吉 日 本 画 展 10—15 三 越

百 草 居 個 展 11—15 銀 座・松 坂 屋

絲 卷 会 洋 画 小 品 展 14—19 北 莊 画 廊

東 郷 青 見 個 展 15—20 三 越

田 中 佐 一 郎 個 展 18—22 高 島 屋

現 代 巨 匠 陶 藝 逸 品 展 22—24 東 京 美 術 会 館

現 美 会 展 23—12月7 都 美 術 館

2 回 新 興 日 本 美 術 展 23—12月7 都 美 術 館 読 賣

新 聞 主 催

濱 田 庄 司、河 井 寛 次 郎 陶 藝 展 24—29 高 島 屋

田 村 一 男 個 展 25—29 高 島 屋

十二月

梅 原 龍 三 郎 扇 面 画 鑑 賞 会 1—3 交 詢 画 廊

3 回 斐 陀 工 房 工 藝 展 1—6 三 越

昭和二十三年度

一月

上 社 会 洋 画 展 5—10 三 越

西 洋 美 術 名 作 展 10—12月15 大 阪 美 術 館

丸 木 位 里 個 展 11—15 天 元 画 廊

読 賣 ベ ス ト ス リー 洋 画 展 19—31 柴 田 画 廊

入 江 泰 吉・仏 像 写 真 展 20—25 京 都・朝 日 会 館

フ ラ ン ス 繪 画 複 製 展 20—2月5 銀 座・三 越

現 代 日 本 版 画 展 22—30 三 越

日 米 交 歡 水 彩 画 展 22—28 三 越

新 日 本 美 術 家 協 会 展 22—31 都 美 術 館

坂 本 繁 二 郎・福 田 平 八 郎 新 作 發 表 会 27—2月1

大 阪・大 丸

二月

28 回 朱 葉 会 展 1—13 都 美 術 館 批—東 京 11

創 元 会 展 1—13 都 美 術 館 批—東 京 12、每 日 13

太 平 洋 画 会 展 1—13 都 美 術 館 批—每 日 11、東

京 11

2 回 旺 文 会 展 2—10 都 美 術 館

自 由 美 術 新 作 展 2—7 銀 座・三 越 批—每 日 9

東 京 12

新 構 造 社 展 14—24 都 美 術 館

白 日 会 展 15—24 都 美 術 館

示 現 会 展 15—24 都 美 術 館

泰 西 名 画 展 25—3月15 都 美 術 館 読 賣 主 催 批

讀 賣 25、東 京 3月2、讀 賣 3月3、讀 賣 3月5、讀

賣 3月7、讀 賣 3月9、讀 賣 3月12、朝 日 3月12

モ タ ン アー ト 展 25—3月15 都 美 術 館 批—讀 賣

8、朝日9

藤田嗣治近作展 25—28 銀座・銀橋

三月

4回東京染織作家協会展 1—6 三越

矢野知道人新作風景展 1—6 丸善

野口彌太郎油繪展 1—5 日動画廊 批—東京4

2回三光会日本画展 4—12 三越 批—朝日12

3回新日本美術会展 8—13 銀座・松屋別館 批—東京13

野間仁根新作展 11—15 日動画廊

小川芋銭遺墨展 12—20 高島屋 批—朝日16 東京18

7回水彩聯盟展 16—27 都美術館

34回光風会展 17—30 都美術館 批—東京25、毎日26、朝日29

泰西名画展 17—26 表慶館 批—読賣19

女流画家協会アンデパンダン展 18—30 都美術館

批—東京25、毎日26、朝日27

3回日本美術院小品展 25—4月8 三越

福澤一郎新作展 22—26 日動画廊

二科春季展 25—4月1 三越 批—朝日30、東京31

桑重議一遺作展 27—31 日動画廊

春陽会廿五週年記念展 31—4月13 都美術館 批—朝日4月5、東京4月8、毎日4月8

茂牛之輔、加藤秀夫、新会員—南大路一、新会友—賀

茂牛之輔、加藤秀夫、川上尉平、小川マリ、三井永一

主要出品目録（○会員）

りんごかご ○三雲祥之助

アトリエの一隅

制作

ぶど

静庭物

秋庭物

静庭物

秋庭物

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

紅葉

○三雲祥之助

○加山四郎

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

も舎のち

田舎のち

みかんのち

風吹くち

百吹くち

日吹くち

三島手扇

少年夏帽子

壺の花

いちはり

ひまわり

早春の赤城

山口翁像

西芳寺林泉

桃前雪景

羽前雪景

碗関風景

秋草堂

聖一（武田麟太郎作小説挿繪）

一の西（武田麟太郎作小説挿繪）

爛（二）（徳田秋声作小説挿繪）

わかれ道（樋口一葉作小説挿繪）

猿山

秋山

鴛鴦

雛子

童話四題

○小林徳三郎

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

青 衣 の 女	山 茶 花	赤 衣 少 女	鯖 アツ子とユミ子	崖	早春のハツ岳	山中白暮	山村園日	住ノ江公園	早 村 風景	道 村 春	木 立	村芝居の楽屋を描く	シヤクンタラ姫成人	七 面 鳥	窓	橋	草 叢	松 と 紅葉	山 本 鼎 遺 作	社 頭 春色	月 と す き	棒 静 物(白)	鯖 和 日 暖	棒 静 物(白)	棒 静 物(白)	大伴卿酒を讀ぶ
"	"	"	○伊藤慶之助	"	○土屋義郎	"	○小栗哲郎	"	○鬼塚金華	"	○遠藤典太	"	"	"	"	"	"	○田中壽太郎	十点	○前田藤四郎	○小林徳三郎	"	"	"	○中川一政	○小杉放庵

雨 魚 靜	靜 物	南風原朝光	○香月泰男	22回國展 1-13 都美術館 批朝日4月1、毎 日4月7、東京4月8 推薦會員—原精一、二見利節 推薦新會員—島内キミ、橋本三郎、澁川榮志、吉田璋 也、及川全三、上田恒次、廣本長子、川上澄生、棟方 志功 推薦新會員—渡邊禎雄 主要出品目録(○會員)	四月	税 関 氏 附 近	N 氏 像	風 年 景	少 年 像	丘 景	庭 室	裸 婦 像	朝 顔 像	琉 球 靜 物	雲 海	波 靜 物	馬 靜 物	薪 靜 物	花 靜 物	カ 那 人 形	支 那 人 形	朝 の ひととき	曉 宮 脇 晴			
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"

水	少	原	ホ	庭	山	東	稻	早	寒	冬	日	靜	波	靜	裾	砂	三	裸	伊	山	殘	裸	早	岩	冬	梟	逆	卓	雲	風	
邊		宿	レ	の	陰	京		春						野	丘			豆					肌		と		上	と			
秋	年	附	ロ	の	一	の		靜			輪			と	地			婦	と				に		肖		光	靜	室		
色	像	近	娘	隅	町	夜	畑	物	空	色	草	物	濤	物	帶	津	國	山	松	雪	婦	春	ぶ	野	画	卓	物	内			
											A		B																		
○土	〃	○益	○宮	〃	○喜	ブ	〃	○澤	〃	〃	島	〃	〃	○青	〃	〃	○梅	〃	○柏	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
田		田	田		多	ブ		野			内			山			原		木												
文		田	田		村	ノ		岩			キ			義			龍		俊												
雄		義	重		知	ワ		太			ミ			雄			三		一												
		信	雄					郎							念		郎					勝	登								

○長濱慶三
○木村伊兵衛
○北角玄三
〃小野由行
○中山岩太
〃中居正躬
〃山口源
〃關野準一郎
〃川上澄生
○川西英
〃棟方志功
○下澤木鉢郎
〃平塚運一
〃前田政雄
塚木哲
〃齋藤清
〃畦地梅太郎

晴 日

高安寺山門(多摩史蹟)
版画の内

形象(青の幻像、
カリカチュール、
一九四八年の日本

夏 (小田原)
燈の笑る家(多賀)

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

陶 器 十三点

畦地梅太郎

棟方末華

恩地孝四郎

橋本興家

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

主要出品目録

花 酒

卵 蕨

紅 薔薇

春 濃

信 濃

雪 小

水 景

落 葉

春 雨

日 本

長 閑

商 水

止 水

猫 雲

風 雲

孟 宗

三 月

窓 月

宵 月

秋 月

暖 月

梨 月

ス 月

山 月

茨木杉風個展

落合朗風遺作展

1 回清流会展

川端龍子

坂口一草

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

酒井三良個展 19-24 銀座・松坂屋

梅原龍三郎近作鑑賞会 20-30 兜屋画廊 批-朝

日5月3

一采社日本画展 20-24 高島屋

赤松俊子滯ソ小品展 21-26 天元画廊

牧野虎雄遺作邦画展 26-30 高島屋

武者小路實篤新作展 28-5月3 三越

鈴木信太郎油繪個展 28-5月3 三越

1 回創造美術展 29-5月8 都美術館

五月

現代中日版画展 1-15 高島屋 朝日新聞社主催

8 回青衿会展 6-14 三越

須田壽個展 10-15 三越

現代彫塑院展 10-15 銀座・三越

高澤圭一素描水墨画個展 11-15 丸善

19 回第一美術協会展 11-22 都美術館

2 回榎会日本画展 11-18 資生堂

2 回吉岡憲・大久保泰二入展 11-15 兜屋画廊

批-東京15

2 回小島謙油繪個展 11-15 北莊画廊 批-東京

14 回東光会展 12-22 都美術館 批-東京22

富本憲吉日本画展 12-16 東京美術会館

日本画院公募展 12-22 都美術館

第二紀会同人展 14-20 三越 批-東京18

2 回行動美術全関西展 15-24 大阪美術館

熊谷守一近作展 17-19 九善 批-東京18

13 回清光会展 17-22 兜屋画廊

北京の裸婦 梅原龍三郎

上高地 安井曾太郎
秋の明神 猿 〃
紅梅 安田 靱彦
雉子 福田平八郎
牡丹 〃
松風 小林古徑
組坂本繁二郎
盆 〃
大黒天 佐藤清藏
2回新匠工藝展 18-22 高島屋
村上華岳遺作展 20-24 相馬画廊 批-東京22
清水六兵衛作陶展 24-31 三越
鍛金美術工藝展 25-31 三越
10周年記念連袖會洋面展 25-31 三越
2回連合展 25-6月16 都美術館 批-毎日27、
28、29、31、6月1、東京6月2、6月3、6月4、
6月6、6月10

六月

北大路魯山人新作陶展 1-7 三越
木本大果個展 1-5 高島屋
1回コンラッド・メイリ會展 2-10 日佛會館
春日部たすく個展 7-9 資生堂
3回山本正個展 8-12 丸善
1回西尾善積個展 10-12 銀座・資生堂
3回行動美術協會試作展 11-19 三越
荒木十畝遺作展 19-24 都美術館
8回美術文化展(十周年記念) 19-7月5 都美
術館
芹澤銈介染織小品展 20-26 たくみ工藝店
工藝巨匠作品展 21-26 上野・松坂屋

1回新制作派協會選拔七人展 2-30 丸善
日本輸出工藝展 22-7月4 都美術館
中山巍個展 24-30 日動画廊
水彩連盟同人展 24-29 三越

七月

小山良修水彩展 1-5 日動画廊
6回緑巷會展 6-15 都美術館
日本水彩画會展 6-15 都美術館
前衛美術展 7-15 都美術館
2回職場美術展 7-15 都美術館
2回新樹會展 10-17 三越 批-毎日15、朝日18
手工藝展 10-20 都美術館
石井鶴三個展 12-16 相馬画廊
梅原龍三郎素描展 15-23 交詢社
2回新生派美術展 16-25 都美術館
17回朔日會展 16-25 都美術館
2回露靈展 17-25 都美術館
中西利雄個展 18-22 日動画廊
村井正誠・山口薫・矢橋六郎三人展 25-31 日動
東西大家日本面展 26-31 銀座・松坂屋

八月

現代美術協會展 2-7 三越
里見勝藏個展 9-14 白木屋
2回創造美術會同人展 31-9月4 高島屋

九月

20周年記念青龍社展 1-11 三越 批-朝日5、
毎日5、読賣6、東京6 奨励賞-内池青星、結城天
童、宅間説、佐々木邦彦 社人推挙-時田直善、小晶

鼎子 社友推挙-入江臥水、佐々木邦彦
主要出品目錄

狐人の幻想(人)

川端龍子

刺青 苑 坂口一草

懸苑 坂口一草

田浦崎晚 景 加納三樂

李白、陸 羽 福岡青嵐

夢 殿 山崎 豐

旅 籠 市野 亨

飛 鷲 安西啓明

連作の二重橋 小晶 鼎子

我家畫夜像 時田直善

白冠 舟 松宮左京

早苗 龜井藤兵衛

磯の踊 渡邊不二根

賀茂の踊 結城天童

花月 琴塚英一

五松 義春 内池青星

妙義春 佐藤士筆

靜日 林 心耳

春 竹 內 未明

巖 丸山 鮫

崖 九山 裕

芍藥 水島 裕

綠 佐々木邦彦

秋 入江臥水

33回二科展 1-16 都美術館 批一朝日5、毎日

5、読賣6、第一6、東京7、日本女性新聞11 二科
賞—伊藤研之 特待—齋藤三郎、齋藤愛子、井上賢三
松下隆治、淀井敏夫 准会員推挙—荻野康兄、吉田一
雄、会員推挙—米良道博 会員努力賞—大澤昌助、寺
田竹雄、山本敬輔

主要出品目録(〇会員)

(繪画)

室	解	白	馬	綱	八	山	月	夏	海	茶	夏	港	池	静	内	山	花	関	高	湖	夕	女
内放	服の少	上少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少	の少
寺田竹雄	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博	米良道博

緑	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー	バー
影	(A)	(B)	(C)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)
山尾薫明	吉井淳二	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎	高岡徳太郎

海	木	村	詩	紫	ち	ち	雑	踊	草	ダ	家	窓	朝	少	涼	ひ	さ	兜	顔	ヒ	ヒ	ヒ	作	同	憂	夜	オ	顔
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	
星	星	タ	陽	陽	ま	ま	草	子	上	ン	音	女	女	達	風	咲	合	昇	天	マ	マ	マ	品	愁	明	チ	レ	
歌	歌	ン	人	花	た	た	如	子	上	ス	会	達	達	達	達	後	戦	天	天	(空)	(人)	(雲)	A	B	愁	明	チ	
野	岡	岡	松	松	松	松	北	北	清	清	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	庭	
間	田	田	本	本	本	本	川	川	水	水	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	音	
仁	謙	謙	弘	弘	弘	弘	民	民	刀	刀	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	
根	三	三	二	二	二	二	次	次	根	根	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	

小さな噴水

○吉原治良

山のあなたに空遠く

○鷹山宇一

魔園

〃

裸婦

○阿部金剛

シヤワ

〃

アバト裏

〃

(彫塑)

マツ

○妹尾健太郎

果チの実

○乗松巖

カチの首

○鷲泰次郎

坐木先生像

○植木力

白木先生像

〃

ボイルさん

〃

横立態

○笠置季男

立態

〃

首作

〃

清純像

○妹尾健太郎

立像

○安藤菊男

立像

○上田曉

立像

○大西金次郎

立像

○堀内正和

立像

○大西金次郎

立像

〃

立像

〃

立像

〃

立像

〃

藝桑珠、坊坂俊文明(以上繪画)、黒崎弘、小林三郎、山本力吉(以上彫塑)

主要出品目録(同人)

(繪画)

立像

初河白道を描く

中村貞以

雪

眞藤黎明

二河白道を描く

太田聰雨

牡

大智勝觀

五浦の

郷倉千靱

新婦

酒井三良

瀟湘夜

堅山南風

舞

小倉遊亀

新

横山大觀

春

小林古徑

花

奥村土牛

緑

田中青坪

残

小谷津任牛

沼畔

北澤映月

山

長野草風

山

新井勝利

首像

富取風堂

野口氏立像

小松均

宇佐美氏頭像

宮本重良

卒塔婆小町

山本豐市

救苦觀世音菩薩

關谷充

少女頭像

松原松造

觀音

石井鶴三

仕舞

村田徳次郎

吉沢国手像

〃

ぬひの顔

中村直人

老人の顔

〃

女の顔

〃

うづの顔

〃

安達潮花師壽像

大内青圃

大吉祥天女像

〃

春妖

〃

在田翁試作

新海竹藏

3回行動美術展

都美術館 批一朝日5、

毎日5、読賣6、第一6、東京7

会友賞—中山春雄

奨励賞—武部本一郎、川端伊織、齋藤眞一、入江信四

郎新会員—高橋進、生澤朗 会友推挙—鈴木博、荒

井秀宣、山口正雄、宮野進、佐藤眞、西田秀雄、船越

かつみ、長谷川勝人、能坂太郎

主要出品目録

樹蔭

榎倉省吾

かき

〃

蓮池

〃

噴煙(樽前山)

古家新

未明

〃

霧

福井勇

葉煙草

〃

琉瑠

伊谷賢藏

少女と梅

〃

夕	水	夏	黄	姉	夏	窓	踊	ニ	星	霧	岬	船	樹	夏	開	牡	鉄	小	二	白	山	鳥	歸	廃	大	裸	裸	オ	た	出	
	辺	日	色					ン	座					の	壁			鳥	十								婦	婦	ル	そ	演
	の	の	い				り	フ	の	の	の	入			の			を	一										ガ	が	待
	子	子		子			の		ン				ケ		初		開		人	の											
涼	供	供	服	妹	供		子	苑	ブ	日	浜	淵	間	岳	夏	丹	く	供	樺			影	路	屋	樹	B	A	ン	れ	つ	

長坂春雄 永井保 西阪修 尾崎梯之助 大場厚 織田雅嗣 下高原龍己 田中忠雄 坪内節太郎 田邊三重松 田川寛一 高井貞三 高須國之 玉澤潤一 高橋進

七九

横わる女、坐わる女、ベッドの上の女、

少年達、室内の婦人

少女像、秋、海辺

樹の根、浪の上（説話）、空（説話）、

地上（説話）、リボン

裏庭にて、人物、A博士像

門（山本通）、山本通、雲立つ道

裸婦A、裸婦B、扉、花輪、黒い猫、窓辺

腰かけた女、臥た女(1)、臥た女(2)

人形の国(A)、人形の国B、少女

桃色の花、黄色の花、紅い花、黄色による構図、

赤色による構図、室内一隅

憩、旅

（彫刻）

フオーヌ、馴鹿

容子像、青年

少

裸

白

青年、南歐の人

T嬢の首

ヒロの首

1回創造美術展 18—10月2 都美術館 批—毎日

19、讀賣20、東京23、朝日26 創造美術奨励賞—堀文子、小郷良一、松井章、稗田一穂、岩崎錦

主要出品目録（會員）

作品1、作品2

牡丹、裸婦

夕、秋田のマリヤ

憤、熟

鏡と裸婦

木、樹、柿

果樹、雪、緑、樹

白亜夜景、室内佛、ダリヤ

子供1、子供2

月初、多

10回一水会展 19—10月2 都美術館 批—毎日19

讀賣20、東京29、朝日26 一水会優賞—小野末、一水

會賞渡邊祐一郎 新會員—福田英太郎、金丸直衛、菊

池秀一

主要出品目録

（委員）

晩夏の流、秋景

伊豆の川口さん、立岩、U嬢像

N嬢

徳川氏像

奈良公園高円山

学校歸り、杉並永福町

水

裕三彩亭

池部釣

山下新太郎

安井曾太郎

有島生馬

中村善策

安宅虎雄

戦争と平和

飯場の男

静

飯場の男

松本城

母と子

戦争と平和

厚川初

裸

若き農婦

千曲川、松

少女像

夕雲、清澄

蓉子像、H氏像、

ブルーズ・ド・ブルガリ

湖畔、阿蘇山、門司港（大里）

漆畑風景

肖像像、白

近藤光紀遺作 十三点

少

千曲川、松

若き農婦

裸

厚川初

戦争と平和

飯場の男

静

飯場の男

松本城

母と子

戦争と平和

厚川初

裸

若き農婦

千曲川、松

少女像

夕雲、清澄

蓉子像、H氏像、

ブルーズ・ド・ブルガリ

湖畔、阿蘇山、門司港（大里）

漆畑風景

肖像像、白

近藤光紀遺作 十三点

菅沼金六

谷内俊夫

源川雪

山川勇一郎

堀忠義

近藤吾朗

福田新生

等々力巳吉

小平一

渡邊正一

常岡卯三郎

小竹義夫

鈴木良三

中畑艸人

池谷寅一

池邊一郎

納富進

小野末

菅野矢一

矢野雄藏

須山計一

近岡善次郎

石井柏亭

小山敬三

田崎廣助

木下義謙

○成井弘文

[illegible]

○山田榮二
○居串佳一
狹間二郎
○齋藤求
○菅野圭介
斑目秀雄
阿村芳男
鳩川誠一
山道榮助
岡部文之助
○富樫寅平

富岡鐵齋小品鑑賞展 12—16 高島屋
野口彌太郎近作油絵展 12—18 丸善 批—東京15
毎日16

2 回和田三造日本画個展 14—19 三越
1 回東陶會展 14—19 三越
近代日本美術綜合展 15—11月30 国立博物館 批
朝日17、東京11月4

沼田一郎ガラス繪近作展 15—22 江戸橋画廊 批
—東京18
淺井忠遺作展 15—20 日本橋ギャラリー 批—東
京18

岸田劉生(邦画)鑑賞展 19—23 高島屋
4 回日展 21—11月20 都美術館 日本藝術院主催
批—毎日24、讀賣25、東京11月9、東京11月10

主要出品目録(○審査員、△日本藝術院會員)

(日本画)

湯屋 三谷十糸子
海潮 西山英雄
郷愁 東山魁夷
高野草 江崎孝坪
狗 森田沙伊
婦 堂本印象
しぐれ 宇田萩
朝顔と少女 伊東深水
新 秋 小野竹喬
少 女 中村岳陵
瀟 山 山口蓬春
朝 夕 安 居 矢澤弦月
白 帆 居 矢澤弦月
殘 雲 在 中村貞以
小 猫

多 幽 丹 陽
秋 月 雪
春 月 雪
新 (西洋画)
殘 雪 車 山
甲斐 斐 駒
京都郊外岩倉村
山村校庭
田園風景
金 山 景
裸 婦 山
ブドウと少女 物
靜 花 安 日
大 安 日
蝦 遊 粧
化 遊 粧
鯨 遊 粧
神 遊 粧
裸 婦 苑
Mis Murataの像
ブルース・ド・ブルガリ
初冬の相模湖
S 奈良公園の藤
白 奈良公園の藤
首 飾 秋
麥 秋

田中咄哉州
矢野橋村
○金島桂華
案本一洋
兒玉希望
△福田平八郎
田村一男
佐竹克己
三宅泰舒
赤城泰雄
安宅庸雄
石川寅治
鬼頭鍋三郎
安宅安五郎
眞下慶治
高間惣七
小絲源太郎
△石井柏亭
△中澤弘光
△南 薫造
△川島理一郎
中村琢二
白瀧幾之助
小山敬三
△辻 永
△有島生馬
△山下新太郎
中村研一
長谷川昇
清水良雄

湘南風景
單衣景
室 鷗 園 内
初 秋 木 原 秋
黃 秋 木 原 秋
柿 秋 木 原 秋
麥 秋 木 原 秋
磯 秋 木 原 秋
室 秋 木 原 秋
初 秋 木 原 秋
花 苑 戲 日 内
十 和 戲 日 内
道 化 戲 日 内
山 湖 戲 日 内
阿 蘇 戲 日 内
少 女 戲 日 内
春 女 戲 日 内
二 少 女 戲 日 内
更 紗の前 像 日 内
(彫塑)
五 鬢之文 珠 像 日 内
自 由 解 放 的 像 日 内
少 女 像 日 内
吉 祥 天 女 像 日 内
童 心 座 像 日 内
夏 裸 婦 像 日 内
首 裸 婦 像 日 内

金澤重治
寺内萬治郎
大澤海蔵
池部 鈞
有馬さとし
三上知治
森田元子
耳野卯三郎
佐藤一章
高田 誠
奥瀬英三
辻村八五郎
跡見 泰
大久保作次郎
伊原宇三郎
高野三三男
中村善策
田崎廣助
渡邊武夫
富田温一郎
小寺健吉
河井精一
△山崎朝雲
△北村西望
△加藤顯清
○大内青圃
○後藤清一
○古賀忠雄
雨宮治郎

男 世の顔 堀進二
濁 潮 新 〇横江嘉純
潮 畔 〇吉田三郎
支 潮 北村正信
女 潮 藤野舜正
裸 會 朝倉文夫
試 作 清水多嘉示
衣 食 澤田晴廣
腰 食 齋藤知雄
文 裸 森野圓象

(美術工藝)

唐銅 偏型花瓶 〇山本純民
みやま路色紙宮 〇前大橋美衡
黒味銅象嵌肉刻秋草ニ虫紋 二橋美衡
籠の蒔繪盛器 〇松田権六
葆光白磁牡丹花瓶 〇板谷波山
波 上 鉢 〇清水南和
青 磁 花瓶 〇清水六和
刀 筆 芦 刈 〇六角柴水
花 莖 香 爐 飯塚琅玕齋
木 莖 香 爐 〇香取秀眞
彫金 平象嵌宮 〇三井義夫
青銅獅子耳花瓶 〇長野埤志
染色ハツビコート江戸風景紋様 〇櫻井霞洞

(書)

白 楽 天 詩 松井如流
戰 後 主 民 詩 長谷川流石
秋 立 頃 頃 吉澤義則
愛 雲 詩 林祖洞

蘇東坡詩 七言二句
譚 今 譚 今 譚 今 譚 今
下 保 津 川 詩 歌
王維過福禪師蘭若詩
莊子逍遙篇
歸臥雜詩
萬葉集歌
高崎正風之歌
宗司馬溫公勤學歌
楷書白詩軸
安 山 行
あかき詩
寒 山 詩
雉 特 選

(西洋画)

母 子 裸婦 書齋の牧野博士 書架の前の少女 室 内 戰 争 早 春 甲 板 上 の 出 外 (美術工藝)

選

石橋犀水 柳田泰雲 江川碧潭 田中塊石 西脇吳石 〇辻本史邑 〇川村颯山 〇松木芳翠 〇鈴木翠軒 〇高塚竹堂 〇中村春堂 〇西川靖闇 〇上田桑鳩 〇山口蘭溪 〇尾上柴舟 〇豐道春海 〇相澤春洋

土佐林豐夫 水上信雄 轉松正利 刑部正利 藤江理三郎 伊藤清永 福田新生 納富進 谷澤一郎 荒木穩雄

魚文青銅花瓶 會田富康
漆之寶石箱 大場松魚
鶯之園小屏風 寺井直次
六角楓文釜 伊藤鏝一
群禽飾宮 天野文堂
黃銅布目象嵌花瓶 三村昌弘

のうぜんかつら壺 濱 達也
水紋打出水指 河内 宗明
龍 池 研 雨宮 靜軒
模 蒔 繪 手 宮 勝田 靜璋
孔雀文透彫盛鉢 安原 喜明
染色二曲屏風群鶯水禽圖 小林 清
註一日本画、彫塑、書は特選なし
ブブノワ夫人水彩・版画個展 26—30 兜屋画廊

批一東京30
田村一男個展 26—30 九善 批一東京30

十一月

旭正秀小品版画個展 1—6 白木屋
青々會展 1—8 三越
金山平三近作発表會 1—6 資生堂
東山魁夷個展 1—5 九善
安井曾太郎新作展 3—10 数寄屋橋面廊
2回霜月會展 8—13 高島屋
1回青季會展 8—13 九善 批一東京12
2回藤田嗣治個展 9—13 資生堂 批一東京12
杉本健吉作品展 11—18 三越 批一東京15、朝日
16、毎日16
1回白壽會展 15—20 高島屋
平櫛田中木彫展 15—20 高島屋

牧野虎雄三周忌記念遺作展 18—20 丸善 藝術新聞社主催

3 回國画会秋季展 20—26 三越 批—毎日24、東京25

2 回日本美術会アンデパンダン展 22—12月16、都美術館 批—讀賣12月2、朝日12月2、讀賣12月6、毎日12月8

2 回松本護介遺作展 22—27 北莊画廊 批—毎日

25、朝日26、東京26 勤勞者美術展 26—12月12 都美術館 批—朝日12月5

十二月

1 回太平洋会展 1—8 丸善
3 回型々工藝集団展 1—10 和光
25 回龍駿介富士油繪展 1—3 工業クラブ
饒瘦鐵個展 3—8 高島屋 批—朝日5
7 回工藝燦匠会展 1—5 上野・松坂屋
岡田謙三個展 5—15 北莊 批—毎日16
濱田庄司新作陶展 1—6 三越
川島理一郎作品鑑賞展 6—9 日動画廊
北大路魯山人日本画展 7—11 三越
脇田和個展 7—11 兜屋画廊
舞台美術展 8—14 三越
萌木会染色展 8—14 三越
岡田謙三個展 15—21 北莊画廊
廣幡憲追悼展 21—25 柳屋
日本美術院彫刻展 23—29 三越
旺玄会三越展 26—30 三越

昭和二十四年度

一月

川端實個展 17—22 北莊画廊 批—東京20、毎日朝日21
3 回墨心会日本画展 25—29 上野・松坂屋
鶴岡政男個展 29 北莊画廊 批—東京29
ベスト・スリー洋画展 25—30 銀座・松坂屋 批—讀賣30

二月

八木正風個展 10—12 丸善 批—東京12
1 回日本アンデパンダン展 11—3月3 都美術館
讀賣主催 批—東京17、第一19、讀賣21、讀賣23、毎日25、讀賣26、讀賣28、東京4月18
1 回櫻井濱江個展 21—28 北莊画廊 批—東京24 毎日25

三月

春光会展 1—10 高島屋
憲吉、土牛作品展 1—10 黒田陶苑
3 回三光会展 1—6 三越
太平洋画会春季展 1—5 丸善
日本彫金会展 1—6 三越
2 回示現会展 4—13 都美術館
8 回双台展 5—13 都美術館
8 回水彩聯盟展 5—13 都美術館
9 回美術文化展 5—13 都美術館 批—毎日7、東京11、讀賣4月11、東京4月18
日米交歓水彩展 6—16 新宿・三越

四月

2 回二紀会委員展 8—13 銀座・三越
荒井龍男作品展 14—19 北莊画廊
35 回光風会展 15—30 都美術館 批—毎日23、讀賣4月11、東京4月18
3 回前衛美術展 15—30 都美術館 批—讀賣4月11、東京4月18
富岡鐵齋名作展 15—31 東洋美術館
風間完個展 16—19 兜屋画廊
7 回眞赤土工藝展 17—24 三越
8 回創元会展 19—30 都美術館 批—東京4月18
廣幡憲遺作展 22—28 北莊画廊
日本美術院小品展 27—4月10 三越 批—朝日10
一采社展 30—4月3 高島屋

春の青龍社展 1—10 三越 批—毎日7、朝日10
旺玄会展 1—10 都美術館 批—東京18
梅原、安井、坂本三巨匠新作展 1—7 大阪・兜屋
3 回女流画家展 1—16 都美術館 批—朝日7、東京18
25 回春陽会展 1—16 都美術館 批—朝日3、讀賣11、東京18、明大新聞15、春陽会賞—小柳秀太郎、廣野股生 会友賞—小川マリ子 会員推挙—佐藤篤郎、宮田武彦

主要出品目録（○會員）

木 靜 桃 三 聖 H
立 物 情 神 人
ある 靜 情 神 人
物 物 物 物 物
佐 藤 昌 胤
原 田 武 男

〇大澤鉦一郎
〇栗田雄
〇石井鶴三
〇横堀角次郎
〇小栗哲郎
小川マリ子
〇川端彌之助
〇藤野龍
三吉亮久
岩崎又二郎
田邊謙輔
〇遠藤典太
〇新沼杏一

静	風	卓	黒	裸	緑	静	豚	静	オ	丘	古	少	白	白	赤	す	冬	晩	冠	白	春	浅	初	沈	小	蟹	風	南	登
		上	衣		衣				ラ	の	き		い	い	い	か	の	秋	帆	の	間	夏	丁	坪	田				し
物	景	物	女	婦	女	物	肉	物	屋	の	洋	女	服	家	家	女	崖	物	鶴	湖	雪	泉	山	花	浜	庭	景	瓜	壇
○中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
谷	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
泰	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

久	ボ	雪	縦	静	棒	静	旧	扇	若	N	風	柳	山	早	静	門	海	金	オ	深	桃	港	タ	滞	静	窓	船	こ	卓	が
保	暮	れ	と				街	を	き	夫						の	見	魚	レ			の	リ				す	上	！	
山	タ	ん	と	横	物	物	道	持	画	人	景	麓	春	物	景	景	鉢	秋	秋			午	後	ヤ	船	物		も	静	べ
葬	ン	す					の	て		家	景					風	景	鉢	秋								す	物	ら	

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

蓮	蓮	蓮	遮	夕	疎	椅	卓	逆	梅	桃	壺	枯	緑	色	瓶	山	崎	隆	夫	細	谷	重	雄	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
蓮	蓮	蓮	陽	影	林	物	物	女	女	女	柳	実	柳	実	柳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
蓮	蓮	蓮	陽	影	林	物	物	女	女	女	柳	実	柳	実	柳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

大江橋風景
横浜風景
葵頭
鶏頭
水辺
23回国展 1-16 都美術館 批1朝日3、読賣日
東京18（繪画部）推薦會員—須田勉大、青木達彌
新會員—細谷重雄、福留重雄、南風原朝光、山田千
秋、日向裕 国画賞—岩尾秀樹、石井佐一、森本三郎
森本三郎（版画部）新會員—山口源、齋藤清、品川工
笹島喜平、橋本興家 国画賞—玉上恒夫、中尾義隆
（写眞部）新會員—西山清、中居正躬、入江泰吉
（工藝部）新會員—河井武一、岡村吉右衛門、小島恵
次郎、三代澤本壽、安川慶一 国画賞—柳悦博、金澤
滋

主要出品目錄（〇會員）

（繪画）

運による作品	支那刺繍の背景	枯日向葵	橋のある風景	臥竜梅	向日葵	黒と白	樹間の家	秋の朝(逆光)	日の盛り	夏の山草	櫻のつる像	二つの裸婦像	横たわれる裸婦品	裸婦小品	裸婦	ねてゐる裸婦	窓辺早春	黒犬	冬のカンナ	岩山のA	岩山のB	夏服の少女像	少女の座像	田園の柿	コドモと柿の夢	春雷	六甲早春	
宇治山哲平	" "	尼川尙達	" "	宗像逸郎	" "	澤野岩太郎	" "	村上巖	" "	福井敬一	" "	原精一	" "	" "	" "	" "	榊貞雄	久本弘一	" "	上田清一	" "	尾田龍	" "	佐藤哲三	" "	長谷川春子	宗像逸郎	〇見利節
アメリカアカシヤ	沖繩風景丹	丘と田圃(仙台)	練馬早春	雪の丘(仙台)	室の内	小諸早春	椿ある一隅	花畔	湖畔	雪山	裸婦	干鮎	赤繪と三鉢	赤繪と三宝柑	川辺の工場	斜陽	橋物	静物	盛緑の山路	新緑の山路	初緑の山路	花いろ倉	鎌倉	飯比島	由比浜	モデル人形	笛模	伊豆の山
〇二見利二郎	" "	鈴木正二	" "	" "	南風原朝光	〇平塚運一	〇宮田重雄	" "	〇宮坂勝	" "	" "	〇大谷房吉	" "	" "	〇中村好宏	" "	" "	" "	〇土田文雄	" "	" "	" "	〇大淵武夫	" "	" "	〇眞垣武勝	" "	〇柏木俊一
薬と婦人	花(一)	花(二)	花景	すきと海	ぎぼん	三津輪	三月堂月明	二月堂湯屋	椿映物	静房	夕風	外房風景	花坐像	女雲(台湾)	西雲(台湾)	パンの木窓(台湾)	青田(台湾)	雨霽(台湾)	夏雲(台湾)	陽の照る庭(台湾)	崖上の漁村	川の裁店	洋裁店	夜の静物	果物の静物	地球儀の椅子	硝子器	
〇川口幸次	小林邦報	" "	" "	曾宮一念	" "	〇梅原龍三郎	〇杉本健吉	" "	" "	〇熊谷九壽	〇青山義雄	" "	" "	〇澁川榮志	〇立石鉄臣	" "	" "	" "	" "	" "	〇辻愛造	" "	〇大森啓助	〇養田つや子	〇久保守	〇伊藤麻		

[illegible]

諸鹿石硯 吉田璋也
 屏風琉球 吉田弟三
 ひるがほ模様 渡邊禎雄
 (版画)
 赤い実 齋藤清
 あるボーズ 塚本哲
 浅夏の夢 〇恩地孝四郎
 初夏の夢 〇恩地孝四郎
 即興 No. 2 顔 〇恩地孝四郎
 ポエム No. 6 空の感情 〇山口源
 構図・黒と白 〇山口源
 松原湖早春 橋本興家
 聖観音立像 棟方末華
 赤いあかん坊 〇ブノワ
 三色スミレ 〇ブノワ
 くだもの 〇平塚運一
 大同雲崗ビシヌウ神像 〇平塚運一
 承德普陀宗乘廟 〇平塚運一
 瀬戸内海の朝陽 〇川西英
 内牧曉霧 〇川西英
 焼ケ獄 〇前田政雄
 子供 〇前田政雄
 油地獄板画冊 〇畦地梅太郎
 岡本かの子作 〇畦地梅太郎
 女人觀世音板板画卷 〇棟方志功
 東西南北額板板画(A) 〇棟方志功
 東西南北額板板画(B) 〇棟方志功
 私の博物誌(魚) 〇關野準一郎
 私の博物誌(水族館) 〇關野準一郎
 私の博物誌(介) 〇關野準一郎
 南蛮人図 〇川上澄生

現代美術展覧会(昭和二十四年)

五月

一采社展 1-3 高島屋
 前田寛治回顧展 4-10 銀座・三越、丸善、日動
 柳屋 批一朝日1
 棒貞雄油繪個展 6-12 三越
 新制作派會員春季展 11-16 丸善
 二科会春季展 13-24 三越 批一朝日23、東京24
 ラグーザお玉夫人遺作繪画展 13-17 高島屋
 菅橋彦個展 16-17 高島屋
 現代美術総合展(都展) 17-5月9 都美術館
 批一朝日24
 安藤義茂個展 18-23 北莊 批一朝日30
 坂本万七彫刻写真展 23-30 三越 批一朝日30
 2回清流会鑑賞会 26-28 京橋・兼素洞
 青衿会日本画展 1-8 三越
 5回国土会展 4-8 高島屋
 2回井上長三郎個展 6-12 北莊 批—東京11
 創造美術春季展 9-14 丸善 批—毎日14、東京14
 安井・梅原自選展 11-30 銀座・松坂屋 批—毎日15、東京25
 3回連合展 14-6月5 都美術館 批—毎日15、東京15、読賣21、朝日25
 3回行動美術全関西展 14-29 大阪美術館
 香月泰男個展 16-31 フォルム 批—毎日27、朝日30
 2回日本美術協会展 17-31 銀座・三越
 長谷川利行遺作展 20-22 東京美術館
 5回瀟々会日本画展 21-25 丸善

六月

二紀会洋画展 22-31 三越 批—毎日27
 3回五月会展 24-29 高島屋
 3回六人展 24-28 資生堂 批一朝日28
 2回中川一政新作展 24-31 三越 批一朝日28
 野口彌太郎水彩展 24-29 数寄屋橋画廊 批一朝日28
 型々工藝集団展 24-30 和光 批—東京29
 三岸好太郎遺作展 26-6月1 北莊画廊 批一朝日30、毎日30、東京31
 4回行動美術試作展 1-8 三越 批一朝日8、東京8
 岩崎鐸個展 2-7 北莊画廊
 春陽会々員展 3-9 上野・松坂屋 批一朝日8
 棟方志功自選展 5-30 日本民藝館
 東光会展 6-18 都美術館
 彫刻文化総合展 6-18 都美術館 批—毎日1、東京17
 日本画院展 6-18 都美術館
 1回日本彫刻家連盟展 7-14 都美術館
 白日会小品展 7-12 銀座・松坂屋
 西山英雄作品展 7-12 京都・大丸
 1回鑑光遺作展 8-14 北莊画廊 批一朝日13
 2回新制作派選拔七人展 13-18 丸善 批—毎日
 佐伯米子個展 16-21 資生堂 批—毎日18、東京20、朝日21
 2回小川マリ個展 16-21 北莊画廊 批—東京18、朝日21
 自主連立展 19-30 都美術館
 今村紫紅遺作鑑賞会 20-25 黒田陶苑 批—東京

24

第一美術協会廿回展 20—30 都美術館

14回清光会展 21—25 兜屋画廊

現代陶匠五大家展 21—30 上野・松坂屋

奉陽会四人展 22—26 高島屋

4回古茂田守介作品展 23—30 北莊 批—朝日30

東京30

七月

仲田菊代個展 1—6 北莊画廊 批—朝日5、每日6

日6

3回職場美術展 3—13 都美術館

4回南画院展 3—13 都美術館

新樹会展 7—14 三越 批—毎日9、朝日13、東京14

京14

西山英雄個展 11—16 丸善 批—毎日15

ピカソ近作複製展 11—16 柳屋 批—東京13、毎日15

日15

9回日本水彩画会展 14—25 都美術館 批—毎日

24

松本竣介遺作展 15—22 北莊画廊

24

八月

堂本印象作品展 2—8 大阪・大丸

九月

21回壽龍社展 1—11 三越 批—毎日2、東日6

東京9、朝日11、東京10月3 奨励賞—中川佐風路、

細野光治、生田武、間瀬琳一

主要出品目錄

（社 人）

都會を知らぬ子供等、頼祭

千手觀世音、稻妻娘

島 最初の傳道

太 羽 京都八坂塔（連作の三）

芥 子 坊 主

十 二 橋

唐 獅 子

牛 獅 子

た き つ

水 辺

し た り

魚 年 彩

今 年 彩

絲 水 馬

唐 松

鏡 魚

暮 調 漁

草 堤

伊 良 子

お 岩

川 端 龍 子

坂 口 一 草

加 納 三 樂

福 岡 青 鳳

山 崎 豐

市 野 亭

安 西 啓 明

小 島 鼎 子

時 田 直 善

松 宮 左 京

龜 井 藤 兵 衛

渡 邊 不 二 根

琴 塚 英 一

内 池 青 星

佐 藤 土 筆

林 內 心 耳

竹 內 未 明

丸 山 皎

内 海 加 壽 子

水 島 裕

佐 々 木 邦 彦

入 江 臥 水

渡 會 伊 良 子

大 塚 香 緑

田中太郎（以上彫塑）奨励賞—守屋多々志、岩橋英遠、

田中嘉三、鹽出英雄、羽石光志（以上繪画）武井斌、

櫻井祐一、村上丙、片野不空藏、小柳津三郎 院友

推挙—鈴木孝之、酒井亞人、綿谷行四郎、田畑豊秋、

太田稻吉、岩田彌光、藤田高日子、松田文子、兒玉徹

（以上繪画）、大和作内（彫塑） 同人推挙—古藤正

雄（彫塑）

主要出品目錄（同人）

（繪 画）

鏡 仔 馬

家 鄉

果 物

花 瓶

花 瓶

猫 神

風 神

食 神

秋 雨

白 日

被 雪

初 雪

夕 雲

蔬 果

蔬 果

蔬 果

池 魚

小 魚

小谷津任牛

富取風堂

太田聽雨

小倉遊龜

前田青邨

小林古徑

大智勝觀

奧村土牛

横山大觀

酒井三良

郷倉千靱

堅山南風

中村貞以

田中青坪

北澤映月

松火 裡 蓮

(彫刻)

手子 像

K 觀 像

兔 作

習 婦

裸 像

阿彌陀 像

阿彌陀 像

觀自在 尊

水泳者 像

裸女 像

乳女 像

裸女 像

俳人 像

I 氏 像

薄衣 像

楓木 像

K 女 像

繪 本 像

鷺 像

風生 像

少年 像

法然 像

34回二科展 1-19 都美術館 批 毎日2、読賣

5、東京5、東日7、朝日11、東京13、東京10月3

特待堀木莊輔 岡田實一 堀賢三 会員努力賞 野村

守夫、吉原治良、藤川榮子、笠置季男(彫刻) 準会

小松 均

眞道 黎明

松原 松造

喜多武四郎

大内 青圃

石井 鶴三

山本 豐市

村田 徳次郎

辻 晋堂

關 谷 充

中村 直人

新海 竹藏

宮本 重良

員推挙 織田廣喜、鶴岡義雄、井上賢三、淀井敏雄

主要出品目録 (〇会員)

(繪画)

無題

潮の眠るとき

戦争と平和(一部)

戦争と平和(二部)

(彫立)

(二)女

(二)座

(二)二人の像

雑草の如く(第三)

水と裸女

ヅイナス

櫻と裸女

月の裸女

花の頸飾裸女

菊と裸女

きねの場

秋の場

朝の場

花の場

筑波

ユローツ

憩い

白いポト

若葉と海景

マリヤ孤兒園

長崎の家(室内)

長崎の家(ベランダ)

〇野村 守夫

〇山本 敬輔

〇笠置 季男

〇北川 良次

〇米良 道博

〇松井 正

〇服部 正一郎

〇藤井 二郎

〇鈴木 信太郎

おらんだ 万歳

長崎の港を望む

夏

扇

裸婦

トルソを抱く裸女

座

女

菜の花

食

海

立

海

樹

バイオレット

(彫) 自

かつばと

壺

ニシフとサチール

彩

朝

か

五

ち

踊

燈

流

街

街

高岡 徳太郎

藤川 榮子

佐藤 吉五郎

大澤 昌助

井上 覺造

東郷 青兒

乗松 巖

野間 仁根

岡田 謙三

松本 弘二

山尾 薫明

錦義 一郎

萩野 康兒

花瓶 (六方染付)	米澤蘇峰
(金屬)	
鑄銅壺	平野泰三
(漆工)	
手箱 (彩櫥)	堂本漆軒
盛器 (彩漆)	"
盛器 (草花紋)	井田宣秋
盆蓋 (梅)	"
(木工)	
鏡	初瀬川菊次郎
4 回行動美術展 1—19	都美術館 批1 毎日2、
東京5、說賣5、東日7、朝日11、東京10月3	行動
美術賞—下高原千歳、篠田正昭	友山莊賞—田中勇次
郎 奨勵賞—漆崎繁雄	ばれつと賞—吉川家永 会友
推挙—川端伊織、高井寛二、田中勇次郎、山森元龜、	
全和光、野尻弘、齋藤眞盛、入江信四郎、佐藤眞一、	
澤田豐志、森野照子、古田十郎、井寄武夫	
主要出品目錄 (○會員)	
集ひ、岩かげ	大場 淳
扇	○高井貞二
森	"
誘蛾燈	○田川寛一
その前	船越かつみ
化粧室	"
少女	○坪内節太郎
秋	"
海辺の裸婦	○下高原龍己
CIRICO	"
競馬場風景 B	"
Y 港展望	○生澤 朗

競馬場風景A
時雨景
秋景
初夏
くしけずる裸女
裸女と少女
憩ふ少女
静物と私
油ビンのある風景
南瓜と子供
昏明の時期
石川の畔
丘
野
頰
猪
花
山
芦
湖
樹
湖
湖
ピアノと少女
舌を出した道化
風
製材所
D館の裸婦
山
池
一

〇生澤 朗
〇福井 勇
〇柏原 覺太郎
〇難波 香久三
〇向井 潤吉
〇田邊 三重松
〇高橋 進
〇田中 忠雄
〇松田 種次
〇小出 卓二
〇榎倉 省吾
〇西田 秀雄
〇尾崎 悌之助
〇荒井 秀宜
〇伊東 久三郎
〇小林 武夫
〇村田 實史雄
〇河野 通紀

支那湖
牡丹と猫
室内裸婦
山と部落
山と部
青年座像
叢子による群像
椅子
二と人
黄と緑(A)
〇(B)
八月の浜辺
海
浜
古
城
の
歌
パッ
カ
ス
の
祭
り
家
族
祭
年
の
日
少
年
の
日
風
景
A
同
風
景
B
水
浴
蒼
族
タンク車のある風景
構
内
白
い
門
の
ある
風景
有
楽
町
裏
白
酒
場
裸
女

〇古家 新
〇伊谷 賢藏
〇三芳 悌吉
〇西坂 修
〇川原 章二
〇織田 雅嗣
〇永井 保進
〇宮野 進
〇長坂 春雄
〇玉澤 潤一
〇高須 國之
〇西村 清
〇飯田 清毅
〇浦久 保義信
〇伊藤 信夫
〇長谷川 勝人
〇山中 春雄

母下子
ガ
山
斜
河
裏
野間仁根小品展 7-11 高島屋
中谷泰個展 8-15 北莊画廊 批-毎日15
福澤一郎新作油繪展 10-14 日動画廊 批-朝日
1 回武蔵小路實篤油繪展 13-18 三越 批-東日
1 回立軌会洋画展 13-21 三越 批-毎日16
2 回創造美術展 21-10月10 都美術館 批-東日
24、東京25、毎日25、東京10月3、朝日10月4 創造
美術奨励賞一堀文子、俣田一穂
主要出品目録
(会 員)
橋本 明治
加藤 榮三
高橋 周桑
福田 豊四郎
澤田 宏毅
廣田 多津
奥村 厚一
吉岡 堅二
向井 久万
山本 丘人
秋野 不矩
菊池 隆志
稗田 一穂
堀文子
八丈島風景A
花と兎、鳥
裸婦
少年の群像
草上の秋
娘原、草の葉
立原、草の葉
卓達子像
踊る娘
群像
高橋 原像
裸婦
(準 員)
花と兎、鳥
八丈島風景A
B

母の誕生日 岩崎 鐸
ヒカルカオル

13回新制作派展 21—10月10 都美術館 批—毎日

25、朝日25、讀賣26、東京28、東京29、東京10月3

新制作派協會賞—伊東傀（彫刻） 新作家賞—赤穴宏

（繪画）、玉置正敏（繪画）、風間完（繪画）、久保

孝雄（彫刻） 岡田賞—田淵安一（繪画） 會員推挙

—芥川永、山本常一、田畑一作、西常雄（以上彫刻）

主要出品目録（會員）

（繪画）

黒鳥と海 猪熊弦一郎

コレクシヨナ—F氏の像

箱の中の小猫

青い服

皿の上の猫

赤い服と猫

兎を見る

浜辺

琵琶湖の船

機帆船

東京港

室内

裸婦

鏡と踊り

踊りの女子

夏の女子

笛を吹くサーカスの子供

浴室

二さいヴアイオリン

四つのポーズ

竹谷富士雄

椅子に倚る裸婦

横

室内

花

鈴木誠

踊り

横

室内

花

鈴木誠

横たはる裸婦

横

室内

花

鈴木誠

青年の像

横

室内

花

鈴木誠

秋

横

室内

花

鈴木誠

嵐の中の三色旗

横

室内

花

鈴木誠

宇宙盲点

横

室内

花

鈴木誠

石切場の父子

横

室内

花

鈴木誠

木樵刺市の像

横

室内

花

鈴木誠

向日葵

横

室内

花

鈴木誠

童子像

横

室内

花

鈴木誠

二人裸婦

横

室内

花

鈴木誠

竈瓦の門

横

室内

花

鈴木誠

窓

横

室内

花

鈴木誠

ありし日の居留地の家

横

室内

花

鈴木誠

少女（A）

横

室内

花

鈴木誠

少女（B）

横

室内

花

鈴木誠

緑衣

横

室内

花

鈴木誠

人形

横

室内

花

鈴木誠

裸婦A

横

室内

花

鈴木誠

裸婦B

横

室内

花

鈴木誠

赤い魚

横

室内

花

鈴木誠

裸婦A

横

室内

花

鈴木誠

裸婦B

横

室内

花

鈴木誠

裸婦A

横

室内

花

鈴木誠

裸婦B

横

室内

花

鈴木誠

窓際の裸婦

横

室内

花

鈴木誠

花作品

横

室内

花

鈴木誠

フロアアーラムブ(1ヶ)
吉村順三
広島都市計画とその平和記念建築
丹下健三
慶応義塾大学四号館
谷口吉郎
藤村記念堂
山口文象
高松市近代美術館
前川國男
小教会堂(東京)

11回一水会展 21—10月10 都美術館 批—毎日25
朝日25、讀賣26、東京28、東京29、東京10月3 一水
会優賞—深澤紅子、近岡善次郎、金九直衛 一水会賞
—中川力、筒井廣道、幸雅二 会員推挙—廣瀬功、酒
井亮吉、尾崎正章、ピアチェンティニ・フミコ、水野
勝美、兒島三吉、林達川

主要出品目録 (〇委員)

夏 ヒルム・クラストの山 奥田郁太郎
靜 阿蘇山の晩秋 〇田崎廣助
花 マダム・ルレキユ 〇高野三三男
姉妹像 〇中村琢二
画 家像 〇松田忠一
少 女像 〇中村善策
阿 修羅像
北海道の風景 〇中村善策
植 木の道輪 〇中村善策
土 堤の道輪 〇中村善策
麦 堤の道輪 〇中村善策
藏のある風景 〇中村善策

兄 浴田氏 弟 衣
柴田氏 像
黄色い服
夏の日の午後
ダンスホール
郊外の駅
小 駅
室 内
兄 像
黄 葉
晩 シンを踏む女
春 咲く花々
ビクトリア嬢
一 本 松
江の島に見える風景
靜 立物
仕 村新緑
山 村雪景
山 六公園櫻花
兼 六公園櫻花
室 内
B 氏 像
雪 町
雨 町
九 窓
額 像
釣 像
小 岩 風景
樓 門

丸野豊司
近岡善次郎
中畑艸人
金子博信
多 和 興 三
小 竹 義 夫
高 橋 庸 男
岡 田 行 一
久 野 昌 康
木 村 辰 彦
矢 野 雄 藏
堀 忠 義
堀 忠 義
菅 野 矢 一
末 松 勇
松 村 三 多
野 村 光 司
甲 斐 仁 代

銀屏風の靜物
夕 映 え
早春のながれ
ジョン・ゴメス像
S 夫人 像
薄暮浅間山
かんぞうをもてる少女
湯河原風景
小坂氏 像
奈良公園の藤
榮 秋 木 立 園
一 兵 卒 像
稻 村 け 崎
松 の 屋 敷
江 の 島
落 陽
裏 通 陽
市 街 展 望
市 街 展 望
裸 婦 像
靜 物
初 人 像
職 人 像
夾 竹 桃
は ち 桃
Y 氏とその娘さん
風 史 之 像
O 女 史 之 像
麦 秋

常岡卯三郎
鈴木良三
〇小山敬三
深澤紅子
〇安井曾太郎
〇山下新太郎
〇石川眞五郎
〇木下孝則
〇有島生馬
小 野 末
山 川 勇 一 郎
仲 田 菊 代
菊 地 秀 一
渡 邊 正 一
〇安宅虎雄
野 崎 利 喜 男
池 邊 一 郎
佐 藤 功 茂
〇裕三彩亭
〇石井柏亭

[illegible]

静物 (二十号)	樹と石庭	薔薇	裸婦	朝港	果物	新緑A	あじさいB	新緑	卓少女	静物	南瓜と御茶院	花瓜と古銅	南瓜	南瓜	無花果	海林	風岬	浜景	或る自画像	画家とモデル	K子像	卓上花	静物(1)	静物(2)	眞横向	桃(其ノ二)	桃(其ノ三)
〇兒島善三郎	〇佐川敏子	〇熊谷登久平	〇中尾彰	〇齋田武夫	〇鳥海青兒	〇小林和作	〇野口彌太郎	〇須田國太郎	〇中山巍	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎	〇小島善太郎
とうもろこしを食う子供	船	〇居串佳一	〇菊地精二	〇田中佐一郎	〇藤岡一	〇齋藤長三	〇宮島佐一郎	〇中間冊夫	〇岡部文之助	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎	〇高島達四郎
〇足達襄	〇宇根元警	〇木村忠太	〇狭間二郎	〇宮崎精一	〇緑川廣太郎	〇松島正人	〇樋口加六	〇赤星孝	〇末永胤生	〇岡村芳男	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助	〇山道榮助

[illegible]

[illegible]

井上長三郎
小松義雄
山口正城
長野誠之助
長谷川三郎
植木茂
伊藤憲治
野見山曉治
北垣正樹
植木茂
昆野恒
佐藤溪
小野里利信
佐藤美代子
山口薫
小川孝子

青い裸婦	夜の群像	赤い石	静かなる詭辯	臥裸婦像	あみものする婦人像	岸辺にて	人々と	女（A）	青い鳥（B）	海辺（A）	海辺（B）	風景（1）	風景（2）	婦人像	少女人像	秋の立像	小工場の木像	窓のゆゑ	あじさいの花の咲く頃	樹に攀つた少女	詩集「蜜蜂」の中より夢	苦惱	旅愁	傷口	白紙	契り
鶴岡政男	三木弘	寺田球一	林田重正	三井滋夫	村井正誠	佐田勝	大野五郎	清希卓	松本忠義	森芳雄	山口英哉	勝田寛一														
愛考	生思	男	風	少女	少女	静物	花族	孤獨	人々	静物	三鳥	海壺	裸婦	裸婦	ビノ	室内	三内	桃人	静物	いづみ	女	街	エスキース			
中條顯	中村眞	清水七太郎	末松正樹	中山次郎藏	小谷博貞	池田榮	蘭田猛	富成忠夫	榎山七重	松本正子	今井繁三郎															

遺作特陳 小山昇 十三点	廣幡憲 十点	佐分賞受賞者近作展 15—30	フオルム 批—毎日	現代洋画十人会展 15—20	松坂屋	菅野圭介個展 17—24	北莊 批—朝日21、東京23	現代フランス絵画複製展 18—29	国博 批—東日21、毎日26	北大路魯山人展 18—23	高島屋	春陽会秋季展 19—23	高島屋 批—東京22	前田寛治回顧展 20—28	上野・松坂屋	和田三造日本画展 21—30	三越	齋藤愛子個展 25—31	北莊画廊 批—毎日28	野口彌太郎個展 25—30	丸善 批—東京29	5回展 29—11月21	都美術館 日本藝術院・日展運営会共催 批—毎日11月3、朝日11月5、讀賣11月7、東京11月13	主要出品目録（○審査員△日本藝術院会員）	（日本画）	霞 沢 岳	西山英雄	カ ン ナ	望月春江	果 実	常岡文亀	出を待つ踊子	江崎孝坪	清 流	白倉嘉入	草 原	三谷十糸子
--------------	--------	-----------------	-----------	----------------	-----	--------------	----------------	-------------------	----------------	---------------	-----	--------------	------------	---------------	--------	----------------	----	--------------	-------------	---------------	-----------	--------------	---	----------------------	-------	-------	------	-------	------	-----	------	--------	------	-----	------	-----	-------

カ	楊	雲	羅	首	高	葵	投	「小	舞	寒	窓	水	桐	山	或	若	朔	先	蓮	迦	少	宵	秋	「江	山	不	牡	日	曉	櫻
ナ	上	二	漢		麗			梨				辺	郷		る		風	師		様			漢	湯						曉
リ	の	(対			雉			の				秋			家		飄	面					房	初						清
ヤ	花	幅)	窟		子	壺		花		燈	物	趣		彦	族	婦	雪	影		羅	女	月	深		夏	二	丹	向	露	秀
森	山	東	田	根	西	勝	生	川	伊	矢	廣	松	畠	田	堂	寺	水	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	横
田	口	山	岡	上	澤	田	田	崎	東	野	島	本	山	中	本	島	田	鏡	宇	結	岩	案	松	野	矢	太	郷	山	吉	横
沙	蓬	魁	春	富	笛	朝	小	深	橋	村	人	水	錦	以	印	紫	竹	木	荻	素	正	洋	月	浦	月	雨	靱	華	登	深
伊	春	夷	徑	治	畝	女	虎	水	村			成	庵	知	明	圓	方	清	荻	明	已	洋	月	浦	月	雨	靱	華	登	林
																														子
B	熱	高	漁	水	鏡	浴	向	二	青	初	小	裸	裸	夏	富	雲	竹	水	宵	若	夏	不	あ	向	蛾	秋	鳴	称	望	
	海	原	村	の	の	日				秋	春			(西	土			清	葉	の	の	を	日					名		
	の	の	の						間					洋	あ			涼	の			死	ま							
室	多	場	多	浴	前	後	葵	人	衣	川	日	婦	婦	賀	み			瑤	月	頃	山	鳥	な	葵	妍	門	瀑	頂		
阿	河	吉	奥	小	伊	榎	草	藤	藤	新	福	水	南	井	村	福	木	幸	永	松	磯	鈴	井	三	板	今	池	水	榎	
以	井	村	瀬	寺	藤	戸	光	江	本	保	田	上	手	手	嶋	田	本	松	田	元	部	木	上	輪	倉	中	田	田	本	
田	清	芳	英	健	清	庄	信	理	東	兵	新	信	政	宣	西	翠	大	春	春	道	草	恒	恒	梟	星	素	田	田	千	
治	一	松	三	吉	永	衛	成	三	良	次	生	雄	善	通	一	光	果	浦	水	夫	丘	雀	也	勢	光	友	邨	山	花	
修																													使	
由	阿	多	F	宇	川	富	婦	駱	高	叔	仲	浅	肖	水	連	行	裸	大	青	裸	新	柿	帽	湖	尾	伊	靜	西	竹	池
利	蘇	夫	治	の	士	人	見	同	父	五	間	の	見	辺	合	合	平	い	少	緑	の	子	子	畔	瀨	豆	伊	爽	爽	池
子	山	人	朝	奈	少	像	蕩	山	像	秋	の	見	る	朝	ひ	橋	婦	道	鳥	女	頃	女	(浮	屋	ヶ	湯	物	意	藪	畔
と	晚	川	像																			島	島	小	長	ケ	の	秋	秋	畔
ミ	秋	川	像																			島	屋	小	長	の	秋	秋	秋	畔
																						島	屋	小	長	の	秋	秋	秋	畔
○	田	△	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	富
伊	崎	川	中	太	白	小	中	山	小	鬼	高	木	南	中	有	寺	木	高	石	齋	森	小	赤	三	岩	柚	金	富		
原	廣	島	野	田	瀧	絲	村	下	山	頭	田	下	澤	中	島	内	間	川	藤	田	堀	城	宅	井	木	澤	田			
宇	助	理	和	喜	幾	源	研	新	太	鍋	下	老	造	光	馬	治	七	治	里	元	進	泰	克	彌	久	重	溫			
三		一	高	二	之	太	一	太	郎	三	則	造	光	弘	馬	治	七	治	里	子	舒	己	一	太	治	一				

杉村春子氏像	初衣K	黄衣K	最上小	画室小	松本郊	切部株	ブロン	朝顔	深人	婦人	はい	丘上	K室	室の露	踊りの工	緑の工	初鹿島	画室	繕ひ	藝科高	H信楽	Yahoh	立静						
中村琢二	樋口一郎	渡邊武夫	眞下慶治	△石井柏亨	中村善策	池部釣	高野三三男	伊藤四郎	佐藤一章	島野重之	山下忠平	谷澤一郎	西村喜久子	耳野卯三郎	櫻井悦	有馬さとえ	新道繁	田中繁吉	鈴木榮二	高宮一榮	納富進	村岡平藏	土佐林豊夫	田村一男	金子徳衛	大澤海藏	大久保作次郎	高光一也	渡邊浩三
牧年座人	青と裸婦像	猫と裸婦像	裸婦像	鹿上翁像	村上翁像	N姫の讃像	八田先生壽像	少女と山羊像	少女の像	花の観音(テラコッタ)	粧彫小鍛冶	能識人の首	知野老公	浅野誕生	釈迦の秋	(彫)の秋	牧場面秋	七つ鳥色	待つ門前	水の鏡	鏡の衣象	青石場の印象	探石場の印象	秋木曾川の源泉	伐川倒像	省子の(石橋)	能入(石橋)	奥入(石橋)	
木村桂二	宮本重良	柚月芳繁	木下繁	中野桂樹	清水多嘉示	佐々木大樹	喜多寒泉	叔山三穀	分内青園	大内朝秀	○橋本朝秀	後藤良	加藤顯清	△平櫛田晴中	北村正信	澤田晴廣	樽松正利	三上知雄	荒木穂雄	刑部人	平通武男	小早川篤四郎	丸田勝皓	跡見泰	清水敦次郎	鶴田吾郎	近岡善次郎	森田茂徳	佐竹徳
裸婦立像	浄に立像	磐の立像	女の立像	裸女群像	松浦九平氏像	裸化粧する裸婦像	英彦山踊	芋持錢翁	花持薫る女	秋草薫る女	夢草薫る女	裸婦立像	裸婦立像	裸婦立像	回廊の裸婦立像	古橋選手の像	想グビ	壁面裝飾試作(サロメ)	夢斧	風	蟬声閑居	哀靜一試	動靜一如	男習性試作	習性試作	男立像	青いうなばら像		
國方林三	横江嘉純	○松田尚之	畝村直久	宮地寅彦	服部仁郎	長谷川義起	杉本宗一	富永朝堂	一色五郎	森山朝光	羽下修三	都賀田勇馬	倉持芳	中川清	○和田全剛	○大須賀力正	○藤野舜正	樽谷清太郎	森野圓象	安永良徳	古川順三	水船六洲	長沼孝三	小室忠雄	古賀文夫	雨宮治郎	黒田嘉治	吉田三郎	赤堀信平

玉 峯 女 立 像 嵐
少 女 立 像 夢
春 曉 の 夢
(美術工藝)

○後 藤 清 一
△○内 藤 仲
△藤 井 浩 祐
△北 村 西 望

藤 樹 龍 文 二 曲 屏 風
乾 漆 春 華 飾 宮
金 工 青 銅 線 文 花 生
青 磁 花 瓶
金 工 磁 花 瓶

大 坪 重 周
小 松 芳 光
○丸 谷 端 堂
楠 部 彌 式
○岡 部 達 男
石 田 素 暎

金 工 雙 酸 花 盛 器
木 彫「菊慈童」御所人形
金 工 透 鉢 水 瓶
陶 器 紫 翠 沟 花 瓶
漆 器 雙 笑 國 小 屏 風
染 色 黎 明 屏 風

○海 野 建 夫
○野 口 光 彦
○信 田 洋
△清 水 六 和
番 浦 省 吾
山 形 駒 太 郎

手 織 錦 妙 義 郷 國 壁 掛
金 工 日 月 文 壺
陶 器 俊 馬 象 嵌 花 瓶
陶 器 盛 花 器
彩 磁 草 花 文 花 瓶
漆 器 刀 筆 文 寶 の 國 小 硯 宮
金 工 法 冠 (聖 觀 世 音 菩 薩)
金 工 兎 香 爐
染 色 紺 紙 摺 箔 草 文 樣 小 屏 風
漆 器 菖 蒲 の 屏 風
皮 染 色
金 工 祝 拜
刺 繡 陽 光 壁 掛
染 色 遊 童 國 四 曲 屏 風
彫 漆 水 虫 文
陶 器 老 松 國 壁 面 裝 飾 用 額
金 工「雲 山 拾 得」文 花 瓶
漆 器 菊 醬 乾 漆 水 指
金 工 臘 銀 小 瓶
ク リ ス タ ル ガ ラ ス 花 器
金 工 雙 蛾 文 花 器
竹 花 籃
漆 器 七 宝 燒 嵌 入 小 棚
金 工 漆 技 を 嵌 め た 青 銅 花 瓶
磁 器 彩 釉 象 嵌 八 稜 形 花 瓶
金 工 烏 伏 香 爐

山 鹿 清 華
香 取 正 彦
大 森 光 彦
○安 原 喜 明
△板 谷 波 山
△六 角 紫 水
北 原 千 鹿
△香 取 秀 眞
稻 垣 稔 次 郎
吉 田 源 十 郎
櫻 井 霞 洞
山 室 百 世
岸 本 景 春
○木 村 雨 山
佐 藤 陽 雲
北 出 塔 次 郎
佐々 木 象 堂
○磯 井 如 眞
山 脇 洋 二
○各 務 鐵 三
○原 直 樹
飯 塚 琅 玕 齋
會 田 裕 宣
山 本 純 民
伊 藤 翠 壺
内 藤 春 治

金 工 鏡 起 仏 伽 陵 頻 迦
漆 器 子 の 日 書 棚
染 色 秋 萩 二 曲 屏 風
金 工 喚 鐘
磁 器 富 貴 (清 香) 染 付 花 瓶
陶 器「遂」花 瓶
金 工 龜 甲 紋 飾 宮
彫 漆 獅 子 硯 箱
漆 器 蘭 と 猫 の 國 小 屏 風
金 工 平 象 嵌 花 器
染 色 秋 庭 二 曲 屏 風
漆 器 樹 間 錦 繡 繡 繡 立
描 染 織 室 内 裝 飾 華 布
漆 器 翳 翠 盆
陶 器 月 見 草 染 付 花 瓶
金 工 鴉 の 象 嵌 香 炉
金 工 扇 蕪 雙 魚 花 瓶
漆 器 詩 繪 花 瓶
磁 器 錦 彩 水 指
金 工 滝 文 花 瓶
漆 器 春 庭 木 地 詩 繪 軸 盆
陶 器 葡 萄 彫 文 壺
金 工 鳩・象 嵌 置 物
染 色 夏 実 有 華
金 工 (結 紐) 青 銅 花 瓶
漆 器 寂 光 手 宮

○小 合 友 之 助
北 原 三 佳
河 村 蜻 山
○清 水 六 兵 衛
鴨 幸 太 郎
堆 朱 楊 成
前 大 峰 夫
三 井 義 夫
○山 岸 堅 二
三 田 村 自 芳
皆 川 月 華
大 下 雪 香
近 藤 悠 三
高 橋 勇
杉 田 禾 堂
△○松 田 権 六
○河 村 喜 太 郎
長 野 埜 志
高 野 松 山
宮 之 原 謙
二 橋 美 衡
鹿 島 英 二
高 村 豐 周
○本 間 舜 華

金 工 雙 酸 花 盛 器
木 彫「菊慈童」御所人形
金 工 透 鉢 水 瓶
陶 器 紫 翠 沟 花 瓶
漆 器 雙 笑 國 小 屏 風
染 色 黎 明 屏 風
(書)

○上 田 桑 鳩
○羽 田 春 桂
○西 川 寧
○高 塚 竹 堂
○柳 田 泰 雲
○鈴 木 翠 軒
○辻 本 史 邑
○吉 澤 義 則
△○尾 道 春 海
△○尾 上 柴 舟
○川 村 驥 山
○手 島 右 郷
○松 本 芳 翠
○松 丸 東 魚
○國 田 湖 城
○中 村 蘭 台
○關 野 香 雲
○内 藤 香 石
高 畑 翠 石
新 井 琢 齋
○山 田 正 平
○石 井 雙 石
○黑 木 拜 石
○鈴 木 海 溪

○海 野 建 夫
○野 口 光 彦
○信 田 洋
△清 水 六 和
番 浦 省 吾
山 形 駒 太 郎

失歌自詠題 和歌自詠題 杜甫詩句 七言絕句 老松五絕行 法悲庵七言律詩 趙悲庵七言律詩 無下草上題 華淵明詩 陶淵明詩 月翁詩 頤成五言絕句 傷成五言絕句 杜少陵若竹 世尊寺八代抄

(日本画)

高原清秋館 待月夕女 街角の 少嶋の 浮嶋の 雲行雨 茶店立 蓮池映 夕映 夏物 縫日

(西洋画)

大池晴嵐 中村春堂 松井如流 鳥海鶴洞 西脇吳石 江崎節潭 山崎節潭 (故)林祖洞 大澤雅往 平尾孤往 近藤秋篁 相澤春洋 安東聖定 山口蘭溪 田中眞洲 田中塊堂

選

涙子 踊り ひとと 画室 婦人 六國前的 靜内 室內 少望 希望 光望 立望 凝望 追憶 過ぎにし 日 (美術工藝) 和染本栖湖畔の農家 金工水牛文花器 漆器和染の図蒔繪箱 陶器紅映堯花壺 「靜思」人形 金工「野ばら」の図水指 金工切嵌飾花器 金工章魚両耳花瓶 磁器印花壺 漆器水辺の花欄立 金工四季連作「夏」蛾の踊り伊 (書) 白樂天詩和松樹

小川博史 中川力 高田正二郎 朝比奈文雄 上島一司 林達川 小野彦三郎 筒井廣道 瀬戸田治 畫間弘 北村治 中村博直 遠山靜夫 齋藤吉郎 綿引弘 清水禮四郎 皆川泰藏 鹿島一谷 六角顯雄 宮下善壽 堀柳女 鴨政雄 小川友衛 池田逸堂 叶光夫 岡部敬象 藤豐 德野大空

林和靖詩 秋風辭 般若心經 鳥夜啼 杜甫寄弟詩 古今集四季抄 月雪花 津金龜仙 炭山南木 印南溪龍 宇野雪村 村上三島 能勢照郷 内田鶴雲 十一月 9回青々會展 1-8 三越 批 東京8 瓊珠會展 1-8 高島屋 批 東京8 鍋井克之個展 1-9 北莊画廊 批 東京6 大觀畫業六十年展 2-13 上野・松坂屋 批 朝日4、朝日8、每日9、東京12、每日14 向井潤吉個展 8-12 資生堂 入江波光遺作展 10-24 京都博物館 国画会秋季展 10-20 三越 批 東京19 森芳雄個展 10-16 北莊画廊 批 東京16 現代日本民藝展 15-23 第一会場 東横、第二会場 民藝館 梧竹傑作展 15-23 藝大 2回鈴木信太郎油個展 15-20 三越 2回勤勞者美術展 23-12月6 都美術館 批 朝日27 53回丁亥展 24-29 上野・松坂屋 十二月 濱田庄司新作陶展 1-7 三越 河井寛次郎新作陶器展 8-14 大阪・高島屋 2回白壽會展 11-15 高島屋 東郷青兒個展 12-15 高島屋

武者小路實篤個展 12—17 壺中居
8 回日本人形美術院展 13—17 三越
2 回香月泰男個展 19—28 フォルム

昭和二十五年

一月

船木父子新作陶展 2—8 やまと民藝店
西田弦(六才)油繪展 10—14 北莊画廊
現代美術自選代表作十五人展 11—29 批—讀賣16

東京20

關西彫刻家連合展 11—16 大阪・大丸
英連邦現代繪畫複製展 11—18 三越
女子美術展 13—21 三越 批—東京22

舞台美術展 13—21 吉田謙吉研究所創作発表
1 回無名會展 13—22 三越 批—東京22

原勝郎・木内克二人展 16—23 北莊画廊 批—東京20

東京20

津田青楓日本画個展 17—22 三越
鬼原素俊作品展 12—22 高島屋

3 回日本美術院彫塑展 19—24 三越
矢野目清彦個展 19—25 彌生画廊

5 たくみ工藝店

朱葉会春季展 24—29 銀座・三越
柏田泰次油繪展 25—31 資生堂

二月

上村松園とその藝術展 1—12 大阪・高島屋
アミチエ会ミニアチュール展 6—11 丸善 批—東京9

川端實個展 6—11 北莊画廊 批—東京9、夕朝
10、毎日16

16 回東光會展 8—17 都美術館 批—東京14
3 回日本美術會アンデパンダン展 8—17 都美術館 批—東京14、夕讀賣14、東京タイムズ15

龍村新製品陳列會 10—11 日本橋・龍村織宝館
現代繪畫觀賞展 11—17 壺中居 批—東京15

岸田劉生遺作展 11—28 木挽町・東洋美術館 批—東京17

岡田謙三個展 13—18 北莊画廊
須田國太郎自選作品鑑賞展 14—19 大阪・高島屋
佳入日本画展(生田・提原) 14—19 京都・高島屋

2 回日本アンデパンダン展 18—3月8 都美術館
讀賣主催 批—讀賣22、25、夕讀賣3月1

上村松園とその藝術展 22—3月8 高島屋 毎日
主催 批—夕毎日27、東京日々3月1、毎日3月2、夕讀賣3月5

荒井龍男個展 28—3月6 北莊画廊 批—東京3月6

三 三月
三岸好太郎遺作展 7—14 北莊画廊 批—夕讀賣

美術文化展 10—21 都美術館 批—東京15、毎日
15、夕讀賣22

白日會展 10—21 都美術館 批—東京15、夕讀賣
22

示現會展 10—24 都美術館 批—東京15、夕朝日
16、夕讀賣22

安井・梅原・坂本・藤田四巨匠油繪展 10—16 大

阪・梅田画廊
林武個展 14—22 北莊画廊 批—毎日16、夕朝日
20、夕讀賣22

一九四九年秀作展 15—31 三越 朝日主催 批—朝日19、東京21、夕讀賣22、夕朝日23

富岡鐵齋名作展 15—31 東洋美術館
丸木位里・赤松俊子「原爆ノ國」展 22—25 丸善
桃李會主催
三光會日本画展 24—31 三越
36 回光風會展 24—4月8 都美術館 批—毎日4月3、夕讀賣4月3

9 回創元會展 26—4月8 都美術館 批—毎日4月3、夕讀賣4月3、東京4月4
山樹會第1回風景画展 27—31 黒田陶苑 批—夕朝日30
高島達四郎個展 28—4月1 フォルム 批—夕讀賣31

四月

春の青龍社展 1—12 三越 批—夕毎日5、東京
1 回朝倉攝作品展 1—7 北莊画廊 批—東京7朝日9

六窓會展 4—9 高島屋 批—東京10
三井文二日本画個展 6—11 黒田陶苑
九品庵日本画展 6—12 壺中居

4 回アンデパンダン女流画家協會展 9—26 都美
術館 批—夕讀賣12、毎日13、夕刊中外14、東京20、東京日々22、東京23

27 回春陽會展 10—26 都美術館 批—毎日14、朝
日16、東京19、夕讀賣19、東京20、東京日々22、東京
23 會員推荐—小川マリ子

[illegible]

批—每日20

新制作派春季展 17—22 丸善 批—夕朝日22、夕朝日22

朝日22

日本美術院小品展 18—30 三越 批—夕朝日22、夕朝日25

夕朝日25

春光會展 18—23 高島屋

伊谷賢藏・榎倉省吾作品展 18—22 資生堂

青木大乗近業展 18—23 高島屋

5 回行動美術春季展 20—26 三越 批—東京タイムズ22

ムズ22

現代木版画展 20—22 京橋・国際文化振興會

坂本万七佛像写真展 21—28 たくみ 批—東京タイムズ24

イムズ24

二科會春季展 28—5月7 三越 批—夕朝日5、夕朝日5、東京8

夕朝日5、東京8

10 回日本画院展 28—5月11 都美術館 批—東京8

8

4 回行動美術全開西展 29—5月7 大阪美術館

五月

中谷ミユキ個展 1—6 資生堂

兒島善三郎滯歐作回顧展 1—9 北莊画廊

1 回日月社展 2—9 三越 批—夕朝日7

1 回由良玲吉紙藝工藝展 8—13 資生堂 批—朝日11

日11

8 回東丘社日本画展 9—14 京都・大丸

38 回日本水彩展 9—19 都美術館

今村俊夫遺作展 10—16 北莊画廊 批—夕朝日15

15 回清光會展 12—16 壺中居

4 回連合展 14—6月7 都美術館 批—夕朝日20

朝日21、每日21、夕讀賣24、東京25、26、東京タイム

ス26、讀賣26、東京日々30、31

4 回六人展 15—20 資生堂 批—夕朝日19、東京20

20

寺内萬治郎個展 17—24 北莊画廊 批—東京22

6 回国土會展 17—21 高島屋

2 回創造美術春季展 23—28 高島屋 批—每日26

夕朝日28、東京28

主要出品目錄

(會員)

少年供養

柿若葉

くさむら

董の花輪

野の花輪

そい

白い

チューリップ

風光

帽子の女

溫室の花

壺の花

作の品

街角の商館

婦人の像

湖畔の旅

八丈島

島

五月會展 23—28 高島屋

高島美術部主催、壺中

五月會展 23—28 高島屋

居集集陶磁併陳 批—朝日28

2 回関西二科クラブ展 23—31 大阪美術館

佐伯米子個展 25—31 北莊画廊 批—東京29

六月

荻太郎個展 1—7 北莊画廊

日本美術協會日本画展 3—15 三越 批—夕讀賣

貞以熟春泥會展 5—10 大阪・三越

東華會展 7—15 東洋美術館

2 回自主連立展 9—19 都美術館

矢部友衛個展 14—19 北莊画廊

2 回双青會展 14—17 壺中居

連袖會展 15—21 三越

川村吾藏彫塑遺作展 17—23 三越 批—夕朝日19

21 回第一美術協會展 20—7月1 都美術館

3 回香月泰男展 20—30 フォルム 批—夕朝日30

4 回旺玄會展 21—7月1 都美術館

8 回大日展 23—7月1 都美術館

1 回月岡榮貴個展 25—30 上野・松坂屋

七月

2 回日本彫刻家連盟展 1—15 都美術館

鶴岡政男個展 1—7 北莊画廊 批—東京6

坂本繁二郎自選回顧展 1—11 三越 批—東京12

夕朝日7月7、夕朝日7月4

荒井陸男個展 2—5 丸の内・工業クラブ 批—東京日々25

1 回日本画人展 2—12 都美術館

6 回現代美術展 2—12 都美術館

東山魁夷個展 3—6 丸善 批—東京6

島田訥郎個展 11—16 上野・松坂屋

19回朔日会展 13—24 都美術館

4回新樹会展 13—20 三越・批—毎日16、東京17

中外19、夕讀賣20

9回水彩聯盟展 14—24 都美術館

2回阿部六陽日本画展 14—18 高島屋

創元会会員展 22—30 三越

2回チャールズ会油繪展 23—30 三越

妹尾正彦・田中行一洋画展 31—8月5 丸善

八月

牛島憲之個展 1—2 北莊画廊

原爆ノ図三部作展 丸木位里・赤松俊子共同製作

7—12 丸善

イサム・ノグチ作品展 17—30 三越・批—毎日17

夕毎日21、東京日々25

本宮龍太郎個展 22—26 北莊画廊

九月

美術文化秋季展 1—7 三越

5回行動美術展 1—20 都美術館 批—朝日3、

毎日3、東京7、東京11 行動美術賞—高井寛二、

田中勇次郎 友山莊賞—富岡賢二 奨励賞—江見絹子

石倉貴美男 パレット賞—山田稔 会員推挙—山中春

雄、川原章二 新会友九名

主要出品目録

(会 員)

子供、木の笑、とんぼ 下高原龍巳

集 い、女 高橋進

人 魚 キ テ イ 小林武夫

現代美術展覧会(昭和二五年)

湖口、合奏、七夕、湖畔

秋の夜のものがたり、鳥影

海の 饗宴 洋裁する女たち、掛けたる裸婦

亭 午

田園の静物、五月の朝、山小屋

ダリア、海浜暮色、原生林の湖

畔、朝霧の港、街の波止場

村の祭壇、みくにを来らせ給え

長崎マリヤ園

あかるい・くらしい、花は

一つ一つ、かげ

婦人像、暮色哀愁の図、

緑蔭翫喜の図、卓上秋色図

鉄骨、夕陽、陰影

海、尾の道風景、棧橋

簡窓より、道化の行進

高原の牧場、たそがれの樽前山麓

牡 丹、猫

婦、顔 顔

岩 藍の 鳩、梅

伽 藍の 鳩、梅

麦秋ひなげし、静物(庭)、

静物(室内)

三 人、二 人

ぬかるみエレジー

(影 刻)

石 試 作

青年、裸婦立像、K夫人像、三

人、裸婦座像、脱衣

榎倉省吾

田川寛一

高井貞二

柏原寛太郎

向井潤吉

村田養史雄

田邊三重松

田中忠雄

浦久保義信

伊谷賢藏

生澤朗

小出卓二

三芳悌吉

伊藤信夫

古家新

坪内節太郎

飯田清毅

伊藤久三郎

福井勇

西阪修

難波香久三

板谷慎

林是

作品79、作品80

トルソ、作品Aの8、作品Aの9

(推 薦)

少女の首

トシエ、Mr.Coons

(会 友)

死の鶏と花束、即興的な

静物、貝殻の追想

軽業、落雁、海鳥

ふねと少女といかり、

もりの少年

曲技、夜の歌

樂園、ひと、海辺の歌

滯船、冬の装い

二條展望、埴輪

干潮を待つ子供たち、白日

親子、涼み

七面鳥、あじさい

Y子の肖像

K劇場、室内、船内

洋装、店、月夜

黒い草、原

窓外、風景

眠る子供、都会

ばら、花、丘

朝の花々

大の山、晩春

Mの像、氏

涅槃図、涅槃図

中島快彦

建島覺藏

今村輝久晃

河井正典

川端伊織

山中春雄

下高原千歳

河野通紀

山森元龜

鈴木秀雄

西田太郎

熊坂太一郎

玉澤潤一

大場厚

高井寛二

入江信四郎

織田雅嗣

永井保

澤田豊志

佐藤眞一

西村清

佐藤眞

森野照子

尾崎悌之助

齋藤眞成

作品 船越かつみ
 果樹園 古田十郎
 粧い、作品、三人 宮野進
 ていぶる、めりーごう 上山哲夫
 らんど
 伝説、或る日の夢 全和光
 子 供、海底 川原章二
 森の話、空地、自画像 田中勇次郎
 森の朝、牛滝山風景 荒井秀宜
 西銀座、有樂町河岸 長谷川勝人
 風 野尻弘
 湊川トンネル、阿波踊 井寄武夫
 春、 高須國之
 上妻村 山口正雄
 35回二科展 1-19 都美術館 批一朝日3、毎日
 3、讀賣4、東京7、東京11、東京日々17 功勞賞
 東郷青児 会員努力賞 藤井二郎、松井正、岡本太郎
 鷹山宇一、上田曉二 科賞 齋藤三郎 特待 石橋宏
 一郎、森田太郎、戸川串田、吉村勲、日高正法、曾山
 節雄 会員推挙 井上賢三、桂ユキ子、織田廣喜、荻
 野康児、鶴岡義雄、野口功造、若松羊瑤

主要出品目録

（繪画）（會員）

A、エピソード B 山口長男
 タ映え 野村守夫
 街の 寺田竹雄
 神々の 中原實
 北海の 山本敬輔
 スリンピー A 山尾薫明
 スリンピー B

女人 佛
 ファイナール
 フアンダンス
 がくや
 橋、海、夕浜、水郷
 港の見える丘
 長崎の町、長崎の丘、
 天主堂の中、丘の家々
 海、海、海、I氏像、
 肖像
 海の見える丘、釣橋、
 滑船、海女
 裸婦A、裸婦B、裸婦C
 花と壁掛、室内、女と魚
 青いコスチュームの女
 お多福、執着獅子、（舞踊）
 羅をまとう女
 夏の山川、森の泉、黒
 二科三十五人 像
 すばる星と金牛宮、網
 の魚、夜曲夜釣、星座
 漂泊の歌、追憶、荒野
 の歌
 浜辺の歌
 ミス X
 暗い街、まひる
 少女と七羽の鳥
 田園交響樂
 繪のある繪
 街、風、蝕
 海辺裸女

錦 義一郎
 服部正一郎
 鈴木信太郎
 高岡徳太郎
 松本弘二
 藤川榮子
 藤井二郎
 米良道博
 北川民次
 松井仁根
 野間仁根
 麗山宇一
 東郷青児
 大澤昌助
 吉原治郎
 井上覺造
 桑原實
 清水刀根

画室の裸女
 麥刈、麦やき、とうみ
 那岐山（赤）
 那岐山（青）
 風景、人物
 カンナ
 高原の庭湖ナ
 高みどりの庭
 踊り、二人
 青の 春
 森の 掟
 ネブチューン、月
 壺・枯木・石など
 根、夏
 白蛾、小松
 （彫刻）
 横たわる女
 K夫人像、葡萄酒、顔
 島のあんこ
 レダ、和
 二つの和
 男の立像
 立像、坐像
 トルソ、首（A）
 首（B）
 自像
 髪
 二科三十五回
 （準會員）
 （繪画）
 プリユーファンタジー
 鳥と少女、サーカスの女

吉井淳二
 福島金一郎
 伊庭傳治郎
 小林喜一郎
 青山龍水
 佐藤吉五郎
 山路眞護
 岡本太郎
 阿部金剛
 加治屋隆二
 鱷利彦
 上田曉
 植木力
 妹尾健太郎
 乗松巖
 笠置季男
 上田曉
 安藤菊男
 堀内正和
 乗松巖
 浅野孟府
 大西金次郎
 井上賢三

員

水浴 井上賢三
讃歌、曲、女 織田廣喜
こまつた 桂ユキ子
飛マドモアゼル、魚を持 鶴岡義雄
つ女、群像 荻野康兒
街(日比谷) 荻野康兒
街(銀座) 荻野康兒
街(日本橋) 荻野康兒
老婆像、抱擁 鷺泰次郎
男立像 淀井敏夫
裸(立) 野水信
裸(坐) 野水信
35回院展 1-19 都美術館 批一朝日3、毎日3
夕刊中外6、東京10、東京11 大觀賞・日本美術院賞
1 顯出英雄、岩橋英遠、高橋米子、千野茂(彫塑) 日
本美術院賞・中島清、片岡球子 日本美術院賞・笠
村草人、院友推挙・本間堯彩、大智経之、関山御島
伊藤弘人、川上芳江、菊川多賀子、大塚堅二郎、岩崎
玲千、青木英夫、檀野澤、澤野育、松井牧牛、伊坂靜
雄津田榮子、寺内幸雄、小畑廣三、武井斌、基俊太郎
(寺内より彫塑)
主要出品目録(同人)

バ(繪画) リーナ
渡頭新雪 田中青坪
漁港の朝 酒井三良
瓶花、花屑 富取風堂
舞花、花屑 小倉遊亀
新涼雅品 小谷津任牛
鯉 堅山南風
大觀先生像 前田青邨
安田靱彦

流れゆく水 横山大観
壺 小林古徑
髪海 中村貞以
樹海の秋 郷倉千靱
爽涼室 大智勝観
温 新井勝利
軍 奥村土牛
苔寺須彌山石 北澤映月
母の日の鶴 眞道黎明
桃、津島の娘 小松均
神津島(彫塑) 村田徳次郎
村の少年、菊池氏像、女 石井鶴三
肖眞夏の夜の夢 關谷充
藤井一郎氏像 辻晋堂
坐不動試作 宮本重良
不君像、坐女 松原松造
T君像、少年の首 喜多武四郎
習作、会津博士像 中村直人
鶏、EVA、婦人像 大内青圃
月神(頭部) 林昌院開山頂相
昆廬遮那佛試作 昆廬遮那佛試作
裸 古藤正雄
エチユード 山本豐市
22回青龍社展 1-12 三越 批一朝日3、毎日3、
東京10、東京日々13 奨励賞・結城天童、竹内未明、
高山晴雄 社友推挙・高山晴雄、古野新生、兒玉三鈴

加藤輝三 主要出品目録
沼の鑿安 川端龍子
金閣炎上 加納三樂
遠花火、年棚 福岡青嵐
桃源山 山崎亨
ゴール、夏宵 市野
落の子、道後鷺の湯(連作の五) 安西啓明
雨の子、道後鷺の湯(連作の五) 小島鼎子
苔庭 時田直善
漁帆 松宮左京
滝子 龜井藤兵衛
山落像 琴塚英一
あざみ 佐藤土筆
長春(社友) 結城天童
花上 竹林心耳
二上 竹内未明
山 丸山 鮫
霧流 佐々木邦彦
神鹿 入江臥水
松王丸 大塚香緑
翠 高山晴雄
茂林 古野新生
漁村小景 兒玉三鈴
2回立軌会展 9-15 三越 批・東京12
川島理一郎個展 14-20 三越 批・夕朝日18、東
磯部章丘個展 14-19 三越 批・夕朝日18

菅橋彦浪速懷旧小観展 19—24 高島屋

関西自由美術展 19—28 大阪美術館

12回一水会展 21—10月8 都美術館 批—東京23

夕朝日24、毎日26、東京26、讀賣10月2 一水会優賞

—荒谷直之介、高橋庸男 一水会賞—上田哲農、大津

鎮雄、岡田高平 S賞—福田新生、新井一郎 雄鶴社

賞—マリエ・デドウフ 新会員—筒井廣道、中川力、

幸雅二、別車博資

主要出品目録

(委 員)

残雪、牟礼の道、漁港	納富進
入ヶ岳山麓の村	高田誠
春の江の浦	高野三三男
白交響樂第三樂章	中村善策
白のエチュード	奥田郁太郎
森と港、北の国	小山敬三
短歌を作るG嬢	山下新太郎
桔梗の窓	有島生馬
盛夏の浅間山	木下孝則
Y O 子 像	木下孝則
天龍峽風景	安井曾太郎
瀬田川より琵琶湖を望む	石井柏亭
S 夫人 像	安井曾太郎
千曲川	安井曾太郎
黒衣夫人 像	安井曾太郎
N G 像	安井曾太郎
小室君像、孫、桃、大内氏像	安井曾太郎
芙蓉湖	安井曾太郎
嵐の	安井曾太郎
舞扇、はらみ猫、老巡査、軍鶏飼	安井曾太郎
う男	安井曾太郎
関門海峡の朝	安井曾太郎

鮎と鯉、静物	秋の草花	阿蘇山	裸婦、静物	良太の像	緑衣の女	セロをひく男	炭焼の家	高原部	あらいぎ風景	花咲く村道	(会)	スキー友達	哀しい平和	巷の女たち	赤いチャケツ	婦人像、街角	赤い倉庫の有る	運少	函館の初秋	雨の	T嬢の像	兎走近し	優勝馬	窓際室	エテイユド	アブレ・ミディ	馬込の麦秋	私達の午後	漁港の午後
--------	------	-----	-------	------	------	--------	------	-----	--------	-------	-----	-------	-------	-------	--------	--------	---------	----	-------	----	------	------	-----	-----	-------	---------	-------	-------	-------

員

山川勇一郎	福田新生	尾崎正章	小野末衛	金丸直衛	丸野豊司	池谷寅一	菅野矢一	中畑艸人	廣瀬功	近藤吾朗	田坂乾	近岡善次郎
-------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-----	-------

日暮の公園	F校長さんの像	港内	蓼科風景	白樺林	赤い上	潮来の晩春	牧舎の秋	野毛皮による少女	厚川雪景	砂川氏の像	楠雪国の子供	T嬢像	裸婦	編物する女	橋の見える橋	文楽人形	文楽人形	三寶寺	雪どけの山ふところ	初めて縫った浴衣	焼跡工場から	窓辺の少女	窓辺の少女	初マンドリン	早春、鳴門
-------	---------	----	------	-----	-----	-------	------	----------	------	-------	--------	-----	----	-------	--------	------	------	-----	-----------	----------	--------	-------	-------	--------	-------

B A 3 1

金子博信	野村光司	小竹義夫	眞下慶治	久野昌康	鈴木良三	源川雪	堀忠義	末松勇	矢野雄蔵	日塔笑子	菅沼金六	荒井一郎	菊地秀一	松田忠一	松村三多	森寅雄	大月源二	富樫正雄	須山計一	深澤紅子	渡邊正一	木村辰彦	石川眞五郎
------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	-------

爪切る裸婦	仲田菊代	三原山、あんど	狩野壽一	土佐廻風景	静物 1(チンジャ)	三岸節子
古城跡	本郷淳	午後三時	岡田行一	静物 2(夜の構図)	2(夜の構図)	
焼夷彈のある静物、夕映えの立つ女	高橋庸男	婦人像	谷内俊夫	静物 3(窓)	3(窓)	
浜の黄昏	林達川	斜人	木下壽々子	静物 4(金魚)	4(金魚)	
天竜河岸(川岸村附近)	高橋貞一郎	人形たち	千ヶ崎悌六	静物 5(山椒)	5(山椒)	
湖畔の夏	尾澤勝朗	女学生	不破章	静物 6(首)	6(首)	
池	小栗精	裸婦	富田通雄	花にくる天使		脇田和
T女像	片山芳樹	K君の像、夏	荒谷直之介	子使の作品師		
婦人像	鍋谷傳一郎	丸	岡崎祇容	子供はトランプが好き		
裸婦像	弦田英太郎	つくつくぼうし鳴く頃	常岡卯三郎	漁船、畫、漁場		石川滋彦
緑	等々力巳吉	赤マンマ	黒田外喜男	私の現代繪画考A(キサク風の試作)		内田巖
霽	松田晃八	瀬戸風景	水野勝美			
埋れた川	朝倉力男	朝の溪内	河上一也			
裸	坂本正春	室人	加藤一豊			
黄色い服	酒井亮吉	夫人像	大橋文子			
奈良公園の春	小野藤一郎	14回新制作派展 22—10月8	都美術館 批—東京			
春日山の溪谷	名取明德	23、夕朝日24、毎日26、東京26、東京29、東京日々10	月2、讀賣10月2、讀賣10月9			
集学工場	新海覺雄	月2、讀賣10月2、讀賣10月9	新作家賞—絲田芳			
山村初秋	小平鼎	雄、田中鶴子、赤穴宏、角浩、金山康喜(彫刻)	小坂圭一、手島修、永田大石			
画面	多和興三	主要出品目錄				
古木の夜	三角嘉壽男	(繪画)				
小作風の風景	三浦俊輔	(會員)				
あづみの柳蔭	瀧川太郎	少女、壁、砂丘	小磯良平	子供達、夜、少年、少憩		伊勢正義
夜	池邊一郎	裸婦A、裸婦B	三田康	Sの像、Aの像		内田武夫
果樹園の静物	一木萬壽三	曉の訪問者	伊藤繼郎	少女、座像		
小花	兒島三吉	黄と黒		本讀む女		
漁港の門	林鶴雄	オランダ領事館風景	小松益喜	六つの顔、バレリーナ夢想、繪を描くN氏		猪熊弦一郎
花		中之島風景		テンプルの前の裸婦、少女二人、森の中の女		竹谷富士雄

（彫刻）

慶応義塾中等部校舎

山口哲郎

黒いタイツ

村尾紬子

牛と少女

明田川孝

銀座不二越ビル

岡田哲郎

休息

村尾紬子

アザレヤ

舟越保武

プロテスタントの教会—久ヶ原

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

鶏、家鴨、水鳥

山本常一

教会—

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

音楽家I氏

田畑一作

食卓と椅子

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

青

菊池一雄

（協）

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

平和の群像—試作

菊池一雄

（繪）

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

同部—試作

菊池一雄

（繪）

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

犬—試作

菊池一雄

（繪）

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

婦人—試作

菊池一雄

（繪）

山口文象

鳥踏、年輪

田中鶴子

夕張市労働会館外壁浮彫（部分）

山内壯夫

鏡

若松光一郎

立

久保孝雄

戦歿学生記念像—きけわたつみのこえ—

本郷新

クレインのある風景（B）

田中正三

3回創造美術展

都美術館—東京27

S

吉田芳夫

牛、三

丸山正三

裸男習作

山本格二

ミ

早川義一郎

ホテ

西田勝

一九五〇年の作品

永田大石

たつろ

佐藤忠良

緑色—（摘える）

西田勝

裸男習作

山本格二

オ

村田勝四郎

はだか—（坐わる）

西田勝

裸男習作

山本格二

F

芥川永

はだか—（坐わる）

西田勝

裸男習作

山本格二

裸婦立像

村田勝四郎

はだか—（坐わる）

西田勝

裸男習作

山本格二

（建築）

吉村順三

Les Prisonnière

桑田道夫

裸男習作

山本格二

ソ

吉村順三

室

桑田道夫

裸男習作

山本格二

イー

吉村順三

室

桑田道夫

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

子

丹下健三

初秋の庭

太田忠廣

裸男習作

山本格二

三 (準) 人 廣田多津

初孫 誕 生 岩崎 鐸

青い電車 堀 文子

海 辺 碑田 一穂

湖のむれ 三越

魚のむれ 三越

中村蘭台篆刻工藝展 22—28 三越

恩地孝四郎新作版画展 22—28 三越

黒田久美子個展 27—30 資生堂 批—東京10月1

1回型生派美術家協会展 27—10月4 三越 批—

朝日10月2、毎日10月3、東京10月3 都美術館

1回全国学生手工藝展 29—10月8 都美術館

1回國松登個展 30—10月7 フォルム 批—夕朝

日 10月5

十月

東京藝術大学開学記念特別展 4—6 藝大美術学

部正木記念館 18回独立展 10—27 都美術館 批—毎日13、朝日

14、讀賣16、東京22、東京タイムズ22、東京日々22

会員推挙—大久保泰、伊藤彪、中津瀬忠彦、清水鍊徳

江川平三 独立賞—芝田米三、岡部繁夫、河村春、下

川都一郎、豊田逸二、妹尾正雄

主要出品目録

(会 員)

犬、溜池、卓上 須田國太郎

長崎の家、オランダ坂附近(長崎) 松島 正人

長崎の街 国際市場、サーカス(A)、サー 太田たけを

カス(B) 齋田 武夫

日向葵の種子と果物、冬蟲、向日葵の種子

橋 (鋼路) 鈴木 保徳

春 (熱海) 高島達四郎

霧 (鋼路) 島海 青兒

皿と二つの果物 緑川 廣太郎

皿と三つの果物 緑川 廣太郎

皿と四つの果物 緑川 廣太郎

静物、秋 緑川 廣太郎

ひまわり 緑川 廣太郎

夏山、静物、立秋 緑川 廣太郎

静物、裸婦、横向婦人像 緑川 廣太郎

棒、つつち 緑川 廣太郎

朝 黒衣の女 緑川 廣太郎

高田馬場風景 緑川 廣太郎

酒田港、麦の丘、(A)公園より 緑川 廣太郎

山の花、高原、あじさい 緑川 廣太郎

眠る裸婦 緑川 廣太郎

鏡の風景 緑川 廣太郎

都会の風景 緑川 廣太郎

お茶 緑川 廣太郎

裸婦習作 緑川 廣太郎

猫を抱く子供、子供達 緑川 廣太郎

母と娘、軒下、向日葵 緑川 廣太郎

小鳥、黒いバツクの静物 緑川 廣太郎

さかな、さかな、壺とさかな 緑川 廣太郎

果実、静物、夏 緑川 廣太郎

港の広場(鋼路) 緑川 廣太郎

野口彌太郎

工場と山(日鋼室蘭)、アイヌ老夫婦 中山 巍

アトリエの一隅 熊谷登久平

緑の首飾 中間 冊夫

猿、鴉、虎 少年(A) 少年(B)

少 少年(A) 少年(B)

婦人 少年(A) 少年(B)

坐女、静物 少年(A) 少年(B)

釋の庭、窓外、学院 少年(A) 少年(B)

静物(A)、静物(B)、静物(C) 少年(A) 少年(B)

紫陽花、芥子、風景 少年(A) 少年(B)

裸婦(A)、裸婦(B)、裸婦(C) 少年(A) 少年(B)

二人、横顔、顔(B) 少年(A) 少年(B)

御苑裏寄、四谷より、けさの秋 少年(A) 少年(B)

金魚鉢、百台、夏みかん 少年(A) 少年(B)

道北の秋 少年(A) 少年(B)

道北の秋 少年(A) 少年(B)

石佛(A) 少年(A) 少年(B)

石佛(B) 少年(A) 少年(B)

椅子による女 少年(A) 少年(B)

森 少年(A) 少年(B)

壺(A) 少年(A) 少年(B)

壺(B) 少年(A) 少年(B)

花、風景 少年(A) 少年(B)

静物(A)、静物(B)、静物(C) 少年(A) 少年(B)

水をかむる男、帽子の男、静物 少年(A) 少年(B)

梅林、ザクロ、晩秋、晩秋山村、古堂、葉龜頭 少年(A) 少年(B)

早春山村、柿 少年(A) 少年(B)

あぢさい、雪、黒衣の女 少年(A) 少年(B)

紅衣、腰かけの女、帽子の女 少年(A) 少年(B)

室内、漁場、静物 少年(A) 少年(B)

久保一雄

小出三郎

中村節也

楠本峻士

坂本善三

中村善三

菊地精二

松島一郎

宮島佐一郎

志村計介

岡村芳男

小原雄二

赤堀佐兵

高橋忠彌

樋口加六

狭間二郎

池島勘治郎

葉龜頭

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

久保一雄

冬 瓜、池 辺 山道榮助
秋、冬、春 鳩川誠一
男・子供・犬 鳥居敏文
風の 日 ヌ
静物、風景、人物 木村忠太
笛、ハ、ゼ 足立襄
風景(B) 大田啓介

(準備員)

風景(A)、風景(B)、後楽園外苑 中津瀬忠彦
布地、窓眺、静物 江川平三
赤いボレロ、家族、母の像 大久保泰
秋葉原駅より、都会、霧の山 清水鍊徳
大島風景、倉と湖 矢崎牧廣
海浜のスタチニード、群舞 横地康國
14回自由美術展 10-27 都美術館 批-毎日13、
朝日14、讀賣16、東京タイムズ22、東京23 会員推挙
—荒木道夫、小野忠弘、文挾克明、小谷良徳、山田繁
雄、團雄二

主要出品目録

(会 員)

伝 説 井澤元一
青年の首(A)、青年の首(B)、青年のト
ルソ、女、少女、(以上彫刻) 木内 岬
白 いばらの花 寺田 球磨
モンマルトル、語る人、肖像(木暮実千代)
漁 夫、農 婦 松本 正子
海 の 静 物 手塚 益雄
蛾、タヤ 山田 光春
三態、デコラチーフ試作 末松 正樹
机 の 上 の 魚 林田 重正

舞 踏 山口英哉
愛 登崎太三郎
貌、三人の塔、屋内の女 野見山曉治
夜の橋、コンポジション 井上 照子
ひ と び と 吉 井 忠
空、 田 中 健三
風 あねいもと、朱い笑、お面 小谷 博貞
創 世 紀 竹 中 三郎

朝の球、手鏡、オリンボスの饗宴(以上繪画)
乳房、メ・フラワー号(以上彫刻)

座 像 小林 邦二
三羽の鳥のコンポジション 中山次郎藏
裸婦A、裸婦B、裸婦C 麻生 三郎
静 物 佐藤美代子
コンポジション 佐 田 勝
キタール、母子像 月田美都子
海、小さき生活、キツサ店にて 瑛 九
組織と形相(繁植の言葉) 三 木 弘
工場地帯A、工場地帯B、廃墟 中島 保彦

窓 庭 前
女たち、母と子 長野誠之助
街の貌、街の断層 清水七太郎
アイロンをかける女 渡力敷唯信
作品A、作品B 藤 間 清
母と子1、母と子2、母と子3、母と子4 富成 忠夫
菊地 又男
フアンタステイク・バレエ 澤野井信夫
路 傍、夕 月、壁 川口 精六

坂 道 蘭田 猛
風景、蒙古婦人像 佐 藤 溪
お 猿 の 会 議 清水 正策
月 の 光 倉 石 隆
猫のいる家族(象形文字繪画試作) 長谷川三郎
動く、旅、人々、遊歩 小野里利信
虹、裸 婦 難波田龍起
男、風景、静物 井上長三郎
生と死の凝視、灯の中の相談、ひまわり

原爆に祈る、收縮と開放 寺田 政明
顔 清 希 卓
男と建物、少女 池田 淑人
男 三井 滋夫
幼 女、裸 景 久保田久一
豆 明 婦 塚谷 政義
裸婦、風景、静物 今井繁三郎
裸婦A、裸婦B 仲村 俊夫
女、顔 奈知安太郎
二 人 大野 五郎
山 の 花、牧 童 西村 保史郎
地 上、月 水谷 武彦
電気スタンドのある静物 勝田 寛一
夜の 生 誕 西田 信一
明 け 方 伊藤 憲治
娘、月に映える 中山 一郎
聖馬(エツチング)、初年兵哀歌(エツチ
ング) 小山田 二郎

モルペーA、モルペーB、線群A、線
群B 濱田 知明
山口 正城

デッサン—外国の女、街の女、人物、女、
ベロ、パイプの男、彫刻—鳥、A、顔、
首、芽
彫刻—裸婦、青年立像
デッサン—午 後 峰 岡 政 男
デッサン—老人の首、彫刻家の首 新 田 恒 孝
4 回第二紀会展 10—27 都美術館 批—毎日13、
朝日14、讀賣16、東京22、東京タイムズ22 第二紀賞
—古賀肇 佳作賞—吉田富士夫、西村功、濱田信次、
堀江萬壽男 努力賞—安藤義茂 同人賞—築山節生、
山口操助、藤村恒夫、兒玉幸雄

主要出品目録 (同人)

水 浴、浴 後 藪野 正 雄
モデルとリボン 宮 川 仁
変形組画(具象同存)、顔、心の静物、スウベニ
アシヨツプより港町を望む 峯 岸 義 一
防火用水、ガスコンロ、勝手 島 岡 實
静物A、静物B、厨房 佐々木 孔
みづ た ま り 橋本 徹 郎
都 会 と 月 “
三 夏 の 庭、家 族 伊藤市太郎
黄と黒、赤と黒 萩 森 久 朗
壁、海 底 築山 節 生
中国の女達 山口 操 助
船 ストリツパー達 曾我 芳 子
休息する女 松岡 寛 一
河原の部落、原始林 栗 原 信

少 タコ の 嫁 入 り 女 森 英
黄 丹 の ある 町 昏 藤村 恒 男
港 の マリヤ “ 近 藤 嘉 男
春の春日野、海岸の丘より、静物、黒潮、
白良浜夜景 鍋 井 克 之
平和の日(ボスター) 原 弘
習作A・B(ボスター)、ブローチ習作、
写真による習作A・B 亀 倉 雄 策
アルミ工場生産住宅 金子 徳 次 郎
風景A、風景B、風景C 秋 保 正 三
朝なぎ(勝浦港) 土 岐 國 彦
村の秋、伊那の谷 中 川 紀 元
日輪草、三穂の秋、娑羅の花、炭焼き
小屋 正 宗 得 三 郎
向日葵、ダリヤ、裸女習作、水ぬるむ、
藍皿静物 黒田 重 太 郎
万 景、裸 婦 像 熊谷 守 一
風 景、裸 婦 原 勝 四 郎
しゃんぶる、カトリックの人、ばあやん、
休日、ふ あ む 佐野 繁 次 郎
夏 から 秋 へ 横 井 禮 市
たかねの静物 “
金 トルコぎれと女 “
少年楽士、踊るニフ、シルク 水 清 公 子
裸婦A、裸婦B、裸婦C、かれい 田村 孝 之 介
赤 い 部 屋 宮 本 三 郎
グエニス、鐘楼、カンナ、杜への道 加 藤 敏 子
芝 野 武 男

埠 モード、赤いスカート 頭 青 木 一 夫
亭のある風景、池畔風景 上 原 綾 子
瀬戸内海、尾道風景 山 田 一 雄
産 A ジ ソ 湯 井 上 安 男
B ボックス 桑 澤 洋 子
C ワンピース “ “
花 と 女 “ “
捕えらるる闘牛 福 岡 孚 雄
秋 色 鳥 取 敏
港、赤い岩、子供たち、岩かけの人 安部 治 郎 吉
たち 高 山 道 雄
お面によせて 田 邊 榮 二 郎
室内裸女、白桃と花壺 津 田 周 平
温 室 の 花 藤 田 禮
た そ が れ 市 野 長 之 介
蕎 麦 ど 薇 松 本 正 子
ぶ ど う 岩 月 虎 雄
果 物 と 少 女 松 田 豊
愁 青 木 壽
画 山 田 等
海 内 海 九 郎
室 内 婦 人 辺 中 野 安 治 郎
植木茂・山口薫二人展 10—17 フォルム 批—夕
朝日14
向井潤吉個展 10—14 資生堂 批—東京15
現代フランス版画展 10—11月3 表慶館 批—東
京10月9
春陽会秋季展 17—22 高島屋 批—東京21
兒島善三郎個展 17—22 高島屋 批—東京21、夕

每日22

野口彌太郎個展 17-22 資生堂 批—東京21、夕

每日22

野間仁根新作展 20-23 日動画廊 批—東京23

今關鷺人個展 23-28 資生堂 批—東京26

6 回日展 29-11月28 都美術館 日本藝術院・日

展運當会共催 批—夕讀賣11月5、毎日11月5、朝日

11月5、讀賣11月6、東京11月7、東京タイムズ11月

9、東京11月13

主要出品目錄

(日本藝術院會員)

(日本画)

大聖 歎 喜 天 結城素明

氣 球 揚 る 中村岳陵

雲 (西洋画) (審) 福田平八郎

湖 畔 逆 光 (審) 川島理一郎

女 子 信 敬 (審) 中澤弘光

靜 愛 犬 穩 (審) 石井柏亭

山 藤 咲 く 頃 (審) 辻 有島馬永

夏 仔 雲 猫 (審) 山下新太郎

(彫 塑) 和 田 英 作

浴 女 (審) 藤井浩祐

平和祈念塔構想の一部 (審) 北村西望

三相(モニウマンの一部) (審) 朝倉文夫

(美術工藝) (審) 清水六和

陶器新星文流瀧花瓶 (審) 松田樓六

鶴 蒔 繪 硯 宮 (審) 松田尚之

屏 一 大 字 (審) 豐道春海

大 文 字

(日本画) (審) 尾上柴舟

洛北芹生の秋 (審) 宇田茂郎

開 花 と 銀 香 伊東深水

卓 と 野 草 川崎小虎

黄 の 月 昏 (審) 金嶋桂華

水 の 庭 開 (審) 堂本印象

新 緑 の 庭 戲 (審) 山口華楊

水 黎 園 戲 (審) 矢野絃月

黎 の 明 戲 (審) 矢野橋村

水 の 辺 竹 (審) 大智勝觀

鯉 (審) 森 岡 神 泉

(西洋画) (審) 寺內萬治郎

横 臥 裸 婦 (審) 伊原宇三郎

ダ ム 湖 棠 (審) 齋藤興里

秋 海 氏 像 (審) 小山敬三

Y 氏 像 (審) 中村研一

裸 氏 像 (審) 木下孝則

パ レ リ ー ナ 池 像 (審) 太田喜二郎

初 秋 の 人 像 (審) 中野和高

婦 人 像 (審) 小絲源太郎

秋 庭 蘭 (審) 石川寅治

新 緑 の 庭 時 (審) 大久保作次郎

お 茶 の 時 (審) 橋本朝秀

立 舞 (彫 塑) (審) 松田尚之

La Meditation 像

(審) 清水多嘉示

練 習 場 に て (審) 國方林三

男 面 觀 音 (審) 雨宮治郎

大 悲 に 歩 む (審) 吉田三郎

人 偶 (審) 澤田晴廣

偶 像 (審) 横江嘉純

(美術工藝) (審) 加藤顯清

陶器天啓扁壺 (審) 後藤清一

硝子光りの美 (審) 清水六兵衛

漆器獅子衝立 (審) 岩田藤七

漆器存星秋草円卓 (審) 吉田源十郎

黄銅百合花器 (審) 堆朱楊成

彫金印 簞 筥 (審) 石田素暎

銅銅蠟型耳付花瓶 (審) 北原千鹿

銅金鳩鈕銀香炉 (審) 高村豐周

漆器梔子黑繪卓 (審) 杉田禾堂

陶器磁製花瓶 (審) 高井白陽

平面織物兒童協韻手織錦 (審) 宮之原謙

染色水村風物壁掛 (審) 山鹿清華

(書) (審) 廣川松五郎

陶詩歸田園居 (審) 辻本史邑

和 歌 春 秋 (審) 吉澤義則

定 庵 詩 話 (審) 西川靖園

廬 山 諸 寄 (審) 松本芳翠

見 賢 思 齊 (審) 園田湖城

潭 影 空 人 心 (審) 鈴木翠軒

(審) 査 員

(日本画)

漆器 山路 手宮	彫金 鯉文 銀鉢	描染 波紋 二曲屏風	青銅 花瓶	陶器 七官青 透彫花瓶	陶器 雲の図 壺	浴	錐狀 をなす 座像	し	女 辺所 見年	少女 少	孔 い	高 子 の像	H 子 の像	海 子 の像	美 代 の像	頭 上 静物	卓 木 崎湖	村 の 人 たち	(西洋画)	白 道 夜	藥 師	櫻 島	雞 頭 花
----------------	----------------	------------------	----------	-------------------	----------------	---	-----------------	---	---------------	---------	--------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	-------------------	-------	-------------	--------	--------	-------------

小松 芳光	介川 芳秀	皆川 月華	會田 富康	大森 光彦	近藤 悠三	杉本 宗一	安永 良徳	都賀 田勇馬	長沼 孝三	岡本 錦明	富永 朝堂	三上 知治	佐竹 徳男	田村 一男	耳野 卯三郎	富田 温一郎	中村 琢二	高野 三三男	鈴木 千久馬	中村 善策	小寺 健吉	田中 以知庵	東山 魁夷	江崎 孝坪	西山 英雄	望月 春江
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	----------	-----------	-----------	----------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------

ダ リ	巧 の	漁 港 の	初 夏 の	雪 湖 残	蒐 集	春秋 夕 暉 対	夕 殿 暮	大 佛 留	加 留 多	沼 と	花 閣 追	金 閣 追	黎 閣 追	冬 の 山	ピ ア ノ の 前	花 さ す の 人	(日本画)	(出品依頼者)	山 居 秋 閑	富 士 の 歌	寒 江 鳥	都 門 上 一 眼	菊 の 山 花 詩	寒 山 詩	(書)	漆器 木蓮 額 盆	金工 芙蓉 置物	宮 工 美 蓉 置物	漆器 静寂 の意手
--------	--------	-------------	-------------	-------------	--------	-------------------	-------------	-------------	-------------	--------	-------------	-------------	-------------	-------------	-----------------------	-----------------------	-------	---------	------------------	------------------	-------------	-----------------------	-----------------------	-------------	-----	--------------------	----------------	------------------------	-----------------

木本 大果	長山 はく 子	富取 風堂	濱田 観	酒井 三良	西澤 管 飲	寺島 紫明	笠原 可於	我妻 碧字	村松 乙彦	高山 辰雄	三谷 十糸 子	池田 遙邨	伊藤 万耀	奥田 元宋	加藤 長明	岩田 正己	手島 右郷	安東 聖空	上田 桑鳩	相澤 春洋	山田 正平	高塚 竹堂	松井 如流	福澤 健一	信田 洋	高野 松山
----------	---------------	----------	---------	----------	--------------	----------	----------	----------	----------	----------	---------------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------

霧 れ 行 く	磯 上 の 磨 堂	浦 鳩 の 磨 堂	斑 鳩 の 磨 堂	浴 鳩 の 磨 堂	夕 鳩 の 磨 堂	は 鳩 の 磨 堂	部 鳩 の 磨 堂	い 鳩 の 磨 堂	花 鳩 の 磨 堂	胡 鳩 の 磨 堂	鮮 鳩 の 磨 堂	秋 鳩 の 磨 堂	武 鳩 の 磨 堂	く 鳩 の 磨 堂	朝 鳩 の 磨 堂	万 鳩 の 磨 堂	初 鳩 の 磨 堂	徑 鳩 の 磨 堂	客 鳩 の 磨 堂	夕 鳩 の 磨 堂	地 鳩 の 磨 堂	香 鳩 の 磨 堂	憩 鳩 の 磨 堂	雪 鳩 の 磨 堂	爽 鳩 の 磨 堂	放 鳩 の 磨 堂	庭 鳩 の 磨 堂	早 鳩 の 磨 堂	姉 鳩 の 磨 堂	白 鳩 の 磨 堂
------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

中野 草雲	松久 休光	川上 拙以	濱田 台兒	須田 珠中	梶原 排佐	山本 倉丘	勝田 風哲	石渡 風古	松元 道夫	服部 有恒	勝田 蕉琴	永田 春水	鈴木 朱雀	三宅 鳳白	吉田 登穀	水田 竹園	磯田 又一郎	根井 香坡	町田 富治	吉村 忠夫	赤松 雲嶺	板倉 星光	白井 炯崑	島田 柏樹	矢野 鐵山	常岡 文龜	川本 末雄	岩淵 芳華	三輪 昇勢
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

平通武男
高田正二郎
鈴木榮二郎
簡井廣道
堀田清治
橋原健三
中川力
渡邊浩三
佐藤一章
倉員辰雄
森田茂
林達川
西村喜久子
赤城泰舒
荒谷直之介
三宅克己
故谷澤一郎
古川弘
小堀進
伊藤四郎
河井達海
山喜多二郎
鶴田吾郎
堀進二
森野圓象
北村正信
綿引弘
三國慶一
佐々木大樹
羽下修三

ト ル ソ 1
 C 神 父 の 像
 げ ん じ う
 生 池 寛 胸 像
 菊 池 寛 胸 像
 若 月 晴 れ の あ る 日
 皐 月 晴 れ の あ る 日
 た か 子 さ ん
 砲 丸
 水 浴 行
 默 行
 裸 婦
 無 限
 餓 鬼 と 観 音
 倚 聖 人 民 主 義 者
 親 聖 人 民 主 義 者
 能 石 橋
 淵 婦

(美術工藝)

漆器五月の頃壁面
 蠟染夏の庭屏風
 和染佐渡小木の漁家屏風
 染色萩二枚屏風
 彫金海景瓶
 銅金鯉置物
 彫金
 陶器線彫草花文扁壺
 銅鋼「天が下安かれ」と祈つて作る花瓶
 漆器空小屏風

倉持 芳
 小笠原貞弘
 遠山靜夫
 清水禮四郎
 小倉右一郎
 中村博直
 池田勇八
 瀬戸團治
 北村治禧
 齋藤吉郎
 古賀忠雄
 大須賀力
 大内青圃
 毛利教武
 藤野舜正
 後藤良
 中村直人
 和田金剛
 磯井如眞
 山岸堅二
 皆川泰藏
 櫻井霞洞
 宮坂房衛
 佐々木象堂
 山脇洋二
 安原喜明
 香取正彦
 山崎覺太郎

陶器白瓷壺
 陶器釉文水盤
 漆器鶴の憩二曲屏風
 染色水紋二曲屏風
 染織機織二曲屏風
 糊染青楓之図屏風
 青銅鳥飾盤
 黃銅地切嵌飾花器
 漆器文化の炎額
 染色東洋の庭壁掛
 陶器靜曉花瓶
 青銅壁面を飾る花生
 彫金笛を吹く壁掛
 驟雨一過人形立像
 繡飾布錦葉降る
 漆器沈金庭の草道小宮
 銅銅水瓶
 漆器春秋蒔繪茶箱
 彫金花盛
 彫漆短冊
 黃銅水指
 硝子牌
 銅銅嵌水鳥の香炉
 彫金黒味銅毛彫象嵌秋草文香合
 陶器有水可漁柳文壺
 陶器染付花瓶
 漆器初冬文庫
 陶製王魚図飾宮
 彫金宝石宮
 漆器初夏譜卓
 漆器南京図衝立

叶光夫
 宮下善壽
 佐治正
 木村雨山
 小合友之助
 稻垣稔次郎
 長野埜志
 小川友衛
 六角顯雄
 大坪重周
 楠部彌式
 丸谷端堂
 岡部達男
 野口光彦
 岸本景春
 前大峰
 内藤春治
 三田村自芳
 三井義夫
 岡部敬象
 鹿島一谷
 各務鏞三
 高橋勇
 二橋美衡
 加藤士師朋
 河村靖山
 結城哲雄
 北出塔次郎
 大須賀需
 吉田醇一郎
 番浦省吾

金工洋酒瓶
 銅銅蛤岡耳花瓶
 銅銅花器
 唐銅堆漆嵌入花瓶
 彫金手宮
 漆器雷光花瓶
 彫漆谷間の百合屏風
 若き日人形
 彫金大日像
 銅銅花器
 陶器織部沼影皿
 (書)
 唐詩答人
 水の姿態
 自作三首
 顧紹敏の渡江詩
 無見視浪
 伊勢物語二段
 いさよう浪
 楷書醉古堂劍掃語
 乃木希典詩
 壹期壹會
 和歌今樣
 四時讀書樂ノ首
 春秋二首
 蘇東坡詩
 乾坤純和
 爰得我娛
 老子語、不是故彰
 銅印
 自天降福千万年

海野建夫
 池田逸堂
 原直樹
 山本純民
 土屋否平
 本間薺華
 菅丸耕堂
 堀柳女
 故松原南海
 伊藤豐
 河合榮之助
 德野大空
 内田鶴雲
 津金雀仙
 村上三島
 江上碧潭
 能勢照郷
 羽田春基
 川村驥山
 田中眞洲
 大澤雅然
 中村春堂
 印南溪龍
 炭山南木
 宇野雪村
 松丸東魚
 中邨蘭台
 梅野丁齋
 關野香雲
 石井雙石

得魚忘筌
山部赤人之歌
旅竹控五言古詩
朱竹控五言古詩
良寛詩五言律
破体試作
特選

生井子華
鈴木梅溪
田中塊堂
山崎節堂
大池晴嵐
山口蘭溪

作品 S
たか子さん
光あ丸
殊勳者
寂寥限
裸婦
婦人の首

朝倉響子
瀬戸園治
北村治輔
水船六洲
富永良雄
畫間弘
山本稚彦
佐藤靜司
畝村直久

(日本画)

影

嶋谷自然
藤田辨次
遠藤桑珠
中村正義
谷野圭一
白鳥映雪
中田晃陽
山田申吾
龜割隆
堂本元次

(美術工藝)
漆器石の図小屏風
鑄銅花器
漆器さざ小屏風
彫金鹿置物
木喰皮装像「茶」人形
彫漆白樺の風炉先屏風
金工兵庫鎖文様飾宮
手織錦野鶴図壁掛
染色罌粟の花屏風
鑄銅魚文水盤

池田喜一郎
松崎福三郎
室瀬春二
平松宏春
平田郷陽
彼谷芳水
小島保彦
中村鵬生
般若侑弘
高木幾望

(西洋画)

マ

弦田英太郎
菅谷邦敏
幸嶋重雄
平松讓
廣瀬功
青地秀太郎
溝江勘二
西村愿定
光安浩行
早出守雄

(書)
白楽天詩
水の姿熊
自作三首
李太白詩
周美成憶旧游
四時讀書樂ノ内春秋二首
耕鑿誰知帝力尙羊人在羲皇
胸中丘壑
乾坤純和
躬恒集

小坂奇石
内田鶴雲
津金崔仙
青山杉雨
殿村藍田
印南溪龍
小林斗金
飯田秀處
宇野雪村
宮本竹逕

土器を持つ女
(彫塑)

圓錐勝二

朝倉響子
瀬戸園治
北村治輔
水船六洲
富永良雄
畫間弘
山本稚彦
佐藤靜司
畝村直久

創元會選拔展 30—11月4 丸善
清方面業五十年展 1—12 上野・松坂屋 批—毎日3、東京5、夕朝日5
京都陶藝家クラブ新作陶展 1—5 京都・高島屋
北出塔次郎作陶展 1—10 和光
国画会秋季展 5—12 三越 批—東京9、毎日11
河合卯之助新作陶展 7—12 三越
設立三十周年記念東西大家新作日本画展 7—12
大阪・大丸
井上恒也日本画個人展 8—12 三越
榎戸庄衛個展 8—12 三越
榎方志功新作展 10—17 京都ギヤラリー
4回霜月会日本画展 11—17 高島屋
10回青々会 14—19 三越 批—東京19
5回踏青会 14—19 三越
上杜会25周年記念展 14—19 三越
須田剋太油繪展 14—19 三越
鈴木千久馬油繪個展 14—19 三越 批—東京16、夕朝日19
河井寛次郎還暦記念陶展 14—19 大阪・高島屋
井上三綱個展 17—25 フォルム 批—夕毎日24
鍋木清方新作展 18—23 三越 批—東京22、夕朝日23
日月社試作展 21—26 高島屋
院展受賞者展(昭和二十五年度) 24—29 銀座・松坂屋 批—夕朝日30
小林古徑文化勳章授賞記念特別展 25—29 講大陳列館
石川滋彦水彩展 29—12月2 日動商廊 批—夕毎日12月1

十二月

京都輸出工藝美術展 1—7 三越
梅原龍三郎近作展 1—9 彌生画廊 批—夕朝日

6、毎日6

懷会洋画展 1—6 資生堂 批—東京4
木内克個展 8—13 銀座・松坂屋
福澤一郎個展 10—16 三越 批—讀賣11、夕朝日

16

田村一男個展 11—15 丸善
船木道忠・研志父子作陶展 11—16 たくみ
武者小路實篤個展 12—16 壺中居 批—夕朝日15

日展諸統計表

○第一回——第六回日展搬入、入選、陳列点数比較

期別		間科		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別		別	
----	--	----	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--

○第一回——第六回日展会期、観覧人員、政府買上品数比較

	会 期	観覧総人員	同上1日平均	政府買入品 (第五、六回は日展作品で 買上げになつた数)					計
				第一科	第二科	第三科	第四科	第五科	
第一回	三一日								
第二回	三六日	一八七、二九二	五、二〇二						
第三回	三六日			三	三	三	三	一	一二
第四回	三〇日	一〇八、五八〇	三、六〇〇	五	六	四	三	三	二一
第五回	二四日	七六、〇二二	三、二〇〇	二	一	三	三	三	一〇
第六回	三一日	一四六、四七五	四、七二五	三	〇	一	三	一	八

○第一回——第六回日展入選人員及び新入選人員数比較

期別	新 旧 の 別	開科別		入選	内新入選	入選	内新入選	入選	内新入選	入選	内新入選	入選	内新入選	入選	内新入選	計
		第一科	第二科													
第一回		一一八	四〇	二五六	七六	九七	二五	二三九	六一	一	一	七一〇	二〇二			
第二回		一五三	二二	二六五	三一	一五九	一九	三六九	四九	一	一	九四六	一一二			
第三回		一六九	二五	三五三	九四	一七七	二四	三四〇	五八	一	一	一、〇三九	二〇一			
第四回		一五七	二五	二六五	五五	二二〇	二〇	一八四	七八	一一七	一一七	九四三	二九五			
第五回		二二八	四四	三〇四	七四	一五三	一九	二五三	五四	一九〇	一〇一	一、一一八	二二二			
第六回		二二八	四七	四八九	一二四	一六八	一一	三一五	六二	一二八	三六	一、三一八	二八〇			

「物故作家及美術関係者」 ページ (131～144 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.131-144)

Cut for protection of the personal information

美術文献目録 (自昭和二十一年至昭和二十五年)

凡 例

一、ここに採録した文献はわが国昭和二十一年から昭和二十五年までに発行された單行図書、定期刊行物、および諸新聞に掲載されたものである。

二、現代美術文献目録は明治大正以後の美術に関するものを集めた。

三、西洋美術に関する文献は別に一括してまとめた。

四、東洋古美術文献目録は編輯の都合上この版ではあつかなかつた。

五、建築ならびに工藝の範囲は本文最初の凡例に記した範囲にとどめた。

六、物故作家及美術関係者の項は昭和二十一年から昭和二十五年までの間に歿した人々の記事に限つた。

七、現代美術文献目録において各項目内の配列は、單行本では書名による五十音順(西洋美術だけは内容別)、定期刊行物所載文献では所載雑誌名による五十音順とした。同一雑誌の配列はその発行順である。

たゞ展覧会記事及批評は雑誌別によらず内容別にまとめた。

八、この目録をつくるため採録した定期刊行物および新聞は下のとおりである。

九、雑誌の号数は通巻番号を採用した。尚、四〇―四二は四〇号、四一

号、四二号に亘ることを示し、四・五は四、五合併号、二二・六・三

〇は昭和二十二年六月三〇日附の新聞を示す。

アサヒ・ニュース	朝日新聞	アトリエ
浮世絵草紙	浮世絵と版画	解釈と鑑賞
翰林工藝	九州タイムス	藝 術
藝 術 新 潮	藝 林 間 歩	建 築 雜 誌
建築史研究	建 築 文 化	工 藝
工 藝 ニ ュ ー ス	国 華	国 際 建 築
国際タイムス	座 右 宝	三 彩
新科学ペン	新 建 築	新 東 京
新 報 知	西 部 美 術	世 界 美 術
造 形	創 美	第 一 新 聞
茶 わ ん	東 京 新 聞	東 京 タイムス
東大新聞	読 書 新 聞	日 本 美 術 工 藝
日 本 歴 史	博物館ニュース	花
美 術	(美術及工藝)	美 術 研 究
美術手帖	毎 日 新 聞	み づ ゑ
明治大正文学研究	読 売 新 聞	B B B B

(五十音順)

目次

〔定期刊行物所載文獻〕

現代美術關係文獻

總	說	雜誌別五十音順	一四七
洋	畫	“	一四八
日	畫	“	一四九
彫	刻	“	一五〇
工	藝	“	一五一
建	築	“	一五二
作	家	人名別五十音順	一五三
物	故作家及美術關係者	雜誌別五十音順	一五五
時	評	“	一五六
身	邊	記	“
雜	“	“	一五七
明治大正以降美術	“	“	一五八
中	國	“	一五九
行政・教育	“	“	一六〇
展覽會記事及批評	內容別	“	一六一
西洋美術文獻	“	“	一六二

繪	彫	建	工	展覽會其他	藝	築	刻	畫	說	雜誌別五十音順
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪
總	繪	建	工	展	藝	築	刻	畫	說	繪

定期刊行物所載文獻

現代美術關係文獻

總 說

文化人と新生活運動	森戸 辰男	朝 日	三・六三
美術の基盤と脱皮	伊原宇三郎	朝 日	三・二・一
ムーブマンについて	中川 一政	アトリエ	二四一
環境に就いて	伊藤 康	"	二四二
民族藝術の再興	森口 多里	"	二四三
フォーヴィズムと日本繪画	植村鷹千代	"	二四七
前衛繪画の課題	"	"	二五〇
印象派と日本繪画	"	"	二五一
一つの見方に就て	吉田 健一	"	二五二
世界美術の成立	富永 惣一	"	二五五
繪画的價值と社会的價值	林 文雄	"	二五六
構図に関する一つの提示	倉田 三郎	"	二五八
アルチストとアルチザン	土方 定一	"	二五九
テーマと造型	"	"	二六一
繪画と人間	麻生 三郎	"	二六二
我が前衛美術について	佐波 甫	"	"
美術批評への抗議	佐田 勝	"	二六六
レアリテとレアリスム	植村鷹千代	"	"
素描の時代性	寺田 春式	"	二六七
デッサン論	三雲祥之助	"	"
三つのレアリズム	土方 定一	"	二六八

アヴァンギャルドの確信と反省	植村鷹千代	アトリエ	二七二
いい繪とわるい繪	土方 定一	"	"
繪画に於ける人間復活	小松 清	"	二七四
批評の批評の批評	土方 定一	"	二七五
生活のある繪	土方 定一	"	二七四
視覚と実存—モダンアート美術のために—	勝見 勝	"	二七五
前衛繪画の実体	瀧口 修造	"	二七七
抽象繪画論	山口 正城	"	"
美術の多元性—内田巖君に送る—	松本 弘二	"	二七八
批評家の立場	田近 憲三	"	二七九
美術家の立場	加山 四郎	"	二八〇
二つの論題	植村鷹千代	"	二八〇
美術をめぐる対談	高見 順	"	二八一
新人について	瀧口 修造	"	二八二
技術と彩料	宮本 三郎	"	二八三
展覧会のあり方について	今泉・益田 吉井	"	"
美術のヒューマニズムといふ事	土方 定一	"	"
現代繪画と抵抗	難波田龍起	"	二八四
美術界の解放運動	伊原宇三郎	"	"
象形と非象形の相剋—阿部展也の藝術—	瀧口 修造	"	二八六
飛躍を阻む画壇の良識	植村鷹千代	"	"
情感について	岡本謙次郎	"	二八七
新しき美術	植村鷹千代	藝 術	二

建築について	(アラン) 藤林間歩	一ノ九
民藝運動は何を寄與したか	柳 宗悦	工、藝 一一五
科学としての美術史	前川 誠郎	座右宝 一二
藝術の問題	長興 善郎	三 彩 一
繪画に於ける線に就いて	伊野重一郎	" 一二
西と東	太宰 施門	" 一五
写真対裝飾	木村 莊八	" 二三
人間性描写の東西	東 珠樹	" 二七
無機線・有機線	島海 青見	" 二八
清純の藝術—タウトの日本美術觀—	北川 桃雄	" 三〇
遠 像	矢崎 美盛	" 三七
美術の東西(1)(2)(3)	長谷川三郎	四〇—四二
近代繪画の構図	小林太市郎	" 四二
日光の画家・ベオロ・ウツチエロの藝術—日本画世界性的問題と關聯して—	柳 亮	" 四五
色彩について	堀 文子	" 四六
地方美術の振興	伊原宇三郎	西部美術 一
東洋画に於ける精神主義と人格	岸田 勉	" 一、二
生活に美しさを	荒城 季夫	" 五
繪画的レアリテの喪失	土方 定一	世界美術 一
苦悶と危機の克服	吉井 忠	" "
レアリスム試論	大口 理夫	" "
日本のアカデミズム	土方 定一	東京 三、三・四
藝術に生命を 上下	永井 深	三、五・七・八
宗教美術を提唱	柳 亮	〃七・二
ふう刺画と時代精神	須山 計一	三、二・四・五
兒童画と文化	伊原宇三郎	三、三・四

作家の立場と批評の基準

今泉 篤男 東京 二四・二・八九

建築・繪画・彫刻

丹下 健三 東大新聞 二四・六・八

繪画に於ける東西の交流

園 頼三 日本美術 四五

戦争美術の功罪

鈴木 治 美術 三ノ一

レアリズムと民主主義

柳 亮 三ノ六

新しき藝術

今日出海 美術及工藝 二

藝術清談

安倍 能成 田中 直昭 小宮 豊隆 三

藝術と生活

ラングドン ウォーナー 四

美術と国民生活について

青野 季吉 四

新しい繪の理解

植村 鷹千代 美術手帖 一

デッサン

大森 啓助 三

構図について(1)(2)(3)

倉田 三郎 六・七

黄金率プロポーションは何か?

南城 一夫 八

続アバンギャルド藝術

岡本 太郎 二四

藝術学入門

兒島喜久雄 二九・三〇・三一

藝術と集団生活

イサム・ノグチ 三一

コミュニティ藝術

夕毎日 三二・五〇

最近のフランス美術界を語る

岡 鹿之助 大久保 泰實 末松 正樹 田近 憲三 四九三

繪画の領域

土方 定一 四九四

近代主義の返り咬き

林 文雄 四九五

抽象藝術の擁護

モホレイ・ナガイ 四九八

ヒューマニズムの福

鈴木 治 四九八

美術は文学より立ち遅れているか? その他

林 文雄 平野 省 龍崎 安之助 永井 基一 佐々木 清輝 高田 清輝 花田 清輝

四九八

近代美術とレアリズム

土方 定一

五〇三

抽象繪画の問題

植村 鷹千代

五〇五

新藝術

長谷川 三郎

五〇八

繪画の質実性について(原勝郎氏とその藝術)

田近 憲三

五一五

玩具的性格

伊藤 康

五一七

面の問題

宮坂 勝

五一七

新しい美術とは何か 讀賣主催討論会

今泉 篤男 岡本 太郎 内田 巖

五二二

討論会追記

土方 定一

五二三

近代美術とレアリズム

石井 柏亭

五二四

描写的繪画の行方

植村 鷹千代

五二四

アヴァンギャルドとレアリズム

三雲祥之助

五二五

繪画の眞実性と趣味

古澤 岩美

五二五

ありがたきかな四面

安部 公房

五二六

シニールアリズム

西脇 順三郎

五二六

繪画美

中島 健蔵

五二七

純粹藝術のわく

土方 定一

五二七

自然主義とレアリズム

阿部 展也

五二八

反駁

阿部 展也

五二八

日本現代美術の問題と誤り

エリゼ・トラウ 石井 柏亭 小山 敬三

五三〇 五三三 五三四

反論への反論

村山 知義

五三五

繪画の健康性について

福澤 一郎

二四・一〇・三

美術の問題展

土方 定一

二四・一〇・三

モダンアート

ルネ・グルッセ

二四・一〇・三

二〇世紀レアリズム

安井曾太郎

一

日本美術の独自性

吉岡 忠良

二

デッサン、線、自然

赤松 俊子

二

線の速さの問題

土方 定一

二

デッサンについて

福澤 一郎

二

4B鉛筆の使い方

福田 新生

二、三

廿世紀のレアリズムとは

本郷 文雄

三

人民派のレアリズム

本郷 新

六

(1)(2)

大島 博光

二

原子力時代と美術

小寺 健吉

二五三

今泉篤男氏への公開

飯澤 匡

二五三

状、日本美術アン

大口 理夫

二四五

ンダン展評に關

阿 鹿之助

二五三

繪画と写真

今泉 篤男

二五三

洋画

植村 鷹千代

二五四

繪画の実用化

小寺 健吉

二五三

カット藝術論

飯澤 匡

二五三

安井曾太郎氏談話

大口 理夫

二四五

油繪の美しさに就いて

阿 鹿之助

二五三

立体派以後と日本繪画

植村 鷹千代

二五四

これらの先輩達の作品をみて私は画家として斯う考へる

日本油繪の性格
ヒザンヌ、ドラント
安井曾太郎

國吉康雄の藝術
對極

繪画について
梅原の新しいデッサン

繪の鑑賞について
近代繪画に於ける技術について

近代繪画に於ける色彩
精神史的にみた近代繪画

コッビーの話
さしえ考

ヴァールについて
(對談)

日本人の油繪
藝術を生むもの

近代日本美術の系譜
洋画

ハダカ談議
顔料について(一)

現代繪画に於ける靜物の重要性
明治ホテルの壁面
前衛繪画の応用性
安井曾太郎「グラナダ風景」(解説)

三雲祥之助
阿トリエ
二六六

今泉 篤男
" " " " 二七九

石垣 綾子
" " " " 二八三

岡本 太郎
" " " " 二八六

福島繁太郎
座右宝
一〇二

武者小路實篤
" " " " 一二

今泉 篤男
" " " " " "

岡 鹿之助
" " " " " "

富永 惣一
" " " " " "

土方 定一
新科学ペン
二ノ三

高田 力蔵
西部美術
一

木村 莊八
" " " " 五

水彩講座(1)(2)(3) 春日部たすく
石井柏亭「羅馬花寶娘」(解説)
石井 柏亭

安井曾太郎「藤山氏像」(解説)
伊藤 廉

われらのクニヨシ
久保貞次郎

石井先生の二科二十人像の思い出、其の他
鈴木信太郎

鈴木信太郎「砂浜」
" " " " " "

中西利雄「巴里の裏街」(解説)
中西 利雄

荻須高徳「カザ・ロッツ」(解説)
佐波 甫

技術ノート、油について
宮本三郎
山下新三郎
中村新一郎

安井曾太郎「湯河原風景」(解説)
土方 定一

油繪保存のための二つの方法
小松 益喜

繪かきの眼
木村 莊八

兒島善三郎「靜物」(解説)
高昌達四郎

モチーフに就いて
林 太一郎
仲田 一
山田 薫
美術手帖 二八

続「ヴァンギヤルド」藝術 画面の構成
岡本 太郎
川端 實武
二九

作畫課程について
鈴木信太郎
東郷青児
小泉 清
" "

技術ノート「シカチ」の研究
岡 鹿之助
矢部 章彦
三〇

技術ノート「シカチ」の使い方
脇田、伊藤
宮本 三郎
" "

初めて繪を描く人に
初學者のために「裸体画の描き方」
岡、角、高
野、小、高
福澤
" "

私のキャンパス
技術ノート「ホワイ」の扱い方
中村新一郎
齋藤 長三
小泉 清
三雲祥之助
三七

松島正人「長崎の街」(解説)
松島 正人
" "

顔料に就いて(完)
二科会に出会つたもの
瀧口 修造
" "

近代繪画に於けるフォルムとスタイル
三雲祥之助
" "

現代繪画管見
村田 潔
" "

いはゆる前衛繪画について
植村鷹千代
" "

油繪伝説への苦闘
菊池 一雄
五〇一

我油繪はいずこに往くか	須田國太郎	みづゑ	五〇五	水墨画南北論	鈴木 治	三	彩	七	現代日本画の諸問題	青野 季吉	三二
モティフと表現	益田 義信	"	五一〇	西洋画から日本画を見る	須田國太郎	"	"	"	新井 勝利	三彩	三二
技法の探求について	高野三三男	"	五一四	日本画をどう見る	中川 一政	"	"	九	北川 桃雄	"	"
メヂエに就いて	岡 鹿之助	"	"	和画の前途	石井 柏亭	"	"	一三	中田 宗男	"	三三
フオルムの問題の中	宮坂 勝	"	五一五	日本画私観	木村 莊八	"	"	一四	三好 達治	"	三四
繪画の技法に於ける近代性の研究(1)	柳 亮	"	五一六	現代日本画の一つの課題	中井 正一	"	"	一五	小杉 放庵	"	"
日本油繪の特殊性	内田 巖	"	五一七	日本画におけるグアルーの問題	今泉 篤男	"	"	"	小川 千穂	"	"
壁面の種類に就いて	山下新太郎	"	五二一	俳 画	顯原 退藏	"	"	一六	文人画散話	"	"
透明画法と焼繪具に就いて	小松 益喜	"	五二二	現代日本画における前近代性について	水澤 澄夫	"	"	一七	武者小路實篤氏に日本画の話を聴く	"	"
ヤスオ・クニヨシの作品	久保貞次郎	"	五三二	スケッチについて	前田 青邨	"	"	"	私の写生帳	"	"
國吉康雄 上下	仲田定之助	"	五三三	日本画と近代	上島 長健	"	"	一八	新日本画の技法	"	"
ことしの收穫―ベストスリーをきく	荒城 季夫	"	五三三	室内要素としての画面の大きさ	藤島玄治郎	"	"	一九	光琳宗達と現代日本画	"	三五
クニヨシとノグチ	瀧口 修造	"	五三八・三	日本画の危機と復興	井島 勉	"	"	"	日本画のデフォルマシオン	"	"
人物画のバックについて	安井曾太郎	BBB	三	太い一本の線	長谷川三郎	"	"	"	写生と写意	"	三六
静物の構図について	林 武	"	"	装飾的日本繪画	藤懸 静也	"	"	二三	日本画の描線	"	"
風景画の構図について	高島達四郎	"	"	現代日本画の問題	河北 倫明	"	"	二五	東洋画の行方	"	三七
日本洋画半世紀―流派の動き(座談会)	土方、裕、内田、他二氏	"	四	或る日本画家へ	彩 滴	"	"	"	私の写生	"	四二
女流画家の歴史	三岸 節子	"	"	日本画滅亡論(時評)	"	"	"	"	現代日本画の方向	"	"
日本の油繪とセザンヌ革命	外山卯三郎	"	五	近代美術綜合展の日本画	澤柳六五郎	"	"	二六	近頃の日本画	"	四六
繪がわかる、わからないうといふ事について	加山 四郎	"	六	美人画小観	川上 洋典	"	"	二七	「河童の嫁入」解説	"	"
	今泉 篤男 他二氏	"	"	近代日本画の非人間的傾向	鈴木 進	"	"	二八	現代日本画の洋画的傾向	"	四七
				日本画の線	新井 勝利	"	"	"	日本画の運命	"	"
				アプレゲール	岩崎 鐸	"	"	三〇	竹の繪	"	"
				一つの言葉―米人からきく日本画	恩地孝四郎	"	"	"	近代日本美術の系譜―日本画―	"	"
				リアルルの自覚	朝倉 楯	"	"	"	近代日本画と古徑の位置	"	"
				近代繪画としての日本画	今泉 篤男	"	"	三二		"	美術 三ノ三

日本画と洋画
日本画の将来
日本画の危機
藝術の前途

土方 定一 美術及工藝 三
今泉 篤男 毎 日 三三・三三
福田豊四郎 讀 賣 三三・五六
福澤 一郎 〃 二四・四五

彫刻

現代彫刻の諸問題
イサム・ノグチのこ
と

ノグチイサム アトリエ 二八三
和田 定夫 〃 二八六

光雲胸像鑄造覚書

彫刻と批評家 院
展と二科を巡つて

高村 豊周 翰林工藝 一五
菊池 一雄 東 京 三三・五

森川杜園の画稿

彫刻について
彫刻家の目

禿氏 祐祥 日本美術 一二九
菊池 一雄 美術手帖 二五・二
木内 克 〃 二四

ノグチ、日本

イサム・ノグチと語
る

長谷川三郎 〃 三三
長谷川三郎 毎 日 三五・六八

イサム・ノグチの藝
術

瀧口 修造 みづゑ 五三七
クニヨシとノグチ 〃 讀 賣 三五・三

工 藝

最近の美術工藝界
見返り物資としての
工藝品

高松喜八郎 朝 日 三三・三三
矢部 連兆 アトリエ 二四三

財団法人翰林工藝研
究会が生れるまで

工藝品とその素材

小池 新二 翰林工藝 一
武田 久吉 〃 二一八・〇

玩具の三つの要素

牛島 義友 工藝ニ 一五ノ一
ユース 〃 〃

基準玩具に就て

幼児の心理と色彩

工藝指導所 設計部 〃 〃

織物、陶磁器、漆器
の輸出問題に就いて
紙とガラスの新局面
実験室の中にあるも
の

丹羽 恒夫 工藝ニ 一五ノ二
ユース 〃 一五ノ三

量産家具の研究

現代の要求する工藝
感

神原 周 〃 〃
工藝指導所 〃 〃
齋藤 信治 〃 一五ノ四

工藝の指導理念と意
匠の独立

松崎福三郎 〃 〃
吉田 亨二 〃 一五ノ五

輸出漆器断想

金属漆器に就て

岡田 元 〃 〃
宮田 聰 〃 一五ノ六

漆器生産の現状

漆工藝の再出発

日本漆器聯 〃 〃
合組合 〃 〃
齋藤 信治 〃 一五ノ七

漆器と科学技術

美術工藝品は輸出商
品になるか？ならぬ
か？

齋藤 信治 〃 〃
齋藤 信治 〃 一五ノ九

アイヌの熊

―漆器について―

工藝品の美と形

北川 清 〃 〃
菊池 一雄 〃 〃

輸出工藝品について
思うこと

名取洋之助 〃 〃
硝子 〃 〃

創造力について

吉木 文平 〃 一五ノ二〇
宮本百合子 〃 〃

ハウス・ビュロー

新しい工藝

小池 新二 〃 一六ノ二
北園 克衛 〃 一六ノ三

オীগニツク・デザ
インとパツク・シー
エム・デザイン

豊口 克平 〃 一六ノ五
河内 諒 〃 〃

日本工藝に対する近
代生活の基礎づけ
目止の話

江川 和彦 〃 〃
河内 諒 〃 〃

デザインナーの辯
工藝の夢
建築の立場から
木材加工技術の研究
方向

金倉 雄策 工藝ニ 一六ノ六
勝見 勝 〃 一六ノ八
三好 正夫 〃 一六ノ二
三好 東一 〃 一六ノ三

高周波の工藝的利用

つくつてほしい家具

劍持 勇 〃 〃
春山 行夫 〃 一七ノ一

デザインナーとしての
覚え書き

柳 宗理 〃 〃
山崎 幸雄 〃 〃

身のまわりの色彩に
就て

工藝産業の転換と本
所の再建

齋藤 信治 〃 一七ノ二
宋吉、各務 〃 〃
十場、中村 〃 〃
松崎、松田 〃 一七ノ六

工藝の輸出をどうす
るか

デザインと技術

柳 宗理 〃 〃
龜倉 雄策 〃 一七ノ七

デザインとは明るい
生活の歌でなくては
ならない

佐野繁次郎 〃 〃
天野 孝雄 〃 一七ノ三

マテリアルの個性

おもちゃの設計に於
けるモチーフとその
表現

松田 一雄 〃 一八ノ一
劍持 勇 〃 一八ノ二
鹽澤 永孚 〃 一八ノ三

長崎の陽山白磁工場

高周波による新しい
木製品

野崎南海雄 〃 〃
中山 正人 〃 〃

マルセイエイーズ号
の船内装飾を見る

柳 宗理 〃 一八ノ四
企 画 課 〃 〃

輸出造花について

インダストリアル・
デザインナーのひとり

工藝指導所 設計課 〃 〃
デザイン 〃 〃
インダストリアル、
デザイン 〃 一八ノ五
竹家具の近代小史 劍持 勇 〃 一八ノ七

工業意匠についての
諸問題

工業意匠についての
諸問題

工業意匠についての
諸問題

立休最小限住居の試み

池邊研究室 新建築 五ノ七

廿世紀建築の回想—
アールヌーボーより
バウハウス迄

井上長三郎のこと
アトリエ訪問
一ノ二

建築空間と家具

新制作派展
建築部より
五ノ三

形の温度

谷口 吉郎
造 形 一ノ一

建築様式考

今 和次郎
岸田日出刀
二ノ二

日本建築

都市計画について

ボッパム
栗原孟男訳
美術 三ノ三

新しい建築への理解

網戸 武夫
美術手帖 八、九

新しい家具と室内装飾

美術と工 七

これからの建築

小林 秀彌
小池 新二
日三・四・五
五ノ四

現代建築と純粹美術

美術手帖 六

赤松俊子論

友を語る(朝井閑右衛門)

麻生三郎を素描する

大河内信敬
アトリエ 二八一

自画像

鶴岡 政男
美術手帖 二八二

麻生三郎—訪問記—

原 勝郎
美術手帖 三一

麻生三郎論

佐々木基一
土方 定一
美術手帖 三六

象形と非象形の相剋

瀧口 修造
アトリエ 二八六

文学される藝術について—
荒井龍男論—

田近 憲三
美術手帖 五二三

在米日本人画家の生活(イシガキ・エイタロウ)

イシガキ
アヤコ
アトリエ 二五八

自画像(自伝)

今泉 篤男
小山 敬三
美術手帖 三四

吉井 忠 BBBB 三

佐渡 甫 美術手帖 一六

大河内信敬 二八

辰野 隆 二二三

猪熊弦一郎君について
猪熊弦一郎と新制作派
上村松篁
近代の牧歌—牛島憲之の繪—
内田 巖
荒城 季夫
矢代 幸雄
内田 巖
森口 多里
長興 善郎
武者小路實篤
美術手帖 四

内田 巖 二四

松原 淑人 二二四

今泉 篤男 二八七

荒城 季夫 二七〇

矢代 幸雄 一ノ七

内田 巖 四

森口 多里 一ノ一

長興 善郎 二

武者小路實篤 二

梅原龍三郎の繪に就て
アトリエ訪問—梅原龍三郎—
今泉 篤男
美術手帖 五二三

植村鷹千代 二

伊藤 康 二

宮田 重雄 二

土方 定一 五二四

安井、梅原自選展
梅原問答
岡鹿之助論
アトリエ訪問—岡鹿之助—
岡田謙三の作品を観る
山口 長男
美術手帖 三〇

竹林 賢 六

寺田 千壘 六

山口 長男 五〇五

アトリエ訪問—岡田謙三—

岡本太郎論

岡本太郎の藝術

アトリエ訪問—岡本太郎—

対極について—岡本太郎論—
奥村土牛論

自画像(自伝)

大河内信敬論

小野竹喬

香月泰男

道光のなかのフアンタジ—香月泰男の繪—

川合玉堂

川合玉堂氏を訪ねて

アトリエ訪問—川端實論—

川端實論

川端實の近作

人間龍子

川端龍子の作品

清方

鍋木清方の藝術

加山四郎さん

堅山南風

木内克の彫刻

躍動する彫刻—木内克氏の彫刻について—

美術手帖 一

植村鷹千代 アトリエ 二六七

野間 宏 二八六

福田 恒存 美術手帖 二二三

花田 清輝 五二三

遠山 孝 三 四

大久保 泰 美術手帖 三六

古茂田守介 美術手帖 一二

佐渡 甫 美術手帖 一四

福島繁太郎 アトリエ 二六一

土方 定一 二八五

横川毅一郎 三 九

浅川 次郎 四八

南大路 一 美術手帖 二九

柳 亮 五二〇

田近 憲三 アトリエ 二六八

大島 隆一 一六

北川 桃雄 一三

河北 倫明 四八

岡鹿之助 アトリエ 二六九

松原 淑 三 三四

大久保 泰 アトリエ 二六二

田近 憲三 美術手帖 五三〇

源 豐宗 三 一二

佐渡 甫 三 三三

吉川 逸治 美術手帖 六

橋本 喜三 日本美術 一一三

仲田 菊代 毎日 二四・二五

私の繪面に於ける 方向	國吉 康雄	毎 日 三・二・六	アトリエ訪問—坂本 繁二郎—	田代 省吾	美術手帖	一〇	今人古人—鐵齋翁に ついて—	中川 一政	三 彩 三八
國吉康雄への追憶	仲田 菊代	B B B B 五	櫻井濱江論	今泉 篤男	美術手帖	五二一	鐵齋を學んだバスキ	柳 亮	" "
アトリエ訪問 —能谷守一—	和井 植男	美術手帖	澤野井信夫	長谷川三郎	アトリエ	二六九	雪舟・大雅・鐵齋の 道	里見 勝藏	" "
小泉清論	里見 勝藏	五〇六	菅野圭介論	今泉 篤男	美術手帖	五三二	鐵齋學人	日夏耿之介	" "
兒島善三郎	今泉 篤男	四九六	自画像(自傳)	菅野 圭介	美術手帖	二九	鐵齋について—梅原 先生との會話	宮田 重雄	" "
小杉放庵	木村 莊八	三 彩	杉本健吉論	高田 保	" "	" "	鐵齋と考槃社	青木 正見	" "
小杉放庵	武者小路實篤	美術手帖	—杉本健吉氏に—	水澤 澄夫	美術手帖	五〇八	鐵齋先生のこと	園田 湖城	" "
小林古徑	谷川 徹三	三 彩	杉山 寧	K・M	三 彩	二五	鐵齋の藝術—鐵齋に ついて—	鈴木 治	" "
小林古徑	須田國太郎	三 彩	アトリエ訪問 —鈴木信太郎—	伊馬 春部	美術手帖	九	東郷青兒	寺田 竹雄	夕 毎日 三・六
近藤嘉男	宮本 三郎	アトリエ	須田國太郎について	中山 巍	每 日	三・四八	アトリエ訪問 —東郷青兒—	中田 宗男	三 彩 二五
アトリエ訪問 —佐藤 敏—	土門 拳	美術手帖	アトリエ訪問 —須田國太郎—	天野 忠	美術手帖	一五	溪仙と京都	北川 桃雄	三 彩 四八
坂本繁二郎兩年譜	吉井 淳二	西部美術	—會宮一念—	南山 栗雄	" "	七一	堂本印象	佐波 甫	" "
坂本繁二郎	石井 鶴三	" "	—田村孝之介—	鈴木信太郎	" "	一九	富本憲吉	小山富士夫	博 物 館 ニ ユ ース 二五
坂本繁二郎	黒田重太郎	" "	—高島達四郎—	片山 敏彦	美術手帖	五三四	アトリエ訪問 —中川一政—	松原 淑	美術手帖 一八
坂本繁二郎	兒島善三郎	" "	高田博厚	古澤 岩美	アトリエ	二七〇	中澤さんの繪(東京 風物6)	木村 莊八	藝林間歩 二ノ七
坂本繁二郎	河北 倫明	" "	高村光太郎—訪問記—	土方 定一	美術手帖	三七	中谷泰論	南大路 一	B B B B 五
坂本君を語る	梅野 満雄	" "	多賀谷伊徳君	平塚 運一	藝林間歩	二ノ三	中村研一論	木村 莊八	三 彩 一九
坂本氏への教へ	池上 丁一	" "	谷中安規君のこと	寺田 透	美術手帖	三〇	中村研一—兩伯訪問記	竹林 賢	古美術 二ノ一
坂本氏の藝術	井上 三綱	" "	アトリエ訪問—鳥海 青兒—	土門 拳	" "	" "	中村研一論	宮川 謙一	" "
坂本君へ	青木 壽	" "	鳥海青兒—南瓜と柑 子に花入(解説)	井上長三郎	アトリエ	二六八	アトリエ訪問—中村 研一—	田近 憲三	" "
坂本繁二郎先生	正宗得三郎	" "	ヒューマニスト鶴岡 政男	佐波 甫	美術手帖	三〇	鍋井克之論	黒田重太郎	日本美術 一一四
坂本繁二郎特集	赤星 孝	" "	自画像(自伝)	鍋井 克之	美術手帖	三〇	鍋井君について見る	田近 憲三	工 藝 五四一
坂本繁二郎	河北 倫明	博物館ニ ユース 三五	鐵齋と篆刻	山田 正平	三 彩	三八	鍋井克之	岡 鹿之助	アトリエ 二五六
坂本繁二郎自選回顧 展覧会の折に	火野 葦平	藝術新潮	鐵齋作品の贗物に就 て	若海 方舟	" "	" "	南大路一君の仕事	本郷 新	" "
坂本繁二郎を語る	寺田 透	みづゑ 五三九	鐵齋通信	城戸勘太郎	" "	" "	西常雄君	石垣 綾子	美術手帖 八
	梅野 滿雄	古美術 一ノ五		青山 民吉	" "	" "	アトリエ訪問—イサ ム・野口—		

イサム氏のデザイン	谷口 吉郎	工藝ニユ	一八ノ
工藝指導におけるイサム・ノグチ	劍持 勇	〃	〃
その後のイサム・ノグチ	〃	〃	一八ノ
イサム・ノグチとの日々	長谷川三郎	三 彩	四五
イサム・ノグチと会う訪問記	長谷川三郎	美術手帖	三一
野口彌太郎	茂原 茂	〃	〃
野口彌太郎のことなど	大久保 泰	みづゑ	四九五
野口彌太郎の繪	田坂 乾	BBB B	六
アトリエ訪問—野口彌太郎—	野間 仁根	美術手帖	二
自画像	土方 定一	〃	三三
アトリエ訪問—林武	福島繁太郎	美術手帖	二六
林武論	大久保 泰	みづゑ	五二八
林武の境地について	工藤信太郎	BBB B	六
裕三彩亭	富永 惣一	みづゑ	五〇三
生活のある繪(原勝郎)	土方 定一	アトリエ	二七五
プロフィール原勝郎	田近 憲三	美術手帖	二
繪画の質実性について—原勝郎とその藝術—	伊藤 逸平	美術手帖	三四
土方定一—訪問記—	土方 定一	みづゑ	五〇一
福澤一郎論	宇津木 清	三 彩	三七
福田豊四郎論	上島 長健	〃	四七
福田豊四郎論	大口 理夫	三 彩	五
福田平八郎論	井島 勉	日本美術	一一三
福田平八郎氏に寄せて	大久保 泰	アトリエ	二七一

フジタツグジアメリカ	茂原 茂	アトリエ	二七一
小説藤田嗣治	蘆原 英了	藝術新潮	二五八
まつやまみつお小論	壺井 繁治	BBB B	四
前田寛治と構図—私青柳覺書	鈴木 武	美術手帖	二七
アトリエ訪問—三岸節子—	船戸 洪	美術手帖	五
三岸 節子	大久保 泰	アトリエ	二五六
アトリエ訪問—三雲祥之助—	高見 順	美術手帖	二七
宮田重雄論	徳川 夢聲	〃	三三
宮本 三郎	小磯 良平	朝 日	三八・元
宮本三郎—訪問記—	蘆原 英了	美術手帖	三五
向井久萬、廣田多津夫妻との対談	天野 忠	三 彩	二六
アトリエ訪問—向井潤吉—	島田 洋一	美術手帖	二〇
自画像(自伝)	向井 潤吉	美術手帖	三五
村岡平藏君のこと	横山 隆一	アトリエ	二六六
森芳雄論	辻 永	アトリエ	二六六
森田元子さん	今泉 篤男	みづゑ	五四二
安井曾太郎	仲田 菊代	アトリエ	二八三
作品論(安井曾太郎)	石井 柏亭	みづゑ	五〇七
安井曾太郎の可能性(対談)	伊藤 康	〃	〃
アトリエ訪問—安井の画室—	土門 拳	〃	〃
安井梅原自選展	小宮 豊隆	美術手帖	二四
安井曾太郎氏のレアリスム	土方 定一	みづゑ	五二四
安井曾太郎訪問	徳大寺公英	〃	五二七
安井曾太郎特別号	市原 豊太	藝術新潮	一ノ六

安井藝術の位置	安井 豊太	美術手帖	二九
湯河原の歳晚—安井画伯訪問の思出—	市原 豊太	美術手帖	二九
安田毅彦ノート	水澤 澄夫	三 彩	一一
矢野雄藏君のこと	裕三彩亭	アトリエ	二六〇
山口華楊	森 暢	三 彩	一八
山口君と	木村 莊八	〃	四八
山口長男の作画態度について	寺田 竹雄	みづゑ	五〇五
プロフィール山本丘人	松原 淑人	美術手帖	三
山本 丘人	宇津木 清	三 彩	三二
山本 敬輔	茂原 茂	美術手帖	二七
横山 大観	鷹巢 豊治	博物館ニユース	三三
横山大観素描(対談)	徳川 夢聲	藝術新潮	一ノ一
大観についての印象	福島繁太郎	三 彩	三九
大観の藝術	河北 倫明	〃	〃
日本画と近代性—大観藝術について—	福田豊四郎	〃	〃
吉岡憲	長瀧 澄	美術手帖	三
吉岡堅二	久保貞次郎	みづゑ	五四二
瑛九のフォト・デッサン	美術手帖	三	〃
アトリエ訪問—脇田和—	山本鼎先生	アトリエ	二四五
鼎伝	木村 莊八	アトリエ	二五九
松本竣介君の死	小杉 放庵	〃	二六一
廣幡憲を悼む	難波田龍起	〃	二六五
松本俊介遺作展をみて	末松 正樹	〃	二六六

物故作家及美術関係者

鬘光の藝術	佐波 甫	アトリエ	二六七	兒島喜久雄先生の業績	富永 惣一	みづる	五三九	裏返しに見た展覧會	佐田 勝	アトリエ	二八二
小林徳三郎の死	渡邊庄三郎	浮世繪草紙	一ノ四	兒島の思ひ出	細川 護立	〃	〃	春の展覧會	北丘 卓	〃	〃
逝ける井上和雄氏	松方 三郎	藝術新潮	一ノ〇	時 評	〃	〃	〃	美術家連盟とは	三田 康	〃	二八四
松方幸次郎	榎原 紫峰	三 彩	二二三	美術界展望	兒島喜久雄	朝 日	二・一七	東西南北	齋藤 信治	工藝ニユ	七〇九
入江君の死に就て	加藤 一雄	〃	〃	美術界短信	〃	〃	二・五六	東西南北	T K	〃	八ノ一
波光氏のプロフィール	ヒュー・ウイ	〃	四五	日本美術界への忠告	ラングドン P・ウオーナー	〃	二・六〇	東西南北	吉井 一郎	〃	八ノ三
不滅の女像——歐米人から見た上村松園の藝術	リヤムスン	〃	〃	日展の底流に抗爭	内田 巖	〃	二・九	美術界の根本問題について	青野 季吉	三 彩	三
松園先生	木村 莊八	〃	三六	日展はどうなる	高 松	〃	三・二一	創造美術の結成とその示唆するもの	柳 亮	〃	一七
ゴッホ、マチスと上村松園	土方 定一	〃	四二	美術界の問題	河北 倫明	〃	三・三八	美術の天気予報	曾宮 一念	〃	一八
松園さん小感	錦木 清方	東 日	二四・八・三	秋の美術界と楽壇	高 松	〃	三・八・九	古典への反省	(時 評)	〃	一九
母松園の藝術	上村 松篁	讀 賣	二四・九・三	画壇に統合の動き	〃	〃	二四・四・七	線	猪熊弦一郎	〃	二一
田中豐藏君のこと	安倍 能成	博物画ニユリス	一〇	純在野運動の兆し	〃	〃	二四・七・七	二つの聲	(時 評)	〃	〃
琅子を哭す	樂之軒 生	〃	〃	秋の美術界展望	鈴木 進	アトリエ	二四・一	日展と日本画家	()	〃	二三
田中豐藏追憶	上野 直昭	〃	〃	皇室博物館と美術館を巡つて	〃	〃	二四・一	美術批評の在り方	()	〃	二五
倉琅先生	菅沼 貞三	〃	〃	現在の出發の意識について	土方 定一	〃	二四・二	日本画と人間表現	()	〃	二七
大口理夫君の業績	脇本 榮之軒	〃	一八	連合展の現在的意義	永井 潔	〃	二四・九	日本画とヒューマニズムの問題	伊藤 康	〃	〃
上村松園	關 千代	〃	二九	美術家の孤独と自由	伊原宇三郎	〃	二五・五	自覚の要請	皆光 茂	〃	二八
清水龜藏	山脇 洋二	〃	三三	光を求めて	荒城 季夫	〃	二五・七	純潔の手	(時 評)	〃	〃
松方幸次郎	〃	〃	三九	展覧會というもののへ	水澤 澄夫	〃	二六・八	愛情の欠如	伊原宇三郎	〃	二九
津田先生のこと	高村 豐周	美術及工 藝	一	美術時評(二四年)	茂原 茂	〃	二七・五	法隆寺の災害を生かせ	柳 亮	〃	〃
中西君の死を悼む	内田 巖	美術手帖	一二	病める美術展	〃	〃	〃	世界宝の災禍を償う	藤島亥治郎	〃	〃
画中の美人(松園展をみて)	幸田 文	夕 日	三・二七	日展有終の慘	加賀 三春	〃	二七・六	法隆寺金堂の災上に當つて	堀口 捨巳	〃	〃
美校時代の牧野君	田 軒 記	みづる	四九六	寒暄計	〃	〃	二七・六	法隆寺金堂焼失	伊藤 康	〃	〃
廣幡憲の死	末松 正樹	〃	五一九	二つのアンデパンダ展	鈴木良之助	〃	二八・〇	金堂炎上	内田 誠	〃	〃
中西 君	小山 良修	〃	〃	初恋の乙女のごとく——西増民主化と日本美術會——	福田 新生	〃	二八・一	法隆寺金堂焼失	大久保 泰	〃	〃
松本 竣介	佐波 甫	〃	〃	〃	〃	〃	〃	焼けたま々の姿を昭和の壁面に	猪熊弦一郎	〃	〃
兒島喜久雄の研究ノ	三幅 福松	〃	五三九	〃	〃	〃	〃	〃	杉本 健吉	〃	〃

責任の所在	内田 巖	三	彩	二九	外国工藝品の蒐集	柳 亮	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	猪熊弦一郎	朝	日	三・八・三
金堂の火災	山下新太郎	"	"	"	裏からのぞいた美術界	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	岡 鹿之助	夕朝日	三・五・二〇	
消火について	谷口 吉郎	"	"	"	日展博物館問題など	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	安井曾太郎	アトリエ	二・四・一	
金堂の復興	福山 敏男	"	"	"	美術文化への関心	岡田 譲	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	北川 桃雄	"	二・四・四	
文化戦線への高まり	井手 則雄	"	"	"	美術界一年の回顧	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	武蔵小路實篤	"	二・四・四	
戦禍と繪画	吉村 忠夫	"	"	"	(三年座談会)	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	三輪 鄰	"	三・一・三	
時論二題	石井 柏亭	"	"	"	現代美術と古美術	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	植村鷹千代	"	三・一・三	
日本美術界の諸問題	H・C・ホリス	"	"	"	一九五〇年を迎えて	河北 倫明	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	吉川 逸治	"	三・一・三	
をつく	S・E・リ	"	"	"	建設への進言	近藤市太郎	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	植村鷹千代	"	三・一・三	
日本美術に於ける当	寺田 竹雄	"	"	"	かく思ふ	田近 憲三	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
面の要諦	ブルーノ・ツ	"	"	"	人間精神の提唱	内田 巖	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
美術界の肅正	ローチヤ・ス	"	"	"	美に關與する権利と	横川毅一郎	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
新美術界は如何に動	内田 巖	"	"	"	その前提	鈴木 進	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
く	田中 一松	"	"	"	美術家のモラル	村田 良策	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
美術界の再生によせ	加藤 顯清	"	"	"	ある美術学生に與ふ	植村鷹千代	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
て(一三)	里見 勝蔵	"	"	"	新しい世代への一つ	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
外装の民主主義	"	"	"	"	の希望	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
官展解消すべし	"	"	"	"	公募展の乱立とその	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
事大主義の清算—日	"	"	"	"	弊害	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
展の休止と洋画団体	"	"	"	"	日展の問題を中心と	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
の現状	"	"	"	"	して(座談会)	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
多すぎる公募展	"	"	"	"	美術界今年のもめご	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
梅原氏の藝術院辞任	"	"	"	"	と(昭和二十三年)	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
に寄せて	内田、福田	"	"	"	工藝時評	大島 隆一	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
これからの官展	須田國太郎	"	"	"	美術と戦犯	内田 巖	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
本年度の美術界—鑑	今泉 篤男	"	"	"	民間団体の重責	横川毅一郎	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
賞者側の成長—	"	"	"	"	美術家の出発展	今泉 篤男	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
美術界打診	"	"	"	"	日展をめぐる	荒城 季夫	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
動きつゝある美術界	田近 憲三	"	"	"	官展廃止と美術界	土方 定一	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
昭和二年の関西美	橋本 喜三	"	"	"	現代繪画と生活感情	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
術界展望	井上 靖	"	"	"	近代化の停滞	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
美術界最近の動向	今泉、裕、吉岡	"	"	"	現代洋画の問題	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
美術界一年の回顧	ユリス	"	"	"	時 評	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	
(二十二年座談会)	"	"	"	"	"	"	美術手帖	三	一〇	一〇	身辺雑記	阿部 展也	"	二・七・七	

自叙伝	我が裏切りの藝術について	福澤 一郎	アトリエ	二七七	制作	清水多嘉示	アトリエ	二八五	新春日記抄	福田豊四郎	三彩	二九
私の作品	村井 正誠	阿本 太郎	〃	〃	中川 紀元	〃	〃	〃	法隆寺災害余録	鈴木 進	〃	〃
頭の皿	南大路 一	〃	〃	〃	小糸源太郎	〃	〃	二八六	模写の思い出	新井 勝利	〃	〃
イタリーの追想断片	中山 巍	〃	〃	〃	梅原龍三郎	藝術新潮	〃	一ノ〇	此君汀難談	伊東 深水	〃	三〇
想うこと	山口 長男	〃	〃	〃	岡本 太郎	〃	〃	〃	根本的なこと	堀 文子	〃	三二
画に立つまで	須田國太郎	〃	〃	〃	木村 莊八	藝林間歩	〃	一ノ九	追憶の港	東山 魁夷	〃	〃
静物画家の独白	三岸 節子	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二ノ三	日記抄	三輪 晃勢	〃	〃
アホなものに対して素朴にたいかうこと	永井 深	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二ノ四	長崎	安西 啓明	〃	三三
牛の頭蓋骨	川端 實	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二ノ五	某月某日の感想	柳原 紫峰	〃	〃
技巧隨筆	高島達四郎	〃	〃	〃	木村 莊八	〃	〃	二ノ八	戸隠	郷倉 千鶴	〃	三四
アキルと亀の子	齋藤 義重	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二ノ九	漢魚	杉山 寧	〃	三五
身辺雜記	小川 マリ子	〃	〃	〃	田邊 泰	建築文化	〃	三	偶庵閑日	川合 玉堂	〃	〃
巴里の一週間	里見 勝藏	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八	新居	森 白甫	〃	〃
(自叙伝の一章)	林 武	〃	〃	〃	吉村 孝義	工藝ニユ	〃	一七ノ一	アミーバの心	高山 辰雄	〃	〃
私の勉強	森 芳雄	〃	〃	〃	長谷川三郎	イス	〃	〃	心境	山野 不矩	〃	〃
一つの会談	濱口 陽三	〃	〃	〃	野間 仁根	国際タイ	〃	三・九・六	太夫さん	山崎 豊	〃	〃
昔噺(自叙伝の一章)	碓 伊之助	〃	〃	〃	金井 紫雲	三彩	〃	三九・七・八	麗風来	川端 龍子	〃	〃
田舎	古茂田守介	〃	〃	〃	小野 竹喬	〃	〃	九	室桂庵閑談	松林 桂月	〃	〃
墓地板	向井 潤吉	〃	〃	〃	小杉 放庵	〃	〃	一二	見る阿呆	船戸 洪	〃	〃
わがくたびれの記	伊原宇三郎	〃	〃	〃	津田 青楓	〃	〃	一五	このごろ	太田 聰雨	〃	三七
雨の引越	高田 誠	〃	〃	〃	東山 魁夷	〃	〃	一六	小説家の眼	徳川 義恭	〃	〃
このごろ	齋藤 愛子	〃	〃	〃	伊藤 康	〃	〃	二一	ただ一回の感情	小倉 遊亀	〃	三八
煎茶	中川 一政	〃	〃	〃	福田豊四郎	〃	〃	二二	感じたまゝに	川端 龍子	〃	四〇
山本正君への手紙	吉岡 憲	〃	〃	〃	小川 千麴	〃	〃	二五	盲目漫語	内山 完造	〃	〃
吉岡君への手紙	山本 正	〃	〃	〃	小杉 放庵	〃	〃	二六	私の抱負を語る	太田 聰雨	〃	〃
私の仕事	岡 鹿之助	〃	〃	〃	小竹無二雄	〃	〃	二七	新しいと云うこと	岩崎 鐸	〃	〃
或る日の私	鶴岡 政男	〃	〃	〃	秋野 不矩	〃	〃	二七	パリーの季節	難波田龍起	〃	〃
近代繪画に関心を持つまで	三雲祥之助	〃	〃	〃	川端 龍子	〃	〃	二七	山、海、断章	西山 英雄	〃	〃
									そゞろごと	望月 春江	〃	四七

制作手帖	吉岡 堅二	三	彩	四七	美の教養の欠如	北川 桃雄	東京	三・五・七	マレイに於ける山崎省三画伯の生活断片	若林喜久平	美術	三ノ五
父の横顔	伊東 薫燿	〃	〃	〃	銀座と瀬戸内海上下	鍋井 克之	〃	三・〇・二、三	役にたたないもの	中川 一政	〃	〃
旧知	大久保 泰	〃	〃	〃	錯覚の回想 上下	本郷 新	〃	三・二・七、八	アメリカ兵と交る	恩地孝四郎	美術及工	二
美術難感	武者小路實篤	〃	〃	〃	東洋と西洋	三雲祥之助	〃	三・一・一、三	人形人語	山田徳兵衛	〃	〃
梅原龍三郎への手紙	志賀 直哉	〃	〃	六	閑かな庭 上中下	中川 一政	〃	三・一・七、一、九	離山莊記	福澤 一郎	〃	〃
四都三旬	曾宮 一念	〃	〃	〃	人の命	木村 莊八	〃	三・二・三、三	老蒼居	木村 和一	〃	〃
巴里時代の梅原氏と私	新村 出	〃	〃	〃	風狂の士	中川 一政	〃	三・七・一、四、五	一九四七年へ	中村 善策	〃	三
峯の寺	小穴 隆一	〃	〃	〃	マーキユロの赤	佐藤 忠良	〃	三・七・三、三	陶藝偶感	加藤士師萌	〃	〃
モデル百日	安倍 能成	〃	〃	〃	盛夏画想	福田豊四郎	〃	三・七・三、九、〇	山小屋にて	石井 鶴三	〃	〃
画家の日記	見島善三郎	〃	〃	〃	新しい課題	朝倉 文夫	〃	三・二・一、六	来年などとは思つてゐない	川端 龍子	〃	〃
美術工藝解体	小池岩太郎	〃	〃	三	御人よし	宮田 重雄	〃	二・四・二、四	日記抄	小糸源太郎	美術手帖	二
美術難信	鍋井 克之	〃	〃	〃	ボリの事	中川 一政	〃	二・四・二、五、一、七	雲と画	曾宮 一念	〃	五
自分の事	坂本繁二郎	〃	〃	〃	画室、花、思い出	小糸源太郎	〃	二・四・三、三、四	白色の舞台	大森 啓助	〃	六
寸 感	内田 巖	〃	〃	〃	新春閑文字	朝倉 文夫	〃	二・四・六、七、八、六	巴里の夏	川端 實	〃	八
藝術の範疇	伊原宇三郎	〃	〃	〃	香爐峰	中川 一政	〃	三・五・一、四、一、六	リウ・ムーランド・ブル	島村三七雄	〃	〃
内容の变化	兒島善三郎	〃	〃	〃	世界は狭い	東郷 青兒	東京タイムス	三・五・五、九	ロシア雑誌	麻生 三郎	〃	〃
京都と梅原	黒田重太郎	〃	〃	〃	画家の反省	猪熊弦一郎	東朝	三・二・三、六	タロー・パリ・トウキョウ	佐渡谷 勇	〃	一、二
画家の力	中川 一政	〃	〃	〃	御宿海岸	荻須 高德	〃	〃	キョウウー岡本太郎と僕	小松 義雄	〃	二、四
随 想 上下	福田豊四郎	〃	〃	〃	都市美の構想	石川 榮耀	東日	三・二・〇、四	六甲山の写生	高島達四郎	〃	三、〇
美術の本筋	野口彌太郎	〃	〃	〃	母のしつけ	岡本 太郎	〃	三・五・一、三	画家の随筆(特輯)	五十六氏執筆	〃	三、二
新緑の湖畔より(上下)	鍋井 克之	〃	〃	〃	夏の上高地	足立源一郎	讀書	三・六・三、三	繪画生活	菅野 圭哉	〃	三、四
美術家の立場	岡本 唐貴	〃	〃	〃	竹の繪	堂本 印象	日本美術工藝	四、八	自画像	福澤 一郎	〃	三、七
風船画伯の死	西川 満	〃	〃	〃	終戦近く	石井 柏亭	花	一	日本髪	鍋木 清方	〃	日 三、一、一
敗戦生活の美術	孝橋 謙二	〃	〃	〃	雲を見る	曾宮 一念	美術	三ノ一	富士山	内田 巖	〃	三、一、〇
出品作の始末	北川 桃雄	〃	〃	〃	黒い眼	岡 鹿之助	〃	〃	寒中画談	梅原龍三郎	〃	三、一、一
女流という言葉	三岸 節子	〃	〃	〃	身辺より	中村 研一	〃	〃	山中人隨筆	川端 龍子	〃	三、一、九
シミる田舎で	中川 紀元	〃	〃	〃	三 極	曾宮 一念	〃	三ノ二		石井 鶴三	〃	三、三、一
					地下壕	木村 莊八	〃	〃				

名人戦をみる	梅原龍三郎	毎日	三・四・六	兒島善三郎の手紙	大久保 泰	アトリエ	二四八	奎太郎の写生"宮松亭"	木村 莊八	藝林間歩	一ノ四
暮のこゝろ	佐伯 米子	"	二四・二・八	産業と美術	ウオルター・アベル	"	二五四	奎太郎画"平土間"	"	"	一ノ六
水の音をきいて	曾宮 一念	みづゑ	五〇五	近代繪画と写真	相良 徳三	"	二五八	都市、広告、広告塔	伊藤喜三郎	建築文化	一七
繪画の精神と技術についての勝手な考えの一つ	野口彌太郎	"	五二六	パレットについて	勝見 勝	"	二六五	倉吉耕四季	長谷川富三郎	工藝	一一七
ブルジョアとレベル	濱口 陽三	"	"	一つの返事	福田 新生	"	二六七	手織の話	柳 悦孝	"	"
長崎見物	鈴木信太郎	"	五二八	アリヤー・アンド・アイヴス版画	許 斐仁	"	二六八	能面の女性美	野間 清六	"	"
隠岐日誌	小泉 清	"	五四〇	画廊めぐり	ミカエル・ミドルトン	"	二七四	安来の鑒場	河井寛次郎	"	"
斷・想	吉原 治良	"	五四一	アトリエ新人賞	"	"	二八二	アツテイカの墓碑二点	澤柳大五郎	座右宝	一二
大觀先生酒を語る	讀 賣	三・九・五	"	スキの回想	元木 恵	"	二八四	北京西郊	土方 定一	彩	四
私の青春	内田 巖	BBB B	一	ガラス繪について	佐田 勝	"	二八七	書道閑談	岡 麓	"	二四
二十年前の六ヶ月	本郷 新	"	二	版 画	恩地孝四郎	"	"	書について	中川 一政	"	"
シベリヤ画伯	佐藤 忠良	"	四	深水の版画処女作"対鏡"その他	藤懸 靜也	浮世繪と版画	一	書は美術か	石橋 犀水	"	"
好きな道	大河内信敬	"	"	戦後の浮世繪界	"	"	"	日記抄	鍋木 清方	"	二六
雑	"	"	"	渡邊木版画店生ひ立ちの記(上下)	市原 治正	"	一、二	私の事、繪のことなど	和田 三造	"	"
ガラス板にガラス粉で描く繪	朝 日	三・三・三	"	現代版画の諸相	檜崎 宗重	"	二	新聞小説の挿繪	柳 亮	"	三九
画商と画家	"	三・五・三	"	巴水藝談	川瀬 巴水	"	"	美術の著作權	石井 鶴三	東	京三・二・四
適切な日本觀察―ザヴィエル渡来の文化的意義―	田中耕太郎	"	二四・四・三	装幀漫談	森 銑三	翰林工藝	七・八	遠い巴里の話	宮田 重雄	"	三三・九・九
われらの不忍池	木村 莊八	"	二四・八・九	東西画商伝	福島繁太郎	藝術新潮	一ノ四	美を創る力を函 館	佐藤 敬	"	二四・六・二
古書におぼれて	高橋誠一郎	"	二四・二・七	藝術院授賞式と宮中御陪食藝談	鍋井 克之	"	一ノ八	都会を知らぬ子供ら	高島達四郎	"	二四・八・二〇、二
廣告だらけの街	岡 鹿之助	"	二四・三・四	贋物について	石原 龍一	"	"	文五郎	川端 龍子	"	二四・八・九
日本人の狭さ(ニューヨークより)	藤田 嗣治	"	二五・一・一	日本美術	福島繁太郎	"	"	回想	中村 研一	"	二四・〇・六
豪華な美術書出版	植村鷹千代	夕朝日	二五・八・三〇	文学者の繪	矢代 幸雄	"	一ノ九	フアン	木村 莊八	"	二五・一・三、二
美術品の修理と保存	アサヒ	二五・五・五	"	贋物の勝利	小林 秀雄	"	一ノ九	鯉のぼり	小穴 隆一	"	二五・五・七、八
院―イタリヤの美術病	ニユース	二五・五・五	"	細川護立藝術放談	龜井勝一郎	"	一ノ九	祇園祭	石井 鶴三	"	二五・五・五、六
繪木について	吉田 一穂	アトリエ	二五・二	白洲 正子	田近 憲三	"	一ノ三	有明海	小糸源太郎	"	二五・六・一、七
魯迅藝術学院の木版	土方 定一	"	二四六	河上徹太郎	土方 定一	"	一ノ三	奈良公園	三雲祥之助	"	二五・八・三
									曾宮 一念	東日	二五・八・三
									鍋井 克之	"	二五・八・二四

夢の色・巴里	高野三三男	東日	三五・八・九	壁肖像画	石見 爲雄	美術手帖	八	鑑識について(上)(下)	渡邊 護	五九・七四〇
油彩画の動き	日本美術工藝館ニユース	一二二		かすみ版の話	鈴木 金平	九		最近の会場構成によせて	阿部 展也	五四一
地方美術館の問題	蓮實 重康	七		キヤンパスを作る	岡 鹿之助	九・二〇		展望—展覧会の入場者—		
大原コレクション	ユース	三一		パステル画について	川島理一郎	一一		テラコッタ土人形について	富永 惣一	三九・九元
文化財保護委員の横顔	〃	四〇		特異児童の繪	本明 寛	一二		日展と書道	正木 篤三	三八・六
東洋画のデッサンとしての書	石橋 厚水	三ノ一		マデスの映画				現代漫画批判	荒城 季夫	三五・八・六
行動美術協会の出発	榎倉 省吾	三ノ二		野虎雄	吉田 謙吉	二四		ローマ画信	裕 伊之助	三五・八・六
独立美術協会主催自由出品展について	藤岡 一	〃		舞台装置家の眼	遠藤 慎吾	二七		アメリカ通信	岡田 謙三	三五・八・六
人形風土記	西澤 笛歌	美術及工藝二		知られざるニジンスキーの繪	諸 家	三〇		アメリカ版画について		三五・八・六
油繪具の話一二、三	中谷 泰	美術手帖 一二、四		画家の隨筆		三二		東芝美術サークル訪問記	永井 潔	〃
創作版画の技法一	平塚 運一	一、二、三、四、七、九、一〇、二		莊八筆化物百態	何 初彦	三三		石川島美術サークル訪問記	永見 讓治	二
繪の値段	西田 武雄	一		漫画について	雁香 忠留	三四		繪本について	富山 妙子	〃
職場美術協議会の現況	高田 修	〃		当世漫画論	三林亮太郎	三五		画家の生活	中村 哲	〃
額縁の作り方(上下)	丸野 豊司	二、三		バレエのデコール	那須 良輔	三六		現代漫画家論	須山 計一	〃
技術ノート・揮毫油と乾性油(溶き油に就て)	岡 鹿之助	〃		バレエの衣裳	三林亮太郎	〃		セリグラフィについて	永井 潔	〃
ヴェルニについて	〃	四		ドビュッシー「子供達の領分」が画になる迄	恩地孝四郎	三七		中国の木刻	菊地 三郎	〃
東京美術学校を志す人へ	村田 良策	〃		バレエ装置の特質	三林亮太郎	〃		日立亀有美術サークル訪問記	高森 捷三	三
職場美術の在り方	須山 計一	五		画商の生態	土方 定一	毎日	二四・二・七	美術大学カメラ訪問記	水澤・佐伯	四
蒐集家レオ・スタインの冒険	久保貞次郎	六		最近の美術書	木村 莊八	〃	二五・八・四			
スタインのコレクション	齋藤 興里	〃		夜間野球	山脇 巖	みづゑ	四九六			
或日本人氣質	久保 守	〃		日本の都市にあらはれたアメリカの色	瀧川 太朗	五〇〇				
藏書票	恩地孝四郎	〃		讀賣主催泰西名画展出陳画の保存	諸 家	五〇三				
装幀について	渡邊 一夫	〃		國産油繪具と油	北川 民次	五三三				
文学に現れた美術家	秦 一郎	七八・一〇		新しい児童美術の哭	戸川 行男	五三五				
一、二、三	〃	〃		清君のこと	〃	〃				

明治大正以降美術

速水御舟の素描一・二	隈元謙次郎	アトリエ	二四・四三
フューザン会・ノオト	木村 莊八	〃	二四一
近代日本洋画展—油繪體質の貧困	内田 巖	〃	二五〇
阿部 展也	〃	〃	五四一
富永 惣一	〃	〃	三九・九元
正木 篤三	讀賣	〃	三八・六
荒城 季夫	〃	〃	三五・八・六
裕 伊之助	〃	〃	三五・八・六
岡田 謙三	〃	〃	三五・八・六
永井 潔	〃	〃	〃
永見 讓治	〃	〃	二
富山 妙子	〃	〃	〃
中村 哲	〃	〃	〃
須山 計一	〃	〃	〃
永井 潔	〃	〃	〃
菊地 三郎	〃	〃	〃
高森 捷三	〃	〃	三
水澤・佐伯	〃	〃	四

黒田清輝初期の風景	隈元謙次郎	アトリエ	二五〇	明治大正の版画	近藤市太郎	茶わん	二〇三	島崎鴎二君の死	高岡徳太郎	美術	三ノ五
明治以降浮世繪年譜	吉田 咲二	浮世繪草紙	一ノ一	父劉生の思い出	岸田 潤子	東日	三・三六	近代日本洋画の史的	土方 定一	美術及工	六
明治洋風版画家井上	樋口 弘	一ノ二		青木繁の画業	河北 倫明	西日本	三・四・元	展覧	河北 倫明	一	
安治の生涯	心	一ノ二		岸竹堂について	土居 次義	日本美術	四五	黒田清輝以前	森口 多里	一	
フエノロサと岡倉天	河北 倫明	解釈と鑑賞	一六二	明治初期の洋画	黒田重太郎	一		黒田清輝と日本印象	派	一	
岸田劉生の日記一鶴	藝術新潮	一ノ七		京都を中心とした明	森本 東閣	一		青木繁の生涯(下)	河北 倫明	美術研究	一四〇
沼から京都へ	一ノ七			治画壇の回想	小西 謙三	一〇八		吉川靈華筆 騷離(解説)	久我 五千男	美術手帖	七
二科盛衰史	石井 柏亭	藝林間歩	二ノ五	黎明期の大版画壇	山内 斧生	一		青木繁記念碑建立経	過概要	一	
黒田清輝回顧	瀧 拙庵	国華	六五〇	大阪画壇の思い出	河北 倫明	日本歴史	二六	石井先生の二科二十	人傑の思い出、其他	小出先生の素描	物故作家の思い出二つ
鐵齋画の展示を觀て	山内 斧生	古美術	一ノ五	美術と明治初年の外	青木 繁	ユース	一三	古賀春江のことな	ど	青木繁「天平時代」	帝展改組当時の思い出
竹久夢二のこと	館林唐一郎	一		人教師	河北 倫明	一		或る頃の佐伯君	出	佐伯祐三「瓦斯燈と	廣告」(解説)
劉生と夢二	青野 季吉	座右宝	四・五	偉大な美術史家フエ	岡 畏三郎	一六		前田寛治と構図	草土社「岸田劉生に	ついて」一、二	愛惜(三岸好太郎)
ひとりの画家(川上	藤島亥治郎	一		涼花)	岡 畏三郎	一		青木繁の繪	近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について
文明開化建築時代	藤森 成吉	三彩	一二	岸田劉生	土方 定一	一七		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
天心と金谷	村上華岳	六		岡倉天心	水澤 澄夫	一八		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
森田 恒友	森田 恒友	一五		連水御舟	千澤 植治	二二		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
森田 恒友の藝術	倉田 三郎	二八		荻原守衛	岡 畏三郎	二六		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
近代日本画の系譜	水澤 澄夫	二二		小出橋重	河北 倫明	二七		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
速水御舟特輯	河北他二氏	三一		今村紫紅	隈元謙次郎	三七		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
今村紫紅特輯	河北他六氏	四三		高橋由一	中村傳三郎	四一		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
ある伝説、柴田安子	福田豊四郎	一		藤川勇造	隈元謙次郎	一		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
の藝術について	堀 文子	一		黒田記念室	隈元謙次郎	一		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
柴田安子女史の思い出	金子 義男	一		近代日本美術の系譜	河北 倫明	一		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
外遊時代の御舟	福島繁太郎	一		近代日本美術の系譜	鍋本 清方	一		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
明治・大正・昭和・日本	河北 倫明	西部美術	三	鳥合会のこと	久富 貢	美術	三ノ四	近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
画巨匠名作展を觀て	田中 一松	創美	一ノ一	ジョン・ラファージ	木村 莊八	三ノ四・七・八		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
漁夫晩歸(青木繁)	西村 貞	茶わん	一八二	草土社「岸田劉生に	ついでに」一、二、三、四	三ノ四・七・八		近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
御舟の藝術								近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について
田中喜作君の思い出								近代洋画展を觀て	近代洋画展の感想	近代洋画展について	近代洋画展について

明治と大正の境め	鈴木信太郎	みづゑ	五一〇
小出楯重の仮面	大久保泰	"	五一
小出楯重の裸婦	水澤 澄夫	"	"
小出君を惜しむ	安井曾太郎	"	"
師小出楯重	長谷川三郎	"	"
三岸好太郎論	伊藤 康	"	五三四
明治美術と自然主義	河北 倫明	明治大正 文学研究	四
影を求めた画家竹久 夢二	内田 巖	B B B B	五
青木繁の「天草風景」	河北 倫明	"	六

中 國

中国現代画壇展望	梅花堂主人	三 彩	二三
蔣兆和と現代の支那 美術	土方 定一	美 術	三ノ二
中日版画の段階	小野 忠重	みづゑ	五〇三

行 政・教 育

美術展の開催	中島 健藏	朝 日	三・二・九
文化院の問題	桑原 武夫	"	三・一〇・四
一考を要する美術行政 (社説)	"	"	三・八・二六
置き去り美術行政	"	"	三・五・二
封建的な画壇	内田 巖	"	三・八・八
よわい反対説	石井 柏亭	"	三・八・八
文化財の保護	有光 次郎	夕朝日	三・八・三五
院展と青龍社展	北川 桃雄	三 彩	三
文化省の夢	木村 莊八	西部美術	三
文化省生まれよ	"	東京	三・二・二
文展の即時廃止	村雲 毅一	"	三・二・三
美術大学の構想につ いて	柳澤 健	"	三・二・九、三〇
地方美術館の問題	蓮實 重康	博物館ニ ユース	七

社寺見学禁止の問題	吉澤 忠	博物館ニ ユース	一四
文化財の擁護	石澤 正男	"	二一
国宝保存法の改正に ついて	本間 順治	"	二二
古美術行政の新展望	蓮實 重康	"	二三
美術教育施設への入 場税	吉澤 忠	"	二五
文化財保護法案のそ の後	松下 隆章	"	三二
博物館設置法につい て	和田 新	"	三三
文化財はどんな方法 で保護されて来たか	坂元 正典	"	三七
文化財保護法の成立	石澤 正男	"	"
文化財保護法の解説	富士川金二	"	三八、四〇
文化財保護法に望む	諸 家	"	四〇
美術政策の問題	中島 健藏	美術及工 藝	二
帝室博物館を国宝と せよ(社説)	毎日	"	三・九・九
美術行政審議会	村山 麒嶺	"	三・九・三
児童画の問題	小山 良修	みづゑ	五三七
藝術院	福田豊四郎	讀 賣	三・五・七
新発足の藝術大学	小宮 豊隆	"	三・六・元
藝術大学と一般教養	"	"	三・六・四

展覧会記事及批評

(昭和二十二年)			
官展の新方式	伊原宇三郎	造 形	一ノ一
1回日本美術展	石井 鶴三	"	"
1回日本美術展(第 二部評)	岡 畏三郎	西部美術	二
1回日本美術展(第 一部評)	河北 倫明	"	"
日展評	土方 定一	美 術	三ノ四

日展鑑賞後感	遠山 孝	美 術	三ノ四
"日展"への再検討 (社説)	毎日	"	二〇・元
2回日展記	岩山 光郎	美術及工 藝	三
2回日展評	植村鴈千代	みづゑ	四九六
日展第二部評	永井 潔	"	五〇六
二科展と院展	山本隆太郎	アトリエ	二四四
春陽会展	田近 憲三	美 術	三ノ七八
梅原龍三郎二十年回 顧陳列を見て	井上 昇三	"	三ノ六
梅原龍三郎の繪画そ の他(、国展)	大口 理夫	翰林工藝	六七八
福澤一郎個人展につ いて	植村鴈千代	美 術	三ノ一
1回翰林工藝展に就 いて	小池 新二	翰林工藝	七・八
2回西部美術展評 (昭和二十二年)	河北 倫明	西部美術	四

今春の展覧会に於ける 優秀作と新人アン ケート	一五氏解答	アトリエ	二四八
春の展覧会から	今泉 篤男	みづゑ	五〇一
官展について	武者小路實篤	新報知	九・一一
官展問題	兒島喜久雄	第 一	一九・一三
学士院と藝術院(社 説)	毎日	"	日・一・二三
官展問題についての 私見	青木 達彌	みづゑ	五〇五
日展を觀て	長瀧 澄三	彩	一四
日展への要望	朝井閑右衛門	東京	二・二三
連合展の現在の意義	永井 潔	アトリエ	二四九
現代美術展評	蓮實 重康	"	二四八
新制作、行動展	正木 須恵	みづゑ	四九五
二科展を見て	吉岡 憲	"	五〇五

一水会展	今泉 篤男	みづゑ	四九五	自由美術展を見て	大江 満雄	アトリエ	二五八	創造美術春季展	水澤 澄夫	三 彩	三二
清光会展を觀る	〃	〃	四九四	三月の展覧会2回泰西名画展 モダンアート	美術手帖	四	創造美術評	大久保 泰三	〃 彩	三七	
人間像について(福澤一郎個展の感想)	瀧口 修造	アトリエ	二四六	春の展覧会評1回元會、太展、自由美術展	〃	三	青龍社展、日本美術院小品展	佐田 勝	〃	〃	
虚しい"靜と動"院展と青龍展	田中 一松	東京	九・四	院展の感想	河北 倫明	三 彩	二四	都展の日本画	水澤 澄夫	〃	三二
虚しい楯の両面	鈴木 進	三 彩	一二	青龍社展	北川 桃雄	〃	〃	青衿会展	河北 倫明	〃	〃
日展の工藝	K 生	美術と工	七	危機を行く日本画1回展	柳 亮	〃	二五	5回国土会展	北川 桃雄	〃	〃
1回(2回)翰林工藝展報告出品目録	翰林工藝	三、三	〃	展覧会の動向1回輸出工藝展、生活造形展	小池 新二	工藝ニユ	一六ノ	中小企業振興工藝展(特集)	佐波 甫	工藝ニユ	七ノ五
工藝創作権の確立と意匠法の改正に就て	齋藤 信治	工藝ニユ	五ノ九	展覧会評	和井 植男	みづゑ	五一七	(昭和二年)	水澤 澄夫	BBB B	三
(昭和二年)	河北 倫明	博物館ニユース	一六	(昭和四年)	今泉 篤男	東京	一五六	日展とは	北丘 卓	アトリエ	二八三
近代日本美術総合展	千澤 植治	〃	〃	展覧会の新しい構想	江川、太田	日本美術	一二二	連合展を觀る	吉岡 堅二	三 彩	四四
近代日本美術総合展陳列解説と批評	〃	〃	〃	現代日本画の問題(二四年度)	今泉 篤男	讀 賣	二・七	毎日連合展を見る	岩崎 録	三 彩	四四
近代日本美術総合展展覧作品名	梅原龍三郎	朝 日	七・元	既成概念をすてよ5回日展評	河北 倫明	三 彩	三七	誌上美術団体連合展	大河内、植村	美術手帖	三一
日展廃止説と自分官展問題の結論	土方 定一	毎日	八・八	連合展管見	嘉門 安雄	アトリエ	二六一	二つのアンデパンダン展	鈴木良之助	アトリエ	二八〇
日展評	大久保 泰三	三 彩	二六	連合展の感想	河北 倫明	みづゑ	五二四	日本美術会主催3回アンデパンダン展評	土方 定一	BBB B	五
日展を見て感じるままに	田近 憲三	〃	〃	アンデパンダン展をみる	土方 定一	アトリエ	二六九	讀賣主催2回アンデパンダン展を見て	吉澤 忠	〃	六
工藝の特殊性と日展評	内藤 匡	茶わん	一九〇	關志の復活と前衛様式の流行124年春の展覧会総評!	柳 亮	みづゑ	五二三	35回二科展	植村麗千代	みづゑ	五四〇
展覧会総評	柳 亮	みづゑ	五一六	春の諸展	佐波 甫	アトリエ	二七〇	二科展行動展評(対談)	田近・植村	美術手帖	三五
アンデパンダン展	碓 伊之助	讀 賣	二・三	秋の団体展総評	〃	みづゑ	五三〇	5回行動展評	土方 定一	みづゑ	五四〇
連合展私観	木村 莊八	美術手帖	八	制作合評(24年11月展)	植村、柳、大河内	美術手帖	二六	新制作派展	柳 亮	美術手帖	三六
春陽会と国画会評	宮川 謙一	〃	五	独立、自由美術、第二紀会評	植村麗千代	〃	二四	14回新制作派展評	瀧口 修造	みづゑ	五四一
女流美術、光風会	河北 倫明	〃	〃	安井、梅原自選展	土方 定一	みづゑ	五二四	一水会展評	田近 憲三	美術手帖	三六
水彩聯盟、双台社評	朝井閑右衛門	アトリエ	二五九	制作合評(24年度個展評)	今泉、三雲	美術手帖	二五	12回一水会展評	柳 亮	みづゑ	五四一
春の展覧会について	三雲 祥之助	〃	二五九		〃	〃	〃	二紀会展評	富永 惣一	美術手帖	三七
秋の展覧会から	土方 定一	〃	二六五		〃	〃	〃	今年の独立・二紀自由対談	田近 憲三	みづゑ	五四二

独立展評

自由美術展評

美術文化展を語る

4 回新樹会展

一五人展によせて

讀賣主催現代一五人展の批判

一五人展の作家と作品を語る

坂本繁二郎の藝術

坂本繁二郎自選回顧展の折に

坂本繁二郎自選回顧展を主催して

制作合評—25年1月

制作合評—25年1月

制作合評—25年1月

制作合評—25年3月

制作合評—25年4月

日展の日本画評

日本美術院小品展

日展会展

春季創造展

創造美術展評

実証の成長

13 回創造美術展評

院展

青龍社展

東北北海道工藝品展

示会について

新制作派展の工藝をめぐって

ス編集委員

瀧口 修造 美術手帖 三七

大河内信敬 〃 〃

江川 和彦 B B B B 六

佐波 甫 アトリエ 二八五

嘉門 安雄 博物館ニ ユース 三四

倉林 正藏 B B B B 四

今泉・土方 讀賣 一・六

河北 倫明 夕朝日 七・四

寺田 透 みづゑ 五三九

久我五千男 〃 〃

高島・瀧口・田近 美術手帖 二七

今泉・土方 〃 二八

吉川・菊池 〃 二九

川・富永 〃 三〇

大久保・仲田・植村 〃 四八

野間 清六 三彩 四四

河北 倫明 〃 四四

P・P 〃 〃

河北 倫明 〃 四七

北川 桃雄 〃 〃

植村騰千代 〃 〃

田中 一松 〃 四六

今泉 篤男 〃 〃

安部 郁二 〃 一八ノ二

工藝ニユース 〃 一八ノ二

ス編集委員 〃 〃

西洋美術関係文献

総説

歐洲美術の破壊と掠奪 エム・ピア アトリエ 二四二

現代アメリカ美術 アメリカ美術の動向 中川 暢子 〃

繪画と人間 石垣 綾子 二五一

リアリズムへの道 麻生 三郎 二六二

近代繪画の要素としての光と色 難波田龍起 二六五

繪画に於ける人間復活 江川 和彦 二七三

原始藝術と近代藝術 内田 巖 二七五

イタリヤ古寺巡礼 和辻 哲郎 二八六

ロシア藝術紀行 野崎 韶夫 一ノ六

東西美術論(近代美術の誕生) アンドロ・マルロオ 一ノ八一三

藝術雑誌一・二・三 小松 清訳 〃

ベレニケの髪 兒島喜久雄 座右宝 一二・七

造形主義について 徳川 義寛 〃

タブロウとパンチュール 富永 惣一 世界美術 一〇・二

古典的な基礎(上、中、下) 植村騰千代 〃 〃

世界博物館めぐり 兒島喜久雄 東京三・三一五

フランス 中村 常雄 博物館ニ ユース 三

アメリカ一 ギヤラガー 〃 〃

中国 土方 定一 〃 四

アメリカ二 シヤーマン・リー 〃 五

ソヴェート 高柳 博也 〃 六

イタリヤ 小林 剛 〃 七

スペイン

アメリカの美術 須田國太郎 博物館ニ ユース 一二

西洋美術略史一五 イシユベル・美術 三ノ五

西洋美術略史一ルネッサンス 今泉 篤男 美術手帖 八・〇

西洋美術略史一北歐のルネッサンス 大久保 泰 二六・元

西洋美術略史一バロコ 嘉門 安雄 〃 三〇

西洋美術略史一十八世紀 矢崎 美盛 〃 三五

西洋美術略史一十八世紀 岡本 太郎 〃 三六

現実・写真 岡本 太郎 〃 三七

現代アメリカ美術の動向 久保貞次郎 〃 四九三

視覚の言語 吉川 逸治 〃 四九六

人間の藝術 コンラッド・メイリス 〃 五二一

フランス美術の精神的地位 メイリス 〃 五二四

新伝統主義の定義 メイリス 〃 五二五

戦後ヨーロッパの第一印象 メイリス 〃 〃

太陽 モーリス・ドニ關口訳 〃 〃

この頃一、二 高田 博厚 〃 五三・五三

現代に於ける中世の観点 岡本謙次郎 〃 五三一

また別種の劃一主義 レオン・ウ 〃 〃

知性と感覚的感動 レオン・ウ 〃 〃

戦後シュールレアリスムの動向上、下 山中 散生 〃 五三・五八

前衛美術の民族的形態上、下

和田 定夫 みづゑ 五九、五四〇

巴里のこのごろ

コンラッド・メイリ 五四二

世界美術の新課題

植村麗千代 讀賣 三四・三・五

リアリズムと技術
ベ・ヨガンソンの論文から

田中 義三 B B B B 四

流派の運命

永井 潔 " "

絵 画

フランス画壇の消息

末松 正樹 朝日 三・五・三

巨匠ダリの新作展

アサヒニ ユリス 三・一・七

マチス作品回顧展に
よせて—アラゴンの言葉—

岡 鹿之助 " 三・八・三

ラブラードの回想

土方 定一 " 二四一

フラン・マズレルのこと

瀧口 修造 " 二四三

三角の窓—最近のフランス画壇の展望とイタリーの古典美術—

瀧口 修造 " 二四四

ヴァン・ゴッホに就

狹間 正 " "

ダリの素描について

北園 克衛 " 二四五

ピトレスク(セザンヌ覚書)

伊藤 廉 " 二四六

フィリップ・ガストン

H・W・ジャニス 瀧口修造 二四七

ピカソはアンチイブ
で新しいマニエール
をつくる

ピエル・サベリチ 武者小路實光 二四七

マチス訪問記

猪熊弦一郎 " "

マチス作品の発展

和田 定夫 " "

マチスの系譜—フオーヴ運動を中心に—

勝見 勝 アトリエ 二四七

マチスの藝術

今泉 篤男 アトリエ 二七、二八

ルイス・ボサ

アーネスト・W・ワットソン 二四八

モゼリアニ

西川 友武 " "

ピカソについて

堀内 明 " 二四九

芭蕉・リルケ・セザンヌ

岡 鹿之助 " "

ボナアルの色

和田 定夫 " "

ピエール・ボナアルの藝術

末松 正樹 " "

ボンナールの教訓

中川 暢子 " "

現代アメリカ美術の活動的作家達一

江口 清 " 二五〇

コクトオのデッサン

末松 正樹 " "

フランス画壇若き世代の意識

川上 洋典 " "

スウラをめぐって

瀧口 修造 " "

最近のピカソとキリコ

倉田 三郎 " 二五一

セザンヌの実現

大久保 泰 " "

ルノアールの伝統主義

勝見 勝 " 二五二

アルベール・マルケ

瀧口 修造 " 二五三

コロオのデッサン

岡本 太郎 " "

シュールレアリスム

嘉門 安雄 " "

その後

伊之助 今泉 篤男 " "

二十世紀絵画の藝術

須田國太郎 " 二五四

精神

須田國太郎 " 二五四

品

須田國太郎 " 二五四

近代繪画とレアリスム

須田國太郎 " 二五四

ロマネスク繪画の藝術

吉川 逸治 アトリエ 二五四

バルセロナ画壇の回想

三雲祥之助 " 二五五

西歐風景画の伝統とそのゆくえ

柳 亮 " "

美術学校について—セザンヌ覚書—

伊藤 廉 " 二五六

光と色の祝祭—外光写真派より印象派まで—

田近 憲三 " 二五七

近代繪画の推移と人間性の発見

大久保 泰 " 二五八

巴里派の解散

倉田 三郎 " "

構図に関する一つの提示

成田重郎 二五九

印象派の風景画家—アルマン・ギョオマン—

大河内信敬 " 二六〇

ブラツクに寄せて

瀧口 修造 " "

ブラツクの藝術

大久保 泰 " "

セザンヌ・ゴッホ・ゴーガンについて

諸 家 " 二六二

ピカソと現代繪画

植村 吉川 " 二六四

戦後のピカソと制作

瀧口 修造 " "

ピカソとヒューマニ

齋藤 義重 " "

アンティボリス

和田 定夫 " "

リアリズムへの道

難波田龍起 " 二六五

コロ

内田 巖 " "

画廊めぐり

ミカエル・ミドルトン " 二六六

レンブラント「自画像」(図版解説)

嘉門 安雄 " 二六七

レンブラントの「夜警」について

林 文雄 " "

繪画の近代
クロード・モネ「庭」
(図版解説)
土方 定一 アトリエ 二六七

ルオーの画風など
岡田 哲 二六八

ルオーの苦悶
和田 定夫 二六八

ルオーのキリスト
小松 清 二六八

デイオニソスの歡喜
大久保 泰 二六八

「マチスの近作につ
いて」
二六九

シヤルダンの生涯と
その藝術
田近 憲三 二六九

ピカソの「意地悪さ」
今泉 篤男 二六九

南仏ゴルドの画家群
水谷 乙吉 二七〇

マチス「裸婦」(解説)
嘉門 安雄 二七〇

クールベとブルド
ン「或は政治と繪画」
土方 定一 二七〇

ラブラードの藝術
倉田 三郎 二七〇

ルノアールの描き方
と言葉
二七〇

クールベにかんする
一つの賞書
林 文雄 二七一

フランシス・ボドキ
ンズの生涯
ジョフエリ
イ・ゴエラ 二七一

マチスと挿繪
水谷 乙吉 二七一

ドラクロアと下書
二七一

サルヴァドール・ダ
リは俗物か
勝見 勝 二七二

楽天主義者デュフィ
角 浩 二七二

ラウル・デュフィ
佐波 甫 二七二

ピカソ雑誌
和田 定夫 二七三

ピカソの詩・青春ピ
カソ
瀧口 修造 二七三

ピカソ藝術の表裏
岡本 太郎 二七三

現代の裸体画につ
いて
外山卯三郎 二七四

繪画に於ける人間復
活
小松 清 アトリエ 二七四

色感表現について
富永 惣一 二七四

マチスの個展
萩須 高德 二七五

マチスの素描
三雲祥之助 二七五

マチスの礼拝堂
瀧口 修造 二七五

ドラン論
伊藤 廉 二七五

セザンヌとセザンヌ
伝説
土方 定一 二七五

ベラルの横顔
小林 逸雄 二七五

ゴーギャンへの回想
田近 憲三 二七六

二十世紀のアメリカ
繪画
フレドリツ
ク・ワイト 二七六

ブラツクの繪画
伊原宇三郎 二七六

ブラツクの立体主義
瀧口 修造 二七六

ブラツクの骨格
植村麗千代 二七六

海外前衛繪画の動向
二七六

フランス
末松 正樹 二七七

アメリカ
イギリス・イタリ
ー
瀧口 修造 二七七

ドイツ
水谷 武彦 二七七

前衛繪画の実体
瀧口 修造 二七七

抽象繪画論
山口 正城 二七七

アヴァンギャルドの
五つの個性
二七七

ダリ
古澤 岩美 二七七

エルンスト
小牧源太郎 二七七

アルプ
長谷川三郎 二七七

クレイ
藪内 正直 二七七

エリオ
中村 眞 二七七

ミロの触手
川上 洋典 二七八

アメリカに行つたシ
ヤガール
櫻岡 玄 二七八

メデューヌ号の筏
田近 憲三 アトリエ 二七八

ピカソの描いた五つ
の顔
元木 恵 二七八

ヘンリー・ムアとベ
ン・ニコルソン
瀧口 修造 二七九

セザンヌ・ドランと
安井曾太郎
土方 定一 二七九

関兵するセザンヌ
大森 啓助 二八〇

コンスタン・ブラン
キエジ
江川 和彦 二八〇

ニューヨークで展覧さ
れた近代巨匠の作品
アドロウ
櫻岡 玄 二八一

人と藝術「モジリア
ニについて」
長谷川三郎 二八一

イタリー美術、過去
と現在
二八一

カイエダール・アメ
リカに於けるアプス
トラクト・アート
二八一

コレツジョ作スカラ
のマドンナ(解説)
嘉門 安雄 二八一

サルヴァドール・ダ
リ雑誌
阿部 展也 二八一

グリユネワルドと現
代繪画
田近 憲三 二八二

マチス八〇年(年譜
風に)
二八二

古典の現代的感覺
田近 憲三 二八三

古典美的近代性
二八三

現代繪画と抵抗
難波田龍起 二八四

マチスとサロ
ン・メイ
二八四

ミロ現象
萩須 高德 二八五

ピカソのデッサン
瀧口 修造 二八五

パウル・クレ
エ
二八五

幻想のある映像
駒井 哲郎 二八六

ユトリロの宿命
土方 定一 二八七

大久保 泰 二八七

二八七

二八七

二八七

隨想ルノアル ルオーの手紙	矢代 幸雄	藝術新潮	一ノ二	現代アメリカ画壇の 動向	寺田 竹雄	西部美術	一	忘れられし画家ミレ エ	大森 啓助	美術	三ノ一
美術周辺	福島 慶子	"	一ノ二	若き繪畫の胎動期	黒田重太郎	"	"	ヴェロネーゼの事ど も中、下	大久保 泰	"	三ノ二
近代繪畫の運命	土方 定一	"	一ノ五	スゴンザツク・その 生活と藝術上・下	ジャツク・ 眞木嘉徳	"	三、四	セザンヌ覺書上、下	伊藤 廉	"	三ノ三
曇る日のセザンヌ	富永 惣一	"	一ノ六	アングルの古典性	吉川 逸治	世界美術	一	天 国	大久保 泰	"	三ノ三
マチスとボードレー	ゴン・アラ	"	一ノ七	近代繪畫の技法	福澤 一郎	"	"	マネーと印象派	新 規矩男	"	三ノ四
アンチポリス	伊藤 廉	"	一ノ八	ピカソの素描	三雲祥之助	"	"	顔料について三	岡 鹿之助	"	三ノ七・八
マチス會見記	碓 伊之助	"	一ノ二	フランス古典の再檢 討	田近 憲三	"	"	ルノアル先生	山下新太郎	"	"
デュフィ・リーニ ユ・リトム	宮本 三郎	"	一ノ三	パウル・クレイと近 代性	土方 定一	"	"	ルノアルについて	富田 重雄	"	"
クロード・モネー翁	福島繁太郎	藝林間歩	一ノ六	印象主義的人間	"	創 美	"	ルノアルの赤	今泉 篤男	"	"
ジョルジ・ルオー	"	"	一ノ九	印象主義的人間	富田 啓子	"	"	アメリカ繪畫の足跡	ジョン・ ウオーカー	美術及工 藝	四
アンリ・マチス	"	"	二ノ一	オノレドゥミエにつ いて	岡 鹿之助	東京	三・三・二六	コロの繪	久保 守	美術手帖	一
ピカソ	"	"	二ノ七	單純化への成果	岡 鹿之助	東京	三・三・二六	セザンヌ「書を読む 青年」(解説)	富永 惣一	"	"
「ベルリオーズの家」 ユトリロ	嘉門 安雄	藝術	三	現代アメリカ美術を 観る——画壇の二潮 流——	南江 治郎	"	二四・六・五七	フランスの画家達	岡 鹿之助	"	"
「冬のサンヴィクト ワール山」セザンヌ	"	"	"	ヴェラスケスを観る	裕 伊之助	"	三五・九・三	アンリ・ルツツオ「風 船のある風景」(解説)	"	"	二
リルケとセザンヌ	高安 國世	座右宝	二	花の繪	黒田重太郎	日本美術 工藝	四八	アンリ・ルツツオ	大森 啓助	"	"
セザンヌ論稿	マリア・リルケ 大山 定一	"	四・五六	泰西名画の雪	"	"	一一三	ドオミエのカルカチ ユア	須山 計一	"	"
ボンナールについて	三輪 福松	"	四・五	洋画講座	"	"	"	ボナール「ゲルネル 橋」(解説)	岡 鹿之助	"	三
観知について(セザ ンヌ覺書)	伊藤 廉	"	七	チシアン	黒田重太郎	"	一一四	フランス繪畫の動向 (一九四〇—一九四五)	荻須 高德	"	"
グレコの彩色	須田國太郎	"	"	ヴェラスケス	石井 柏亭	"	一一五	ルノアル「少女」 (解説)	今泉 篤男	"	"
マチスの或石版画 について	武者小路實篤	"	一〇・二	ゴッホ	里見 勝藏	"	一一六	アンドレ・ドラン	伊原宇三郎	"	"
ルノアルの家	山田 一夫	"	一一	クロード・モネ、 リユーベンス	鍋井 克之	"	一一七	ピカソ	益田 義信	"	"
古代エジプトの壁画	新規矩男	三彩	四〇	マチス	太田喜二郎	"	一一八	ピカソ「顔」(解説)	今泉 篤男	"	"
パオロウツチエロの 藝術	柳 亮	"	四五	テイペールのアポロ ン	正宗得三郎	"	一一九	モリス・アスラン	中村 研一	"	"
近代繪畫の成立	吉川 逸治	新科学ペ ン	二ノ三	ミレーの創作版画	田近 憲三	美術	三ノ一	裏街の画家ハイナリ ツビ・デルレ	まつやま・ ふみお	"	五
					小島 鳥水	"	"				

モノ「柳に水」(解説)	今泉 篤男	美術手帖	五	ドラシ「裸婦」(解説)	今泉 篤男	美術手帖	一二	セザンヌ「セザンヌ夫人の肖像」(解説)	今泉 篤男	美術手帖	二九
マルク・シヤガール	フランソワ・ミシュレ	〃	〃	立体主義から印象主義迄	植村鷹千代	〃	〃	ミロ「太陽の前の女と鳥」(解説)	長谷川三郎	〃	〃
モノが見た青色について	伊吹 武彦	〃	〃	オロスコの死とその藝術	北川 民次	〃	二四	サルヴァドール・ダリの近況	大久保 泰	〃	三〇
ヴラマンクの散歩とモチーフ	里見 勝蔵	〃	六	アングルとドラクロアの握手	關口 俊吾	〃	〃	パスキンの逸業	大久保 泰	〃	〃
ヴラマンク「マルリイ・ル・ロワの道」(解説)	岡 鹿之助	〃	〃	シヤルル・ヴァルシュ「アンチミテ」(解説)	柳 亮	〃	〃	マルケ「海峡」(解説)	中村 研一	〃	〃
マチスの藝術と近況「美と野獸」(タイムス紙より)	〃	〃	〃	シヤルル・デスピオ「ピニオン」考へる女」(解説)	本郷 新	〃	〃	アングル「小浴女」(解説)	柳 亮	〃	〃
マチス「背景を黒にした讀書の婦人」(解説)	〃	〃	〃	フランチェスカ、チシアン、グレコ、ブリュゲル、ゴッホ、ピサロ、ボナール(口繪解説)	瀧口 修造	〃	二五	ドミニク・アング	小磯 良平	〃	〃
ジョルジ・ブラツク「ブラツク」(解説)	三雲祥之助	〃	七	新しきエコー	〃	〃	〃	日曜画家	石見 爲雄	〃	三一
民族の画家ソラナ	梅花岬堂主人	〃	〃	オノレ・ドウミエ	瀧口 修造	〃	二六	空想を物語るシヤール・デュフレヌ	福島繁太郎	〃	〃
シュヤツク「カーニユ風景」(解説)	今泉 篤男	〃	〃	ドオミエ「洗濯女」(解説)	内田 巖	〃	〃	デュファイ「ヴィヴィルのヨツト」(解説)	大久保 泰	〃	〃
ジョルヂオネ「眠るヴィナス」(解説)	大久保 泰	〃	八	ジョツト「ダンテの像」(解説)	伊藤 廉	〃	〃	ゴッギヤン「白馬」(解説)	三雲祥之助	〃	三三
クウルベ	伊藤 廉	〃	九	スーテン	田近 憲三	〃	〃	ラファエロに戻るダリ	〃	〃	〃
クウルベ「鹿」(解説)	〃	〃	〃	ラファエロ「自画像」(解説)	蔭生 三郎	二七	〃	ヴラマンク「河岸」(解説)	大河内信敬	〃	〃
ボサダ	北川 民次	〃	一〇	ルオー「ヴェロニツク」(解説)	嘉門 安雄	〃	〃	ブラツクと東洋思想	瀧口 修造	〃	〃
近代繪画の裝飾性	大久保 泰	〃	〃	マチス「英國娘」(解説)	伊藤 廉	〃	二八	ルノアル「水浴」(解説)	伊藤 廉	〃	三四
ユトリロ「サントニ運河」(解説)	嘉門 安雄	〃	〃	マチス「覺書」	猪熊弦一郎	〃	〃	トウールズ・ロー	富永 惣一	〃	〃
マネのオリンピア	水谷 乙吉	〃	〃	ピカソ「坐せるアルルキヤン」(解説)	猪熊弦一郎	〃	〃	モンドリアンの横顔	瀧口 修造	〃	〃
近代繪画の系譜一、二植村鷹千代	三雲祥之助	〃	二〇	アンリ・ルツッオ「散步」(解説)	岡 鹿之助	〃	〃	ロートレック「ルウチ・ペランジエ嬢」(解説)	白川 一郎	〃	〃
近代繪画における色彩について	〃	〃	二一	ポール・セザンヌ「ダム」(解説)	須田國太郎	〃	二九	ユトリロ「風景」(解説)	宮本 三郎	〃	〃
ケーテ・コルヴィツ	東 珠樹	〃	〃	ユトリロ「ノートル・猪熊弦一郎	〃	〃	〃	ピカソ「肘掛椅子の中の女」(解説)	柳 亮	〃	〃
繪の秘密一、二、三	柳 亮	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ビエール・ロワとたまし繪	瀧口 修造	〃	三五
ラウル・デュファイ	小野 勇二	〃	二二	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

創造者ピカソ	末松 正樹	美術手帖	三五	むなしき花東	大久保 泰	みづゑ	四九三	初期フランス派繪画の回想	宮本 三郎	みづゑ	五〇二
ルオー「昔語りの人物」(解説)	福島繁太郎	"	"	繪の病氣―保存修理について―	瀧川 太朗	"	四九四	フオーヴィスムを顧みて	マルセル・アストリエツク	"	"
フランス中堅作家の問題(座談会)	末松・大久保・瀧口	"	"	クールペエ	田近 憲三	"	"	宗教画とルオーの繪	水平 讓	"	五〇三
ラブラード「讀書」(解説)	和田 定夫	"	"	個性と運命一	末松正樹訳	"	四九六	最近フランス画壇の動き	吉川 逸治	"	五〇四
レジエ「ドミノのあるコンボジション」(解説)	柳 亮	"	三六	エドアール・ヴィアールと二十世紀の初頭における巴里生活	ルネ・ジャ	"	"	完成・未完成の意味について(セザンヌ覚書)	伊藤 廉	"	五〇五
ピカソ「鳩をもつ子供」(解説)	大久保 泰	"	"	セザンヌの威厳	今泉 篤男	"	四九七	名作展会場を巡つて	碓 三彩亭	"	五〇六
ルノアール「ムーラ・ド・ウ・ラ・ガレツト」(解説)	富永 惣一	"	三七	セザンヌの構図	柳 亮	"	"	西洋美術名作展を見て	吉川 逸治	"	"
マネ「腕組する婦人」(解説)	木下 孝則	"	"	セザンヌの人物の手繪画の限界に就いて―セザンヌ覚書―	安井曾太郎	"	"	油繪の起原に関する覚書	富永 惣一	"	五〇八
ボナール「食堂」(解説)	岡 鹿之助	"	"	シヤルダン	伊藤 廉	"	"	シヤントルールのベルニニ仏蘭西滞在日記一、二	三輪 福松	"	五〇九
ドガの素描	柳 亮	"	"	リベラー・シケイロ	北川 民次	"	四九八	セザンヌ回顧	富永 惣一	"	五〇九
国立博物館「西洋美術名作展」に於ける二三の作品について	兒島喜久雄	美術研究	一五四	エ・ライス・ペレイラ	エリザベス・マツコリス	"	"	脱出の画家ゴッガン	土方 定一	"	"
ドラクロア覚書	坂崎 坦	"	"	ユトリロを訪ふ J・M・アルセル	瀧口修造訳	"	"	セザンヌ年譜	フランシス・ユレ	"	五一二
セザンヌに於ける影響について	富永 惣一	"	"	呪はれた画家モリス・ユトリロ	大久保 泰	"	"	現代フランス繪画	三雲祥之助	"	五一四
クルールベール作「ルイ河の洞窟」について	新規矩男	"	"	ピサロの作品	久保貞次郎	"	五〇〇	造形と技術	伊藤 廉	"	"
グレコ「聖告」について	吉川 逸治	"	"	ヴィアールの藝術課程	岡 鹿之助	"	"	デッサン論(セザンヌ覚書)	兒島喜久雄	"	五一五
伝レムブランド作「一男の顔の習作」	嘉門 安雄	"	"	ロートレック	里見 勝藏	"	"	グレコとゴッ	梅花神社主人	"	"
モネ筆柳に水(解説)	兒島喜久雄	"	"	松方蒐集の繪画について	石井 柏亭	"	"	スペイン繪画の今昔	長谷川三郎	"	五一六
フランス画壇の展望	高田 博厚	毎日	三・三・七	所謂大原コレクショ	武内 潔眞	"	"	ピカソ雑誌	吉川 逸治	"	五一八
ゴッホの緑	大岡 昇平	"	二四・三・三	ビエール・ボナール	福島繁太郎	"	五〇一	マティスの藝術	"	"	"
米國を担ふ画家たち	"	"	三五・五・二	フランス初期画家達	佐波 甫	"	五〇二	色彩の道―アンリ・マチスの言葉―	"	"	"
現代フランス繪画―戦時中の動き―	末松 正樹	みづゑ	四九三								

マチスの道	猪熊弦一郎	みづゑ	五一八	マティスの色彩論	有島 生馬	みづゑ	五三〇	フランシス・グリユ	末松 正樹	BBBB	一
海外ニユース、プー サン、ピサロ、スー ラー	"	"	"	ジノセヴェリニ	コンラッド・ メイリ	"	五三一	ソヴエト美術の近 状一、二	岡本 唐貴	"	一、二
ジョルジュ・スーラー の素描について	三雲祥之助	"	五一九	フエルナン・レジエ のアトリエ訪問	コンラッド・ メイリ	"	"	グインセント・グア ン・ゴツホー、二	林 文雄	"	"
スーラーの素描につい て	岡 鹿之助	"	"	フランスの現代画家 七人	"	"	"	ハンス・エルニー ー	W・S	"	二
新しい現実―抽象派 美術	"	"	五二〇	フランス絵画の新世 代について	瀧口 修造	"	"	民にかゝつた彫像 ―マリローランサ ン―	大久保 泰	"	三
蛾の踊(クレイ)	和田 定夫	"	"	タヒチのゴーガン	林 文雄	"	五三二	人民の画家、ケーテ・ ホルヴァイツ	新海 覺雄	"	"
ポール・クレイ	長谷川三郎	"	"	ロジェ・ド・ラ・フ レネエ	末松 正樹 三雲祥之助	"	五三三	ワラン・マズレル のことに触れて	佐々木基一	"	"
ポール・クレイ雑誌	阿部 展也	"	"	印象主義の色彩につ いて	徳大寺公英	"	"	オノレ・ドミエの 生涯と藝術	吉岡 憲	"	"
ハーパー・トリード のポール・クレイ論	江川 和彦	"	"	ブラツクのノート ―ブラツクの手帖よ り―	"	"	五三四	モチリアニについて	麻生 三郎	"	四
キュービズムを顧み て	吉川 逸治	"	五二二	マチス	レオン・ウ エルト	"	"	コロ人物画の技法	工藤信太郎	"	"
オーヴエルに於ける ヴァンサン	里見 勝藏	"	五二二	マチス訪問記	ピエール・ ムーニエ	"	"	ベン・シヤーン雑誌	阿部 展也	"	"
ルノアール追想	大久保 泰	"	五二三	ジャツク・エロー ブラツクの手帖二	山中 散生	"	五三五	ボードレル、マネ ―ドクロア	末松 正樹	"	"
ルオー覚書	岡本謙次郎	"	"	ボナール	レオン・ウ エルト	"	五三七	二七才の日記	安東 次男	"	"
L'AMANDLER EN FLEURS	和田 定夫	"	五二四	現代絵画の基盤	植村鷹千代	"	五三八	セザンヌ私見	裕 三彩亭	"	"
実存主義と現代フラ ンス絵画	"	"	"	スゴンザツク	大久保 泰	"	"	セザンヌ「制作」 ―知られざる傑作―	林 文雄	"	"
英国現代作家	グラハム・ レイノルズ	"	五二五	エル・グレコ	小山 敬三	"	"	セザンヌ回顧展を思 ひ出して	井上長三郎	"	"
ラ・パンチエール・ の完成、マチス近作 について	佐藤 敬	"	"	マルケ	レオン・ ウエルト	"	"	シヤルダンとセザン ヌ	後藤 禎二	"	"
十九世紀のロシア繪 画	ブブノワ	"	"	クルト・セリグマン	岡本 太郎	"	五三九	モリス・ドニのセ ザンヌ論	關口 俊吾	"	"
フエルナン・レジエ	柳 亮	"	五二七	ルノワール	ウエルト	"	"	セザンヌを想う	佐波 甫	"	"
ピカソのデッサン	吉川 逸治	"	五二八	ユトリロ	"	"	五四二	コンスタンタン・ム ニエの生涯と藝術	今井 滋	"	六
繪画に就いて	ヴラマンク	"	"	ピカソ大いに語る	ビエール・ ムーニエ	"	五二六	三人が一人の画家、 ―テクニクスイ について―	宮森 繁	"	"
クレイの藝術とその 時代	和田 定夫	"	五三〇	パリのアンデパンダ 展	荻須 高德	"	五三八				

彫刻

彫刻性の二側面 ヘンリー・ムーアとベ ン・ニコルソン	本郷 新 アトリエ	二五六
マチスの鎮魂歌	瀧口 修造	二七九
現代フランス彫刻	勝見 勝	二八二
タナグラ人形	木内 克	二八七
マイヨールとモデル	見島喜久雄 藝林間歩	二ノ三
希望に於ける婦人像 の推移	チユデイト 座右宝	四・五
マイヨールは生きて いる	富永 惣一 世界美術	一
ブウルデル雜記	山本 豐市 美術	三ノ三
アリスティド・マイ ヨール	桑原 武夫	三ノ六
英国の新進彫刻家バ トラ	ジャック・クロボア 美術手帖	四
ジャン・アルブ	A・D・B・シ ルヴェスター	二六
ロダン	瀧口 修造	三六
若き日のマイヨール	菊池 一雄 みづゑ	五一〇
マイヨール三、四	片山 敏彦	五二六、五二八
彫刻家マルセル・ジ モン	コンラツド ・メイリ	五三四
ヘンリー・ムーアの 彫刻	瀧口 修造	五三五
アレグサンダー・コ ルター	〃	五四〇
ピカソの彫刻	今泉 篤男	五四一
テラコッタ像につい て—タナグラ土人形	富永 惣一	〃
ザツキンの彫刻展を みる	讀賣	三・一〇・三

建築

世界の知識人を訪ふ (ル・コルビエ)	朝日	二四・六・五
中世フランスの建築 工人組合	飯田喜四郎 建築史研究	四
アメリカ建築遠望	蔵田 周忠 建築文化	三
摩天樓の性格	柳瀬 駿	六
アメリカ建築一九四 二—一九五〇	山本 學治 国際建築	一七ノ一
ル・コルビエのエモ の後	生田 勉	〃
マル・コルビエのエの マルセイユの新しき 建築	吉川 逸治	〃
最近の海外建築思潮	津島 次夫	一七ノ二
螺旋形のアパート	濱口 隆一	〃
ヘリツクス	I・M・ペイ	〃
歐洲諸国及南米のア パート	吉阪 隆正	一七ノ三
ル・コルビエのエ 国際聯合本部の計画 について	(ブツクレ ビユー)	〃
スカイスクレーパー 論	〃	〃
カーテン・ウォール	木村俊彦他	〃
造型に於けるモラル の問題	三氏	〃
ル・コルビエのエの 「マルセイユ綜合住 宅」	網戸 武夫 新建築	二四ノ九
ライトの建築	村田 豊	二四ノ六
ル・コビエのエの新 しき建築マルセイユ の家	瀧口 修造 美術手帖	三七
〃	吉川 逸治 みづゑ	五三五

工藝

美にひかれて	嘉門 安雄	アトリエ	二四三
繪画へ合流するフラ ンスの陶器	水谷 乙吉	〃	二八二
オーストラリアの近 代家具	〃	建築文化	四〇
ウォルト・デイズニ ーの漫画と玩具	野口 恒喜	工藝ニ ユース	一五ノ一
戦後のアメリカに於 ける室内裝飾	〃	〃	一五ノ三
グロビウス	蔵田 周忠	〃	一六ノ五
ニウヨーク近代美 術博物館	春山 行夫	〃	一五ノ九
アメリカの工藝雜誌 紹介	〃	〃	一六ノ六
英国の工藝デザイン 協会	中村 秀茂	〃	〃
ノルマン・ベル・ゲデス オーストラリアの新 施設	小池 新一	〃	一六ノ八
アルヴァール・アー ルト	小池 新一	〃	一六ノ二
CID&NRIAD	小池 新一	〃	〃
アメリカ・モダニズ ムに窺える竹趣味	劍持 勇	〃	一七ノ八
ミネアポリスの生活 美術博物館	山形 光夫	〃	〃
デザイナーの話— ヘンリー・ドレフュ ス—デザイナーの横顔	〃	〃	一八ノ一
二十周年を迎えた現 代美術博物館	〃	〃	一八ノ二
最近のリチャード・ ノイトラ	〃	〃	一八ノ三
ナツツラ夫妻とウイ ルデンハイン夫妻	〃	〃	一八ノ四
〃	〃	〃	一八ノ五

インダストリアル・
デザイナードと企業
名作ルーヴル美術館
に還る

英国の陶工バーナード・リーチの藝術
陶工ピカソ

クロードの顔「ピカソの陶器」雄感
和田 定夫
みづみ
五二六

展覧会・その他

マデス展と巨匠の近況
アトリエ
二六〇

ニューヨークで展覧された近代巨匠の作品
ドロシイ・アドロウ
二八〇

西洋美術名作展
博物館ニ
二、三

偉大なる美術史家スタイン
能谷 宣夫
一一二

文化財保護法案めぐって
諸 家
二六

飾りのない室内風景
石見 爲雄
美術手帖
二、三

現代フランス創作版
嘉門 安雄
三七

米国の個人陶
柳 宗悦
毎日
二八・七

映画ミケランゼロ
菅 圓吉
夕毎日
二五・二二

フランス美術界ヌーヴエル
水谷 生
みづみ
五二八

レオン・ウエルト
片山 敏彦
五三一

M・M・ラ・マルセ
水谷 生
五三二

巴里秋の諸サロン
荻須 高德
五三七

現代フランス創作版
展覧
二十世紀美術展
(アメリカ)

現代美術関係単行圖書

総説

アヴァンギャルド
アヴァンギャルド藝術
繪の話
繪の本
繪画讀本
繪画の倫理
繪画論
繪画論
我思古人
傾きの美
画家と作品
画論
京都洋画の黎明期
近世繪画史
近代日本画論
近代日本洋画史
近代美術論
(青年文化叢書)
近代美術の研究
藝術學の認識と
構成概念
藝術研究
藝術研究
藝術通論

岡本 太郎
月曜書房
美術出版社
美術出版社
小峰書店
書肆一杉
十字屋書店
日本科学社
靖文社
是文社
高桐書院
弘文堂書房
高桐書院
創元社
高桐書院
雲舎
新書房
三書房
齋藤書店
解放社
巧藝社

中村 二柄
岡崎 義惠
野村 良雄
岸田 劉生
福田 恒存
片山 敏彦
除村吉太郎
村田 茂雄
深田 康算
金子 馬治
豐増 秀俊
甘粕 石介
植村瀧千代
讀賣新聞社
文化部編
土方 定一
讀賣新聞社
文化部編
大西 克禮
柳原 榮峰
板垣 廣穂
六和商事株式
會社出版部

三

生活と美術

一九五〇年度美術界総覧

今 和次郎 日本青年館
國立博物館 美術出版社

大衆藝術論

民科藝術部 解放社

第四次元の藝術
(ア・デ・ネ・文庫)

谷川 徹三 弘文堂

日本画を学ぶ人へ

西澤 實 叢書 堂

日本近世繪画

美術研究所 白鳳書院

日本藝術思潮三ノ下

岡崎 義恵 岩波書店

(昭和一八年版)

美術研究所 座右宝刊行会

日本美術年鑑
(昭和元・三・三年版)

美術研究所 美術出版社

日本美術の再発見

タウ ト 岩波書店

日本文化私観

タウ ト 明治書院

日本文化史ノート

早川 二郎 眞善美社

人間画家

内田 巖 雲 舍

美意識論史

大西 克禮 角川書店

美を慕ふ者へ

野間 清六 朝日新聞社

美学短篇

植田 壽藏 角川書店

美学と藝術学

山本 正男 創美社

美術解剖学論攷

西田 正秋 彰考書院

美術隨筆

下田 靜市 河原書店

美術と思想の話

福田 新生 大雅堂

美術と社会

井手 則雄 文化評論社

美術とリアリズム

林 文雄 八雲書店

美術の国

岡田 清 星野書店

美と精神の秩序

中井 駿二 カホリ書房

美とヒューマニズム

内田 巖 リスナー社

美の大意

金原 省吾 養徳社

美の批判

植田 壽藏 弘文堂

美の本体

美はどこにも

民衆藝術論

岸田 劉生 河出書房

青木繁

武者小路實篤 和敬書店

芋銭子俳句と画跡

野坂 参三 文化聯盟

梅原龍三郎二十年史画集

河北 倫明 養徳社

賣りに出た首―美術随想

酒井三良子 芸 堂

大阪三十六景

富 岳 社

大阪三十六景第二集

木下圭太郎 角川書店

岡倉天心

赤松 麟作 金尾文鳳堂

画聖芋銭

藤森 成吉 小峰書店

川島理一郎自撰デッサン

津川 公治 宮越太陽堂

岸田劉生

土方 定一 創 藝 社

岸田劉生

武者小路實篤 小山書店

岸田劉生

瀧本貞二郎 建設社

岸田劉生

中川 一政 美術出版社

近代日本美術資料第一輯

美術研究所 美術工藝会

近代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

岸田 劉生 河出書房

武者小路實篤 和敬書店

野坂 参三 文化聯盟

河北 倫明 養徳社

酒井三良子 芸 堂

富 岳 社

木下圭太郎 角川書店

赤松 麟作 金尾文鳳堂

藤森 成吉 小峰書店

津川 公治 宮越太陽堂

土方 定一 創 藝 社

武者小路實篤 小山書店

瀧本貞二郎 建設社

中川 一政 美術出版社

美術研究所 美術工藝会

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

現代美術展覧集

大観画業六十年展図録

第一回美術団体連合展画集

中華人民版画集

鐵齋作品集

デッサン選(1)(2)(3)(4)(5)

富岡鐵齋

日本裸体美術全集 八卷

麥徳と御舟

板愛榮

美術の秋

平福百穂

福田平八郎

藤田嗣治版画選集

放庵画選

前田寛治画論

前田寛治研究

牧野虎雄デッサン集

松本竣介画集

三岸好太郎画集

棟方志功版画集

日本美術展覧集(第二回―第六回)

文部省日本美術展覧集

安井曾太郎(みづゑ臨時増刊)

安井曾太郎滞歐習作デッサン集

柳瀬正夢画集

裸体デッサン

裸体繪画

大塚巧藝社

毎日新聞社

李 平凡 三一書房

西澤 實 芸 堂

小高根太郎 養徳社

鈴木 治 美術出版社

棟方 志功 白井書房

小高根太郎 東京堂

横川毅一郎 美術出版社

高見澤木版社

小杉 放庵 美術出版社

外山卯三郎 昭 森 社

牧野虎雄記 建設社

念事業会

美術出版社

棟方 志功 細川書店

日本美術展覧集(第二回―第六回)

文部省日本美術展覧集

安井曾太郎(みづゑ臨時増刊)

安井曾太郎滞歐習作デッサン集

柳瀬正夢画集

裸体デッサン

裸体繪画

日本版画の技法

人間のつくる美

版画の新技法

版画の新技法

工藝及圖案

意匠學
鑄物師の話
応用彩色図案集
応用図案文字集
応用略画と図案集
カラー・ブック
京染
近代日本陶業発展秘史
経済と美術工藝
化粧陶器
現代図案カット集成
現代図案カット大成
工藝と社會
工藝の美
工藝文化
さまざまな土地・さまざまの工業
諸国の民藝
新選図案集
製陶法要義
世界家具図集
草木虫魚の図案集
鑒のための図案集
竹の利用と其加工
民と美
図案手帖
図案文広告資料大集成

宮下 孝雄 光生館
香取 秀眞 講談社
辻 克巳 大同出版社
大原 芳樹
山崎 勝弘 甲文社
上村 六郎 高桐書院
伊勢本 一郎 技報堂
河田 嗣郎 大丸出版社
河井寛次郎 西村書店
図案美術研究社編 文雅堂
辻 克巳 大同出版社
オスカル・ビー 寶雲舎
勝見 勝 雄鶏社
水原 徳言 雄鶏社
柳 宗悦 那珂書房
別枝 篤彦 矢島書房
式場隆三郎 講談社
崇文堂編集部 崇文堂
徳見 知考 協同出版社
家具意匠研究会編 森北出版K K
伊藤 憲治 衣裳研究所
中元 藤英 丸善出版K K
柳 宗悦 靖文社
岩崎喜久雄外 照林堂
辻 克巳 大同出版社

手仕事の日本
配色の美
美術と工藝の話
民藝論
和英図案文字資料大成
私たちの生活と配色
明日の住居
家のはなし(小学生文庫)
計画建築文化の
基本的問題
建築家の手帖
建築藝術論
現代建築(タウト著作
集第五)
建築構造学
建築五講
建築今昔
建築の製図
建築文化の交流(中国篇)
住宅雑誌
小住宅図集
商店建築図集
世界の名橋
造園隨想
日本(タウトの日記)
ニッポン
日本の家屋と生活
日本の住居のうっかりか

柳 宗悦 靖文社
天井 陸三 講談社
佐藤 亘宏 桃山書林
吉井 忠 彰考書院
辻 克巳 大同出版社
佐藤 亘宏 講談社
西山 卯三 高桐書院
森 蘆 小峰書店
日本建築文化聯盟編 相模書房
藤島亥治郎 酣燈社
タウト 岩波書店
篠田英雄 育生社
上野伊三郎 育生社
堀 紫郎 丸善出版K K
岸田日出刀 相模書房
竹田 米吉 実業之日本社
藏田 周忠 相模書房
村田 治郎 高桐書院
田邊 泰 彰國社
田邊 泰 彰國社
藏田 周忠
藤部屋福平
上原 敬二 東洋堂
タウト 岩波書店
篠田英雄 春秋社
国立博物館 童話春秋社

日本住宅の封建性
ぼくらの住居
窓—建築隨筆評論集—
吉田五十八建築作品集
新しい繪を見る手引
あらゆる図画
繪をかくこともへ
繪の勉強
繪へ誰デモ描ケル
鉛筆写生の仕方
京都の美術教育
近代日本美術事典
(美術の問題)
(中学校三年用)
子供の繪の導き方
(図画工作)指導
(自由研究)指導
兒童美術(みづゑ臨時増刊)
人物画の描き方
新用器画自在画
綜合画詳解
新略画
水彩画の描き方
スケッチの描き方
墨繪の技法
綜合図画新技法
素描技法
中央美術学園美術講座
デッサンと技法
図画教育論

濱口 ミホ 相模書房
森 蘆 東京堂
岸田日出刀 相模書房
目黒書店
長谷川三郎 美術出版社
木村郁太郎 増進堂
古家 新 富士書房
高田 義興 洋書社
赤松 俊子 眞善美社
福田 新生 大雅堂
中井宗太郎 高桐書院
諸 家 白楊社
間瀬 正次 三晃社
古家 新 弘文社
東京第二師範女子部附 目黒書店
足立源一郎 美術出版社
富岡伊三郎 尚学社
西尾 日知 小笠書房
南 薫造 崇文堂
唄野 蛾生 育英出版K K
遠藤 敦三 小笠書房
図画工作研究 文化建設社
研究所編 文化建設社
湯川 尙文 小笠書房
須山 計一 中央学園
岸田 劉生 建設社

図画の新しい教え方
学び方

日本画を学ぶ人へ
日本画の新技法

人間の美的教育について

美術を学ぶ
(中学高校図画工作)

美術展覧会の見方

美術入門

ペン画図典

ペン画の描き方

漫画人物画の描き方

漫画の描き方

洋画技法講座(全六巻)

彫刻の技法

略画事典

略画事典

略画の描き方

私たちの自由研究

私の図画辞典

雑

油絵の科学

ある彫刻家

色物理學叢書

浮世すがた女人百態

お祭の太鼓

回想の巴里

画家と作品

桑原 實 技 報 堂

西澤 笛 芸 艸 堂

森 白甫 小笠 書 房

シララ 吉田次郎 養 德 社

諸 家 照 林 堂

浦崎 永錫 吉井 書 房

森口 多里 東峰 書 房

太田 天橋 三 集 社

野々口 重 藝 術 学 院

下川 四天 考 文 社

大野 鯛二 小笠 書 房

松田 義之 國 民 會 社

岡登 貞治 文 化 建 設 社

後藤 福次郎 野 薔 薇 社

中野 正治 学 進 書 房

中川 郁三 兼 六 館

野村 侯三 堀 書 店

福田 青史 堀 書 店

山下 新太郎 好 学 堂

武者 小路 實 細 川 書 店

東 堯 河 出 書 房

幸谷 保 協 同 出 版 社

鈴木 信太郎 朝 日 新 聞 社

柳澤 健 甜 燈 社

内田 巖 高 桐 書 院

顔の形態美
「顔」巴里の晝と夜

歌舞伎美論

紙瀧村旅日記

隨筆歸去来

鵠沼日記

球 面

藝術と狂氣

藝術と人生に就ての手記

藝術民俗学研究

壺中天

世界の博物館

惣々帳

葱南雜稿

西田 正秋 彰 考 書 院

藤田 嗣治 世 界 の 日 本 社

岸田 劉生 早 川 書 房

壽岳 文章 明 治 書 房

小杉 放庵 洗 心 書 林

岸田 劉生 建 設 社

伊藤 廉 大 丸 出 版 社

村上 仁 三 井 書 房

岸田 劉生 永 言 社

竹内 勝太郎 福 村 書 店

北川 桃雄 圭 文 社

棚橋 源太郎 講 談 社

内田 誠 白 鷗 社

太田 正雄 東 京 出 版 社

茶杓博士

墳空隨筆

美術隨想

美神の翼

美について

舞台藝術

冬の虹

漫画日本歴史

緑の感覺

武蔵野日記

無名の南画家

略画・図画ハンドブック

裸体のポーズ

高原 慶三 洛 味 社

兒島喜久雄 全 国 書 房

富永 惣一 創 藝 社

三岸 節子 朝 日 新 聞 社

眞船 豊 文 藝 春 秋 新 社

小山内 薫 早 川 書 房

小糸源太郎 朝 日 新 聞 社

澤 壽次 竹 井 出 版

川島理一郎 淡 路 書 房

中川 一政 三 島 書 房

加藤 一雄 美 術 出 版 社

武井 勝雄 照 林 堂

寺田 政明 大 同 出 版 社

敦 常良 三 笠 書 房

齋藤榮治 育 生 社

チエールフス 日 本 評 論 社

石山正三 河 出 書 房

竹内敏雄 河 出 書 房

テエヌ 東 京 堂

廣瀬哲士 創 元 社

セアイユ 創 元 社

牛山高次 創 元 社

片山敏彦 三 井 書 房

アラン 新 潮 社

河盛好藏 河 出 書 房

西洋美術關係單行圖書

總 說

カント判斷力批判―カント
研究の基礎づけのために―
美と崇高との感情性に關
する觀察

ヘーゲル美學講義

マルクス主義藝術論入門

マルクス主義藝術論

マルクス・エンゲルス藝術
論

美意識論史

岸本 昌雄 夏 目 書 店

イ・マヌエル 岩 波 書 店

上野直昭 北 隆 館

甘粕石介 社 会 主 義 著 作 刊 行 会

蔵原 惟人 社 会 書 房

ルナチヤー 昇 曙 夢 社

コムアカデ 眞 理 社

外村史郎 角 川 書 店

西洋美術史
美術哲学
現実に對する藝術の美術
的關係

ヘーゲル美學

美術哲学

藝術と哲学

藝術と文化

アラン藝術百一話

美術論上下二卷(ボード
レル全集)

ルソー著作集—學問藝術論

シムラーの美育論
デューウイの藝術論

現代アメリカ藝術論

ゲーテ藝術論集

美と藝術について

ゲーテ藝術について

ラオコオン

伊太利文藝復興期の文化
(上下二卷)

ギリシヤ文化史
(一二、三、四、五卷)

ルネッサンス

西歐學藝研究

希臘藝術模倣論

スペイン藝術精神史

ヨーロッパの藝術

現代の藝術
ソヴェート藝術の展望

レーニンと藝術

未來の藝術作品

美術文獻目錄

辰野隆、鈴木信太郎 河出書房

前田 博 玉川出版部

田尾 一 福村書店

ツチノドリ 早川書房

加島祥造 福村書店

ゲーテ 甲文社

小牧健夫 生活社

大山 定一 アテナ書房

谷 友幸 生活社

レツシグ 岩波書店

櫻井和市 東京堂

ブルクハル 三 東京堂

ト、村松恒 三 東京堂

健治共訳 三 東京堂

コピノ 加茂儀一 三 東京堂

安倍能成編 小石川書房

ギン、澤柳大 五郎 座右宝刊行会

須磨彌吉郎 須磨彌吉郎 座右宝刊行会

美術と社会

西洋美術史論攷
ギリシヤ・ローマの美術

中世の美術
ギリシヤ美術

アメリカの美術
エトルリアの美術

世界の美術
西洋の美術

チチエローネ(古代篇)

精神史としての美術史

西洋美術史概説
西洋美術発達史

解説西洋美術史要
伊太利紀行抄—ゲエテ

伊太利紀行の一考察
西洋美術の智識

ぼくらの世界美術史
少年美術館 I II

西洋美術名作集
西洋美術図譜

西洋美術図譜
世界美術図譜 第二期集

西洋文化史講話
西洋文化史講話 古代篇

井手 則雄 文化評論社

澤木四方吉 慶応出版社

村田 潔 東京堂

吉川 逸治 大丸出版印刷

澤木四方吉 慶応出版社

村田 潔 東京堂

吉川 逸治 大丸出版印刷

中村 亮平 東亜出版社

荒井 政二 新宝雲舎

清水 政二 新宝雲舎

青柳 正廣 実業の日本社

三輪 正廣 実業の日本社

今泉篤男編 小峰書店

ブルクハル 筑摩書房

ト、嘉門安 筑摩書房

ドヴォルジ 全国書房

村茂夫訳 全国書房

坂崎 坦 風間書房

相良 德三 三笠書房

福田 新生 乾元社

澤柳大五郎 十字屋書店

吉野 正孝 九州評論社

世界に於ける日本美術の位置

世界美術全集—五卷、一
六卷、二四卷、二一巻

モダンアート

泰西名画家伝

泰西名画物語

西洋繪画発達史

西洋の名画—中学生全集

イタリヤ繪画史

レオナルド・ダ・ヴィンチ
解剖手稿

ダ・ヴィンチ

デューラーと伊太利紀行

北方の画家たち

リユーベンス

レンブラント

レンブラント

レンブラント

オランダ繪画紀行

フランドル画家論抄

矢代 幸雄 東京堂

長谷川三郎 東京堂

若林喜久平 文苑社

丸野 學人 雄鶏社

相良 德三 三笠書房

嘉門 安雄 筑摩書房

スタンダー 河出書房

秋之寺恵夫 和敬書店

山田智三郎 アールス

前川 誠郎 座右宝刊行会

ブルクハル 座右宝刊行会

ト、谷友幸 世界文学社

ボープラー 座右宝刊行会

ケン、嘉門 座右宝刊行会

安雄訳 フロマンタ

松沢 三輪 弘文堂

ブルクハル 弘文堂

高訳 弘文堂

武者小路實篤 和敬書店

嘉門 安雄 美術出版社

フロマンタ 宝雲舎

三輪 三輪 宝雲舎

ドナテロ、 洗林堂書房

宇田川嘉彦 洗林堂書房

一七七

ドミニック

近代繪画史

近代画家論

近代フランス繪画

クールベ

ミレー

ミレー

ミレー

ピアズレイの生涯と藝術

繪画我觀 バルビゾン派

ゴッ

モネ

セザンヌ

ルノワール—近代画家の生

セザンヌ以後

ヴァン・ゴッホ

ヴァン・ゴッホ自叙伝

ゴッホの手紙

ゴッホ

ゴッホ

ゴッホ

マリス

親友ピカソ

フロマンタ

太田 亮

柳 亮

塩谷 亮

黒田重太郎

坂崎 坦

リヒアルト

大澤 章

大森 商二

植田 壽藏

式場隆三郎

岡田 峻

式場隆三郎

須田國太郎

森口 多里

富永 惣一

伊藤 廉

成田 重郎

植田 壽藏

式場隆三郎

式場隆三郎

益田義信

養徳社

美術出版社

研究社

芸艸堂

雄山閣

山野書店

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

雄山閣

ピカソ—現代画家と

その背景

モデリアニ

モデリアニ

ルオー

ケーテ・コルヴィッツ

聖面名画集

ピアズレイ画集

現代フランス画集

泰西名画集

ブラツク画集

ロートレック素描集

ミルトン失樂園画集

ボツティチエルリ

洋画の技法

セザンヌ以後

デッサン名作集

回想のヴァン・ゴッホ

セザンヌ以前

フランス現代画家

ギリシヤ女人群像

ミロのヴァイナス

ミケランジェロの手紙

成田 重郎

宝雲舎編

黒田重太郎

長谷川三郎

岡本謙次郎

新海 覺雄

編著

式場隆三郎

ギユスタヴ

帆足理一郎

田近 憲三

別冊アトリ

エ(第一集)

エ(第二集)

エ(第三集)

エ(第四集)

エ(第五集)

エ(第六集)

黒田 正利

田近 憲三

ミケランジェ

明平 憲三

田近 憲三

コバルト社

宝雲舎

弘文堂

アルス

八月書房

東京堂新装社

建設社

美術出版社

讀賣新聞社

宝雲舎

美術出版社

野口書店

東京堂

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

アルス

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

ロダン

富永 惣一

菊池 一雄

深田 康算

村田治郎編

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

高桐書院

雄山閣

中央公論社

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

文芸堂

附

錄

附 錄 目 次

美術行政機關	一八一
文化財保護法	一八一
總 則	一八一
文化財保護委員會	一八一
有形文化財	一八四
重要文化財	一八四
重要文化財以外の有形文化財	一八八
無形文化財	一八九
史跡名勝天然記念物	一九一
補 則	一九四
罰 則	一九四
(附 則)	一九五
文化財保護法関係政令規則	一九八
文化財専門審議會令	一九八
文化財保護委員會事務局組織規程	一九九
国立博物館組織規程	二〇一
美術研究所組織規程	二〇三
臨時調査普及室規程	二〇三
帝室技藝員	二〇三
日本藝術院	二〇四
日本美術展覽	二〇七
文部省社会教育局藝術課	二〇八
美術学校・研究所一覽	二〇八
学会一覽	二〇九
美術觀覽施設一覽	二〇九
東京画廊一覽	二一〇
美術団体一覽	二一〇
美術家及美術関係者名簿	二二三
美術関係定期刊行物一覽	二二六

美術行政機関

文化財保護法(昭和廿五年五月卅日法律第二百十四号)

第一章 総則

(この法律の目的)

第一條 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする(文化財の定義)

第二條 この法律で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。

一 建造物、繪画、彫刻、工藝品、書跡、筆跡、典籍、古文書、民俗資料その他の有形の文化的財産であつて、國にとつて歴史上又は藝術上價値の高いもの及び考古資料(以下「有形文化財」という。)

二 演劇、音楽、工藝技術その他の無形の文化的財産であつて、國にとつて歴史上又は藝術上價値の高いもの(以下「無形文化財」という。)

三 史跡、名勝及び天然記念物(以下「史跡名勝天然記念物」という。)

2 この法律の規定(第十八條第一号、第二十一條第二項第一号、第二十七條第一項、第二十八條第一項、第二十九條第一項、第四項、第三十七條第二項、第五十五條第一項、第四号、第八十八條第一項、第二項、

第九十四條及び第百十五條の規定を除く。)中「重要文化財」には、国宝を含むものとする。

3 この法律の規定(第十八條第八号、第二十一條第二項第九号、第六十九條第一項、第二項、第七十條第一項、第七十一條第一項、第二項、第七十七條第二項、第八十三條第一項第四号、第八十八條第三項及び第九十四條の規定を除く。)中「史跡名勝天然記念物」には、特別史跡名勝天然記念物を含むものとする。

(政府及び地方公共団体の任務)

第三條 政府及び地方公共団体は、文化財がわが國の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、將來の文化の向上發展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるように、周到の注意をもつてこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。

(國民所有者等の心構)

第四條 一般國民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。

ればならない。

3 政府及び地方公共団体は、この法律の執行に當つて関係者の所有權その他の財産權を尊重しなければならない。

第二章 文化財保護委員會

第一節 総則

(設置)

第五條 国家行政組織法(昭和二十三年法律第二十号)第三條第二項の規定に基いて、文部省の外局として、文化財保護委員會(以下「委員會」という。)を設置する。

2 委員會の委員は、獨立してその職權を行う。

(任務)

第六條 委員會は、文化財の保存及び活用、文化財に関する調査研究その他第一條の目的を達成するため必要な事務を行うことを任務とする。

(權限)

第七條 委員會は、その所掌事務を遂行するため、左に掲げる權限を有する。但しその權限の行使は、法律(これに基く命令を含む。)に従つてなされなければならない。

一 予算の範圍内て、所掌事務の遂行に必要な支出負擔行為をすること。

二 収入金を徴收し、所掌事務の遂行に必要な支拂をすること。

三 所掌事務の遂行に直接必要な事務所等の施設を設置し、及び管理すること。

四 所掌事務の遂行に直接必要な業務用資材、圖書その他研究用資材、事務用品等を調達すること。

五 職員の任免及び賞罰を行い、その他職員の人事を管理すること。

六 職員の厚生及び保健のため必要な施設をなし、及び管理すること。

七 所掌事務の監察を行い、法令の定めるところに依り、必要な措置をとること。

八 所掌事務の周知宣伝を行うこと。

九 委員會の公印を制定すること。

十 広く利用に供する適當な記録を整備すること。

十一 所掌事務に関する法人の設立を認可すること。

十二 所掌事務に関する國庫支出金を割り当て、配分すること。

十三 所掌事務に関する物資の確保について援助すること。

十四 所掌事務に関する統計調査の資料及び結果を收集し、解釈し、及び刊行頒布すること。

十五 所掌事務に関する國家的又は國際的關心のある題目について會議、研究会、討論會等を主催すること。

十六 文化財の保護に関する法令案を作成すること。

十七 前各号に掲げるものの外、法律(これに基く命令を含む。)に基き委員會に屬せしめられた權限。

2 委員会は、その権限の行使に当つて、法律(法律に基く命令を含む。)に別段の定がある場合を除いては行政上及び運営上の監督を行わないものとする。

(構成)

第八條 委員会は、五人の委員をもつて組織する。

(委員の任命及び欠格事由)

第九條 委員は、文化に関し高い識見を有する者のうちから両議院の同意を経て、文部大臣が任命する。

2 左の各号の一に該当する者は、委員となることができない。

一 禁治産者若しくは準禁治産者又は破産者で復権を得ない者

二 禁こ以上の刑に処せられた者

3 委員は、その三人以上が同一政党に属する者となることとなつてはならない。

(委員の任期)

第十條 委員の任期は、三年とする。但し、補欠の委員は、前任者の残任期間在任する。

2 委員は、再任されることが出来る。

3 第一項の規定にかかわらず委員は、国会の閉会又は衆議院の解散の場合に任期が満了したときは、その後最初に召集された国会において両議院の同意を経て文部大臣が委員を任命するまでの間、なお在任するものとする。

(委員の失職及び罷免)

第十一條 委員は、第九條第二項各号の一に該当するに至つた場合及び既に委員中二人が所属している政党にあらたに所属するに至つた場合においては、その職を失う。

2 文部大臣は、委員が心身の故障のため職務の執行ができないと認める場合又は委員に職務上の義務違反その他委員たるに適しない行為があると認める場合においては、両議院の同意を経てこれを罷免することが出来る。

3 文部大臣は、両議院の同意を経て、左に掲げる委員を罷免する。

一 委員中何人も所属していなかつた一の政党にあらたに三人以上の委員が所属するに至つた場合、これらの者のうち二人をこえる員数の委員

二 委員中一人が既に所属している政党にあらたに二人以上の委員が所属するに至つた場合、これらの者のうち一人をこえる員数の委員

4 両議院は、前項各号に規定する事実があると認めるときは、同項各号の規定により罷免すべき員数の委員の罷免の同意を與えるべきものとする。

5 国会の閉会又は衆議院の解散のため第二項又は第三項の規定による罷免につき両議院の同意を経ることができないときは、その後最初に召集された国会において両議院の承認を得れば足りる。

(委員長)

第十二條 委員会に委員長を置く。委員長は、委員の互選により定める。

2 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

3 委員会は、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときにその職務を代理する委員を、あらかじめ、定めて置かなければならない。

(委員の給与)

第十三條 委員長及び委員は、別に法律の定めるところにより相当額の給與を受ける。

(會議)

第十四條 委員会は、委員長が招集する二人以上の委員から請求があるときは委員長は、委員会を招集しなければならない。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ會議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(委員会規則)

第十五條 委員長は、この法律の執行に關し必要な事項について、委員会の議決を経て、委員会規則を定めることができる。

2 委員会規則は、官報で公布する。

(事務局の内部組織)

第二節 事務局

第十六條 委員会に、その所掌事務を遂行するため、国家行政組織法第七條第四項の規定に従ひ、事務局を置き、事務局に、その内部組織として総務部及び保存部を置く。

(総務部の所掌事務)

第十七條 総務部においては、委員会を補助するため、その所掌事務に關し左の事務をつかさどる。

一 機密に關すること。

二 職員の職階、任免、分限、懲戒、服務その他の人事並びに厚生教養及び訓練に關すること。

三 委員長の官印及び委員会印を管守すること。

四 公文書類を接受し、發送し、編集し、及び保存すること。

五 會計及び會計の監査に關すること

六 行政財産及び物品を管理すること

七 行政の考査に關すること。

八 法令案の審査に關すること。

九 委員会及び文化財専門審議會の會議に關すること。

十 重要文化財の出品又は公開の命令

勸告及び承認に關すること。

十一 出品され、又は管理の委託を受けた重要文化財の管理(滅失又はき損の防止の措置を除く。)に關すること。

十二 重要文化の買取に關すること。

十三 出品に關する給與金、埋藏文化

財の発見に対する報償金及び埋蔵

文化の譲渡及び譲渡に関する事

十四 無形文化財についての資料のあ

つ、旋その他の助成に関する事

十五 無形文化財の公開の命令及び承

認に関する事

十六 文化財についての補助、費用負

担及び損害補償に関する事

十七 前各号に掲げるものの外、委員

会の所掌事務で保存部の所掌に属

さない事務に関する事

(保存部の所掌事務)

第十八條 保存部においては、委員会を

補助するため、左の事務をつかさどる

一 国宝又は重要文化財の指定及びそ

の解除に関する事

二 重要文化財の管理又は修理に関す

る命令、勧告、指示及び指揮監督に

関すること

三 国宝の修理及び滅失又はき損の防

止の措置の施行に関する事

四 重要文化財の現状変更、輸出及び

所有者以外の者による公開の許可並

びに環境保全のためにする行為の制

限、禁止及び必要な施設の命令に関

すること

五 埋蔵文化財の発掘の禁止、停止及

び中止の命令に関する事

六 埋蔵文化財の発掘の施行に関する

こと

七 助成の措置を講ずべき無形文化財

の選定に関する事

八 特別史跡名勝天然記念物又は史跡

名勝天然記念物の指定及びその解除

に関する事

九 史跡名勝天然記念物の管理又復旧

に関する命令、勧告、指示及び指揮

監督に関する事

十 特別史跡名勝天然記念物の復旧及

び滅失、き損又は喪亡の防止の措置

の施行に関する事

十一 史跡名勝天然記念物の現状変更

等の許可並びに環境保全のためにす

る行為の制限、禁止及び必要な施設

の命令に関する事

十二 文化財に関する調査及び調査の

ため必要な措置の施行に関する事

十三 文化財に関する専門的、技術的

な指導及び助言に関する事

十四 文化財の管理に関する届出に関

すること

十五 文化財に関する台帳の整備に関

すること

十六 文化財の管理、修理及び復旧に

必要な資料を刊行し、頒布すること

十七 文化財に関する記録、写真、複

写及び複製に関する事

(事務局長)

第十九條 委員会の事務局に事務局長を

置く。事務局長は、委員長の指揮監督

を受けて事務局の事務を掌理し、所属

職員を指揮監督する。

第三節 附屬機関及び事務局出

張所

(附屬機関)

第二十條 委員会の附屬機関として、文

化財専門審議会、国立博物館及び研究

所を置く。

(文化財専門審議会)

第二十一條 文化財専門審議会は、委員

会の諮問に應じて文化財の保存及び活

用に関する専門的及び技術的事項を調

査審議し、且つ、これらの事項に関し

必要と認める事項を委員会に建議する

2 委員会は、左に掲げる事項について

は、あらかじめ、文化財専門審議会に

諮問しなければならない。

一 国宝又は重要文化財の指定及びそ

の解除

二 重要文化財の管理及び修理に関す

る命令

三 国宝の修理及び滅失又はき損の防

止の措置の施行

四 重要文化財の現状変更及び輸出の

許可及び許可の権限の都道府縣の教

育委員会への委任

五 重要文化財の環境保全のためにす

る行為の制限、禁止及び必要な施設

の命令

六 重要文化財の買取

七 埋蔵文化財の発掘の施行

八 助成の措置を講ずべき無形文化財

の選定

九 特別史跡名勝天然記念物又は史跡

名勝天然記念物の指定及びその解除

十 史跡名勝天然記念物の管理又は復

旧に関する命令

十一 特別史跡名勝天然記念物の復旧

及び滅失、き損又は喪亡の防止の措

置の施行

十二 史跡名勝天然記念物の現状変更

等の許可及び許可の権限の都道府縣

の教育委員会への委任

十三 史跡名勝天然記念物の環境保全

のためにする行為の制限、禁止及び

必要な施設の命令

十四 前各号に掲げるものの外、文化

財の保存及び活用に関する重要事項

前三項の規定により所掌する事項を

分掌させるため、文化財専門審議会

に分科会を置く。

4 文化財専門審議会及びその分科会の

組織及び所掌事務並びに専門委員、

臨時専門委員その他の職員について

は、他の法律(これに基く命令を含

む。)に特別の定がある場合を除く

外、政令で定める。

(国立博物館)

第二十二條 国立博物館は、有形文化財

を収集し、保管して公衆の観覧に供

し、あわせてこれに関連する事業を

行う。

2 国立博物館は、東京都に置く。

3 国立博物館に、奈良分館を置く。

4 国立博物館の内部組織は、委員会規則で定める。

(研究所)

第二十三條 研究所は、有形文化財及び無形文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う。

2 研究所は、東京都に置く。

3 研究所には、支所を置くことができる。

4 研究所の内部組織は、委員会規則で定める。

(事務局出張所)

第二十四條 委員会は、その所掌事務の一部を分掌させるため、所要の地に事務局出張所を設置することができる。その名称、位置、所掌事務の範囲は委員会規則で定める。

第四節 職員

(職員)

第二十五條 委員会に置かれる職員の任免、昇任、懲戒その他人事管理に関する事務については、国家公務員法（昭和二十二年法律第二十号）の定めるところによる。

(定員)

第二十六條 委員会に置かれる職員の定員は別に法律で定める。

第三章 有形文化財

第一節 重要文化財

第一款 指定

(指定)

第二十七條 委員会は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。

2 委員会は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいしない国民の宝たるものを国宝に指定することができる。

(告示及び指定書の交付)

第二十八條 前條の規定による指定をしたときは、委員会は、その旨を官報で告示し、且つ、国宝又は重要文化財の所有者に指定書を交付しなければならない。

2 指定書に記載すべき事項その他指定書に關し必要な事項は、委員会規則で定める。

3 第一項の規定により国宝の指定書を受けたときは、所有者は、二十日以内に国宝に指定された重要文化財の指定書を委員会に返付しなければならない。

(解除)

第二十九條 国宝又は重要文化財が国宝又は重要文化財としての価値を失つた場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、国宝又は重要文化財の指定を解除することができる。

2 前項の規定により指定を解除したときは、委員会は、その旨を官報で告示し、且つ、所有者に通知しなければならない。

ばならない。

3 前項の通知を受けたときは、所有者は、二十日以内に指定書を委員会に返付しなければならない。

4 第一項の規定により国宝の指定を解除した場合において当該有形文化財につき重要文化財の指定を解除しないときは、委員会は、直ちに重要文化財の指定書を所有者に交付しなければならない。

第二款 管理

(管理方法の指示)

第三十條 委員会は、重要文化財の所有者に対し、重要文化財の管理に關し必要な指示をすることができる。

(所有者の管理義務及び管理責任者)

第三十一條 重要文化財の所有者は、この法律並びにこれに基いて発する委員会規則及び委員会の指示に従い、重要文化財を管理しなければならない。

2 重要文化財の所有者は、特別の事情があるときは適當な者をもつば自己に代り当該重要文化財の管理の責に任すべき者（以下「管理責任者」という。）に選任することができる。

3 前項の規定により管理責任者を選任したときは、重要文化財の所有者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、当該管理責任者と連署の上二十日以内に委員会に届け出なければならない。

なければならぬ。管理責任者を解任した場合も同様とする。

4 第二項の規定による管理責任者には、第一項の規定を準用する。

(所有者又は管理責任者の變更)

第三十二條 重要文化財の所有者が変更したときは、新所有者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、且つ、旧所有者に対し交付された指定書を添えて、二十日以内に委員会に届け出なければならない。

2 重要文化財の所有者は、前條の規定による管理責任者を変更したときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、新管理責任者と連署の上二十日以内に委員会に届けなければならない。

3 重要文化財の所有者又は前條の規定による管理責任者は、その氏名若しくは名称又は住所を変更したときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、二十日以内に委員会に届け出なければならない。氏名若しくは名称又は住所の変更が重要文化財の所有者に係るときは、届出の際指定書を添えなければならない。

(滅失又は、損)

第三十三條 重要文化財が滅失し、又はき損したときは、所有者第三十一條の規定により管理責任者を定めてある場合は、その者は、委員会規則

の定める事項を記載した書面をもつて、その事実を知つた日から十日以内に委員会に届けなければならぬ（所在の變更）

第三十四條 重要文化財の所在の場所を變更したときは、重要文化財の所有者（第三十一條の規定により管理責任者を定めてある場合は、その者）は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、且つ、指定書を添えて二十日以内に委員会に届け出なければならぬ。但し、一時的な所在の場所の變更その他委員会規則の定める場合は、この限りでない。

第三款 保護

（管理又は修理の補助）

第三十五條 重要文化財の管理又は修理につき多額の経費を要し、重要文化財の所有者がその負担に堪えない場合その他特別の事情がある場合には、政府は、その経費の一部に充てさせるため、重要文化財の所有者に対し補助金を交付することができ

る。

2 前項の補助金を交付する場合には、委員会は、その補助の條件として管理又は修理に關し必要な事項を指示することができる。

3 委員会は、必要があると認めるときは、第一項の補助金を交付する重要文化財の管理又は修理について指揮監督することができ

（管理に關する命令又は勧告）

第三十六條 重要文化財を管理する者が不適任なため又は管理が適當でないため重要文化財が滅失し、又は損する虞があると認めるときは、委員会は、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に対し、重要文化財の管理をする者の選任又は變更、管理方法の改善、防火施設その他の保存施設の設置その他管理に關し必要な措置を命じ、又は勧告することができ

る。

2 前項の規定による命令又は勧告に基いてする措置のために要する費用は、委員会規則の定めるところにより、その全部又は一部を国庫の負担とするることができる。

3 前項の規定により国庫が費用の全部又は一部を負担する場合には、前條第三項の規定を準用する。

（修理に關する命令又は勧告）

第三十七條 委員会は、国宝がき損している場合においてその保存のため必要があると認めるときは、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に対し、その修理に關し必要な命令又は勧告をすることができ

る。

2 委員会は、国宝以外の重要文化財がき損している場合において、その保存のため必要があると認めるときは、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に対し、その修理に關し必要な命令又は勧告をすることができ

る。

3 前二項の規定による命令又は勧告に基いてする修理のために要する費用は委員会規則の定めるところにより、その全部又は一部を国庫の負担とするることができる。

4 前項の規定により国庫が費用の全部又は一部を負担する場合には、第三十五條第三項の規定を準用する。

（政府による修理等の施行）

第三十八條 委員会は、左の各條の一に該当する場合においては、国宝につき自ら修理を行い、又は滅失若しくは損の防止の措置をすることができ

る。

一 所有者又は第三十一條の規定による管理責任者が前二條の規定による命令に従わないとき。

二 国宝がき損している場合又は滅失し、若しくは損する虞がある場合において、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に修理又は滅失若しくは損の防止の措置をさせることが適當でない認められるとき。

2 前項の規定による修理又は措置をしようとするときは、委員会は、あらかじめ、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に対し、当該国宝の名称、修理又は措置の内容、着手の時期その他必要と認める事項を記載した命令書を交付しなければならない。

第三十九條 委員会は、前條第一項の規定による修理又は措置をするときは、その職員のうちから、当該修理又は措置の施行及び当該国宝の管理の責に任ずべき者を定めなければならない。

2 前項の規定により責に任ずべき者と定められた者は、当該修理又は措置の施行に當るときは、その身分を証明する証票を携帯し、関係者の請求があつたときは、これを示し、且つ、その正当な意見を十分に尊重しなければならない。

第四十條 第三十八條第一項の規定による修理又は措置のために要する費用は、国庫の負担とする。

2 委員会は、委員会規則の定めるところにより、第三十八條第一項の規定による修理又は措置のために要した費用の一部を所有者から徴収することができ

る。

3 前項の規定による徴収については、行政執行法（昭和二十三年法律第四十三号）第五條から第七條までの規定を準用する。

第四十一條 第三十八條第一項の規定による修理又は措置によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

2 前項の規定による補償額に不服のある者は、訴をもつてその増額を請求することができる。但し、前項の補償の

決定の通知を受けた日から六箇月を経過したときは、この限りでない。

(補助等に係る重要文化財譲渡の場合の納付金)

第四十二條 国が修理又は滅失若しくは

損の防止の措置(以下この條において、「修理等」という。)につき第三

十五條第一項の規定により補助金を交付し、又は第三十六條第二項、第三十七條第三項若しくは第四十條第一項の

規定により費用を負担した重要文化財のその当時における所有者又はその相続

人受遺者若しくは受贈者(第二次以下の相続人、受遺者又は受贈者を含む。以下この條において同じ。)(以下この條において、「所有者等」という。)

は、補助又は費用負担に係る修理等が行われた後当該重要文化財を有償で譲り渡した場合においては、当該補助金又は負担金の額(第四十條第二項の規定により徴収された部分を除く。)の合計額から当該修理等が行われた後重要文化財の修理等のため自己の費した金額を控除して得た金額(以下この條において、「納付金額」という。)を、

委員会規則の定めるところにより国庫に納付しなければならない。

2 前項に規定する「補助金又は負担金の額」とは、補助金又は負担金の額を補助又は費用負担に係る修理等を施した重要文化財又はその部分につき委員

会が個別的に定める耐用年数で除して得た金額に、更に当該耐用年数から修理等を行った時以後重要文化財の譲渡の時までの年数を控除した残余の年数(一年に満たない部分があるときは、これを切り捨てる。)を乗じて得た金額に相当する金額とする。

3 補助又は費用負担に係る修理等が行われた後、当該重要文化財が所有者等の責に帰することのできない事由により著しくその価値を減じた場合又は当該重要文化財を国に譲り渡した場合に、委員会は、納付金額の全部又は一部の納付を免除することができる。

4 委員会の指定する期限までに納付金額を完納しないときは、国税滞納処分の例により、これを徴収することができ

る。

5 納付金額を納付する者が相続人、受遺者又は受贈者であるときは政令の定めるところにより納付金額からその者が納付した相続税額のうち当該重要文化財の相続、遺贈又は贈與に係る部分に相当する金額を控除するものとする

6 第一項の規定により納付金額を納付する者の同項に規定する譲渡に係る所得税法(昭和二十二年法律第二十七号)第九條第一項第八号に規定する譲渡所得の計算については、第一項の規定により納付する金額は、同号に規定する譲渡に関する経費とする。

(現狀變更の制限)

第四十三條 重要文化財の現狀を變更しようとするときは、委員会の許可を受けなければならない。但し、その維持の措置をする場合は、この限りでない

2 委員会は、前項の許可を與える場合において、その許可の條件として同項の現狀の變更に關し必要な指示をすることができ

る。

3 第一項の許可を受けた者が前項の許可の條件に役わなかつたときは、委員会は、許可に係る現狀の變更を停止し又は許可を取り消すことができる。

(輸出の禁止)

第四十四條 重要文化財は、輸出してはならない。但し、委員会が文化の國際的交流その他の事由により特に必要と認めて許可した場合は、この限りでない。

(環境保全)

第四十五條 委員会は、重要文化財の保存のため必要があると認めるときは、地域を定めて一定の行為を制限し、若しくは禁止し、又は必要な施設をすることを命ずることができる。

2 前項の規定による処分によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

3 前項の場合には、第四十一條二項の規定を準用する。

(国に対する賣渡の申出)

第四十六條 重要文化財を有償で譲り渡そうとする者は、譲渡の相手方、予定対價の額(予定対價が金銭以外のものであるときは、これを時價を基準とした金銭に見積つた額。以下同じ。)

その他委員会規則で定める事項を記載した書面をもつて、まず委員会に国に対する賣渡の申出をしなければなら

ない。但し、当該譲受人に対して特に譲り渡したい特別の事情がある場合において委員会の承認を受けたときは、この限りでない。

2 前項の規定による賣渡の申出のあつた後二十日以内に委員会が当該重要文化財を国において買い取るべき旨の通知をしたときは、前項の規定による申出書に記載された予定対價の額に相当する代金で、賣買が成立したものとみなす。

3 第一項に規定する者は、前項の期間(その期間内に委員会が当該重要文化財を買い取らない旨の通知をしたときは、その時までの期間)内は、当該重要文化財を譲り渡してはならない。

4 委員会が第一項但書の規定による承認をしない旨の処分をした場合において、その処分に不服のある者は、委員会に対し、異議の申立をすることができ

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

第四十七條 重要文化財の所有者は、委

託又は修理の受託又は技術的指導

(管理又は修理の受託又は技術的指導)

員会の定める條件により、委員会に重要文化財の管理又は修理を委託することができる。

2 委員会は、重要文化財の保存上必要があるとき、所有者に対し條件を示して、委員会にその管理又は修理を委託するように勧告することができる。

3 前二項の規定により委員会が管理又は修理の委託を受けた場合には、第三十九條の規定を準用する。

4 重要文化財の所有者又は第三十一條の規定による管理責任者は、委員会規則の定めるところにより、委員会に重要文化財の管理又は修理に關し技術的指導を求めることができる。

第四款 公開

(出品)

第四十八條 委員会は、重要文化財の所有者に対し、一年以内の期間を限つて、国立博物館その他に施設において国の行う公開の用に供するため重要文化財を出品することを勧告することができる。

2 委員会は、国庫が管理又は修理につき、その費用の全部若しくは一部を負担し、又は補助金を交付した重要文化財の所有者に対し、一年以内の期間を限つて、国立博物館その他の施設において国の行う公開の用に供するため当該重要文化財を出品することを命ずる

ことができる。

3 委員会は、前項の場合において必要があるとき、一年以内の期間を限つて、出品の期間を更新することとができる。但し、引き続き五年をこえてはならない。

4 第二項の命令又は前項の更新があつたときは、重要文化財の所有者は、その重要文化財を出品しなければならない。但し、委員会が所有者の申請によりやむを得ない事由があるものと認める場合は、この限りでない。

5 前四項に規定する場合の外、委員会は、重要文化財の所有者から国立博物館その他の施設において国の行う公開の用に供するため重要文化財を出品したい旨の申出があつた場合において適當と認めるときは、その出命を承認することができる。

第四十九條 委員会は、前條の規定により重要文化財が出品されたときは、第一百條に規定する場合を除いて、国立博物館所屬の職員その他委員会の職員のうちから、その重要文化財の管理の責に任ずべき者を定めなければならない。

第五十條 第四十八條の規定による出品のために要する費用は、委員会規則の定める基準により、国庫の負担とする。

2 政府は、第四十八條の規定により出品した所有者に対し、委員会規則の定める基準により、給與金を支給する。

(所有者による公開)

第五十一條 委員会は、重要文化財の所有者に対し、三箇月以内の期間を限つて、重要文化財の公開を勧告することとができる。

2 委員会は、国庫が管理又は修理につき、その費用の全部若しくは一部を負担し、又は補助金を交付した重要文化財の所有者に対し、三箇月以内の期間を限つて、その公開を命ずることがとができる。

3 前項の場合には、第四十八條第四項の規定を準用する。

4 委員会は、重要文化財の所有者に対し、公開及び公開に係る重要文化財の管理に關し必要な指示をすることがとができる。

5 重要文化財の所有者又は第三十一條の規定による管理責任者が前項の指示に従わない場合には、委員会は、公開の停止又は中止を命ずることがとができる。

6 第一項から第四項までの指定による公開のために要する費金は、委員会規則の定めるところにより、その全部又は一部を国庫の負担とする事がとができる。

7 第一項から第三項までに規定する場合の外、重要文化財の所有者からその所有に係る重要文化財を国庫の費用負担において公開したい旨の申出があつた場合において、委員会が適當と認めこれを承認したときは、委員会規則

の定めるところにより、その公開のために要する費用の全部又は一部を国庫の負担とすることがとができる。この場合には、第四項及び第五項の規定を準用する。

(損害の補償)

第五十二條 第四十八條又は前條の規定により出品し、又は公開したことに起因して当該重要文化財が滅失し、又は損したときは、政府は、その重要文化財の所有者に対し、通常生ずべき損害を補償する。但し、重要文化財が所有者又は第三十一條の規定による管理責任者の責に歸すべき事由によつて滅失し、又は損した場合は、この限りでない。

2 前項の場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

(所有者以外の者による公開)

第五十三條 重要文化財の所有者以外の者がその主催する展覧会その他の催しにおいて重要文化財を公衆の観覧に供しようとするときは、委員会の許可を受けなければならない。但し、あらかじめ、委員会の承認を受けた博物館その他の施設において、委員会以外の国の機関又は地方公共団体が主催する場合は、委員会に届け出ることをもつて足りる。

2 委員会は、前項の許可を與える場合において、その許可の條件として、公

案の観念に供する場合における重要文化財の管理に關し必要な指示をすることができると。

3 第一項の許可を受けた者が前項の許可の條件に從わなかつたときは、委員会は、許可に係る公開を停止し、又は許可を取り消すことができる。

第五款 調査

(保存のための調査)

第五十四條 委員会は、必要があると認めるときは、重要文化財の所有者又は第三十一條の規定による管理責任者に對し、重要文化財の現状又は管理、修理若しくは環境保全の状況につき報告を求めることができる。

第五十五條 委員会は、左の各号の一に該當する場合において、前條の報告によつてもなお重要文化財に關する状況を確認することができず、且つ、その確認のため他に方法がないと認めるときは、調査に當る者を定め、その所在する場所に立ち入つてその現状又は管理、修理若しくは環境保全の状況につき実地調査をさせることができる。

一 重要文化財の現状変更の許可の申請があつたとき。

二 重要文化財が損壊しているとき又はその現状若しくは所在の場所につき変更があつたとき。

三 重要文化財が滅失し、又は損する虞のあるとき。

四 特別の事情によりあらためて国宝又は重要文化財としての價值を鑑査する必要があるとき。

2 前項の規定により立ち入り、調査する場合においては、当該調査に當る者は、その身分を証明する証票を携帯し、關係者の請求があつたときはこれを示し、且つ、その正当な意見を十分に尊重しなければならない。

3 第一項の規定による調査によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

4 前項の場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

第六款 雜則

(所有者變更に伴う權利義務の承繼)

第五十六條 重要文化財の所有者が變更したときは、新所有者は、当該重要文化財に關しこの法律に基いてする委員会の命令、勸告、指示その他の処分による旧所有者の權利義務を承繼する。

2 前項の場合には、旧所有者は、当該重要文化財の引渡と同時にその指定書を新所有者に引き渡さなければならない。

第二節 重要文化財以外の有

形文化財

第一款 埋藏文化財

(發掘に關する届出、指示及び命令)

第五十七條 第六十九條又は七十條の規定により史跡に指定せられた土地以外

の土地において埋藏物たる文化財(以下「埋藏文化財」という。)を發掘しようとするときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、發掘しようとする日の二十日前までに委員会に届け出なければならない。

2 埋藏文化財の保護上特に必要があると認めるときは、委員会は、前項の届出に係る埋藏文化財の發掘に關し必要な事項を指示し、又はその發掘の禁止停止若しくは中止を命ずることができる。

(發掘の施行)

第五十八條 委員会は、必要があると認めるときは、自ら埋藏文化財の發掘を施行することができる。

2 前項の規定により發掘を自ら施行しようとするときは、委員会は、あらかじめ、当該土地の所有者及び権限に基く占有者に対し、發掘の目的、方法、着手の時期その他必要と認める事項を記載した令書を交付しなければならない。

3 第一項の場合には、第三十九條及び第四十一條の規定を準用する。

第五十九條 前條第一項の規定による発掘により文化財を発見したときは、委員会は、当該文化財をその所有者に返還する場合を除いて、遺失物法(明治三十二年法律第八十七号)第十三條で

準用する同法第一條第一項の規定にか

かわらず、警察署長にその旨を通知することをもつて足りる。

2 前項の通知を受けたときは、警察署長は、直ちに当該文化財につき遺失物法第十三條で準用する同法第一條第二項の規定による公告をしなければならない。

(提出)

第六十條 遺失物法第十三條で準用する同法第一條第一項の規定により、埋藏物として差し出された物件が文化財と認められるときは、警察署長は、直ちに当該物件を委員会に提出しなければならない。但し、所有者の判明している場合は、この限りでない。

(鑑査)

第六十一條 前條の規定により物件が提出されたときは、委員会は、当該物件が文化財であるかどうかを鑑査しなければならない。

2 委員会は、前項の鑑査の結果当該物件を文化財と認めたときは、その旨を警察署長に通知し、文化財でないことを認めたときは、当該物件を警察署長に差し戻さなければならない。

(引渡)

第六十二條 第五十九條第一項又は前條第二項に規定する文化財の所有者から警察署長に對し、その文化財の返還の請求があつたときは、委員会は、当該警察署長にこれを引き渡さなければならない。

らない。

(国庫歸屬及び報償金)

第六十三條 第五十九條第一項又は第六十一條第二項に規定する文化財でその所有者が判明しないものの所有権は、国庫に歸屬する。この場合においては、

委員会は、当該文化財の発見者及びその発見された土地の所有者にその旨を通知し、且つ、その價格に相当する額の報償金を支給する。

2 前項に規定する発見者と土地所有者とが異なるときは、前項の報償金は、折半して支給する。

3 前二項の場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

(譲渡等)

第六十四條 政府は、第六十一條第二項に規定する文化財の保存のため又はその効用から見て国が保有する必要がある場合を除いて、当該文化財の発見者又はその発見された土地の所有者に、その者が前條の規定により受けるべき報償金の額に相当するものの範囲内でこれを譲與することができる。

2 前項の場合には、その譲與した文化財の價格に相当する金額は、前條に規定する報償金の額から控除するものとする。

3 政府は、発見された埋藏文化財の保存のため又はその効用から見て国が保有する必要がある場合を除いて、当該

埋藏文化財の発見された土地を管轄する地方公共団体に對し、その申請に基き、当該埋藏文化財を譲與し、又は時價よりも低い對價で譲渡することができ

(遺失物法の適用)

第六十五條 埋藏文化財に關しては、この法律に特別の定めのある場合の外、遺失物法第十三條の規定の適用があるものとする。

第二款 有形文化財に關する技術的指導

(技術的指導)

第六十六條 重要文化財以外の有形文化財の所有者は、委員会規則の定めるところにより、委員会に有形文化財の管理又は修理に關し技術的指導を求めることができる。

第四章 無形文化財

(助成)

第六十七條 無形文化財のうち特に價値の高いもので国が保護しなければ喪失する虞のあるものについては、委員会は、その保存に當ることを適當と認める者に対し、補助金を交付し、又は資材のあつ旋その他適當な助成の措置を講じなければならない。

2 前項の補助金を交付する場合に、第三十五條第二項及び第三項の規定を準用する。

(公開)

第六十八條 委員会は、前條の規定による措置を受けた者に対し、三箇月以内の期間を限つて、当該無形文化財の公開を命ずることができ

2 前項の場合には、第五十一條第三項から第六項までの規定を準用する。

3 前條に規定する無形文化財の保存に當つている者から、その保存に係る無形文化財を国庫の費用負担において公開したい旨の申出があつた場合には、第五十一條第七項の規定を準用する。

第五章 史跡名勝天然記念物

(指定)

第六十九條 史跡名勝天然記念物は、委員会が指定する。

2 委員会は、前項の史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡名勝天然記念物に指定することができる

3 前二項の規定による指定をしたときは、委員会は、その旨を官報で告示し、且つ、指定されたものの所有者及び権限に基く占有者に通知しなければなら

(假指定)

第七十條 前條第一項の規定による指定前において緊急の必要があると認めるときは、都道府縣の教育委員会は、史跡名勝天然記念物の假指定を行うことができる。

2 前項の規定により假指定を行つたと

きは、都道府縣の教育委員会は、直ちにその旨を委員会に報告しなければならない。

3 第一項の規定により假指定をした場合には、前條第三項の規定を準用する

(解除)

第七十一條 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物がその價値を失つた場合その他特殊の事由のあるときは、委員会又は都道府縣の教育委員会は、その指定又は假指定を解除することができる。

2 前條の規定により假指定された史跡名勝天然記念物につき第六十九條第一項の規定による指定があつたときは、假指定は、その效力を失う。

3 前條の規定による假指定が適當でないとき、委員会は、これを解除することができる。

4 第一項又は前項の規定による指定又は假指定の解除には、第六十九條第三項の規定を準用する。

(管理)

七十二條 委員会は、適當な地方公共団体その他の団体を指定して史跡名勝天然記念物の管理(復旧を含む。以下本條第二項から第四項まで、第七十三條及び第七十四條において同じ。)をさせることができる。

2 史跡名勝天然記念物に指定(假指定を含む。以下同じ。)されたものの所

有者又は占有者は、正当な理由がなく、前項に規定する管理及び管理のため必要な措置を拒み、妨げ、又は忌避してはならない。

3 第一項の規定による管理に要する費用は、この法律に特別の定めのある場合を除いて、当該地方公共団体その他の団体の負担とする。

4 第一項に規定する地方公共団体その他の団体は、その管理する史跡名勝天然記念物につき観覧料を徴収することができる。

5 政府は、第三項の費用の一部を補加することができる。

6 前項の場合には、第三十五條第二項及び第三項の規定を準用する。

第七十三條 前條の規定により地方公共団体その他の団体が行う史跡名勝天然記念物の管理によつて損害を受けた者に対しては、当該地方公共団体その他の団体は、その通常生ずべき損害を補償しなければならない。

2 前項の場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

第七十四條 第七十二條に規定する場合を除いて、史跡名勝天然記念物に指定されたものの所有者は、当該史跡名勝天然記念物の管理に当るものとする。

2 前項の規定により史跡名勝天然記念物の管理に当る所有者は、特別の事情があるときは、適当な者をもつばら自

己に代り当該史跡名勝天然記念物の管理の責に任ずべき者（以下「管理責任者」という。）に選任することができる。

3 第一項に規定する所有者には、第三十五條の規定を、前項の規定により管理責任者を選任した場合には、第三十一條第三項の規定を準用する。

第七十五條 第七十二條第一項に規定する地方公共団体その他の団体、前條第一項に規定する所有者及び同條第二項の規定による管理責任者（以下これらの者を「管理者」と総称する。）には、第三十條、第三十一條第一項及び第三十三條の規定を、前條第一項に規定する所有者及び同條第二項の規定による管理責任者には、第三十二條の規定を準用する。

（管理に関する命令又は勧告）

第七十六條 管理が適當でないため史跡名勝天然記念物が滅失し、き損し、又は喪失する虞があると認めるときは、委員会は、管理者に対し、管理方法の改善、保存施設の設置その他管理に関し必要な措置を命じ、又は勧告することができる。

2 前項の場合には、第三十六條第二項の規定を準用する。

（復旧に関する命令又は勧告）

第七十七條 委員会は、特別史跡名勝天然記念物がき損し、又は喪失している

場合において、その保存のため必要があると認めるときは、管理者に対し、その復旧について必要な命令又は勧告をすることができる。

3 委員会は、特別史跡名勝天然記念物以外の史跡名勝天然記念物がき損し、又は喪失している場合において、その保存のため必要があると認めるときは、管理者に対し、その復旧について必要な勧告をなすことができる。

3 前二項の場合には、第三十七條第三項及び第四項の規定を準用する。

（政府による復旧等の施行）

第七十八條 委員会は、左の各号の一に該当する場合においては、特別史跡名勝天然記念物につき自ら復旧を行い、又は滅失、き損若しくは喪失の防止の措置をすることができる。

一 管理者が前二條の規定による命令に従わないとき。

二 特別史跡名勝天然記念物がき損し若しくは喪失している場合又は滅失しき損し若しくは喪失する虞のある場合において、管理者に復旧又は滅失き損若しくは喪失の防止の措置をさせることが適當でないと認められるとき。

2 前項の場合には、第三十八條第二項及び第三十九條から第四十一條までの規定を準用する。

（補助等に係る史跡名勝天然記

（念物譲渡の場合の納付金）

第七十九條 国が復旧又は滅失、き損若しくは喪失の防止の措置につき第七十四條第三項で準用する第三十五條第一項の規定により補助金を交付し、又は第七十六條第二項で準用する第三十六條第二項、第七十七條第三項で準用する第三十七條第三項若しくは第七十八條第二項で準用する第四十條第一項の規定により費用を負担した史跡名勝天然記念物については、第四十二條の規定を準用する。

（現状變更等の制限）

第八十條 史跡名勝天然記念物に関しその現状を變更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、委員会の許可を受けなければならない。但し、その維持の措置をする場合は、この限りでない。

2 前項の許可を與える場合には、第四十三條第二項の規定を、前項の許可を受けた者には、同條第三項の規定を準用する。

（環境保全）

第八十一條 委員会は、史跡名勝天然記念物の保存のため必要があると認めるときは、地域を定めて一定の行為を制限し、若しくは禁止し、又は必要な施設をすることを命ずることができる。

2 前項の規定による処分によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その

通常生ずべき損害を補償する。

3 前項場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

(保存のための調査)

第八十二條 委員会は、必要があると認めるときは、管理者に対し、史跡名勝天然記念物の現状又は管理、復旧若しくは環境保全の状況につき報告を求めることができる。

第八十三條 委員会は、左の各号の一に該当する場合において、前條の報告によつてもなお史跡名勝天然記念物に関する状況を確認することができず、且つ、その確認のため他に方法がないと認めるときは、調査に当る者を定め、その所在する土地又はその隣接地に立ち入つてその現状又は管理、復旧若しくは環境保全の状況につき実地調査及び土地の発掘、障害物の除却その他調査のため必要な措置をさせることができる。但し、当該土地の所有者、占有者その他の関係者に対し、著しい損害を及ぼす虞のある措置は、させてはならない。

一 史跡名勝天然記念物に関する現状変更又は保存に影響を及ぼす行爲の許可の申請があつたとき。
二 史跡名勝天然記念物が損し、又は喪失しているとき。
三 史跡名勝天然記念物が滅失し、損し、又は喪失する虞のあるとき。

四 特別の事情によりあらためて特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物としての價値を調査する必要があるとき。

2 前項の規定による調査又は措置によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

3 第一項の規定により立ち入り、調査する場合に、第五十五條第二項の規定を前項の場合には、第四十一條第二項の規定を準用する。

(古墳、旧跡その他の遺跡発見の届出)

第八十四條 土地の所有者又は占有者が古墳、旧跡その他の遺跡と認められるものを発見したときは、その現状を変更することなく、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、発見の日から十日以内に委員会に届け出なければならない。

第六章 補則

(聽聞)

第八十五條 委員会が左に掲げる処分又は措置を行おうとするときは、関係者又はその代理人の出頭を求めて、公開による聽聞を行わなければならない。

一 第三十八條第一項又は第七十八條第一項の規定による修理若しくは復旧又は措置の施行

二 第四十三條第三項(第八十條第二項で準用する場合を含む。)又は第二

五十三條第三項の規定による許可の取消

三 第四十五條又は第八十一條の規定による制限、禁止又は命令で特定の者に対して行われるもの

四 第五十一條第五項(同條第七項並びに第六十八條第二項及び第三項で準用する場合を含む。)の規定による公開の中止命令

五 第五十五條第一項又は第八十三條第一項の規定による立入調査又は調査のため必要な措置の施行

六 第五十七條第二項の規定による発掘の禁止又は中止命令

七 第五十八條第一項の規定による発掘の施行

2 委員会は、前項の聽聞を行おうとするときは、前項各号に規定する処分又は措置を行おうとする理由、その処分又は措置の内容並びに聽聞の期日及び場所をその期日の十日前までに当該関係者に通告し、且つ、聽聞の期日及び場所を公示しなければならない。

3 聽聞においては、当該関係者又はその代理人は、自己又は本人のために意見を述べ、又は釈明し、且つ、証拠を提出することができる。

4 当該関係者又は、その代理人が正当な理由がなくして聽聞に応じなかつたときは、委員会は、聽聞を行わないで第一項に規定する処分又は措置をするこ

とができる。

(國に関する特例)

第八十六條 國が重要文化財若しくは史跡名勝天然記念物に指定されたものを取得し、又は委員会が国有財産法(昭和二十三年法律第七十三号)に規定する国有財産(公共福祉用財産を除く。)を重要文化財若しくは史跡名勝天然記念物に指定する場合においては、同法第十三條の規定にかかわらず、国会の議決を経ることを要しない。その指定を解除する場合も同様とする。

第八十七條 重要文化財又は史跡名勝天然記念物に指定されたものが国有財産法に規定する国有財産であるときは、そのものは、文部大臣が管理する。但し、そのものが同法第三條第二項に規定する行政財産であるときは又は国有林野法(明治三十二年法律第八十五号)に規定する国有林野に属するものであるときは、そのものを管理すべき機関は、文部大臣、関係各省各廳の長(国有財産法第四條第二項に規定する各省各廳の長をいう。以下同じ。)及び大藏大臣が協議して定める。

2 前項但書の規定により協議する場合

第八十八條 國の所有に属する有形文化財を國宝又は重要文化財に指定したときは、第二十八條第一項規定により所

有者に交仕すべき指定書は、当該有形文化財を管理する各省各廳の長に交付するものとする。この場合においては、国宝の指定書を受けた各省各廳の長は直ちに国宝に指定された重要文化財の指定書を委員会に返付しなければならぬ。

2 国の所有に属する国宝又は重要文化財の指定を解除したときは、第二十九條第二項又は第四項の規定により所有者に對し行ふべき通知又は指定書の交付は、当該国宝又は重要文化財を管理する各省各廳の長に對し行ふものとする。この場合においては、当該各省各廳の長は、直ちに指定書を委員会に返付しなければならない。

3 国の所有又は占有に属するものを特別史跡名勝天然記念物若しくは史跡名勝天然記念物に指定し、又はその指定を解除したときは、第六十九條第三項（第七十條第三項及び第七十一條第四項に準用する場合を含む。）の規定により所有者又は占有者に對し行ふべき通知は、その指定又は解除に係るものを管理する各省各廳の長に對し行ふものとする。

第八十九條 重要文化財又は史跡名勝天然記念物に指定されたものを管理する各省各廳の長は、この法律並びにこれに基いて発する委員会規則及び委員会の勧告に従い、重要文化財又は史跡名

勝天然記念物を管理しなければならない。

第九十條 左に掲げる場合には、関係各省各廳の長は、文部大臣を通じて委員会に通知しなければならない。

一 重要文化財又は史跡名勝天然記念物に指定されたものを取得したとき

二 重要文化財又は史跡名勝天然記念物の所管換を受け、又は所屬替をしたとき

三 所管に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物が滅失し、き損し、又は喪亡したとき

四 所管に属する重要文化財の所在の場所を変更したとき

五 所管に属する土地において古墳、旧跡その他の遺跡と認められるものを発見したとき

2 前項第一号及び第二号の場合に係る通知には、第三十二條第一項及び同項を準用する第七十五條の規定を、前項第三号の場合に係る通知には、第三十三條及び同項を準用する第七十五條の規定を前項第四号の場合に係る通知には、第三十四條の規定を、前項第五号の場合に係る通知には、第八十四條の規定を準用する。

第九十一條 左に掲げる場合には、関係各省各廳の長は、あらかじめ、文部大臣を通じて委員会の同意を求めなければならない。

一 重要文化財又は史跡名勝天然記念物の現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするとき。（その維持の措置をする場合を除く。）

二 所管に属する重要文化財を輸出しようとするとき

三 所管に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物に指定されたものの貸付、交換、賣拂、譲與その他の処分をしようとするとき

2 委員会は、前項第一号に規定する措置につき同意を與える場合においては、その條件としてその措置に關し必要な、勧告をすることが出来る。

3 関係各省各廳の長は、前項の規定による委員会の勧告を十分に尊重しなければならない。

第九十二條 委員会は、必要があると認めるときは、文部大臣を通じて、各省各廳の長に對し、左に掲げる事項につき必要な勧告をすることが出来る。

一 所管に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物の管理方法

二 所管に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物に指定されたものの修理若しくは復旧又は滅失、き損若しくは喪亡の防止の措置

三 重要文化財又は史跡名勝天然記念物の環境保全のため必要な施設

四 所管に属する重要文化財の出品又

は公開

2 前項の勧告については、前條第三項の規定を準用する。

3 第一項の規定による委員会の勧告に基いて施行する同項第二号に規定する修理、復旧若しくは措置又は同項第三号に規定する施設に要する経費の分担については、文部大臣と各省各廳の長が協議して定める。

4 前項の規定により協議する場合には、第八十七條第二項の規定を準用する。

第九十三條 委員会は、左の各号の一に該当する場合においては、国の所有に属する国宝又は特別史跡名勝天然記念物に指定されたものにつき、自ら修理若しくは復旧を行い、又は滅失、き損若しくは喪亡の防止の措置をすることが出来る。この場合においては、委員会は、当該文化財が文部大臣以外の各省各廳の長の所管に属するものであるときは、あらかじめ、修理若しくは復旧又は措置の内容、着手の時期その他必要な事項につき、文部大臣を通じて当該文化財を管理する各省各廳の長と協議し、当該文化財が文部大臣の所管に属するものであるときは、文部大臣の定める場合を除いて、その承認を受けなければならない。

一 関係各省各廳の長が前條第一項第二号に規定する修理若しくは復旧又は措置についての委員会の勧告に応

じないとき。

二 国宝又は特別史跡名勝天然記念物が損し、若しくは喪失している場合又は滅失し、き損し、若しくは喪失する虞のある場合において、関係各省各廳の長に当該修理若しくは復旧又は措置をさせることが適當でないとき。

第九十四條 委員會は、国の所有に属するものを国宝、重要文化財、特別史跡名勝天然記念物若しくは史跡名勝天然記念物に指定するに当り、又は国の所有に属する国宝、重要文化財、特別史跡名勝天然記念物若しくは史跡名勝天然記念物に関する状況を確認するため必要があると認めるときは、関係各省各廳の長に対し調査のため必要な報告を求め、又は調査に当る者を定めて实地調査をさせることができる。

第九十五條 国の所有に属する史跡名勝天然記念物を第七十二條の規定により地方公共団体その他の団体に管理させる場合においては、委員會は、当該史跡名勝天然記念物から生ずる収益を当該地方公共団体その他の団体に帰属させることができる。

第九十六條 委員會は、第五十八條第一項の規定により自ら埋蔵文化財の発掘を施行しようとする場合において、その発掘を施行しようとする土地が国の所有に属し、又は国の機関の占有する

ものであるときは、あらかじめ、発掘の目的、方法、着手の時期その他必要と認める事項につき、文部大臣を通じ関係各省各廳の長と協議しなければならぬ。但し、当該各省各廳の長が文部大臣であるときは、その承認を受けるべきものとする。

第九十七條 第六十三條の規定により国庫に歸属した埋蔵文化財は、委員會が管理する。但し、その保存のため又はその效用から見て機関に管理させることが適當であるときは、これを当該機関の管理に移さなければならない。

第九十八條 国の所有に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物については、第三十條から第三十四條まで、第三十六條から第四十一條まで、第四十三條から第四十四條、第四十八條から第五十二條まで、第五十四條、第五十五條第七十四條から第七十八條まで、第八十條及び第八十二條から第八十四條までの規定は、適用しない。

二 国に対しては、第四十五條第一項中施設の命令に関する部分、同條第二項及び第三項、第八十一條第一項中施設の命令に関する部分並びに同條第二項及第三項の規定は、適用しない。

三 第五十八條第一項の規定により埋蔵文化財の発掘を施行する土地が国の所有に属し、又は国の機関の占有するものである場合には、同條第二項の規定

及び同條第三項中第四十一條の規定を準用する部分は、国に対しては、適用しない。

(權限の委任)

第九十九條 委員會は、必要があると認めるときは、左に掲げる委員會の權限の一部を都道府縣の教育委員會に委任することができる。

一 第三十五條第三項(第三十六條第三項、第三十七條第四項、第六十七條第二項、第七十二條第六項、第七十四條第三項、第七十六條第二項及び第七十七條第三項で準用する場合を含む。)の規定による指揮監督

二 第四十三條 (第八十條第二項で準用する場合を含む。)の規定による現状変更又は保存に影響を及ぼす行為の許可及びその取消並びにその停止命令(重大な現状変更又は保存に重大な影響を及ぼす行為の許可及びその取消を除く。)

三 第五十一條第五項(同條第七項並びに第六十八條第二項及び第三項で準用する場合を含む。)の規定による公開の停止命令

四 第五十三條の規定による公開の許可及びその取消並びに公開の停止命令

六 第五十七條第二項の規定による発掘の停止命令

二 都道府縣の教育委員會が前項の規定による委任に基き同項第二号若しくは第四号に規定する許可の取消又は同項第五号に規定する立入調査若しくは調査のため必要な措置を行う場合には、第八十五條の規定を準用する。

(出品された重要文化財の管理の委任)

第一百條 委員會は、必要があると認めるときは、都道府縣又は地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第五百五十五條第二項の市の教育委員會に対し第四十八條の規定により出品された重要文化財の管理の事務を委任することができる。

二 前項の規定による委任を受けた場合には、都道府縣又は前項に規定する市の教育委員會は、その職員のうちから当該重要文化財の管理の責に任ずべき者を定めなければならない。

(修理等の施行の委託)

第一百一條 委員會は、必要があると認めるときは、第三十八條第一項又は第九十三條の規定による国宝の修理又は滅失若しくはき損の防止の措置の施行、第五十八條第一項の規定による埋蔵文化財の発掘の施行及び第七十八條第一項又は第九十三條の規定による特別史跡名勝天然記念物の復旧又は滅失、き損若しくは喪失の防止の措置の施行に

つき、都道府縣の教育委員会に対し、その全部又は一部を委託することができ。

2 都道府縣の教育委員会が前項の規定による委託に基づき、第三十八條第一項の規定による修理又は措置の施行の全部又は一部を行う場合には、第三十九條の規定を、第五十八條第一項の規定による発掘の施行の全部又は一部を行う場合には、同條第三項で準用する第三十九條の規定を、第七十八條第一項の規定による復旧又は措置の施行の全部又は一部を行う場合には、同條第二項で準用する第三十九條の規定を準用する。

(重要文化財の管理又は修理の受託等)

第二百二條 都道府縣の教育委員会は、あらかじめ、委員会の承認を得て、所有者又は第三十一條の規定による管理責任者の求めに応じ、重要文化財の管理若しくは修理につき委託を受け、又は技術的指導をすることができ。

2 都道府縣の教育委員会が前項の規定により管理又は修理の委託を受ける場合には、第三十九條の規定を準用する(書類等の經由)

第二百三條 この法律の規定により文化財に関し委員会に提出すべき届書その他の書類及び物件の提出は、都道府縣の教育委員会を経由すべきものとする。

2 都道府縣の教育委員会は、前項に規

定する書類及び物件を受理したときは、意見を具してこれを委員会に送付しなければならない。

3 この法律の規定により文化財に関し委員会が発する命令、勧告、指示その他の処分告知は、都道府縣の教育委員会を経由すべきものとする。但し、特に緊急な場合は、この限りでない。(指揮監督及び経費の負擔)

第二百四條 委員会は、この法律の規定により都道府縣又は第百條第一項に規定する市の教育委員会に行わせる事務につき、その教育委員会を指揮監督することができ。

2 都道府縣又は第百條第一項に規定する市の教育委員会が第九十九條から第百一條までの規定による事務を処理するために要する経費は、国庫の負担とする。

(地方公共団体の補助)

第二百五條 地方公共団体は、地方自治法第二百三十一條の規定により文化財の管理、修理、復旧その他保存に要する経費につき補助することができ。

2 前項の規定により補助したときは、当該地方公共団体は、委員会にその補助金の額、補助の比率、補助の方法その他必要な事項につき報告しなければならない。

(刑罰)

第七章 罰則

第二百六條 第四十四條の規定に違反し、委員会の許可を受けずに重要文化財を輸出した者は、五年以下の懲役若しくは禁錮又は十万円以下の罰金に処する。

重要文化財を損壊し、棄し、又は隠匿した者は、五年以下の懲役若しくは禁錮又は二万五千元以下の罰金若しくは科料に処する。

2 前項に規定する者が当該重要文化財の所有者であるときは、二年以下の懲役若しくは禁錮又は一万円以下の罰金若しくは科料に処する。

(行政罰)

第二百八條 第三十九條第一項(第四十七條第三項、第七十八條第二項、第百一條第二項又は第百二條第二項で準用する場合を含む)、第四十九條又は第百條第二項に規定する重要文化財又は史跡名勝天然記念物の管理、修理又は復旧の施行の責に任すべき者が怠慢又は重大な過失によりその管理、修理又は復旧に係る重要文化財又は史跡名勝天然記念物を滅失し、損し、又は喪失するに至らしめたときは、二万五千元以下の過料に処する。

第二百九條 左の各号の一に該当する者は、二万五千元以下の過料に処する。

一 正当な理由がなくて、第三十六條第一項又は第三十七條第一項の規定による重要文化財の管理又は修理に

関する委員会の命令に従わなかつた者

二 第四十三條の規定に違反して、委員会若しくは都道府縣の教育委員会の許可を受けず、若しくはその許可の條件に従わないう重要文化財の現状を変更し、又は委員会若しくは都道府縣の教育委員会の現状変更の停止の命令に従わなかつた者

三 正当な理由がなくて、第七十六條第一項又は第七十七條第一項の規定による史跡名勝天然記念物の管理又は復旧に関する委員会の命令に従わなかつた者

四 第八十條の規定に違反して、委員会又は都道府縣の教育委員会の許可を受けず、若しくはその許可の條件に従わないう史跡名勝天然記念物の現状を変更し、若しくはその保存に影響を及ぼす行為をし、又は委員会若しくは都道府縣の教育委員会の現状変更若しくは保存に影響を及ぼす行為の停止の命令に従わなかつた者

第二百十條 左の各号の一に該当する者は、一万円以下の過料に処する。

一 第三十八條第一項の規定による国宝の修理又は滅失若しくは損の防止の措置の施行を拒み、又は妨げた者

二 正当な理由がなくて、第四十五條第一項の規定による制限若しくは禁

止又は施設の命令に違反した者

三 第四十六條の規定に違反して、委員に国に対する賣渡の申出をせず、若しくは申出をした後同條第三項に規定する期間内に、国以外の者に重要文化財を譲り渡し、又は同條第一項の規定による賣渡の申出若しくは同項但書の規定による承認の申請につき、虚偽の事実を申し立てた者

四 第五十三條の規定に違反して、委員若しくは都道府縣の教育委員会の許可を受けず、若しくはその許可の條件に従わないう重要文化財を公開し、又は委員会若しくは都道府縣の教育委員会の公開の停止の命令に従わなかつた者

五 第七十八條の規定による特別史跡・名勝天然記念物の復旧又は滅失、き損若しくは喪失の防止の措置の施行を拒み、又は妨げた者

六 正当な理由がなくて、第八十一條第一項の規定による制限若しくは禁止又は施設の命令に違反した者

第七十一條 左の各号の一に該当する者は、五千円以下の過料に処する。

一 第二十八條第三項、第二十九條第三項又は第五十五條第二項の規定に違反して、重要文化財の指定書を委員会に返付せず、又は新所有者に引き渡さなかつた者

二 第三十一條第三項（第七十四條第三項で準用する場合を含む）、第三十二條（第七十五條で準用する場合を含む）、第三十三條（第七十五條で準用する場合を含む）、第三十四條、第五十七條第一項又は第八十四條の規定に違反して、届出をせず、又は虚偽の届出をした者

三 第四十八條第二項から第四項まで、第五十一條第二項及び第三項若しくは第六十八條第一項及び第二項の規定に違反して、出品若しくは公開をせず、又は第五十一條第五項（同條第七項並びに第六十八條第二項及び第三項で準用する場合を含む）の規定に違反して、委員会若しくは都道府縣の教育委員会の公開の停止若しくは中止の命令に従わなかつた者

四 第五十四條、第五十五條、第八十二條又は第八十三條の規定に違反して、報告をせず、若しくは虚偽の報告をし、又は当該公務員の立入調査若しくは調査のため必要な措置の施行を拒み、妨げ、若しくは忌避した者

五 第五十七條第二項の規定に違反して、委員会又は都道府縣の教育委員会の埋藏文化財の発掘の禁止又は停止若しくは中止の命令に従わなかつた者

六 第五十八條の規定による埋藏文化財の発掘の施行を拒み、又は妨げた者

財の発掘の施行を拒み、又は妨げた者

七 正当な理由がなくて、第七十二條第一項の規定による管理（復旧を含む）又は管理のため必要な措置を拒み、妨げ、又は忌避した者

（罰則規定）
第百十二條 法人の代表者又は法人若しくは人の代理人、使用人その他の従業者がその法人又は人の業務又は財産の管理に關し、第百六條、第百七條又は第百九條から前條までの違反行為をしたときは、その行為者を罰する外、その法人又は人に対し、各本條の罰金刑又は過料を科する。但し、法人又は人の代理人、使用人その他の従業者の当該違反行為を防止するため当該業務又は財産の管理に對し相當の注意及び監督が盡されたことの証明があつたときは、その法人又は人については、この限りでない。

附則

（施行期日）

第百十三條 この法律施行の期日は、公布の日から起算して三箇月をこえない期間内において、政令で定める。

（關係法令の廢止）

第百十四條 左に掲げる法律、勅令及び政令は、廃止する国宝保存法（昭和四年法律第十七号）

重要美術品等の保存に關する法律（昭和八年法律第四十三号）

史跡名勝天然記念物保存法（大正八年法律第四十四号）

国宝保存法施行令（昭和四年勅令第二百十号）

史跡名勝天然記念物保存法施行令（大正八年勅令第四百九十九号）

国宝保存會官制（昭和四年勅令第二百十一号）

重要美術品等調査審議會令（昭和二十四年政令第二百五十一号）

史跡名勝天然記念物調査會令（昭和二十四年政令第二百五十二号）

（法令廢止に伴う経過規定）

第百十五條 この法律施行前に行つた国宝保存法第一條の規定による国宝の指定（同法第十一條第一項の規定により解除された場合を除く）は、第二十七條第一項の規定による重要文化財の指定とみなし、同法第三條又は第四條の規定による許可は、第四十三條又は第四十四條の規定による許可とみなす。

2 この法律施行前の国宝の滅失又はき損並びにこの法律施行前に行つた国宝保存法第七條第一項の規定による命令及び同法第十五條前段の規定により交付した補助金については、同法第七條から第十條まで、第十五條後段及び第二十四條の規定は、なおその効力を有する。この場合において同法第九條第二項中「主務大臣」とあるのは、「文

和八年法律第四十三号）

史跡名勝天然記念物保存法（大正八年法律第四十四号）

国宝保存法施行令（昭和四年勅令第二百十号）

史跡名勝天然記念物保存法施行令（大正八年勅令第四百九十九号）

国宝保存會官制（昭和四年勅令第二百十一号）

重要美術品等調査審議會令（昭和二十四年政令第二百五十一号）

史跡名勝天然記念物調査會令（昭和二十四年政令第二百五十二号）

化財保護委員会」と讀み替えるものと
する。

3 この法律施行前にした行為の処罰に
ついては、国宝保存法は、第六條及び
第二十三條の規定を除く外、なおその
効力を有する。

4 この法律施行の際現に国宝保存法第
一條の規定による国宝を所有している
者は、委員会規則の定める事項を記載
した書面をもつて、この法律施行後三
箇月以内に委員会に届け出なければな
らない。

5 前項の規定による届出があつたとき
は、委員会は、当該所有者に第二十八
條に規定する重要文化財の指定書を交
付しなければならない。

6 第四項の規定に違反して、届出をせ
ず、又は虚偽の届出をした者は、五千
円以下の過料に処する。

7 前項の場合には、第百十二條の規定
を準用する。

8 この法律施行の際現に国宝保存法第
一條の規定による国宝で国の所有に属
するものを管理する各省各廳の長は、
委員会規則の定める事項を記載した書
面をもつて、この法律施行後三箇月以
内に委員会に通知しなければならない。
但し、委員会規則で定める場合は
この限りでない。

9 前項の規定による通知があつたとき
は、委員会は、当該各省各廳の長に第

二十八條に規定する重要文化財の指定
書を交付するものとする。

第百十六條 この法律施行の際現に重要
美術品等の保存に関する法律第二條第
一項の規定により認定されている物件
については、同法は当分の間、なおそ
の効力を有する。この場合において、
同法の施行に関する事務は、委員会が
行うものとし、同法中「国宝」とある
のは、「文化財保護法ノ規定ニ依ル重
要文化財」と、「主務大臣」とあるの
は、「文化財保護委員会」と、「国宝
保存法第一條ノ規定ニ依リテ国宝とし
テ指定シ」とあるのは、「文化財保護
法第二十七條第一項ノ規定ニ依リテ重
要文化財トシテ指定シ」と讀み替える
ものとする。

2 委員会事務局の保存部においては、
当分の間、第十八條に規定する事務の
外、重要美術品等の保存に関する法律
の施行に関する事務をつかさどる。

3 文化財専門審議会においては、当分
の間、委員会の諮問に応じて重要美術
品等の保存に関する法律第一條の規定
による輸出及び移出の許可、同法第二
條の規定による認定の取消に関する事
項その他重要美術品等の保存に関する
重要事項を調査審議し、且つ、これら
の事項に関し必要と認める事項を委員
会に建議する。

4 重要美術品等の保存に関する法律の

施行に関しては、当分の間、第百三條
の規定を準用する。

第百十七條 この法律施行前につた史
跡名勝天然記念物保存法第一條第一項
の規定による指定（解除された場合を
除く。）は、第六十九條第一項の規定に
よる指定、同法第一條第二項の規定に
よる仮指定（解除された場合を除く。）
は、第七十條第一項の規定による仮指
定とみなし、同法第三條の規定による
許可は、第八十條第一項の規定による
許可とみなす。

2 この法律施行前につた史跡名勝天
然記念物保存法第四條第一項の規定に
よる命令又は処分については、同法第
四條及び史跡名勝天然記念物保存法施
行令第四條の規定は、なおその効力を
有する。この場合において同令第四條
中「文部大臣」とあるのは、「文化財
保護委員会」と讀み替えるものとする

3 この法律施行前にした行為の処罰に
ついては、史跡名勝天然記念物保存法
は、なおその効力を有する。

（最初の委員の任命）

第百十八條 委員会の最初の委員の任命
については、国会の閉会又は衆議院の
解散の場合に限り、第九條第一項の規
定にかかわらず、その後最初に召集さ
れた国会において両議院の事後の承認
を得れば足りる。

2 文部大臣は、前項の規定による両議

院の事後の承認が得られないときは、
その委員を罷免しなければならない。

（第一回の委員会の招集）

第百十九條 この法律に基く第一回の委
員会は、第十四條の規定にかかわら
ず、文部大臣が招集する。

（最初の委員の任期）

第百二十條 この法律により初めて任命
される委員会の委員で委員長及びその
職務を代理する委員以外のものの任期
は、第十條第一項の規定にかかわらず
一人については一年、二人については
二年とする。

2 前項の規定の適用を受ける委員の任
期は、くじで定める。

（国家行政組織法の一部改正）

第百二十一條 国家行政組織法の一部を
次のように改正する。

別表第一中「文部省」を

「文部省 文化財保護委員会」を

に改める。

（文部省設置法の一部改正）

第百二十二條 文部省設置法（昭和二十
四年法律第百四十六号）の一部を次の
ように改正する。

目次中「第三章 職員（第二十五條・

第二十六條）」を

「第三章 外局（第三十五條・第三十六條）
第四章 職員（第三十七條・第三十八條）」

に改める。

第二條第一項第二号中「国宝、重要美術品、史跡名勝天然記念物その他の文化財」を「文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）に規定する文化財」に改める。

同條第三項中「出版」を「文化財保護法に規定する文化財、出版」に改める。

第十條第九号を次のように改める。

九 削除

第十三條中「国立博物館」を削る。

第十四條第一項中「国立博物館」を削る。

第十七條を次のように改める。

第十七條 削除

第二十四條左表中国宝保存会、重要美術品等調査審議会及び史跡名勝天然記念物調査会の項を削る。

第三章を第四章とし、第二十五條を第二十七條とし、第二十六條を第二十八條とし、第二章の次に次の一章を加える。

第三章 外局

（外局の設置）

第二十五條 国家行政組織法第三條第二項の規定に基いて文部省に置かれる外局は、左の通りとする。

（文化財保護委員会）

第二十六條 文化財保護委員会の組織、所掌事務及び権限は、文化財保護法の定めるところによる。

（行政機関職員定員法の一部改正）

第二百二十三條 行政機関職員定員法（昭和二十四年法律第二百十六号）の一部を次のように改正する。

第二項中

文部省本省 三、九六六人

うち六一、八四七人は、国立学校職員とする。

本省	三、六二二	うち六一、八四七人は、国立学校の職員とする
文化財保護委員会	四〇〇	
計	四、〇二二	

に改める。

（従前の国立博物館）

第二百二十四條 法律（これに基く命令を含む。）に特別の定めのある場合を除く外、従前の国立博物館及びその職員（美術研究所及びこれに所屬する職員を除く。）は、この法律に基く国立博物館及びその職員となり、従前の国立博物館附置の美術研究所及びこれに所屬する職員はこの法律に基く研究所及びその職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

2 この法律に基く研究所は、従前の国立博物館附置の美術研究所の所掌した調査研究と同一のものについては、「美術研究所」の名称を用いることができ

（特別職の職員の給与に関する法律の一部改正）

一部改正

第二百二十五條 特別職の職員の給与に関する法律（昭和二十四年法律第二百五十二号）の一部を次のように改正する。

第一條第十四号の二の次に次の一号を加える。

十四の三 文化財保護委員会の委員長及び委員

別表中「全国選挙管理委員会委員長」を「全国選挙管理委員会委員長」に「文化財保護委員会委員長」を「中央更生保護委員会委員長」を「文化財保護委員会委員長」に改める。

（遺失物法の一部改正）

第二百二十六條 遺失物法の一部を次のように改正する。

第十三條第二項から第四項までの規定を削る。

2 この法律施行前に国庫に歸属した埋藏物については、前項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

（国有財産法の一部改正）

第二百二十七條 国有財産法の一部を次のように改正する。

第三條第二項第二号中「国宝」の下に「その他の重要文化財」を加える。

（屋外廣告物法の一部改正）

第二百二十八條 屋外廣告法（昭和二十四年法律第八十九号）の一部を次のように改正する。

うに改正する。

第四條第一項第三号を次のように改める。

三 文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第二十七條の規定により指定された建造物の周囲で、当該都道府県が定める範囲内にある地域及び同法第六十九條又は第七十條の規定により指定され、又は仮指定された地域

同項第四号を削り、第五号を第四号とし、以下一号ずつ繰り上げる。

（教育委員会法の一部改正）

第二百二十九條 教育委員会法（昭和二十三年法律第七十号）の一部を次のように改正する。

第五十條第六号を次のように改める

六 文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）及び重要美術品等の保存に関する法律（昭和八年法律第四十三号）の施行に関すること。

（富裕税法の一部改正）

第三百十條 富裕税法（昭和二十五年法律第七十四号）の一部を次のように改正する。

第九條第一項第四号を次のように改める。

四 文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）の規定により国宝若しくは重要文化財、特別史跡

若しくは史跡、特別名勝若しくは名勝又は特別天然記念物若しくは天然記念物として指定され、若しくは仮指定され、又は重要美術品等の保存に関する法律（昭和八年法律第四十三号）第二條第一項の規定により認定されたもの。

文化財保護法関係政令規則

文化財専門審議會令

（昭和二十五年十月十三日）
（政令 第三百九号）

文化財専門審議會令

内閣は、文化財保護法（昭和二十五年法律第二百四十四号）第二十一條第四項の規定に基づき、この政令を制定する

（所掌事務）

第一條 文化財専門審議會（以下「審議會」という。）は、文化財保護委員會（以下「委員會」という。）の諮問に
應じ、左に掲げる事項を調査審議し、及びこれらの事項に関し必要と認める事項を委員會に建議する。

一 文化財保護法（以下「法」という。）

第二十一條第二項に掲げる事項その他文化財の保存及び活用に関する専門的及び技術的事項

二 法第十六條第三項に規定する重要美術品等の保存に関する重要事項

（組織）

第二條 審議會は、専門委員九十人以上以内で組織する。

2 特別の事項を調査審議するため必要があるときは、審議會に臨時専門委員を置くことができる。

第三條 専門委員及び臨時専門委員は、学識経験のある者のうちから、委員會が任命する。

第四條 専門委員の任期は、二年とし、その欠員が生じた場合の補欠専門委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 臨時専門委員は、特別の事項の調査審議が終つたときは、退任するものとする。

3 専門委員及び臨時専門委員は、非常勤とする。

第五條 専門委員により会長として互選された者は、審議會の会務を總理する

2 専門委員により副会長として互選された者は、会長を輔佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

（分科會）

第六條 審議會に置かれる分科會は、左表上欄に掲げる通りとし、それぞれ同表下欄に掲げる事項を分掌する。

2 前項の規定中有形文化財その他文化財に関する用語の定義は、法における用語の定義による。

第七條 専門委員及び臨時専門委員は、委員會の指名により、前條の分科會のいずれかに分属するものとする。

第八條 各分科會に属する専門委員により分科會長として互選された者は、各

分科會の会務を掌理する。

2 分科會長に事故があるときは、その分科會に属する専門委員のうちから分科會の名稱

分掌事項

第一分科會

有形文化財（埋藏文化財を除く。）及び法第十六條第三項に規定する重要美術品等のうち、繪画、彫刻、工藝品その他建造物以外のものに関する事項

第二分科會

建造物である有形文化財（埋藏文化財を除く。）及び法第十六條第三項に規定する重要美術品等に関する事項

第三分科會

史跡名勝天然記念物（特別史跡名勝天然記念物を含む。）及び埋藏文化財に関する事項

第四分科會

無形文化財に関する事項

科會長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

第九條 審議會は、その定めるところにより、分科會の議決又は二以上の分科會の合同の議決をもつて、審議會の議決とすることができる。

（部會）

第十條 第六條の分科會は、その定めるところにより、部會を置くことができる。

る。

2 部會に属すべき専門委員及び臨時専門委員は、分科會長が指名する。

3 各部會に属する専門委員により部會長として互選された者は、各部會の会務を掌理する。

4 分科會は、その定めるところにより部會の議決又は二以上の部會の合同の議決をもつて、分科會の議決とすることができる。

（議事）

第十一條 審議會は、専門委員及び議事に關係のある臨時専門委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 審議會の議事は、出席した専門委員及び議事に關係のある臨時専門委員の過半数をもつて決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

3 前二項の規定は、分科會又は部會の議事及び二以上の分科會又は部會の合同の議事に準用する。この場合において、二以上の分科會又は部會の合同の議事を整理する会長には、審議會又はその部會を置いた分科會の定めるところにより、その分科會又は部會の會長のうちの一人が當るものとする。

（庶務）

第十二條 審議會の庶務は、委員會事務局總務部において処理する。

（雜則）

第十三條 この政令に定めるもののほか
審議会の議事の手続その他その運営に
関し必要な事項は、審議会が定める。

附 則

この政令は、公布の日から施行する。

文化財保護委員会事務局組織規程

(昭和二十五年九月五日)
文化財保護委員会規則第一号

文化財保護法(昭和二十五年法律第二
百十四号)を実施するため、文化財保護
委員会事務局組織規程を次のように定め
る。

文化財保護委員会事務局組織規程

(総務部)

第一條 総務部に左の三課を置く。

庶務課

会計課

管理課

(庶務課)

第二條 庶務課においては、左の事務を
つかさどる。

一 機密に関すること。

二 職員任免、勤務成績の評定、分
限、懲戒、服務その他の人事に関す
ること。

三 職員の職階及び給與に関すること

四 栄典及びほふ賞に関すること。

五 人事に関する記録を作成し及び保
存すること。

六 職員の教養及び研修に関すること
七 職員の団体との連絡に関すること

八 委員長官印、委員会印及び公印
を管掌すること。

九 公文書類を接受し、発送し、編集
し、及び保存すること。

十 行政の考査に関すること。

十一 法令案その他重要文書の審査に
関すること。

十二 官報掲載に関すること。

十三 委員会の計画及び政策の普及そ
の他広報に関すること。

十四 委員会の会議その他の庶務に関
すること。

十五 委員会の所掌事務の総合調整に
関すること。

十六 翻訳、通訳その他一般渉外事務
に関すること。

十七 委員会の所掌事務に関する法人
に関する事務を処理すること。

十八 国立博物館及び研究所に関する
事務を処理すること。

十九 委員会の所掌事務で他部課の所
掌に属さない事務を処理すること。

二十 文化財保護法(昭和二十五年法
律第二百十四号)その他この課の所
掌事務に関する法令案を作成し、及
び予算案を準備すること。

(會計課)

第三條 會計課においては、左の事務を
つかさどる。

一 各部課の準備した予算案に基いて
委員会所掌の予算案を作成する等予

算に関すること。

二 経費及び収入の決算に関すること
三 経費及び収入の會計に関すること

四 會計の監査に関すること。

五 行政財産及び物品を管理すること
六 職員の衛生、医療その他福利厚生
に関すること。

七 職員の公務傷病に対する補償及び
職員の保険に関すること。

八 廳舎その他の設備の管理及び廳内
の警備に関すること。

九 物資の割当、あつ旋その他物資の
確保についての総括に関すること。

十 この課の所掌事務に関する法令案
を作成し、及び予算案を準備するこ
と。

(管理課)

第四條 管理課においては、左の事務を
つかさどる。

一 重要文化財(国宝を含む、以下第
六條第一号及び第七條第一号の場合
を除き同様とする。)の出品又は公
開の命令、勸告、承認及び許可に関
すること。

二 重要文化財の出品に対する給與金
に関すること。

三 出品され又は管理の委託を受けた
重要文化財の管理(滅失又はき損の
防止の措置を除く。)に関すること

四 重要文化財の買取に関すること。
五 重要文化財についての国庫補助、

国庫負担及び損害補償に関すること

六 埋蔵文化財の発見に対する報償金
に関すること。

七 埋蔵文化財の譲與及び譲渡に関す
ること。

八 無形文化財の公開の命令及び承認
に関すること。

九 無形文化財についての国庫補助、
国庫負担、資材のあつ旋その他の助
成に関すること。

十 史跡名勝天然記念物(特別史跡名
勝天然記念物を含む。以下第八條第
一号の場合を除き同様とする。)に
ついての国庫補助、国庫負担及び損
害補償に関すること。

十一 文化財専門審議会の庶務に関す
ること。

十二 この課の所掌事務に関する法令
案を作成し、及び予算案を準備する
こと。

(保存部)

第五條 保存部に左の三課を置く。

美術工藝品課

建造物課

記念物課

(美術工藝品課)

第六條 美術工藝品課においては、左の
事務をつかさどる。

一 繪画、彫刻、工藝品、書跡、筆跡
典籍、古文書、民俗資料、考古資料
その他建造物以外の有形文化財(以

下「美術工藝品」という。）に關し
国宝又は重要文化財の指定及びその
解除に關すること。

二 美術工藝品である重要文化財の管
理又は修理についての命令、勸告、
指示及び指揮監督に關すること。

三 美術工藝品である国宝の修理及び
滅失又はき損の防止の措置の施行に
關すること。

四 美術工藝品である重要文化財の現
狀変更、輸出及び所有者以外の者に
よる公開の許可並びに環境保全のた
めにする行為の制限、禁止及び必要
な施設の命令に關すること。

五 美術工藝品である重要文化財につ
いての調査に關すること。

六 美術工藝品に關する専門的、技術
的な指導と助言に關すること。

七 美術工藝品である重要文化財の管
理についての届出に關すること。

八 美術工藝品に關する台帳の整備に
關すること。

九 美術工藝品の管理及び修理に必要
な資料を刊行し、及び頒布すること

十 美術工藝品に關する記録、写真、
複写及び複製に關すること。

十一 文化財保護法（昭和二十五年法
律第二百四十四号以下「法」という。）
第一百六條第二項に規定する重要美
術品等の保存に關する法律（昭和八
年法律第四十三号）の施行に關する

事務のうち美術工藝品に關する事務
を処理すること。

十二 美術工藝品である重要文化財に
ついての出品又は公開の命令、勸告
及び承認、並びにそれについての買
取、出品に対する給與金、国庫補助
国庫負担、損害補償、法人の設立の
認可その他総務部の所掌事務でこの
課に關係のある事項に關し、総務部
に對し勧告すること。

十三 文化財専門審議會に對し、管理
課と連絡して事務的、技術的な援助
を與えること。

十四 保存部の所掌事務で他課の所掌
に屬さない事務を処理すること。

十五 この課の所掌事務に關する法令
案を作成し、及び予算案を準備する
こと。

（建造物課）

第七條 建造物課においては、左の事務
をつかさどる。

一 建造物に關し、国宝又は重要文化
財の指定及びその解除に關すること

二 建造物である重要文化財の管理又
は修理についての命令、勸告、指示及
び指揮監督に關すること。

三 建造物である国宝の修理及び滅失
又はき損の防止の措置の施行に關す
ること。

四 建造物である重要文化財の現狀変
更、輸出及び所有者以外の者による

公開の許可並びに環境保全のために
する行為の制限、禁止及び必要な施
設の命令に關すること。

五 建造物である重要文化財について
の調査に關すること。

六 建造物に關する専門的、技術的な
指導と助言に關すること。

七 建造物である重要文化財の管理に
ついての届出に關すること。

八 建造物に關する台帳の整備に關す
ること。

九 建造物の管理、修理及び復旧に必
要な資料を刊行し、及び頒布するこ
と。

十 建造物に關する記録、写真及び複
製に關すること。

十一 法第六十六條第二項に規定する
重要美術品等の保存に關する法律の
施行に關する事務のうち建造物に關
する事務を処理すること。

十二 建造物である重要文化財につい
ての公開の命令、勸告及び承認並び
にそれについての買取、国庫補助、
国庫負担、損害補償、法人の設立の
認可その他総務部の所掌事務でこの
課に關係のある事項に關し、総務部
に對し、勧告すること。

十三 文化財専門審議會に對し、管理
課と連絡して事務的、技術的な援助
を與えること。

十四 この課の所掌事務に關する法令

案を作成し、及び予算案を準備する
こと。

（記念物課）

第八條 記念物課においては、左の事務
をつかさどる。

一 史跡名勝天然記念物又は特別史跡
名勝天然記念物の指定及びその解除
に關すること。

二 史跡名勝天然記念物の管理又は復
旧に關する命令、勸告、指示及び指
揮監督に關すること。

三 特別史跡名勝天然記念物の復旧及
び滅失、き損又は衰亡の防止の措置
の施行に關すること。

四 史跡名勝天然記念物の現狀変更等
の許可並びに環境保全のためにする
行為の制限、禁止及び必要な施設の
命令に關すること。

五 史跡名勝天然記念物についての調
査及び調査のために必要な措置の施
行に關すること。

六 史跡名勝天然記念物の管理につい
ての届出に關すること。

七 古墳、旧跡その他の遺跡発見の届
出に關すること。

八 埋藏文化財の発掘の禁止、停止及
び中止の命令に關すること。

九 埋藏文化財の発掘の施行に關する
こと。

十 埋藏文化財の発掘についての届出
及び指示に關すること。

十一 埋蔵文化財の鑑査に関する事
十二 助成の措置を講ずべき無形文化財の選定に関する事。

十三 史跡名勝天然記念物、埋蔵文化財及び無形文化財（以下「記念物」という。）に関する専門的、技術的な指導と助言に関する事。

十四 記念物に関する台帳の整備に関する事。

十五 記念物の管理及び復旧に必要な資料を刊行し、及び頒布すること。
十六 記念物に関する記録、写真、複写及び複製に関する事。

十七 史跡名勝天然記念物についての国庫補助、国庫負担及び損害補償、埋蔵文化財の発見に対する報償金、埋蔵文化財の譲渡及び譲渡、無形文化財についての公開の命令及び承認、並びに国庫補助、この課の所掌事務に関する法人の設立の認可、その他総務部の所掌事務でこの課に係のある事項に関し、総務部に対し勧告すること。

十八 文化財専門審議会に対し、管理課と連絡して事務的、技術的な援助を與えること。

十九 この課の所掌事務に関する法令案を作成し、及び予算案を準備すること。

附 則

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十五年八月二十九日から適用する。

国立博物館組織規程

（昭和二十六年一月三十一日）
文化財保護委員会規則第四号

文化財保護法（昭和二十五年法律第二百四十四号）第二十二條第四項の規定に基づき国立博物館組織規程を次のように定める。

国立博物館組織規程

（国立博物館の組織）

第一條 国立博物館の所掌事務を分掌せしめるため、左の二部を置く。

庶務部

（庶務部の分課）

第二條 庶務部に左の三課を置く。

管理課

會計課

普及課

（管理課の所掌事務）

第三條 管理課においては、左の事務をつかさどる。

一 機密に関する事。

二 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における、職員的人事に関する事。

三 公文書類の接受、発送、編集及び保存に関する事。

四 公印を管掌すること。

五 国立博物館評議員会に関する事

六 警備に関する事。

七 聴取、通訳その他渉外に関する事。

と。

八 他部課、奈良分館の所掌に属さない事務を処理すること。

九 国立博物館の所掌事務の総合調整に関する事。

（會計課の所掌事務）

第四條 會計課においては、左の事務をつかさどる。

一 予算案の準備等予算に関する事
二 経費及び収入の決算その他会計に関する事。

三 行政財産及び物品の管理に関する事。

四 営繕に関する事。

五 職員の福利厚生に関する事。

（普及課の所掌事務）

第五條 普及課においては、左の事務をつかさどる。

一 この館の事業を行うために必要な美術及び歴史に関する知識の普及に関する事。

二 外国人に対しこの館の事業に関する美術及び歴史資料を解説すること

三 この館の事業に関する出版物の刊行及び頒布に関する事。

四 その他この館の事業の普及宣伝に関する事。

2 普及課が前項各号の事務を行うに当たっては、学藝部各課の助言を得、又は学藝部各課と連絡して処理するものとする。

（學藝部の分課）

第六條 学藝部に左の四課を置く。

美術課

工藝課

考古課

資料課

（美術課の四室及び所掌事務）

第七條 美術課に、美術課の所掌事務を分掌せしめるため、繪画室、彫刻室、書跡室及び建築室の四室を置く。

2 繪画室、彫刻室、書跡室及び建築室の四室は、それぞれ繪画、彫刻、書跡及び建築に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

（工藝課の五室及び所掌事務）
第八條 工藝課に、工藝課の所掌事務を分掌せしめるため、金工室、刀剣室、陶磁室、漆工室及び染織室の五室を置く。

2 金工室、刀剣室、陶磁室、漆工室及び染織室の五室は、それぞれ金工、刀剣、陶磁、漆工及び染織に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

（考古課の四室及び所掌事務）
第九條 考古課に、考古課の所掌事務を分掌せしめるため、先史室、原史室、有史室及び土俗室の四室を置く。

- 2 先史室、原史室、有史室及び土俗室の四室は、それぞれ先史考古、原史考古、有史考古及び土俗に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

(資料課の四室及び所掌事務)

- 第十條 資料課に、資料課の所掌事務を分掌せしめるため、庶務室、資料室、図書室及び写真室の四室を置く。

- 2 庶務室は、学藝部の一般庶務をつかさどる。

- 3 資料室は、図書以外の資料の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

- 4 図書室は、図書の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

- 5 写真室は、写真の作成、収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

- 6 資料課がその所掌事務を行うに当つては、学藝部各課と連絡して処理するものとする。

(奈良分館の分課)

- 第十一條 奈良分館に左の三課を置く。

庶務課

学藝課

普及課

(庶務課の所掌事務)

- 第十二條 庶務課においては、左の事務

をつかさどる。

- 一 別に国立博物館長から委任を受けた範囲における職員の人事に関すること。

- 二 公文書類の接受、発送、編集及び保存に関すること。

- 三 公印を管掌すること。

- 四 行政財産及び物品の管理に関すること。

- 五 経費及び収入の予算、決算その他会計に関すること。

- 六 職員の福利厚生に関すること。

- 七 警備に関すること。

- 八 奈良分館の所掌事務の総合調整に関すること。

(学藝課の所掌事務)

- 第十三條 学藝課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 美術、工藝、考古及び歴史に関する陳列品(本條中以下「陳列品」という。)の収集、保管、陳列及び修理に関すること。

- 二 陳列品の鑑査、解説及び調査研究に関すること。

- 三 陳列品その他の資料の模写及び模造に関すること。

(普及課の所掌事務)

- 第十四條 普及課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 この館の事業を行うために必要な美術及び歴史に関する知識の普及に

関すること。

- 二 圖書、写真その他の資料の収集、整理保管及び閲覧並びに写真の作成に関すること。

- 三 この館の事業に関する出版物の刊行及び頒布に関すること。

- 四 その他この館の事業の普及宣伝に関すること。

- 2 普及課が前項の事務を行うに当つては、関係各課の助言を得、又は関係各課と連絡して処理するものとする

(館長及び次長)

- 第十五條 国立博物館に館長及び次長を置く。

- 2 館長は、館務を総理する。

- 3 次長は、館長を助けて館務を処理する。

(分館長)

- 第十六條 奈良分館に分館長を置く。

- 2 分館長は、分館の事務を総理する。

(国立博物館評議員会)

- 第十七條 国立博物館に国立博物館評議員会(以下「評議員会」という。)を置く。

- 2 評議員会は、国立博物館長の諮問に

- 応じて、国立博物館の重要事項について調査審議するのほか、国立博物館の重要事項について国立博物館長に助言するものとする。

- 3 評議員会は、二十人以内の評議員で組織する。

- 4 評議員は、学識経験のあるものの中から、文化財保護委員会が任命する

- 5 評議員の任期は、二年とする。

- 6 この規則に定めるもののほか、評議員会の議事その他運営に関し必要な事項は、評議員会の議を経て、国立博物館長が定める。

附則

- この規則は、公布の日から施行し、昭和二十五年八月二十九日から適用する。

美術研究所組織規程

昭和二十六年一月三十一日
文化財保護委員会規則第五号

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四十四号)第二十三條第四項の規定に基

き、及び同法第二百四條第二項の規定を実施するため、美術研究所組織規程を次のように定める。

美術研究所組織規程

(美術研究所の組織)

- 第一條 美術研究所の所掌事務を分掌せしめるために左の三部及び一室を置く

第一研究部

第二研究部

資料部

庶務室

(第一研究部の所掌事務)

- 第二條 第一研究部においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(第二研究部の所掌事務)

第三條 第二研究部においては、わが国の近代及び現代美術並びに西洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(資料部の所掌事務)

第四條 資料部においては、左の事務をつかさどる。

- 一 美術研究資料の作成、収集、整理保管、公表及び閲覧に関すること。
- 二 美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管に関すること。
- 三 エツクス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究に関すること。

(庶務室の所掌事務)

第五條 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

- 一 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の人事に關すること。
- 二 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 三 経費及び収入の予算、決算その他會計に関すること。
- 四 行政財産及び物品の管理に関すること。
- 五 職員の福利厚生に関すること。
- 六 黒田記念室に関すること。

(所長)

第六條 美術研究所に所長を置く。

美術行政機関

2 所長は、所務を総理する。

附則

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十五年八月二十九日から適用する。

臨時調査普及室規程

(昭和二十六年三月三日)
文化財保護委員会裁定第二号)
改(昭和二十六年四月二十八日)
正(文化財保護委員会裁定第六号)

臨時調査普及室規程

第一條 文化財保護行政を促進するために必要な調査企画を行わせ、併せて文化財保護委員会事務局(以下「事務局」といふ)各部課の連絡を緊密にさせる目的をもつて、事務局に臨時調査普及室を置く。

第二條 臨時調査普及室においては、前條の目的を達成するため左の事務をつかさどる。

一 機密に関すること。

二 文化財保護委員会(以下「委員会」といふ)の計画及び政策を立案するために必要な資料の収集及び作成並びに資料の収集及び作成に必要な事務局各部課との連絡を行うこと。

三 委員会の計画及び政策の普及その他広報に関すること。

四 文化財の保存及び活用に関する内外の情報を収集し、及びその普及に關する事務を処理すること。

五 委員会の政策の立案を行うこと。

六 渉外事務に関すること。

七 委員会の所掌事務に関する調査統計に関すること。

計に関すること。

八 前各号に掲げるもののほか、臨時にこの室において処理することを命ぜられた事務を処理すること。

九 この室の所掌事務に関する法令案を作成し、及び予算案を準備すること。

第三條 前條各号に掲げる事務のうち、文化財保護委員会事務局組織規程(昭和二十五年文化財保護委員会規則第一号)の規定により他の事務局各部課の所掌に属するものは、臨時にこの室において処理することを命ぜられたものとする。

第四條 臨時調査普及室に室長及び室員を置く。

2 室長は、事務局長の命によつて室の事務を掌理する。

3 室員は、室長の命によつて事務を処理する。

4 室長は、第二條に規定する事務に関する事務局各部課長の職務を代行する

第五條 調査普及室長は、その所掌事務を処理するに當り、事務局関係各部課長の意見又は勧告を徴さなければならぬ。

2 事務局各部課長は、それぞれの所掌事務に關し調査普及室長に意見を述べ又は勧告を行うことができる。

3 事務局各部課長及び各部課員は、文化財の保存又は活用に関する情報を得

たときは、遲滞なくこれを調査普及室長に通報しなければならない。

第六條 この規程に定めるもののほか、この室の所掌事務を行うために必要な事項は、事務局長の決するところによる。

附則

この規程は、昭和二十六年三月十五日から施行する。

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月我が皇室におかれられて、明治維新以来藝術的に衰退し経済的に困窮していた當時の我が美術界振興の思召しから制定されたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰れる大家を、特にその為選ばれた委員をして銓衡させ、任命されたものである。

(帝室技藝員銓衡委員) 大谷正男、廣幡忠隆、細川護立

帝室技藝員名簿	拜命年月
日本画	
川合 玉堂	大正六年六月
横山 大觀	昭和六年六月
安田 靉堂	昭和九年十二月
菊池 契月	"
西山 翠嶂	昭和十九年七月
堂本 印象	"
鍋本 清方	"
前田 青邨	"
松林 桂月	"

洋画 小林 古徑 昭和十九年七月
和田 英作 昭和十九年十二月
金山 平三 昭和十九年七月
中澤 弘光
梅原龍三郎
安井曾太郎

彫刻 山崎 朝雲 昭和十九年十二月
朝倉 文夫 昭和十九年七月
平櫛 田中
板谷 波山 昭和十九年十二月
工藝 香取 秀眞

日本藝術院

明治四十年勅令第二百二十号をもつて美術審査委員会官制が制定され、これに基き毎年文部省美術展覧会を開催し、美術審査委員会は美術展覧会の出品を審議した。大正八年に本官制が廃止され、新たに勅令第四百十七号をもつて帝国美術院規定が制定された。帝国美術院は文部大臣の管理に属し美術の発達を裨補することを目的とし、文部大臣の諮詢に応じ、美術に関する意見を開示し、その他美術に関する重要事項を建議する機関であつた。

昭和十年勅令第四百十七号をもつて帝国美術官制が新たに制定され、帝国美術院規定は廃止された。

昭和十二年勅令第二百八十号をもつて帝国藝術院官制が新たに制定され、美術部門の他に文学及び音楽の両部門が加えられ、同時に帝国美術院官制は廃止され

た。

昭和二十二年政令第二百五十四号をもつて帝国藝術院は日本藝術院と名称が変更され、昭和二十四年六月一日政令第二百八十一号をもつて日本藝術院令が制定せられ、日本藝術院官制は廃止されて今日に至っている。

(一) (文部省設置法抜萃)

第二節 国立の学校その他の機関

(国立の学校等)

第十三條 文部大臣の所轄の下に、国立の学校及び左の機関を置く、

国立教育研究所
国立博物館
国立科学博物館
緯度観測所
統計数理研究所
国立遺伝学研究所
国立国語研究所
日本藝術院

(日本藝術院)

第二十三條 日本藝術院は、藝術上の功績顯著な藝術家を優遇するために置かれる機関とする。

1 日本藝術院会員には、予算の範囲内で、文部大臣の定めるところにより、年金を支給することができ、

2 日本藝術院の内部組織、会員その他の職員及び運営については、政令で定める。

附則

1、この法律は、昭和二十四年六月一日から施行する。

2、左の勅令及び政令は廃止する。但し、法律(これに基く命令を含む。)に別段の定めがある場合を除くほか、従前の機関及び職員は、この法律に基く相当の機関及び職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

文部省官制 (昭和十七年
勅令第七百四十八号)
日本藝術院官制 (昭和十二年
勅令第二百八十号)

(二) 日本藝術院令

(昭和二十四年六月一日
政令第二八一号)

内閣は、文部省設置法(昭和二十四年法律第四百十六号)第二十三條第三項の規定に基き、この政令を制定する。

(日本藝術院の目的)

第一條 日本藝術院は、藝術上の功績顯著な藝術家を優遇するための榮譽機関とする。

2 日本藝術院は、藝術に関する重要事項を審議し、美術の発達に寄與する活動を行い、及び藝術に関する重要事項について文部大臣に建議することができ、

(組織)

第二條 日本藝術院は、院長一人及び職員百人以内で組織する。

2 日本藝術院に左の三部を置く

第一部 美術
第二部 文藝

第三部 音楽、演劇、舞踊

3 会員は、いずれかの部に分属する。第三條 会員は、部会が推薦し、総会の承認を経た候補者につき、院長の申出により、文部大臣が任命する。

2 前項の部会の推薦する者は、部会において藝術上の功績顯著な藝術家につき選挙を行い、部会員の過半数の投票を得た者とする。

3 前項の投票において、病氣その他の事故のため出席できない者は、郵便その他の方法により投票することができ、

第四條 会員は、終身とする。但し、会員が、退任を申し出た場合には、総会の承認を経てこれを認めることができる。

第五條 院長は、藝術に關し卓越した識見を有する者につき、会員の選挙により過半数の投票を得た者を、文部大臣が任命する。

2 前項の場合において、過半数の得票者のないときは投票の最多数を得た者一人につき、更に会員が投票を行い、多数の得票を得た者をもつて当選者とする。但し、得票数が同数のときは、年長者をもつて当選者とする。

3 第三條第三項の規定は、前一項の選

挙に準用する。

4 院長の任期は、三年とする。

5 院長は非常勤とする。

6 院長は、院務を総理する。

7 院長に事故があるときは、部長のうち最年長者が、その職務を代理する。

第六條 各部に属する会員により部長として互選された者は、各部の部務を掌理する。

2 部長は、三年ごとに改選する。

(會議)

第七條 日本藝術院の會議は、總會、部会及び連合部会とする。

2 總會は、年一回、院長が招集する。但し、必要があるときは、臨時にこれを招集することができる。

3 部会は、部長が招集する。

4 連合部会は、關係する部の部長の申出により、院長が招集する。

5 總會は、会員の過半数が出席しなければ、議決をすることができない。但し、あらかじめ通知した議題について、書面をもつて意思を表示した者は、その議題に限り、出席したものと認めることができる。

6 總會の議決は、出席した会員の多数による。

7 前一項の規定は、部会及び連合部会の會議に準用する。

(職員)

第八條 日本藝術院に事務長一人及びそ

美術行政機関

他の職員五人以内を置く。

2 事務長は、院長の指揮をうけ、日本藝術院に關する庶務を整理し、その他の職員は、上司の指揮をうけ、庶務に従事する。

(雜則)

第九條 この政令の定めるもののほか、日本藝術院の運営に關し必要な事項は、總會の議を経て院長が定める。

附則

この政令は、公布の日から施行し、昭和二十四年六月一日から適用する。

(日本藝術院會則)

(昭和二十五年五月三十日決)

第一條 日本藝術院各部の定員は、左に掲げる通りとする。

第一部 美術 五十名以内

第二部 文藝 三十名以内

第三部 音楽、演劇、舞踊 二十名以内

第二條 各部に左の分科を置く。

第一部 美術

第一分科 日本画

第二分科 洋画

第三分科 彫塑

第四分科 工芸

第五分科 書藝

第六分科 建築

第二部 文藝

第七分科 小説、戯曲

第八分科 詩歌

第九分科 評論、翻譯

第三部 音楽、演劇、舞踊

第十分科 洋楽

第十一分科 邦楽(能楽及び雅楽を含む)

第十二分科 演劇(人形劇及び映画を含む)

第十三分科 舞踊(洋舞及び邦舞を含む)

第三條 日本藝術院会員の候補者を選考するため、日本藝術院に日本藝術院会員選考委員会を置く。

2 前項の委員会については、日本藝術院会員選考委員会規則の定めるところによる。

第四條 日本藝術院は卓越した藝術作品と認められるものを製作した者及び藝術の進歩に貢献する顯著な業績ありと認める者に対して賞を授ける。

2 前項の授賞については、日本藝術院授賞規則の定めるところによる。

第五條 院長は、總會及び連合部会の議長となり、議事を整理する。

2 部長は、部会の議長となり、議事を整理する。

3 總會、部会又は連合部会の議事が、可否同数のときは、議長が決するところによる。

第六條 一の部において、その部に属する会員の三分の一以上の請求があるときは、その部の部長は部会を招集しなければならない。

2 二の部において、それらの部に属する会員の各三分の一以上の請求があるときは、院長は、連合部会を招集しなければならない。

第七條 部会または連合部会の議長は、必要があると認めたときは、他の部に属する会員中適當な者を指名して部会または連合部会に出席を求め、その意見を求めることができる。

第八條 會議を公開するか否かは、その都度これを定める。

第九條 この會則の改正は、總會の議決がなければ行ふことができない。

(日本藝術院會員選考委員會規則)

(昭和二十五年五月三十日)

(總會議決)

第一條 日本藝術院令(昭和二十四年六月一日政令第二八一号)第三條第二項の規定による部会の行ふ選挙の候補者(以下「候補者」という)を選考するため、日本藝術院に、日本藝術院会員候補者選考委員会(以下「委員会」という)を置く。

第二條 委員会は、三十人以内の委員をもつて組織し、委員の任期は一年とする。但し、再選を妨げない。

2 委員に欠員を生じたときは、各部において予め定めた順位に従い委員を補充する。

3 補充委員の任期は、前任者の殘任期間とする。

4 委員会に美術、文藝及び藝能の三選

考部会を置く。

第三條 日本藝術院の各部会員はその互選により、各々十人以内の委員を選出する。

第四條 日本藝術院長は、委員会の委員長として、その会務を総理する。

2 委員長に事故があるときは、出席委員により、代理委員長として互選されたものが、委員長の職務を代理する。

第五條 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決することできない。但し、委員はやむを得ない事情があるときは、自己の属する部会の他の委員に、議決権を委任することができ。

2 前項の規定は、部会の議事に準用する。

第六條 日本藝術院会員は、その所属する部会に属すべき候補者を当該選考部会に対し推薦することができる。但し、他分科に属すべき候補者を推薦する場合は、被推薦者の属すべき分科に属する会員が欠けた場合を除き、被推薦者の属すべき分科に属する会員二名（被推薦者の属すべき分科に属する会員の現員数が一名の場合は一名）と共同して推薦しなければならない。

第七條 選考部会は、推薦された候補者につき、選考に必要な調査をしなければならない。

2 選考部会は、推薦者及び被推薦者に

対し、選考に必要な資料の提出を求めることができる。

3 選考部会は、日本藝術院会員、会員以外の学識経験者等適當なる者から、候補者の選考に関し、意見を聴取することができる。

第八條 各選考部会は、被推薦者につき、その調査にもとづく調査書を作成し、順位を附して委員会に報告しなければならない。

2 委員会は、選考部会の報告にもとづき、候補者に推薦された者について、補充すべき会員数だけの無記名連記投票を行う。

3 前項の場合各部の投票数は同数となるよう取り計い、また候補者が属すべき部会の委員の投票は二倍に計算するものとする。

第九條 委員会は、前條の選挙により、出席委員の過半数の得票を得た者を当選者とする。但し、過半数の得票者が各部につき、その部にて補充すべき会員数の二倍をこえるときは、その限度に達するまで、得票順によつて候補者を決定する。各部につき、過半数の得票者のない場合は、最高点者と次点者につき、決戦投票を行い、過半数を得た者を当選者とする。

第十條 委員会は、候補者を決定した後選考部会の報告にもとづいて審査報告書を作成しなければならない。

2 前項の報告書には各被推薦者について、選考部会の決定した順位及び委員会の得票数を記載しなければならない。

第十一條 委員会は、前條の規定により作成した審査報告書を日本藝術院の各部長に提出するものとする。日本藝術院の各部は前項の審査報告書に記載された候補者について選挙を行う。

(四) 日本藝術院授賞規則

(昭和二十五年五月三十日)
總會議決

第一條 日本藝術院は、卓越した藝術作品及び藝術の進歩に貢献する顯著な業績ありと認める者に対して授賞する。

第二條 賞は、恩賜賞及び日本藝術院賞とする。

2 恩賜賞は、毎年一個とし、もしその年度内に授與しないときは、繰越して授與することができる。

第三條 賞は、賞状及び賞金とする。

第四條 賞は、日本藝術院会員でない者に授ける。但し擬賞の決議があつた後会員となつた者は此の限りでない。

第五條 授賞は、日本藝術院会員の推薦による。

2 日本藝術院会員が授賞の推薦をしようとするときは、その所属する分科に属すべき候補者を毎年十二月その所属の部会に提議しなければならない。但し、他科に属すべき候補者を推薦する場合は、被推薦者につき指定された科に属する会員二名（被推薦者の属すべき分科に属する会員の現員数が一名の場合は一名）と共同して推薦することを要する。

3 前項の提議のあつた場合は、部会は各部会員により互選された委員をもつて組織する授賞候補者選考委員会（以下委員会という）において授賞候補者又は授賞候補作品の選考審査を行う。

4 委員は、各部より十名以内宛互選するものとする。委員の任期は一年とする。但し再選は妨げない。

5 委員会は、選考審査につき必要ある場合は、委員以外の日本藝術院会員又は学識経験者の意見を徴することができる。

第六條 委員会の議決は多数決による。

第七條 委員会は、選考並びに審査の経過及び結果を部会に報告しなければならない。

第八條 部会における擬賞の議決には、投票総数の過半数の賛成を要する。

第九條 前條の規定によつて擬賞の議決のあつたときは、部長は部会における結果について總會に報告しその承認を得なければならない。

第十條 擬賞の議決については、投票は無記名とする。

2 病氣その他の事故で出席することができない者は、封書で投票することが

できる。

第十一條 賞を受けた者は、受賞の目的である作品又は著書にその旨を表示することができる。

第十二條 擬賞の議決があつた後、賞を受くべき者が死亡した場合には、日本藝術院は授賞の旨を告示しその者に授くべき賞の処分を定める。

(六) 日本藝術院年金支給規則

(昭和二十五年五月三十日總會議決)

第一條 年金は区分して六月、九月、十二月、三月の四期にこれを支給する。

第二條 年金を支給する場合は、初年度において、その発令が六月三十日以前にある者は全額を、九月三十日以前にある者はその四分の三を、十二月三十一日以前にある者はその二分の一を、三月三十一日以前にある者はその四分の一を支給する。

2 年金受領者が死亡した場合の支給額は、その月の属する受給期分までとする。

日本藝術院會員

院長

昭二三、八、一一 高橋誠一郎

第一部 會員

昭一二、六、二四 楠木 健一(清方)

川合芳三郎(玉堂)

菊池 完爾(契月)

美術行政機関

昭一二、六、二四

小林 茂(古徑)

昭一二、六、二四

内藤 伸

昭一二、六、二四

西山卯三郎(翠嶺)

昭一二、六、二四

平橋倬太郎(田中)

昭一二、六、二四

前田 廉造(青邨)

昭一二、六、二四

藤井 浩祐

昭一二、六、二四

松林 篤(桂月)

昭一二、六、二四

山崎 朝雲

昭一二、六、二四

結城 貞松(素明)

昭一二、六、二四

石井 鶴三

昭一二、六、二四

安田新三郎(觀彥)

昭一二、六、二四

板谷 嘉七(波山)

昭一二、六、二四

福田平八郎

昭一二、六、二四

香取秀治郎(秀眞)

昭一二、六、二四

奥村 義三(土牛)

昭一二、六、二四

清水 六和

昭一二、六、二四

野田 道三(九浦)

昭一二、六、二四

松田 權六

昭一二、六、二四

小野 英吉(竹齋)

昭一二、六、二四

海野 清

昭一二、六、二四

中村 恒吉(岳陵)

昭一二、六、二四

高村 豊周

昭一二、六、二四

堂本三之助(印象)

昭一二、六、二四

堆朱 楊成

昭一二、六、二四

山口 三郎(蓬春)

昭一二、六、二四

伊東 忠太

昭一二、六、二四

有島壬生馬(生馬)

昭一二、六、二四

大熊 喜邦

昭一二、六、二四

石井 満吉(柏亭)

昭一二、六、二四

尾上 八郎(榮舟)

昭一二、六、二四

梅原龍三郎

昭一二、六、二四

豊道 慶中(春海)

昭一二、六、二四

小杉國太郎(放庵)

昭一二、六、二四

第二部、第三部會員略

昭一二、六、二四

中澤 弘光

昭一二、六、二四

(昭和二十六年一月現在)

昭一二、六、二四

安井曾太郎

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

山下新太郎

昭一二、六、二四

日本美術展覽會運営會規則

昭一二、六、二四

和田 英作

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

和田 三造

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

辻 永

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

須田國太郎

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

川島理一郎

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

中村 研一

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

朝倉 文夫

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

北村 西望

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

齋藤 知雄

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

佐藤 清藏

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

昭一二、六、二四

佐藤 清藏

昭一二、六、二四

日本美術展覽會

第五條 会長は、日本藝術院長をもつてこれに充てる。

会長は、本会を代表し、会務を総理する。

会長は、理事会の議長となる。

第六條 理事は會員の互選によつてこれを定め、理事会を構成する。

理事中若干名を常任理事とし、会長これを依頼する。

会長事故あるときは、その指定した常任理事これを代理する。

理事の任期は二年とし、毎年その半数を交替する。

第七條 理事会は、会長これを招集する。

理事会は本会の運営上重要な事項を審議する。

理事会は全員の半数以上出席しなければ議決をなすことができない。但し、会議に出席することのできない者は、予め通知された事項について書面をもつて表決をなし、又は委任状を提出することにより他の理事を代理人とすることが出来る。

理事会の議事は出席者の過半数をもつてこれを決する。可否同数のときは、議長が決する。

第八條 本会に参事若干名を置く。

参事は、会長がこれを指名する。

参事は、日本美術展覽會の運営に関し、会長の諮問に応ずる。

参事の任期は二年とする。ただし留任

を妨げない。

第九條 本会の事務を処理するため事務局を置く。

第七回日本美術展覧会規則

第一章 総則

第一條 日本美術展覧会は、日本藝術院と日本美術展覧会運営会（以下日展運営会という）が開催する。会場、会期及び事務所は、その都度これを公告する。

第二條 展覧会は、作品の種類に依つて左の五科に分け、各科の総合展覧会とする。

第一科 繪画

第二科 繪画（油画、水彩画、パステル画、素描、創作版画等）

第三科 彫塑

第四科 美術工藝

第五科 書（漢字、仮名、てん刻）

第三條 陳列する作品は鑑査して決定する。

左の各号の一に該当するものの専門技術による作品は、前項の規定にかかわらず、無鑑査で陳列することができる。但し第四科に属する作品で総合製作によるものは、すべて鑑査を経なければならぬ。

- 一、日本藝術院会員
- 二、日展運営会参事
- 三、当該年度審査員

四、本展覧会に出品を依頼されたもの

五、前年度特選受賞者

鑑査を経て陳列された作品及び前項第五号に規定する作品については、審査の上特選として授賞することができ

る。

第四條 鑑査、審査及び陳列のため、審査員及び審査員を置く。

審査員は、日本藝術院会員の一部、日展運営会参事の一部及び本展覧会に出品を依頼された者、美術研究家、美術批評家等の中から日本藝術院会員が選衡したものに、日本藝術院長がこれを依頼する。

審査員の各科目員数は、第一科十五名、第二科十九名、第三科十五名、第四科十九名、第五科十四名以内とする。

審査員の任期は一年とする。但し重任を妨げない。

第五條 審査員は、その専門技術によつて第一科から第五科の各科に分属し、その属する科の作品について鑑査及び審査を行う。

各科の審査員はその互選によつて審査主任を決定する。

各科の審査主任はその互選または推薦によつて審査員長を決定する。

第六條 本展覧会に出品を依頼されるものは、日本藝術院会員が特に優秀な作家と認めたものの中から選衡したものに、日本藝術院長が指名する。その員

数は第一科五十二名、第二科百十四名、第三科二十七名、第四科四十六名、第五科二十六名以内とする。

出品を委嘱されるものの指名は、毎年これを更新する。

第二章 出品（略）

第三章 鑑査、審査及び陳列（略）

第四章 賣約及び搬出（略）

第五章 観覧（略）

文部省社會教育局藝術課

文部省分課規程抜萃

第二十二條 社會教育局に次の四課を置く、社會教育施設課、社會教育課、運動厚生課、藝術課。

第二十六條 藝術課に於いて左の事務を司る。

一、文学、音楽、美術、映画、演劇その他の藝術及び国民娯楽並びに社會における視覚、聴覚教育に關し、左に掲げる事務を行うこと。

イ、手引書、会報、パンフレット等を作成し、及びそれらを利用に供すること。

ロ、研究集会、會議、展示会その他の催しを主催し、又はそれらに参加すること。

ハ、教育委員会その他の求めに應じ、直接専門的、技術的な指導と助言を與えること。

ニ、その他発達及普及、奨励に必要な

援助と助言を與えること。

二、社會に於ける視覚、聴覚教育に關し關係局課と連絡して有益な教材等の解説目録を作成し、及びそれを利用に供すること。

三、この課の所掌事務に關する資料を收集し、整備し、及びその結果を利用に供すること。

四、この課の所掌事務に關し、外国との著作家、藝術家及び資料の交換並びにユネスコその他の國際機關、國際會議、その他の國際的事項に關する國內事務を処理すること。

五、日本藝術院に關する事務を処理すること。

六、この課の所掌事務に關する法人の設立の認可について、管理局に對し、勸告すること。

七、教育映画分科審議會に對し、關係局課と連絡して事務的、技術的な援助を與えること。

八、この課の所掌事務に關する法令案を作成し、及び予算案を準備すること。

美術學校・研究所一覽

東京藝術大學 台東区上野公園五の一

電下谷九一六一九〔學長〕 上野直昭

〔美術學部長〕 村田良策 〔音楽學部長〕

加藤成之

東京美術學校 台東区上野公園五の一

電下谷九一六一六〔校長〕 村田良策

東京美術學校附屬工藝技術講習所

台東區上野公園五の一 電下谷九一六一一
六 〔所長〕村田良策

京都工藝纖維大學 京都市上京區北野
神社前 電西陣七六九二 及び左京區松
ヶ崎 電上五〇〇三 〔學長〕中澤良夫

京都市立美術大學 京都市東山区今熊
野日吉町 電祇園一五八 〔學長〕長崎
太郎

岩手縣立美術工藝學校 岩手縣盛岡市
內九六九 〔校長〕森口多里

金澤美術工藝短期大學 金沢市下本多
町三ノ九 電金沢五二七一 〔學長〕森
田龜之助

女子美術大學 杉並区和田本町八六〇
電中野九一〇 〔學長〕佐藤達次郎

多摩美術短期大學 世田谷区玉川上野
毛町三三六 電玉川五六 及び神奈川縣
川崎市久木町一三五 電溝ノ口二五七
〔學長〕井上哲治

武藏野美術學校 武藏野市吉祥寺三二
〇 電武藏野二四七二 〔校長〕名取亮

美術研究所 台東區上野公園內 電下
谷四八七 〔所長〕松本榮一 〔一八四、
一九七、二〇二、頁參照〕

東京大學東洋文化研究所 文京區大塚
町五六 電小石川一八六七 〔所長〕辻
直四郎

京都大學人文科學研究所 京都市左京
區北白川小倉町五〇 電上五〇五〇 〔所
長〕具塚茂樹

通商産業省工業技術庁工藝指導所
本所 川崎市久地津田山五五五 電溝ノ
口三二六 〔所長〕松崎福三郎

東北支所 宮城縣仙台市二〇人町通二〇
〔東北支所長〕安部郁二
關西支所 大阪府布施市高井田中一ノ三
八 〔關西支所長〕渡邊金三郎

九州支所 福岡縣久留米市津福本町二一
八 〔九州支所長〕豐田勝秋
通産省工業技術庁陶磁器試驗所 京都
市伏見區深草正覚町 電祇園一四七八
一四四一 〔所長〕藤井兼壽

學會一覽

〔括弧內は代表者〕
藝術學會 文京區大塚窪町教育大學內
電大塚一八一 〔三吉正雄〕

日本藝術學會 文京區本富士町東大文
學部美術史研究室內 電小石川二二二
〔藤縣靜也〕

日本建築學會 中央區銀座西三ノ一
電京橋一二三二 〔吉田亨二〕

日本考古學會 台東區上野公園 國立
博物館內 電下谷一一一 〔原田淑人〕

日本考古學協會 文京區本富士町、東
大文學部內 電小石川二二二 〔藤田亮
策〕

日本民俗學會 世田谷區成城町一六三
一 電砧一二六 〔柳田國男〕

美學會 文京區本富士町東大文學部內
電小石川二二二 〔竹內敏雄〕

美術史學會 台東區上野公園 美術研
究所內 電下谷四八七 〔蓮實重康〕

美術觀覽施設一覽

國立博物館 台東區上野公園內 電下
谷一一一 〔館長〕淺野長武 〔一八
三、一九七、二〇一頁參照〕

國立博物館奈良分館 奈良市春日野町
電奈良三〇二四 〔館長〕黑田源次
〔一八三、二〇二頁參照〕

東京都美術館 台東區上野公園內 電
下谷二三〇四 〔館長〕杉山司七
演劇博物館 新宿區戸塚町一ノ六四七
早稻田大學構內 電九段七七二三 〔館
長〕河竹繁俊

大倉藏古館 港區赤坂葵町三 電赤坂
七八一 〔館長代理〕諸岡利雄

東京藝術大學陳列館 台東區上野公園
東京藝術大學內 目黒區駒場八六一 電澁
谷五九一 〔館長〕柳宗悅

根津美術館 港區赤坂青山南町六ノ一
一五 電赤坂二五三六、二五八七 〔館
長〕河西豐太郎

牧野美術館 目黒區上目黒八丁目 駒
場高校內 電澁谷二〇〇八 〔管理〕長
倉邦雄

鎌倉國寶館 鎌倉市雪ノ下一〇三四
電鎌倉七五三 〔館長〕磯部利右衛門

長尾美術館 本館 鎌倉市鎌倉山 電鎌倉二〇三九

分館 世田谷區深沢町四ノ一三二 電世
田谷二四六〇、二二三一 〔館長〕矢崎美盛

神奈川縣立近代美術館 鎌倉市雪ノ下
一〇五一 〔館長〕村田良策

徳川美術館 名古屋市中區徳川町二丁
目 〔主任〕能澤五六

恩賜京都博物館 京都市東山区大和大
路通七條上九 電祇園五四 〔館長〕富岡
益五郎

大正記念京都美術館 京都市左京區岡
崎公園 電上六七〇〇、七〇二〇 〔館長事
務取扱〕尾形正夫

大阪市立美術館 大阪府天王寺區茶臼
山町天王寺公園內、電天王寺六一〇〇、
六一〇一 〔館長〕望月信成

兵庫縣立神戸美術館 神戸市葺合區熊
内町一丁目 〔代表〕山口雅生

白鶴美術館 兵庫縣武庫郡住吉村字山
田落合一五四五 電御影六〇〇一 〔理事
長〕嘉納治兵衛

高松美術館 香川縣高松市栗林公園內
電高松三二一六 〔館長〕國東照太

大原美術館 岡山縣倉敷市新川町三一
二ノ一 電倉敷五 〔理事長兼館長〕武
内潔眞

諏訪美術館 諏訪市上諏訪 〔館長〕
片倉武雄

茨城縣立美術館 茨城縣東茨城郡磯浜
町八二三一 〔館長〕菊地五郎

本間美術館 山形縣酒田市浜畑町 〔館
長〕本間祐介

二〇九

東京畫廊一覽

- 丸善畫廊 中央區日本橋通二ノ六
高島屋畫廊 中央區日本橋通二ノ五
壺中居 中央區日本橋通三ノ一
三越畫廊 中央區日本橋室町一ノ七
室町畫廊 中央區日本橋室町二ノ二
フォルム 中央區銀座五
日動畫廊 中央區銀座西五ノ一
三笠畫廊 中央區銀座西六ノ一
數寄屋橋 中央區銀座西六ノ六
彌生畫廊 中央區西銀座並木通り
東京畫廊 中央區銀座西七ノ五
資生堂畫廊 中央區銀座西七ノ三ノ五
たくみ 中央區銀座西八ノ三
サエグサギ 中央區銀座三ノ二
ヤラリ 中央區銀座三ノ二
兜屋畫廊 中央區銀座八ノ二
竹見屋畫廊 千代田區神田駿河台下
松坂屋畫廊 台東區上野広小路一
淺尾畫廊 台東區上野櫻木町二三

美術團體一覽 (五十音順)

(い)

- 一水會 練馬區豐玉北町四ノ一五 田
崎廣助方 (電練馬六六) 創立昭和11年
昭和12年1回展 昭和26年9月13回展
一線美術 杉並區大宮前四ノ四六六

岩井彌一郎方 創立昭和25年7月 昭和
26年2月1回展

(う)

上野會 文京區白山御殿町一二七 鴨
下島湖方 (電小石川一五四〇) 昭和25
年9月結成 昭和25年9月1回展

(お)

旺玄會 武藏野市吉祥寺三二六一 堀
田清治方 創立昭和21年 昭和26年6
5回展

(か)

華畝美術協會 京都市上京區鳥丸上立
賣上ル 太田方 (電西陣五九六〇) 創立
昭和11年爾歩會が昭和15年改称したもの
関西國畫クラブ 神戸市外木山村北畑
四〇 上田清一方 創立昭和25年

(き)

九元社 世田谷區玉川奥沢町二ノ一四
九 森大造方 (電田園調布三一八〇)
創立昭和9年
九室會 世田谷區羽根木町一七五三
山本敬輔方 創立昭和25年1月 昭和26
年6月1回展

京都染色美術協會 京都市左京區岡崎
北御所町三七 山鹿清華方 創立昭和2
年
京都陶藝家クラブ 京都市東山区五條
坂八幡前南入 (電祇園四三七一) 創立

昭和24年1月 昭和26年7月1回陶藝展
京都獨立美術クラブ (獨立美術京都
研究所) 京都市中京區西原中御門町四
二 今井憲一方 創立昭和21年

(け)

型生派美術家協會 横須賀市安浦町一
ノ三 熊谷九壽方 昭和26年10月2回展
現代美術協會 墨田區本所絲町二ノ八
小島謙方 創立昭和23年

(こ)

耕人社 京都市中京區釜座通二條下ル
三宅鳳白方
紅土會 新宿區下落合三ノ一八五九
櫻井慶治方 昭和26年8月5回展
行動美術協會 世田谷區弦卷町一ノ二
六 向井潤吉方 (電世田谷三五六一)
創立昭和20年 昭和26年9月6回展

光風會 中野區江古田一ノ二三七 田
村一男方 創立明治45年昭和26年37回展
國畫會 澁谷區原宿三ノ三四〇 益田
義信方 (電赤坂一八〇八) 創立國画創作
協會大正15、國画會改称昭和3 昭和26
年4月25回展

(さ)

朔日會 台東區谷中眞島町一ノ一 羽
藤馬佐夫方 創立昭和13年 昭和26年7
月20回展

三光會 世田谷區松原町一ノ四六 山
下巖方 昭和26年3月5回展

(し)

示現會 新宿區下落合四ノ二一五一
大沼靜巖方 創立昭和22年12月 昭和26
年3月4回展

日月社 千代田區神田須田町一ノ四
(電神田一七〇六) 創立昭和25年1月
昭和26年4月2回展 會務代表村松松彦
室內構成美術家連盟 目黒區衾町一〇
〇ノ一〇 佐々木達三方 (電荏原二四〇
九) 創立昭和26年 昭和26年11月1回展
J・A・N 杉並區阿佐谷四ノ三八五
濱谷次郎方 創立昭和9年 昭和26年11
月21回展

自由美術家協會 澁谷區代々木西原町
九九四 森芳雄方 創立昭和12年 昭和
26年10月15回展
手工藝協會 文京區関口町一 岡登貞
治方 昭和26年5月9回展

出版美術家連盟 新宿區下落合四ノ二
一一一 林唯一方 (電落合二三五四) 創
立昭和25年11月 昭和26年7月展覽會開
催

朱葉會 新宿區下落合二ノ六六七 吉
田ふじ方 (電落合四三三七) 創立大正
7年9月 昭和26年6月3回自主連立展
春陽會 杉並區和田本町八三二 水谷
清方 (電中野二二四七) 創立大正11
年、大正12年1回展 昭和26年4月28回

展

上彩會 千代田区今川小学校内(電茅場町七八〇九) 創立昭和22年7月
職場美術協議會 文京区西江戸川町二〇 創立昭和22年3月

女流画家協會 世田谷区玉川中町一ノ九二七 小川孝子方 創立昭和21年11月
昭和26年4月5回アンデパンダン展開催

新構造社 北多摩郡小金井町小金井四八 三村英一方 創立昭和11年 昭和26年6月3回自主連立展

再興新興美術院 中野区江古田二一五 茨木杉風方 創立昭和25年10月 昭和26年6月再興1回展

新樹會 台東区谷中清水町三 大河内信敬方 創立昭和22年1月 昭和26年8月5回展

新匠會 京都市東山区今熊野日吉町山田徹秀方 創立昭和26年6月

新水彩作家協會 杉並区上荻窪一ノ一三 五井開一方 創立昭和24年2月

新制作協會 世田谷区経堂四二一 山内壯夫方 昭和11年創立の新制作派協會は、昭和23年創立の創造美術と昭和26年合併し、新制作協會と改称 昭和26年9月15回展(回数は新制作派協會展を追う)

水彩連盟 葛飾区新宿町三ノ八四一 小堀進方 創立昭和15年 昭和26年2月10回展

(廿)

生活工藝集團 中央区宝町一ノ二 前田保三(電京橋二〇六三) 創立昭和26年11月
青季會 練馬区豊玉北町四ノ一 新道繁方 昭和26年6月2回展

青丘會 豊島区要町一ノ一一 大内田方 創立昭和25年9月 昭和26年3月小品展

青晴會 中野区橋場町一三 土田方 創立昭和26年9月 昭和26年10月1回展

青年画家協會 杉並区高円寺五ノ八八 四 創立昭和25年11月
青龍社 大田区新井宿四ノ一〇五三

電大森三二一 創立昭和4年 昭和26年9月23回展

前衛美術會 豊島区千川町二ノ一 山下菊二方 創立昭和22年5月

全書作家聯盟 文京区白山御殿町一二七 尾上榮舟方(電小石川一五七二) 創立昭和24年9月

全日本画人連盟 杉並区馬橋三ノ四二四 土味川獨雨方 創立昭和25年 昭和26年7月2回展

創型會 世田谷区奥沢町二ノ一四九 森大造方 創立昭和26年10月

創藝協會 杉並区東荻町六九 神津港人方 創立昭和25年3月 昭和25年6月1回展

造型版画協會 台東区金杉一ノ六 清水正博方(電浅草七一五六) 創立昭和12年 昭和26年8月10回展

創元會 中野区鷺宮二ノ八七五 倉員展雄方 創立昭和15年 昭和26年4月10回展

創造美術會 港区芝公園一五号地一一番 樹下行雄方 創立昭和22年 昭和26年6月自主連立3回展

双台社 世田谷区玉川奥沢町一ノ三八四 鍋谷傳一郎方 創立昭和16年4月 昭和26年5月10回展

(た)

第一美術協會 文京区高田豊川町六〇 石川重信方(電九段一二〇一) 創立昭和4年 昭和26年6月22回展

大潮會 北區上中里町一七二 浦崎永錫方 創立昭和11年7月 昭和26年11月15回展

泰東書道院 中央区日本橋江戸橋二ノ三 第二紀會 武蔵野市吉祥寺二四〇五 栗原信方 創立昭和22年4月 昭和26年5回展

大日美術院 文京区小石川林町六二 結城素明方(電大塚四四八七) 創立昭和13年 昭和25年8回展

太平洋畫會 文京区駒込林町二一 近藤洋二方 創立明治34年 明治35年1回展 昭和26年6月自主連立3回展、同7

東亞美術院 新宿区牛込築地町一一 今福武雄方(電九段五九〇九) 創立昭和12年7月

東光會 豊島区椎名町一ノ一八七三 森田茂方 創立昭和7年 昭和26年2月17回展

東陶會 中野区川添町一 大森光彦方 昭和26年10月展覽會開催

讀畫會 板橋区常盤台一ノ二九 西澤實敬方(電板橋二二〇一) 創立明治41年3月 昭和26年4月第三回一新社展

獨立美術協會 台東区谷中初音町四ノ一七 島村三七雄方(電駒込一二六二) 創立昭和5年11月 昭和26年10月20回展

(に)

二科會 杉並区久我山二ノ五九〇(電荻窪五二四) 創立大正3年 昭和26年9月36回展

日本アヴァンギャルド美術家クラブ

月自主連立展退會

(ち)

竹杖會 京都市左京区北白川小倉町五〇 竹内四郎方 昭和26年5月5回展

(て)

デッサン社 品川区西中延五ノ一二五 一 旭正秀方 昭和26年7月第16回展

(と)

東亞美術院 新宿区牛込築地町一一 今福武雄方(電九段五九〇九) 創立昭和12年7月

東光會 豊島区椎名町一ノ一八七三 森田茂方 創立昭和7年 昭和26年2月17回展

東陶會 中野区川添町一 大森光彦方 昭和26年10月展覽會開催

讀畫會 板橋区常盤台一ノ二九 西澤實敬方(電板橋二二〇一) 創立明治41年3月 昭和26年4月第三回一新社展

獨立美術協會 台東区谷中初音町四ノ一七 島村三七雄方(電駒込一二六二) 創立昭和5年11月 昭和26年10月20回展

(に)

二科會 杉並区久我山二ノ五九〇(電荻窪五二四) 創立大正3年 昭和26年9月36回展

日本アヴァンギャルド美術家クラブ

二二二

中央区銀座七ノ二 モナミ方 創立昭和22年9月

日本浮世繪協會 港区麻布市兵衛町二ノ一 国華社内(電赤坂一七五二) 創立昭和10年の浮世繪同好会を昭和16年改名

日本画院 台東区谷中清水町一 望月春江方(電下谷二八一〇) 昭和26年5月11日開催

日本山岳画協會 大田区馬込町東一ノ一〇六〇 山川勇一郎方 昭和26年6月12日開催

日本水彩畫會 中野区江古田一ノ二九一 細島昇一方 創立大正2年 昭和26年6月39日開催

日本宣傳美術會 中央区銀座六ノ一 熊谷ビル内 山名文夫方 創立昭和26年昭和26年9月1日開催

日本彫金會 台東区谷中清水町一五 飯田喜代鏡方 創立大正10年

日本彫刻家連盟 北区滝ノ川町四五〇 中野桂樹方 創立昭和22年7月 昭和26年4月3日開催

日本童画會 豊島区长崎一ノ二二 安泰方 創立昭和21年 昭和26年10月5日開催

日本陶彫會 豊島区千川一ノ二 長谷川義起方(電落合二一六二) 創立昭和26年5月 昭和26年11月1日開催

日本陶磁協會 中央区銀座教文館六階 創立昭和21年

日本版画協會 杉並区荻窪八八 恩地孝四郎方(電荻窪一四) 創立昭和6年昭和26年4月19日開催

日本美術院 台東区谷中上三崎南町五二(電下谷二五一〇) 創立明治31年昭和26年9月36日開催

日本美術會 練馬区南町一ノ三四三三 高森捷三方 創立昭和21年4月 昭和26年2月4日日本アンデパンダン展開催

日本美術家連盟 中央区日本橋吳服橋三ノ一成瀬ビル内(電日本橋四三〇四) 会長 安井曾太郎 委員長 伊原宇三郎 創立昭和24年6月

(は) 白日會 北区田端町一九四 川島實方(電駒込一四六四) 創立大正13年 昭和26年3月27日開催

白土會 北区滝野川町四五〇 中野桂樹方 創立昭和25年 昭和26年7月2日開催

(ひ) 美術記者會 假事務所 千代田区日比谷公園共同通信社内(電銀座二二二一五) 美術教育會 板橋区常盤台一ノ二九(電板橋一二〇一) 創立昭和21年11月 美術評論家クラブ 武蔵野市吉祥寺五六九 江川和彦方 創立昭和24年3月 美術文化協會 文京区本郷六ノ一六

モダンアート協會 世田谷区下代田町二六四 小松義雄方 創立昭和25年9月 木彩會 中央区日本橋筋粂町四ノ三 須田利雄方 創立昭和22年4月 昭和26年5月4日開催

(り) 立軌會 世田谷区世田谷三ノ二四四五

今井大彰方(電小石川三六三六) 創立昭和14年4月 昭和26年3月11日開催

(ふ) プラス美術家群 新宿区下落合二ノ六六七 吉田ふじを方(電落合四三三七) 創立昭和25年8月 昭和26年2月1日開催

(へ) 平安書道會 京都市上京区小山花の木町六四 創立大正9年

露塵社 練馬区大泉学園町七一八 平子聖龍方 昭和26年7月5日開催

(ま) 漫画集團 千代田区有楽町一ノ一七 日本藝能振興会内(電丸の内九六七)

(め) 明朗美術連盟 練馬区南町一ノ三四八 狩野晃行方 創立昭和9年

(も) 須田壽方 創立昭和24年4月 昭和26年9月3日開催

(ろ) 六窓會 市川市中山三八四 大須賀方 創立昭和25年3月 昭和26年4月2日開催

須田壽方 創立昭和24年4月 昭和26年9月3日開催

六窓會 市川市中山三八四 大須賀方 創立昭和25年3月 昭和26年4月2日開催

立軌會 世田谷区世田谷三ノ二四四五

美術家及美術關係者名簿

昭和二六年一二月現在

凡 例

一、本名簿にのせた美術家及美術關係者の数は一五七〇名である。我が国において、美術家として社会的地位を有する人々を採録した。不備の点は次年度に補いたい。

一、名簿は氏名の頭文字の発音により五〇音順に記載した。発音の同じ場合は字訓の少ないものを先にし、頭文字の同じものは二字目の発音により、その発音の同じ場合は字訓の少ないものを先に掲げた。但し同字は訓音の異なるものもなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、名簿に用いた略語はだいたい左の通りである。

(日)日本画 (洋)西洋画 (挿)挿画 (版)版画 (漫)漫画

(彫)彫塑 (工)工藝 (漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝

(染)染織 (織)織物 (繡)刺繡 (硝)硝子工藝 (建)建築

(写)写真 (学)学者 (評)美術評論家 (記)美術記者 (藝大)

東京藝術大学 (文化財保存部) 文化財保護委員会事務局保存

部 (文化財専審委)文化財専門審議会専門委員 (日展)日本美術

展覧会 (日展無)日本美術展覧会無鑑査 (日展依)日本美術

展覧会出品依頼者 (日展審)日本美術展覧会審査員 (日展参

事)日本美術展覧会運営会参事 (日展理事) (日展常任理事)

日本美術展覧会運営会理事、同常任理事

一、日展無、日展依、日展審は、日本美術展覧会運営会、日本藝術院

共同主催による昭和二四年第五回日展以後、昭和二六年第七回日

展までに一回以上、無鑑査(昭和二五年度特選者)・出品依頼者・

審査員となつた者を示し、この間に同一人て、無鑑査・出品依頼

者となつた場合は無鑑査の記載を略して日展依と記し、審査員・

出品依頼者となつた場合には日展審のみを記した。

日本藝術院会員、日本美術展覧会運営会理事、同常任理事の地

位にある者は審査員の記載を略した。

一、住所中東京都のみは都名を略して区名を以て始めた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (215～235 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.215-235)

Cut for protection of the personal information

美術關係定期刊行物一覽

(五十音順)

ア ト リ エ	意 匠	藝 術 學 報	藝 術 新 潮	建 築 史 研 究	建 築 雜 誌	建 築 文 化	工 藝 ニ ユ ー ス	工 藝 ニ ユ ー ス	考 古 學 雜 誌	國 際 建 築	國 立 博 物 館 ニ ユ ー ス	古 文 化 財 之 科 學	三 彩	史 迹 と 美 術	書 品	新 建 築			
月刊、編輯田中武雄、発行アトリエ社、千代田区神田神保町三ノ一三、電九段二五七五・二五七六	月刊、編輯日本工藝協會、発行同会、千代田区三年町時許廳内	編輯金丸重嶺、発行日本藝術學會、文京区本富士町東大文學部美術史研究室内	月刊、編輯佐藤義夫、発行新潮社、新宿区矢来町七一、電九段一一一五	編輯建築史研究会(藤島亥治郎)、発行建築史研究会、文京区本富士町東大第一工學部建築科教室内	月刊、編輯北村正雄、発行日本建築學會、中央区銀座西三ノ一、電京橋一二三二・一二三八	月刊、編輯井上精二、発行彰國社、千代田区平河町二ノ一	月刊、編輯工藝學會編集委員會、発行財団法人工藝學會、港区麻布三河台町二四、電赤坂一〇三四	月刊、編輯工業技術廳工藝指導所、発行丸善出版株式會社	中央区日本橋、電日本橋一七三三・二一四二・二一四四	月刊、編輯日本考古學會(原田淑人)、発行野村書店、千代田区神田駿河台一ノ五	月刊、編輯藤縣靜也、発行國華社、港区麻布市兵衛町二ノ一、電赤坂一七五二	月刊、編輯國際建築協會(小山正和)、発行美術出版社、新宿区市ヶ谷本村町一五、電九段三三六・二〇四三	月刊、編輯近藤市太郎、発行國立博物館、台東区上野公園電下谷一一一四	編輯柴田雄次、發行古文化資料自然科學研究會、台東区上野公園國立博物館研究室内	季刊、編輯藤本昭三、発行美術出版社、新宿区市ヶ谷本村町一五、電九段三三六・二〇四三	月刊、編輯川勝政太郎、發行史迹美術同好會、京都市左京区仁王門東大路西入ル、電吉田二四七九	月刊、編輯庄司一夫、發行東洋書道協會、中央区京橋二ノ三、電京橋三〇四・二一五六	月刊、編輯吉岡保五郎、發行新建築社、中央区宝町一ノ六	電京橋四七五二
人 文 學 報	須 貴	刀 劍 美 術	東 方 學 報	東 方 學 報	東 洋 文 化	日 本 本 美 術 工 藝 画	日 本 美 術 工 藝	美 術 館 ニ ユ ー ス	美 術 研 究	美 術 史	美 術 通 信	美 術 手 帖	美 術 ニ ユ ー ス	佛 教 藝 術	墨 美	み づ 系	ミ ュ ー ゼ ア ム	大 和 文 華	
編輯京大人文科學研究所(吉田良馬)、發行同所、京都市左京区北白川小倉町五〇、電上五〇五〇	月刊、編輯柳原良雄、發行柳原出版株式會社、台東区仲御徒町一ノ六	編輯宮崎芳樹、發行日本刀劍美術保存協會、台東区上野公園國立博物館内	編輯東方學會、發行同会、千代田区西神田二ノ二、電九段一〇六一	編輯京大人文科學研究所、發行同所、京都市左京区北白川小倉町五〇、電上五〇五〇	編輯仁井田陞、發行東洋學會、文京区本富士町東大東洋文化研究所内	月刊、編輯安藤鑑一、發行多摩書房、中野区新井町六四九	月刊、編輯藤義一郎、發行日本美術工藝社、大阪市北区梅田阪急ビル内	月刊、編輯早川治平、發行東京都美術館、台東区上野公園隔月刊、編輯美術研究所(松本榮一)、發行吉川弘文館、千代田区神田神保町三ノ一九、電九段一九〇〇	季刊、編輯美術史學會(蓮實重康)、發行便利堂、京都市中京区新町通竹屋町南	旬刊、編輯高木紀重、發行日本美術通信社、新宿区下落合四ノ一五八八	月刊、編輯天下正男、發行美術出版社、新宿区市ヶ谷本村町一五、電九段三三六・二〇四三	月刊、編輯上田宏範、發行大阪市立美術館友の會、大阪市天王寺公園、電天王寺六二一〇・四六〇九	季刊、編輯佛教藝術學會、發行每日新聞社、大阪堂島、東京有樂町	月刊、編輯森田子龍、發行墨美發行所、京都市上京区大宮大門町一二	月刊、編輯天下正男、發行美術出版社、新宿区市ヶ谷本村町一五、電九段三三六・二〇四三	月刊、編輯國立博物館、發行美術出版社、新宿区市ヶ谷本村町一五、電九段三三六・二〇四三	編輯大和文華館(谷田閑次)、發行大和文華館出版部、大坂府南河内郡道明寺村道明寺内		

当所は故黒田清輝子爵の遺志にもとずき、

日本美術年鑑

(昭和二十五年、二十六年版)

昭和二十七年一月二十五日印刷
昭和二十七年二月一日發行

定價七五〇四

編集者

文化財保護委員会
美術研究所

印刷者

印刷

發行所

美術研究所

東京都台東区上野公園内

電話 下谷(83) 四八七

遺作を陳列公開している。